

九州縦貫自動車道関係  
埋蔵文化財調査報告

— XXVII —

福岡県久留米市所在祇園山・七曲山両古墳群の調査

1 9 7 9

福岡県教育委員会

九州縦貫自動車道関係  
埋蔵文化財調査報告

— XXVII —

福岡県久留米市所在祇園山・七曲山両古墳群の調査

昭和54年

福岡県教育委員会

## 序

ここに報告する祇園山古墳は、昭和44年に第I次の調査が行われています。報告書刊行までに10年が経過しており、現在のような情報化時代にあっては遅きに過ぎるとの御批判もあろうかと存じますが、この点事情御賢察のうえ御了解を願うものであります。

祇園山古墳は、本文で述べておりますように、学術上極めて重要な意義を有する文化財であり、当委員会としてもその保存に努力をいたしたのでありますが、諸般の事情により部分保存のやむなきに至りました。

当委員会では、昭和52年度に本墳を史跡として県指定を行い、今後その保存と活用のための事業を推進していきたいと考えております。

おわりに、調査を担当していただいた大川清、吉本堯俊、永井昌文、北条暉幸諸先生ならびに国士館大学文学部考古学研究室、奈良国立文化財研究所をはじめとする関係各位・各機関に対して、また、本墳の保存に御尽力いただいた久留米市民各位、久留米市教育委員会、日本道路公団に対して、心から御礼申し上げます。

昭和54年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 浦 山 太 郎

## 例 言

1. この報告書は、九州縦貫高速自動車道建設によって破壊される予定の遺跡について行なった事前調査のうち、昭和44～47年度にかけて発掘した久留米市に所在する祇園山古墳群・七曲山古墳群の調査報告である。
2. 発掘調査は、日本道路公団の委託を受けて福岡県教育委員会が実施した。
3. 本報告にあたり、石材の鑑定には、西南大学工学部唐木田芳文教授、人骨の鑑定には九州大学医学部教授永井昌文教授に各々担当していただいた。なお、七曲山古墳群関係の人骨については、久留米大学医学部教授竹重順郎教授の論文を抄録させていただいた。
4. 本書の執筆には、下記があたった。なお、その分担は目次の末尾に示すとおりである。

国士館大学部教授	大 川 清
横女子大学講師	吉 本 亮 俊
九州大学医学部教授	永 井 昌 文
久留米市教育委員会	古 賀 寿
久留米市教育委員会	樋 口 一 成
九州歴史資料館	横 田 義 章
九州歴史資料館	森 田 勉
九州歴史資料館	高 橋 章
	木 田 光 子
福岡県教育庁管理部文化課	石 山 勲
福岡県教育庁管理部文化課	橋 口 達 也
福岡県教育庁管理部文化課	副 島 邦 弘
	平ノ内 幸 治

なお、各執筆者の原稿は原文のまま掲載している。

5. 掲載図の実測・製図の分担は挿図目次に示すが、記名のないものは石山の製図による。掲載写真のうち、現場写真は各担当者が撮影し、無記名は石山の撮影による。遺物写真は九州歴史資料館の石丸洋氏の指導の下に、岡紀久夫・前田次郎・平島美代子の三君がこれにあたった。
6. 出土品は、九州歴史資料館にて保管している。なお、整理作業は、岩瀬正信氏の指導の下に同館の整理作業員が行ない、修復・固化については、同館保存科学室に担当していただいた。
7. 本書に用いた高さは、海拔高である。方位は、真北については T. N. の略号を付しており、付さないものは全て磁北である。
8. 本書の編集は、石山が行なった。

## 目 次

## I 調査の経過

1. はじめに.....(石 山).....1  
 2. 調査体制と調査期間.....( " ).....1  
 3. 祇園山古墳の現状保存.....( " ).....4

## II 位置と環境.....( " ).....8

## III 祇園山古墳の調査

1. はじめに.....(石 山).....13  
 2. 祇園山古墳.....( " ).....14  
   (1) 立 地.....( " ).....14  
   (2) 墳丘の構造と規模.....( " ).....14  
   (3) 内 部 主 体  
       箱式石棺.....(大川・高橋).....19  
       石棺構築.....( " ).....20  
   (4) む す び.....( " ).....23  
 3. 裾部外周の主体群  
   (1) 調査の範囲.....(石 山).....24  
   (2) 主体の数と位置.....( " ).....24  
   (3) 蓋 棺 墓.....( " ).....26  
   (4) 石蓋土塚墓.....( " ).....33  
   (5) 箱式石棺墓.....( " ).....54  
   (6) 竪穴式石室.....( " ).....62  
   (7) 構造不明主体.....( " ).....75  
   (8) 出土遺物  
       鏡.....( " ).....75

装身具	（石 山）	77
鉄器	（ " ）	77
土師器	（ " ）	80
須恵器	（ " ）	88
(9) ひ す び		
裾部外周第1号甕棺墓の埋設状況	（石 山）	90
石蓋土壙墓・箱式石棺墓・竪穴式石室のプラン・ 構造・規模	（ " ）	93
頭位と葬法	（ " ）	96
副葬品	（ " ）	97
裾部外周主体相互の先後関係	（ " ）	97
裾部外周主体群を構成する単位とその内容	（ " ）	98
方墳と裾部外周主体との先後関係	（ " ）	100
4. 祇園山古墳以前と以後の遺構と遺物		
(1) 石器	（平ノ内）	102
(2) 歴史時代溝状遺構	（石 山）	102
(3) 歴史時代土器		
歴史時代土器	（森 田）	103
歴史時代土器の年代	（ " ）	111
歴史時代土器の背景	（石 山）	112
5. 小 結		
(1) 墳頂部箱式石棺	（石 山）	112
(2) 裾部外周第1号甕棺墓	（ " ）	116
(3) 方墳の時期	（ " ）	122
(4) 裾部外周主体群の営造期間と被葬者	（ " ）	123
(5) 祇園山古墳の性格	（ " ）	126
(6) おわりに	（ " ）	128

## IV 祇園山第2号墳の調査

1. はじめに	（吉 木）	131
2. 祇園山第2号墳		

(1) 立地と墳丘		
立地と第3～5号墳	(吉 木)	131
第2号墳の墳丘	( " )	132
(2) 横穴式石室	( " )	133
(3) 遺物出土状態	( " )	135
(4) 出土遺物	( " )	135

### 3. 祇園山第2号墳以前の遺構群

(1) 遺構の配置	(吉 木)	138
(2) 第2号墳墳丘下の石蓋土壙墓		
掘方	( " )	139
棺身部	( " )	139
蓋石	( " )	140
被覆粘土	( " )	140
埋め戻しの土	( " )	142
埋葬状態	(橋 口)	142
遺物	(吉 木)	142
(3) 第2号墳墳丘下の箱式石棺墓	( " )	143
棺 槨	( " )	143
石 棺	( " )	144
蓋 石	( " )	145
被覆粘土	( " )	145
埋め戻しの土	( " )	145
埋葬状態	(橋 口)	145
遺物	(吉 木)	146
(4) 第2号墳墳丘西側の石蓋土壙墓	( " )	146
(5) 第2号墳墳丘下の壺棺墓出土状態	( " )	147
壺棺墓の構造と壺棺	(橋 口)	148
(6) 人 骨	(永 井)	148

### 4. 祇園山第2号墳以後の遺構

中世土壙墓		
構 造	(副 島)	149

出土土器	( # )	150
5. 小 結	(吉 本)	152

## V 七曲山古墳群の調査

1. はじめに	(石 山)	157
2. 位置と環境	(樋 口)	157
3. 古墳の配列	(石 山)	160
4. 七曲山第1号墳		
(1) はじめに	(樋 口)	160
(2) 墳 丘	( # )	160
(3) 竪穴式石室	( # )	163
(4) 築造工程と追葬について	( # )	165
(5) 人 骨	(竹重他, 石山抄)	166
(6) 出土遺物		
遺物の出土状態と被葬者との関係について	(樋 口)	168
鉄 器	( # )	168
土 師 器	( # )	171
(7) む す び	( # )	172
5. 七曲山第1号墳関係歴史時代の遺構と遺物		
(1) 遺 構	( # )	173
(2) 遺 物	( # )	174
(3) む す び	(古 賀)	174
6. 七曲山第2号墳		
(1) 墳 丘	(石 山)	176
(2) 内 部 主 体	( # )	179
(3) 人 骨	(竹重他, 石山抄)	182
7. 七曲山第3号墳		
(1) 墳 丘	(石 山)	184



(2) 内部主体	..... (石 山) .....	184
墳頂部A主体	..... ( " ) .....	185
墳頂部B主体	..... ( " ) .....	187
裾部第1号石蓋土壘墓	..... ( " ) .....	188
裾部第2号石蓋土壘墓	..... ( " ) .....	188
裾部第3号石蓋土壘墓	..... ( " ) .....	188
(3) 遺物		
鉄器	..... ( " ) .....	189
土器	..... ( " ) .....	189
8. 七曲山第4号墳		
(1) 墳丘	..... (石 山) .....	191
(2) 内部主体	..... ( " ) .....	193
9. 七曲山第5号墳		
(1) 墳丘	..... (石 山) .....	194
(2) 内部主体	..... ( " ) .....	196
10. その他の遺構		
(1) 方形周溝遺構	..... (石 山) .....	196
(2) 七曲山第1号火葬墓 (HD 1)	..... ( " ) .....	197
(3) 七曲山歴史時代第1号土壘墓 (HD 2)	..... ( " ) .....	198
(4) 歴史時代土器	..... (森 田) .....	198
11. 小 結		
(1) 墳丘	..... (石 山) .....	200
(2) 主体の構造	..... ( " ) .....	200
(3) 葬法	..... ( " ) .....	201
(4) 年代	..... ( " ) .....	201

## VI 主要遺物の保存処置と赤色顔料の分析

1. 主要遺物の保存処置	..... (横 田) .....	203
2. 赤色顔料について	..... (本 田) .....	204

## 図 版 目 次

本文対照頁

PL. 1	完成した縦貫道と部分保存された祇園山古墳	7
PL. 2-1	祇園山古墳群遠景(背景は高良山)	8
2	祇園山古墳全景(北から)	8
PL. 3	祇園山古墳全景(第Ⅱ次調査時)(上一朝日新聞社提供, 下一松岡史撮影)	8
PL. 4-1	東斜面全景	16
2	東隅内部全景	16
PL. 5-1	北斜面遠景	16
2	北斜面全景	16
PL. 6-1	北斜面近景	16
2	北斜面西端葺石近景	16
PL. 7-1	北隅内部全景	16
2	西斜面全景	16
PL. 8-1	西斜面北端葺石近景	16
2	西斜面中央部葺石近景	16
3	西斜面南端葺石近景	16
PL. 9-1	西斜面葺石と裾部の構築状態	15
2	西斜面葺石北および中央部の葺石細部	15
PL. 10-1	西隅内部地山削り出し状態	15
2	南斜面全景	15
PL. 11-1	南斜面葺石近景	16
2	南隅内部全景	16
PL. 12-1	墳頂部箱式石棺蓋石全景(西から)	19
2	墳頂部箱式石棺蓋石全景(北東から)	19
PL. 13-1	墳頂部箱式石椁全景(北から)	20
2	墳頂部南西側墳丘断面	101
PL. 14-1	墳頂部箱式石椁北側での粘土裏込状態	22
2	墳頂部箱式石椁北東側石材裏込状態	22
3	墳頂部箱式石椁上部裏込材を外した状態	22
PL. 15-1	南隅内部付近の主体群全景	26
2	北辺東半裾部外周の主体群全景	26
PL. 16-1	北辺西半裾部外周の主体群全景	26
2	北辺西半裾部外周の主体群全景(北東から)	26
PL. 17-1	北隅内部付近全景(表土除去後)	26

	2	北隅角部付近全景（主体群確認後）	26
PL. 18		北隅角付近の主体群全景	26
PL. 19-1		北辺西半裾部外周上・下段の主体群全景	26
	2	北辺西半裾部外周上・下段の主体群全景（墳頂部から）	26
PL. 20-1		西辺裾部外周主体群全景	26
	2	西隅角部付近の主体群全景	26
PL. 21-1		南辺西半裾部外周の主体群全景	26
	2	南辺西半裾部外周の主体群全景（南西から）	26
PL. 22-1		A単位全景	98
	2	B単位全景	98
PL. 23-1		C単位全景	98
	2	D単位全景	98
PL. 24-1		E単位全景	98
	2	F単位全景	98
PL. 25-1		G単位全景	98
	2	H単位全景	98
PL. 26-1		裾部外周第1号竪穴墓（K1）発見状態	26
	2	裾部外周第1号竪穴墓開口状態と、鏡片および勾玉出土状態	30
PL. 27-1		裾部外周第1号竪穴墓（K1）下壁掘付状態	26
	2	裾部外周第1号竪穴墓墓壇	26
PL. 28-1		裾部外周第1号石蓋土塚墓（D1）確認状態	33
	2	裾部外周第1号石蓋土塚墓蓋石除去後	33
	3	裾部外周第1号石蓋土塚墓墓面掘削状態近景	33
PL. 29-1		裾部外周第2号石蓋土塚墓（D2）	35
	2	裾部外周第3号石蓋土塚墓（D3）	35
PL. 30-1		裾部外周第4号石蓋土塚墓（D4）の蓋石	35
	2	裾部外周第4号石蓋土塚墓蓋石除去後	35
	3	裾部外周第5号石蓋土塚墓（D5）	36
	4	裾部外周第5号石蓋土塚墓石材除去後	36
PL. 31-1		裾部外周第6号石蓋土塚墓（D6）	36
	2	裾部外周第6号石蓋土塚墓蓋石除去後	36
	3	裾部外周第12号石蓋土塚墓（D12）と工具痕	38
PL. 32-1		裾部外周第14号石蓋土塚墓（D14）	38
	2	裾部外周第15号石蓋土塚墓（D15）	39
PL. 33-1		裾部外周第17号石蓋土塚墓（D17）	40

	2	裾部外周第17号石蓋土墳墓壁面の工具痕	40
PL. 34-1		裾部外周第18号石蓋土墳墓 (D18) 蓋石と土器器出土状態	41
	2	裾部外周第19号石蓋土墳墓 (D19)	42
PL. 35-1		裾部外周第22号石蓋土墳墓 (D22)	43
	2	裾部外周第23号石蓋土墳墓 (D23)	45
PL. 36-1		裾部外周第25号石蓋土墳墓 (D25)	46
	2	裾部外周第26号石蓋土墳墓 (D26)	46
PL. 37-1		裾部外周第27号石蓋土墳墓 (D27, ▲印は刀子片)	46
	2	裾部外周第28号石蓋土墳墓 (D28) 上部蓋石	46
PL. 38-1		裾部外周第28号石蓋土墳墓 (D28) 蓋石	46
	2	裾部外周第28号石蓋土墳墓蓋石除去後	46
PL. 39-1		裾部外周第29号石蓋土墳墓 (D29)	48
	2	裾部外周第30号石蓋土墳墓 (D30) 石枕と頭骨	48
PL. 40-1		裾部外周第31号石蓋土墳墓 (D31) と不明柱穴群	48
	2	裾部外周第32号石蓋土墳墓 (D32)	48
	3	裾部外周第32号石蓋土墳墓蓋石と不明石材群 (手前)	51
PL. 41-1		裾部外周第32号石蓋土墳墓 (D32) 蓋石	51
	2	裾部外周第32号石蓋土墳墓南側不明石材群	51
PL. 42-1		裾部外周第33号石蓋土墳墓 (D33) 発見状態	52
	2	裾部外周第33号石蓋土墳墓堆積土除去後	52
	3	裾部外周第33号石蓋土墳墓蓋石除去後	52
PL. 43-1		裾部外周第1号箱式石棺墓 (H1)	54
	2	裾部外周第4号箱式石棺墓 (H4)	55
PL. 44-1		裾部外周第7号箱式石棺墓 (H7)	56
	2	裾部外周第9号箱式石棺墓 (H9, 左H7)	57
PL. 45-1		裾部外周第9号箱式石棺墓 (H9)	57
	2	裾部外周第11号箱式石棺墓 (H11) 蓋石	58
PL. 46-1		裾部外周第11号箱式石棺墓 (H11)	58
	2	裾部外周第11号箱式石棺墓粘土枕	58
PL. 47-1		裾部外周第12号箱式石棺墓 (H12) と第30号石蓋土墳墓 (D30)	58
	2	裾部外周第14号箱式石棺墓 (H14)	60
PL. 48-1		裾部外周第1号壜穴式石室 (T1) 全景	62
	2	裾部外周第1号壜穴式石室 (手前は排水溝)	62
PL. 49-1		裾部外周第1号壜穴式石室 (T1) 西側小口壁	62
	2	裾部外周第1号壜穴式石室北側長側壁と仕切石	62

PL. 50—1	裾部外周第2号壘穴式石室(T2) ……………	64
2	裾部外周第2号壘穴式石室北側長側壁……………	64
PL. 51—1	裾部外周第3号壘穴式石室(T3)全景……………	64
2	裾部外周第3号壘穴式石室南側長側壁……………	64
PL. 52—1	裾部外周第4号壘穴式石室(T4) ……………	66
2	裾部外周第4号壘穴式石室南側長側壁……………	66
PL. 53—1	裾部外周第6号壘穴式石室(T6)全景……………	68
2	裾部外周第7号壘穴式石室(T7) ……………	69
PL. 54—1	裾部外周第8号壘穴式石室(T8) ……………	69
2	裾部外周第8号壘穴式石室長側壁……………	69
PL. 55—1	裾部外周第9号壘穴式石室(T9) ……………	70
2	裾部外周第9号壘穴式石室長側壁……………	70
PL. 56—1	裾部外周第9号壘穴式石室(T9)土器・鉄器出土状態……………	70
2	裾部外周第10号壘穴式石室(T10, 手前はH14の重石) ……………	70
PL. 57—1	裾部外周第11号壘穴式石室(T11)の重石……………	71
2	裾部外周第11号壘穴式石室墓壙全景……………	71
PL. 58—1	裾部外周第11号壘穴式石室全景……………	71
2	裾部外周第11号壘穴式石室刀子片出土状態……………	71
PL. 59—1	裾部外周第12号壘穴式石室(T12) ……………	71
2	裾部外周第12号壘穴式石室長側壁……………	71
PL. 60—1	裾部外周第13号壘穴式石室(T13) ……………	74
2	裾部外周第13号壘穴式石室鉄器出土状態……………	74
PL. 61—1	祇園山古墳裾部外周G主体鉄器出土状態……………	75
2	祇園山古墳北方歴史時代溝状遺構……………	102
PL. 62	祇園山古墳裾部外周第1号壘穴墓出土半円方形帯鏡片と主銘(実大) ……………	76
PL. 63	祇園山古墳裾部外周第1号壘穴墓出土半円方形帯鏡片(2倍大)と副銘(約3倍) ……………	76
PL. 64	祇園山古墳裾部外周主体出土遺物 1 ……………	77
PL. 65	祇園山古墳裾部外周主体出土遺物 2 ……………	78
PL. 66	祇園山古墳北隅角裾部外周第1~3号壘穴……………	32
PL. 67	祇園山古墳裾部外周出土土師器……………	80~88
PL. 68—1	祇園山古墳裾部外周出土須恵器……………	89
2	祇園山古墳周辺出土土器……………	102
PL. 69	祇園山古墳周辺出土歴史時代土器 1 ……………	103~111
PL. 70	祇園山古墳周辺出土歴史時代土器 2 ……………	103~111
PL. 71	高良大社庭三角縁獣文符三神三獸鏡……………	122

PL. 72-1	祇園山第2号墳全景(発掘前—東から) .....	131
	2 祇園山第2号墳全景(発掘後—西から) .....	132
PL. 73-1	祇園山第2号墳墓室(発掘後) .....	134
	2 祇園山第2号墳墓室と石室床面全景 .....	134
PL. 74-1	祇園山第2号墳石室第2次床面 .....	135
	2 祇園山第2号墳石室第1次床面と腰石据付炭 .....	135
PL. 75-1	祇園山第2号墳と墳丘下の石室土藏墓(北棺) .....	139
	2 祇園山第2号墳と墳丘下の石室土藏墓(左)と箱式石棺墓(右)の墓室全景 .....	139
PL. 76-1	祇園山第2号墳墳丘下の石室土藏墓と箱式石棺墓(開棺後) .....	139
	2 祇園山第2号墳墳丘下の石室土藏墓の蓋石 .....	140
PL. 77-1	祇園山第2号墳墳丘下の石室土藏墓(開棺直後—北から) .....	140
	2 祇園山第2号墳墳丘下の石室土藏墓埋葬状態 .....	141
PL. 78-1	祇園山第2号墳墳丘下の石室土藏墓第1号人骨(D1)と落石(▲印) .....	142
	2 祇園山第2号墳墳丘下の石室土藏墓上縁剥落部 .....	142
	3 祇園山第2号墳墳丘下の石室土藏墓上縁復元状態 .....	142
	4 祇園山第2号墳墳丘下の石室土藏墓副葬品出土状態 .....	142
PL. 79-1	祇園山第2号墳墳丘下の箱式石棺墓(南棺)の蓋石 .....	143
	2 祇園山第2号墳墳丘下の箱式石棺墓(開棺直後) .....	144
	3 祇園山第2号墳墳丘下の箱式石棺墓埋葬状態 .....	145
PL. 80-1	祇園山第2号墳墳丘下の箱式石棺 .....	145
	2 祇園山第2号墳墳丘下の箱式石棺側石据付状態 .....	145
	3 祇園山第2号墳北側石室土藏墓(西棺) .....	146
PL. 81-1	祇園山第2号墳墳丘下壺棺埋設状態 .....	147
	2 祇園山第2号墳墳丘下壺棺 .....	148
PL. 82	祇園山第2号墳関係出土遺物 1 .....	135
PL. 83	祇園山第2号墳関係出土遺物 2 .....	136
PL. 84	祇園山第2号墳関係出土遺物 3 .....	136
PL. 85 上	祇園山第2号墳西側中世土藏墓 .....	149
下	祇園山第2号墳西側中世土藏墓出土青磁・土師器 .....	150
PL. 86-1	七曲山古墳群透景(南東から) .....	159
	2 七曲山古墳群透景(東から) .....	159
PL. 87-1 上	七曲山第1号墳全景 .....	161
中	七曲山第1号墳岸石状組 .....	162
下	七曲山第1号墳周溝と歴史時代ビット .....	162
PL. 88-1	七曲山第1号墳石室墓痕跡確認状態 .....	163

	2	七曲山第1号墳石室蓋石	163
PL. 89-1		七曲山第1号墳竪穴式石室全景	163
	2	七曲山第1号墳竪穴式石室北側壁	163
PL. 90-1		七曲山第1号墳竪穴式石室内 甌1人骨	166-167
	2	七曲山第1号墳竪穴式石室内 甌1人骨と副葬品	166-167
PL. 91-1		七曲山第1号墳竪穴式石室内 甌1人骨全景	166-167
	2	七曲山第1号墳竪穴式石室内 甌1人骨集骨状態	166-167
PL. 92-1		七曲山第1号墳床石と副葬品	168
	2	七曲山第1号墳石室の副葬品の位置と抜かれた床石の跡	168
	3	七曲山第1号墳周溝と歴史時代柱穴群	173
PL. 93		七曲山第1号墳出土鉄器	168-171
PL. 94		七曲山第1号墳出土土器	171
PL. 95-1		七曲山第2号墳発掘前の墳丘全景、奥は第1号墳	178
	2	七曲山第2号墳の墳丘と溝	179
PL. 96-1		七曲山第2号墳の墳丘と主体	179
	2	七曲山第2号墳の第1・2号箱式石棺の蓋石	180
PL. 97-1		七曲山第2号墳の墓順と箱式石棺	180
	2	七曲山第2号墳の石棺構築状態	181
PL. 98-1		七曲山第3号墳の発掘前の墳丘	184
	2	七曲山第3号墳の墳丘と周溝ならびに陸橋部	184
PL. 99-1		七曲山第3号墳墳丘全景(東から)	184
	2	七曲山第3号墳墳丘全景(北から)	184
PL. 100-1		七曲山第3号墳A主体全景	185
	2	七曲山第3号墳A・B主体全景	185
	3	七曲山第3号墳A主体の粘土使用状態	185
PL. 101-1		七曲山第3号墳A主体墓階	185
	2	七曲山第3号墳B主体全景	187
PL. 102-1		七曲山第3号墳裾部第1主体蓋石	188
	2	七曲山第3号墳裾部第1主体蓋石除去後	188
PL. 103-1		七曲山第3号墳裾部第2主体蓋石	188
	2	七曲山第3号墳裾部第2主体蓋石除去後	188
PL. 104-1		七曲山第3号墳裾部第3主体蓋石と粘土	188
	2	七曲山第3号墳裾部第3主体蓋石除去後	188
PL. 105-1		七曲山第4号墳発掘前の墳丘	191
	2	七曲山第4号墳墳丘と葺石	191

	本文対照頁
PL. 106—1	七曲山第4号墳主体全景…………… 193
2	七曲山第4号墳南側の土壌群…………… 191
PL. 107—1	七曲山第5号墳石室全景…………… 195
2	七曲山第5号墳石室（天井石除去後）…………… 195
3	七曲山第5号墳石室の枕と頭骨…………… 195
PL. 108—1	七曲山第2・3号墳間の方形周溝と第1号火葬墓…………… 196
2	七曲山第1号火葬墓全景…………… 197
3	七曲山第1号土壙墓瓦器出土状態…………… 197
PL. 109—1	七曲山第3号墳出土遺物…………… 189
2	七曲山第1号歴史時代土壙墓出土瓦器概…………… 197
PL. 110	祇園山古墳出土遺物の保存処置…………… 203・204



## 挿 図 目 次

Fig. 1	祇園山古墳付近縦貫道建設計画図(原図日本道路公団) .....	5
Fig. 2	祇園山古墳と完成した縦貫道・側道関係図(原図日本道路公団) .....	7
Fig. 3	祇園山・七曲山古墳群周辺遺跡分布図(作成石山戴) .....	折りこみ
Fig. 4	祇園山古墳と高良山周辺地形図(作成石山) .....	折りこみ
Fig. 5	祇園山古墳群周辺地形図(原図日本道路公団, 製図平田倫子) .....	13
Fig. 6	祇園山古墳墳丘測量図(実測国土館大学) .....	折りこみ
Fig. 7	祇園山古墳群西面墳丘東西断面図(実測石山) .....	15
Fig. 8	祇園山古墳群石平面図(実測国土館大学, 製図平田) .....	折りこみ
Fig. 9	祇園山古墳群石側面写真測量図1(撮影奈良国立文化財研究所, 図化KKアジア航測) .....	折りこみ
Fig. 10	祇園山古墳群石側面写真測量図2(撮影奈良国立文化財研究所, 図化KKアジア航測) .....	折りこみ
Fig. 11	祇園山古墳墳頂部箱式石棺蓋石実測図(実測国土館大学) .....	20
Fig. 12	祇園山古墳墳頂部箱式石棺全体図(実測国土館大学) .....	21
Fig. 13	祇園山古墳墳頂部箱式石棺突測図(実測国土館大学) .....	22
Fig. 14	祇園山古墳墳丘南面南北断面図(実測石山) .....	23
Fig. 15	祇園山古墳群部外周主体群全体図(実測石山・中司照世・近沢康治, 製図平田) .....	折りこみ
Fig. 16	祇園山古墳北隅角部主体群全体図(原図三好政文・作成石山) .....	25
Fig. 17	祇園山古墳群部外周第1号壘棺破片散布状態実測図(実測石山) .....	27
Fig. 18	祇園山古墳群部外周第1号壘棺実測図(実測石山) .....	28
Fig. 19	祇園山古墳北隅角部南北断面図(実測中司・高橋章) .....	29
Fig. 20	祇園山古墳群部外周第1号壘棺突測図(実測石山) .....	31
Fig. 21	祇園山古墳群部外周第1・2号壘棺突測図(実測石山) .....	32
Fig. 22	祇園山古墳群部外周第1号石蓋土壘墓実測図(実測青木建二) .....	33
Fig. 23	祇園山古墳群部外周第2号石蓋土壘墓実測図(実測松田政基) .....	34
Fig. 24	祇園山古墳群部外周第3号石蓋土壘墓実測図(実測石山) .....	34
Fig. 25	祇園山古墳群部外周第4号石蓋土壘墓実測図(実測真下高幸) .....	35
Fig. 26	祇園山古墳群部外周第5号石蓋土壘墓実測図(実測松田) .....	36
Fig. 27	祇園山古墳群部外周第6号石蓋土壘墓実測図(実測真下) .....	37
Fig. 28	祇園山古墳群部外周第10号石蓋土壘墓実測図(実測上村佳典) .....	38
Fig. 29	祇園山古墳群部外周第11号石蓋土壘墓実測図(実測中司) .....	38
Fig. 30	祇園山古墳群部外周第12号石蓋土壘墓実測図(実測見玉高一) .....	39
Fig. 31	祇園山古墳群部外周第14号石蓋土壘墓実測図(実測中司) .....	39
Fig. 32	祇園山古墳群部外周第15号石蓋土壘墓実測図(実測石山) .....	40
Fig. 33	祇園山古墳群部外周第16号石蓋土壘墓実測図(実測中司) .....	40

Fig. 34	祇園山古墳裾部外周第17号石蓋土槨墓実測図 (実測見玉) .....	41
Fig. 35	祇園山古墳裾部外周第18号石蓋土槨墓実測図 (実測上村・見玉・井上説男) .....	42
Fig. 36	祇園山古墳裾部外周第19号石蓋土槨墓実測図 (実測上村) .....	43
Fig. 37	祇園山古墳裾部外周第20号石蓋土槨墓実測図 (実測見玉) .....	44
Fig. 38	祇園山古墳裾部外周第21号石蓋土槨墓実測図 (実測見玉) .....	44
Fig. 39	祇園山古墳裾部外周第22号石蓋土槨墓実測図 (実測上村) .....	45
Fig. 40	祇園山古墳裾部外周第23号石蓋土槨墓実測図 (実測見玉) .....	45
Fig. 41	祇園山古墳裾部外周第26号石蓋土槨墓実測図 (実測上村) .....	47
Fig. 42	祇園山古墳裾部外周第27号石蓋土槨墓実測図 (実測中司) .....	47
Fig. 43	祇園山古墳裾部外周第28号石蓋土槨墓実測図 (実測中司) .....	49
Fig. 44	祇園山古墳裾部外周第29号石蓋土槨墓実測図 (実測石山・井上) .....	50
Fig. 45	祇園山古墳裾部外周第30号石蓋土槨墓実測図 (実測馬田) .....	50
Fig. 46	祇園山古墳裾部外周第31号石蓋土槨墓実測図 (実測中司) .....	51
Fig. 47	祇園山古墳裾部外周第32号石蓋土槨墓実測図 (実測中司) .....	51
Fig. 48	祇園山古墳裾部外周第33号石蓋土槨墓実測図 (実測中司) .....	52
Fig. 49	祇園山古墳裾部外周第1号箱式石槨実測図 (実測四本和行) .....	54
Fig. 50	祇園山古墳裾部外周第4号箱式石槨実測図 (実測石山) .....	55
Fig. 51	祇園山古墳裾部外周第7号箱式石槨実測図 (実測石山・三好) .....	56
Fig. 52	祇園山古墳裾部外周第9号箱式石槨実測図 (実測石山) .....	57
Fig. 53	祇園山古墳裾部外周第11号箱式石槨実測図 (実測石山・馬田) .....	59
Fig. 54	祇園山古墳裾部外周第12号箱式石槨実測図 (実測馬田) .....	60
Fig. 55	祇園山古墳裾部外周第14号箱式石槨実測図 (実測石山) .....	61
Fig. 56	祇園山古墳裾部外周第1号壜穴式石室実測図 (実測石山) .....	63
Fig. 57	祇園山古墳裾部外周第2号壜穴式石室実測図 (実測石山) .....	64
Fig. 58	祇園山古墳裾部外周第2号壜穴式石室実測図 (実測馬田) .....	64
Fig. 59	祇園山古墳裾部外周第3号壜穴式石室実測図 (実測波部明夫・中司・井上) .....	65
Fig. 60	祇園山古墳裾部外周第4号壜穴式石室実測図 (実測上村) .....	66
Fig. 61	祇園山古墳裾部外周第5号壜穴式石室実測図 (実測見玉) .....	67
Fig. 62	祇園山古墳裾部外周第6号壜穴式石室実測図 (実測見玉・三好) .....	68
Fig. 63	祇園山古墳裾部外周第7号壜穴式石室実測図 (実測井上・阿世賀) .....	69
Fig. 64	祇園山古墳裾部外周第9号壜穴式石室実測図 (実測見玉) .....	70
Fig. 65	祇園山古墳裾部外周第10号壜穴式石室実測図 (実測石山) .....	71
Fig. 66	祇園山古墳裾部外周第11号壜穴式石室実測図 (実測石山・三好) .....	72
Fig. 67	祇園山古墳裾部外周第12号壜穴式石室実測図 (実測見玉) .....	73
Fig. 68	祇園山古墳裾部外周第13号壜穴式石室実測図 (実測上村) .....	74
Fig. 69	祇園山古墳裾部外周第1号甕棺墓出土鏡拓影 (石山手拓) .....	76
Fig. 70	祇園山古墳裾部外周第1号甕棺墓出土玉類実測図 (実測石山) .....	77

Fig. 71	祇園山古墳裾部外周G主体出土鉄器実測図(実測石山) ……………	78
Fig. 72	祇園山古墳裾部外周小型主体群出土鉄器実測図(実測石山) ……………	79
Fig. 73	祇園山古墳裾部外周出土土師器実測図 1(実測石山) ……………	81
Fig. 74	祇園山古墳裾部外周出土土師器実測図 2(実測石山) ……………	83
Fig. 75	祇園山古墳裾部外周出土土師器実測図 3(実測石山) ……………	84
Fig. 76	祇園山古墳裾部外周出土土師器実測図 4(実測石山) ……………	85
Fig. 77	祇園山古墳裾部外周出土土師器実測図 5(実測石山) ……………	86
Fig. 78	祇園山古墳裾部外周出土土師器実測図 6(実測石山) ……………	87
Fig. 79	祇園山古墳裾部外周出土須恵器実測図(実測石山) ……………	89
Fig. 80	祇園山古墳裾部外周第1号壘棺墓型設状復元図(作成石山) ……………	91
Fig. 81	壘・壘棺型設状事例(作成石山) ……………	92
Fig. 82	祇園山古墳周辺出土石器実測図(実測平ノ内幸治, 製図平ノ内) ……………	102
Fig. 83	祇園山古墳北方歴史時代溝状遺構実測図(実測石山) ……………	103
Fig. 84	祇園山古墳周辺出土歴史時代土器実測図 1(実測横田賢次郎・高橋章, 製図森田勉) ……	104
Fig. 85	祇園山古墳周辺出土歴史時代土器実測図 2(実測・製図森田) ……………	106
Fig. 86	祇園山古墳周辺出土歴史時代土器実測図 3(実測・製図森田) ……………	107
Fig. 87	糸島地方と筑後地方の壘棺および変形土器比較図(作成石山) ……………	118
Fig. 88	祇園山第2～5号墳地形実測図(製図吉本英発) ……………	折りこみ
Fig. 89	祇園山第2号墳石室平面図(作成吉本) ……………	134
Fig. 90	祇園山第2号墳関係出土鉄器実測図(実測・製図吉本) ……………	136
Fig. 91	祇園山第2号墳関係遺構配置図(製図吉本) ……………	137
Fig. 92	祇園山第2号墳出土土器実測図(実測・製図吉本) ……………	138
Fig. 93	祇園山第2号墳墳丘下石蓋土壘墓実測図(製図吉本) ……………	折りこみ
Fig. 94	祇園山第2号墳墳丘下石蓋土壘墓埋葬状実測図(製図吉本) ……………	141
Fig. 95	祇園山第2号墳墳丘下箱式石棺実測図(製図吉本) ……………	折りこみ
Fig. 96	祇園山第2号墳墳丘下箱式石棺展開図(製図吉本) ……………	144
Fig. 97	祇園山第2号墳墳丘下箱式石棺墓(製図吉本) ……………	146
Fig. 98	祇園山第2号墳西側石蓋土壘墓実測図(製図吉本) ……………	146
Fig. 99	祇園山第2号墳墳丘下壘棺墓出土状実測図(製図吉本) ……………	147
Fig. 100	祇園山第2号墳墳丘下壘棺実測図(実測製図・中野恵子) ……………	148
Fig. 101	祇園山第2号墳北側中世土壘墓実測図(実測・製図前島邦弘) ……………	150
Fig. 102	祇園山第2号墳北側出土青磁・土師器実測図(実測・製図前島邦弘) ……………	151
Fig. 103	祇園山第2号墳墳丘断面図(製図吉本) ……………	折りこみ
Fig. 104	七曲山古墳群周辺遺跡分布図(作成樋口一成) ……………	158
Fig. 105	七曲山第1号墳全体図(実測・製図樋口) ……………	161
Fig. 106	七曲山第1号墳墳丘南北断面図(実測・製図樋口) ……………	162, 163
Fig. 107	七曲山第1号墳墳頂部葺石状石組実測図(実測・製図樋口) ……………	162

Fig. 108	七曲山第1号墳竪穴式石室実測図(実測・製図樋口) .....	164
Fig. 109	七曲山第1号墳蓋石加工状態実測図(実測・製図樋口) .....	165
Fig. 110	七曲山第1号墳床石再使用状態実測図(実測・製図樋口) .....	165
Fig. 111	七曲山第1号墳出土鉄器実測図 1(実測・製図樋口) .....	169
Fig. 112	七曲山第1号墳出土鉄器実測図 2(実測・製図樋口) .....	170
Fig. 113	七曲山第1号墳出土土器実測図(実測・製図樋口) .....	171
Fig. 114	七曲山第1号墳墳丘南半歴史時代祭祀遺構実測図(実測・製図樋口) .....	173
Fig. 115	七曲山第1号墳墳丘南半歴史時代祭祀遺構 P1実測図(実測・製図樋口) .....	173
Fig. 116	七曲山第2号墳・3・4号墳地形測量図(実測石山・川述昭人, 製図平田) .....	177
Fig. 117	七曲山第2号墳・方形周溝遺構・第1号火葬墓全体図(実測石山・川述, 製図平田) .....	178
Fig. 118	七曲山第2号墳墳丘東半断面図(実測川述) .....	179
Fig. 119	七曲山第2号墳主体全体図(実測児玉) .....	180
Fig. 120	七曲山第2号墳A・B箱式石棺実測図(実測児玉) .....	181
Fig. 121	七曲山第3号墳墳丘測量図(実測石山・川述, 製図平田) .....	185
Fig. 122	七曲山第3号墳A・B主体関係図(実測石山・井上) .....	186
Fig. 123	七曲山第3号墳A主体実測図(実測石山・井上) .....	187
Fig. 124	七曲山第3号墳B主体実測図(実測井上) .....	188
Fig. 125	七曲山第3号墳裾部第1主体実測図(実測石山) .....	折りこみ
Fig. 126	七曲山第3号墳裾部第2主体実測図(実測石山) .....	折りこみ
Fig. 127	七曲山第3号墳裾部第3主体実測図(実測石山) .....	折りこみ
Fig. 128	七曲山第3号墳B主体出土鉄器実測図(実測石山) .....	189
Fig. 129	七曲山第3号墳裾部出土土器実測図(実測石山) .....	190
Fig. 130	七曲山第4号墳墳丘測量図(実測石山・川述, 製図平田) .....	192
Fig. 131	七曲山第4号墳墳丘東半東西断面図(実測川述) .....	193
Fig. 132	七曲山第4号墳内部主体実測図(実測川述) .....	194
Fig. 133	七曲山第5号墳竪穴式石室実測図(実測石山) .....	195
Fig. 134	七曲山第1号火葬墓(HDI)実測図(実測石山) .....	197
Fig. 135	七曲山第3号墳北側裾部第1号土壌実測図(実測川述) .....	197
Fig. 136	七曲山第3号墳北側裾部第1号土壌墓出土土器実測図(実測・製図森田) .....	198

## 表 目 次

Tab. 1	祇園山古墳裾部外周石蓋土塚墓内法一覧表(作成石山) .....	54
Tab. 2	祇園山古墳裾部外周箱式石棺内法一覧表(作成石山) .....	62
Tab. 3	祇園山古墳裾部外周竪穴式石室内法一覧表(作成石山) .....	74・75
Tab. 4	祇園山古墳裾部外周主体床面法量表(作成石山) .....	95
Tab. 5	祇園山古墳周辺出土歴史時代土器一覧表(作成森田) .....	109・110
Tab. 6	大型箱式石棺一覧表(作成石山) .....	114
Tab. 7	祇園山第2号墳関係人骨一覧表(作成永井) .....	149
Tab. 8	祇園山第2号墳墳丘北側中世土壌墓出土土器一覧表(作成副島) .....	152
Tab. 9	赤色顔料試料一覧表(作成木田) .....	206

## I 調査の経過

### 1. はじめに

ここに報告する3遺跡は、いずれも久留米市内に位置しており地籍上では、

祇園山古墳 (第1号墳)	久留米市御井町字高良山 299-8, 299-218 (遺跡番号 030306)
祇園山第2号墳	久留米市御井町字高良山299-1 (遺跡番号 030307)
七曲山古墳群 (旧放光寺古墳群)	久留米市山川町七曲1,052-1, 1,053-1 (遺跡番号 030426-030430)

に所在する。

前二者は九州縦貫自動車道(以下縦貫道と略す)の本線建設予定地に含まれ、後者は縦貫道建設のための上取場に所在するため、各々調査対象となった。

### 2. 調査体制と調査期間

#### 総括

教育長	吉久勝美(前任)	森田 實(前任)	浦山太郎
教育次長	西村太郎(前任)	友野 隆	
文化課課長	杉原信彦(前任)	岩下光弘(前任)	古川善久(前任)
	森 英俊(前任)	巖井 功	
文化課課長補佐	管 隆(前任)	平井元治(前任)	今井岩雄(前任)
	川崎隆夫(前任)	武久耕作	
文化課課長技術補佐	渡辺正気(前任)	松岡 史	
文化課調査第2係長	栗原和彦		

#### 庶務

文化課庶務係長	赤司岩雄(前任)	姫野 博(前任)	前田栄一(前任)	大淵幸夫
文化課主事	加藤久嘉(前任)	瀧電二(前任)	山本文和(前任)	大神 新
文化課嘱託	因 将太			

## 調査(当時)

## 祇園山古墳

国上館大学文学部助教授	大川 清 (第I~III次)
九州大学医学部講師	北条暉幸 (第IV次)
奈良国立文化財研究所技官	伊東大作 (第III次)
”	佃 幹雄 ( ” )
”	黒崎 直 ( ” )
福岡県教育庁文化課技師	西谷 正 (第I次)
”	栗原和彦 (第II次)
”	石山 勲 (第II~V次)
”	児玉真一 (第V次)

## 調査補助員

第I次	戸田有二 田中義和 青木健二	尾形与典 有吉重蔵 (以上国士館大学考古学研究室)	高橋 章 二宮淳子	西岡みゆき 大島秀俊
第II次	大門直樹 松田政基 光畑克己 水野順敏	井 博幸 四本和行 北原実徳 荒巻裕治	大島秀俊 青木健二 森 広樹 (以上国士館大学考古学研究室)	真玉秀樹 宮下幸雄 石川寿裕
第III次	井 博幸	板橋範芳	二宮淳子 (以上国士館大学考古学研究室)	
第VI次	中司服世 (早稲田大学卒) 井上説男 (佐賀大学) 三好政文 (東京教育大学)	渡部明夫 (同志社大学卒) 阿世賀清子 (東京教育大学) 近沢康治 (福岡大学)		
第V次	上村佳男 (別府大学卒) 渡部明夫		馬田弘稔 (国学院大学卒)	

## 祇園山第2号墳

仏教大学講師	吉本典俊
九州大学医学部教授	永井昌文
九州大学医学部講師	北条暉幸
九州大学医学部助手	橋口達也
福岡県教育庁文化課技師	副島邦弘

## 調査補助員

高田一弘、梅川光隆（京都大学） 香川武志（京都大学）  
安楽登志裕（京都大学） 近沢康治（福岡大学） 中尾 徹（福岡教育大学）

浮羽工業高校（佐藤義幸教諭 他生徒）

## 七曲山古墳群

福岡県教育庁文化課調査員 川述昭人  
" 技師 石山 勲

## 調査補助員

中司照世 児玉真一（早稲田大学） 井上説男

## 岩質鑑定

西南大学工学部教授 唐木田芳文

## 日本道路公団久留米工事事務所

所長 北村照喜（前任） 椿宮久夫（前任）  
庶務課長 御平良彦  
工事長 矢部昌夫

## 調査協力

久留米市教育委員会 半田 豊  
" 塚本直次  
" 樋口一成

## 石橋産業株式会社

高良大社 糸永 新  
" 古賀 寿

久留米市立御井中学校

筑後地区郷土研究会

## 調査期間

## 祇園山古墳

第Ⅰ次 昭和44年12月11日～12月26日  
第Ⅱ次 昭和45年7月11日～8月31日  
第Ⅲ次 昭和45年12月7日～12月28日  
第Ⅳ次 昭和47年2月14日～3月25日  
第Ⅴ次 昭和47年4月1日～6月1日

## 祇園山第2号墳

第Ⅰ次 昭和46年7月20日～9月29日

第Ⅱ次	昭和47年1月25日～2月28日
七曲山古墳群	
第Ⅰ次	昭和46年2月8日～3月16日
第Ⅱ次	昭和46年4月15日～5月27日

### 3. 祇園山古墳の現状保存について

祇園山古墳は、後述するように学術上重要な意義を有するにもかかわらず、諸般の事情によりその現状保存を実現するにいたらなかった。本墳の調査結果を報告するにあたり、この間の経緯について若干述べておきたい。

祇園山古墳は、昭和41年度に福岡県教育委員会の斡旋により、日本道路公園福岡支社（現福岡建設局）が福岡県史跡調査会（長沼賢海会長）に委託した埋蔵文化財包蔵地の分布調査によって発見された。この間の経緯については「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ」の「発掘調査の端緒と概括」に詳しいのでそれに拠られたい。

調査者である古賀寿氏による本墳の概要と建設工事に関する処置についての記述は、以下のとおりである。

種別 古墳？

名称 祇園山遺跡

概要 「高良記」に大祝家の祖、<sup>ひつぎこのみこと</sup>ひつぎ子命の廟とする所で、山丘頂を修飾した古墳かとも思われる。東西31メートル、南北24メートルばかり、高さは3.5メートルを測る。一見、前方後円墳のように見える。かつてここから銅剣4本が発見されたという記録もあるので慎重に検討したい。ここは高良山3聖所の一つで名高い「高良山の一つ火」もこの丘から出たものだと伝えている。

建設工事に関する処置

破壊すべきではない。

昭和44年7月1日に、公団と福岡県教育委員会との間に縦貫道建設予定地に含まれることとなった埋蔵文化財包蔵地についての発掘調査の委託契約が交わされた。因みに、福岡県教育庁文化課（当時）は同年4月に発足している。

本墳についての調査は昭和44年度に開始され、昭和47年6月までの間に計5次にわたって行われたが、性格的には第Ⅰ次～第Ⅲ次の前半とこれ以降の後半とに分けられる。前半の調査



は、方墳の実態把握に重点が置かれ、以後は、次第に後述する本墳の現状保存に備える性格を強めていった。

第Ⅰ次調査は内部主体と墳形の確認を目的とし、その結果大型箱式石棺を内部主体とし、九州では極めて稀な葺石をもつ方形墳であることが判明した。第Ⅱ次調査は葺石の清掃・実測調査を目的としたが、隣接する東光寺城跡(註1)・罫口遺跡(註2)の調査と平行して行われ、かつ葺石の清掃に意外に時間を要したこともあって実測するにいたらず、あらためて年末に第Ⅲ次の調査を実施することとした。また、第Ⅱ次調査の過程で南隅角部外周に石蓋土壌墓(D1)が存在することが判明したので、次回の調査時にD1周辺についての発掘調査も行うこととした。

第Ⅲ次調査時に発掘区を若干拡大したところ、計10基の石蓋土壌墓(D1~9)・箱式石棺墓(H1)を確認するにいった。前回の調査時点では、方墳とこれに先行する弥生時代の墓地和が重複しているものと判断した。しかし、予想以上に密集する土壌墓、石棺墓に加えて竪穴式石室(T1)もが発見され、これに伴う古式須恵器が示す製造期間の中はこれらの主体群と方墳とを単純に先後関係でとらえる見解に再検討を迫ることとなった。

計3次にわたる調査によって、本墳は葺石を持つ方形墳で、大型の箱式石棺を内部主体とする古式古墳として極めて重要な意義をもつことが明らかとなった。加えて、裾部外周に本墳と同時期に営まれた可能性もある主体群が確認されたことにより、本墳の現状保持がより強く意識されるに至った。

一方当初の縦貫道建設計画(Fig.1)によって工事が行われるとすれば、本墳は切土部分に属するため本線とこれに付設される側道部分によって東と南の両隅内部が辛じて残る程度――

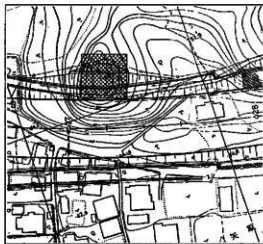


Fig.1 祇園山古墳付近縦貫道建設計画図 (1/2,000)

方墳としては実質的に全壊状態となり、裾部外周にその存在が予測される主体群もまた破壊されることになっていた。

そこで、第Ⅲ次調査終了後当委員会は公園福岡文社長(当時)に対して、昭和46年2月5日付46教文第119号にて祇園山古墳の現状保存についての協議を公式に申し入れた。当委員会では、祇園山古墳のもつ学術的意義からみて路線変更あるいは工法上の設計変更を行なって現状保存を図るべきであると主張した。しかし公園側は、

路線変更については、

1. 本墳を避けてルートを西側にフルと人家密集地帯を通過することになる。
2. この場合、原設計よりもルートのカーブの半径が小さくなるので、本墳の前後についての大巾な手直しが必要である。

工法上の設計変更については、

1. 高架案

本墳の直前（福岡寄）に登坂車線を付設する急勾配がある。

2. トンネル案

上記案と同理由により、本墳の前後の車線の縦断面についての大巾な手直しが必要である。

との理由を挙げ、さらに、用地買収が終了して民家の移転が始まり、かつ、本墳の前後の建設工事が進捗している段階では、路線・工法の変更は技術的には可能であっても各方面に及ぼす影響の大きさから現実の問題としては不可能であると主張した。

公団側とは、本墳の現状保存を強く主張する地元久留米市教育委員会を交えて協議を重ね、この間は裾部外周の主体群と方墳との時期差の有無等について説明する必要を感じながらも保存についての結論を得るまでは調査を再開しないこととした。

一方、昭和46年9月に御井町婦人会・公民館・筑後地区郷土研究会を中心とする市広い層の市民による本墳の現状保存運動が起り、完全保存を求める署名は最終的には16,000名の多きに達し、同年10月6日、久留米市議会は請願書を採択した。

路線ならびに工法上の変更は不可能と主張していた公団側は、協議の過程で、側道建設を中止することによりこれに伴う切土作業を回避する、さらに擁壁の設計変更を行ない三分勾配とすることによって方墳墳丘の部分保存（約80%）を図る案を提示するに至り、公式には昭和47年2月19日付福支総第64号によって同案は回答された。

以上の経過により、破壊予定部分の記録保存を目的とする第Ⅳ・Ⅴ次の調査が行われるに至ったのである。

当委員会では公団側提示案に同意せざるを得ない旨を、昭和47年5月1日付47教文第145号にて久留米市教育委員会ならびに筑後地区郷土研究会あてに通知したが、これに対して同委員会ならびに同研究会は、同年5月16日付47教文第25号にて強い不満を表明された。

本墳周辺の擁壁建設工事は同年8月から開始された。ところが、切土作業中に土砂の一部が崩落したことから、公団側は地盤の脆弱性を理由に擁壁の勾配を緩くしたいとの意向を明らかにした。再び提示された設計図によれば保存率は約60%と後退するもので、妥協し難いものであった。しかも、市民の完全保存を求める声は依然として強く、久留米市教育委員会と協議の結果、急転した事態についての市民の意見を聞くための現地説明会の開催が企画された。

説明会は同年9月27日に地元の御井町公民館で開かれ、席上、公団の矢野工事長と施工のK.K.大本組稲田所長とから本墳付近の車線の線形、地質ならびに擁壁工事の工法等について説明が行われた。これに対して、市民側から部分保存することについての強い不満が述べられるとともに、公団側が工法の決定にあたり技術的に最大限の努力をしたとは考えられないとの指摘がなされた。当然のことながら、部分保存することについて市民の同意は得られなかったが、在来工法の再検討・改良によって破壊部分を最小限に食い止める努力を続けるとの公団側の約束をとりつけたのは大きな成果であった。公団側は直ちに本社技術課・試験担当員をも含めて工法の再検討を行い、この結果が同年11月24日に新工法の導入により方墳墳丘の約80%の保存を図る最終設計図として提示された。

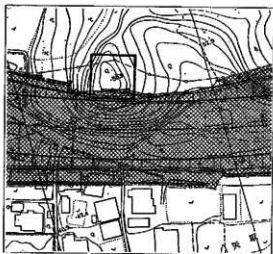


Fig. 2 祇園山古墳と完成した縦貫道・側道関係図  
(1/2,000)

かくして祇園山古墳は幸じて部分保存された(PL. 1, Fig. 2)。100%でなければ率は無意味であると同時に考えたが、保存を熟望する市民の声为建设工法を改良し墳丘保存率を60%から80%へと高める原動力となったことは疑いなく、この点行政側担当者の一人としてその不明に忸怩たるものがある。

縦貫道は現在熊本・御船I.C.から福岡・若宮I.C.までの間が営業しており、昭和54年春には北九州一直方道路が開通することによって山口・福岡・熊本の3県が有料道路でつながると

いう。当委員会が担当した縦貫道関係埋蔵文化財の発掘調査は昭和51年秋に終了し、整理作業・報告書刊行もまたこの昭和53年度末に完了する。着手からまる10年を要し、南関I.C.から八幡I.C.までの約104kmの間の古墳七十数基を含む計196カ所(遺跡数とは一致しない)、発掘面積にして270,563㎡を調査対象とした。これら多数の遺跡は既に消滅し、僅かに本墳と小郡市・三沢遺跡(旧土取場)の計2遺跡が部分保存されているに過ぎない。路線および建設工法を変更しての現状保存は、前述のように技術的に不可能であるからではなくて、供用開始日の延期あるいはこれに伴う直・間接的経費の膨大な増額を要するなどの理由から実現していない。

誤解を恐れず敢えて述べれば、道路建設そのものを一定の条件つきにせよ是認するとすれば、人家密集地帯・耕作地帯を極力避けようとする路線決定法を原則的には容認せざるを得

ず、必然的に埋蔵文化財が眠る低丘陵などが選ばれがちとなるのが実状である。無論、指定史跡は予め路線から外されるが、これは遺跡全体の1%にも達し及ばない。従って、遺跡密集地域ではA遺跡を避けようとする結果としてB遺跡が路線に含まれることになりかねず、いきおい遺跡のランクづけ・選択を迫られることになる。しかも、発掘調査の結果によっては事前の両者のランクが逆転した例さえ現実にある。こうした事態を避けるためには、路線決定以前に遺跡の性格・範囲確認のための予備調査の実施が必須であるが、昭和48年10月19日付で施行命令が発せられた九州横断自動車道の佐賀県鳥栖市～大分県日田市間の新設に伴う県内建設予定地についての路線決定前の予備調査は、諸般の事情で実施されていない。

縦貫道関係の一連の調査により得られた成果は大きい、同時に払った代償も小さくはない。直視すべきものとしての実態を敢えて述べた次第であり、御批判と御叱正を冀うものである。

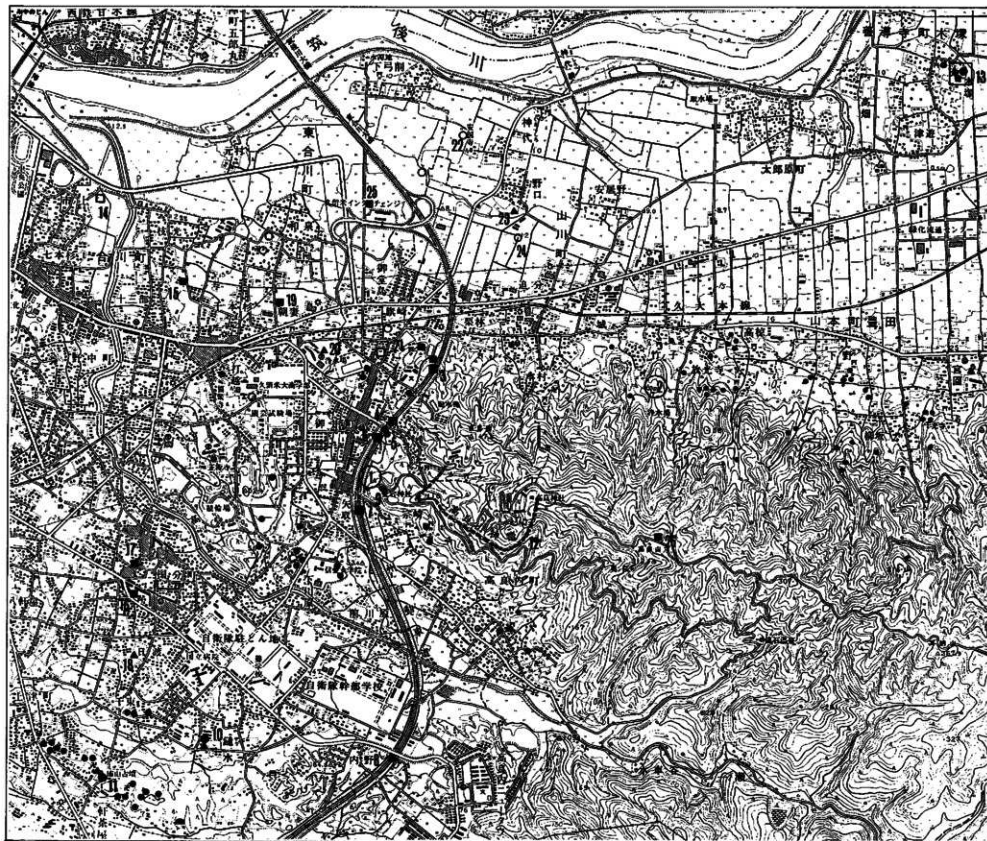
なお、祇園山古墳と小郡市・三沢遺跡の両遺跡は、昭和53年3月25日付をもって史跡として県指定された。本墳は昭和47年6月以降事実上放置状態にあり、荒廃しつつある墳丘ならびに基石についての環境整備が急務となっている。

- 註 1 大川 清・戸田有二 「東光寺城遺跡の発掘調査」〈九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅺ〉 1977年  
 2 大川 清・栗原和彦・井 博幸 「麴口古墳」〈九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅱ〉 1971年

## Ⅱ 位置と環境

ここに報告する祇園山古墳群、七曲山古墳群は、いずれも福岡県久留米市に所在する。久留米市へは、福岡市から私鉄特急電車で所要時間約35分で到着する。電車が両市の略中間にあたる筑紫野市の二日市駅を過ぎて間もなく、左斜め前方に広大な筑紫平野を隔てて略同じ高さの山頂が連続として続く山並が目に入る。これが耳納（水縄）山系である。この山系の西端が、行政区画では現久留米市の東部に含まれている。

有数の穀倉地帯である筑紫平野を東西に、筑紫次郎、筑後川が流れ、豊後・日田盆地と有明海とをつないでおり、久留米市は、この中流域にあたる。平野の北端は福岡平野に、西端は背振山系に接している。こうした地理的環境から、筑紫平野および緑辺山麓部は、各時代にわたる東西、南北の文化交流の痕跡をとどめる遺跡の密集地帯でもある。耳納山北麓に集中する装



1. 姫園山古墳群
2. 七曲山古墳群
3. 東光寺城跡
4. 高良山大宮明神跡
5. 磯山古墳群
6. 高良山大祝忌跡
7. 栗崎遺跡
8. 野口古墳
- (以上姫園通開係遺跡)
9. 磯山古墳
10. 石鏡山前方後円墳
11. 浦山前方後円墳
12. 高良山神籠石
13. 木塚遺跡・木塚前方後円墳
14. 北垣敷遺跡
15. 筑後岡府跡
16. 筑後園分借寺
17. 筑後園分借寺
18. 日渡遺跡
19. 朝妻遺跡
20. 横道遺跡
21. 二本木遺跡
22. 安国寺遺跡
23. 野口遺跡
24. 大島遺跡
25. 下見遺跡
26. 西谷火葬墓

凡例	
▲	縄文時代
○	弥生時代
●	円墳
◐	前方後円墳
■	歴史時代
□	複合遺跡

Fig. 3 姫園山・七曲山古墳群周辺遺跡分布図 (1/25,000)

飾古墳はその典型といえる。また、軍事施設と見做される神籠石が、耳納山系西端の高良山に築造されたことから、自ずと当該地域の重要性が知られる。

以下に、久留米市東部の遺跡の二三についてその概略を紹介する（番号は Fig. 3 のそれと一致する）。

- 3, 東光寺城跡（山川町——註1）
- 4, 高良山大宮司邸跡（御井町——註1）
- 5, 轡山古墳群（御井町——註1）
- 6, 高良山大祝邸遺跡（御井町——註1）
- 7, 宗崎遺跡（御井町——註1・2）
- 8, 罌口古墳（高良内町——註3）
- 9, 礪山古墳（御井町——註4）

石蓋土壘墓計4墓。中央に成人用2墓、両端に小児用各1墓が並列する。

- 10, 石櫃山前方後円墳（高良内町——註5）  
墳丘全長100～115m、横口式石棺直葬、消滅
- 11, 浦山前方後円墳（上津町——註6）  
帆立貝式で、前方部を失う。単室横穴式石室に加飾した横口式石棺を納める。
- 12, 高良山神籠石（御井町——註7）  
切石を用いた列石線のうち、1.5km余が確認されている。
- 13, 木塚遺跡・木塚前方後円墳（善導寺町——註8）  
弥生時代前期土壘墓・木棺墓・石棺墓。全長約48mの帆立貝式。古式単室横穴式石室。樽形埴・形象埴輪（製・甲・冑・馬・家等）が出土。
- 14, 北屋敷遺跡（合川町——註9）  
昭和52年久留米市教育委員会調査。縄文時代早～中期。竪穴状遺構（住居跡?）。押型土器・船元I式系土器。弥生時代前期後半～中期前半の壘棺墓他。
- 15, 筑後国府跡（合川町——註10）  
方8町か。昭和47年度から久留米市教育委員会が継続調査を行なっている。
- 16, 筑後国分僧寺（国分町——註11）
- 17, 筑後国分尼寺（国分町）
- 18, 日渡遺跡（国分町）  
縄文中期～後期の土器が出土。
- 19, 朝妻遺跡（朝妻町）  
昭和53年久留米市教育委員会調査。10C末～12Cの獨立柱の建物（5間×3間）を確

認。

20, 横道遺跡（御井町——註9）

昭和52年久留米市教育委員会調査。

縄文後代早期後半（竪穴状遺構他）・晩期前半。

奈良末～鎌倉時代にかけての溝状遺構他。

21, 二本木遺跡（御井町）

昭和50年久留米市教育委員会調査。

弥生時代中期の溝・住居跡を確認。平安末～鎌倉時代の遺構もある。

22, 安国寺遺跡（山川町）

弥生時代中期要権墓群。昭和53年～54年にかけて久留米市教育委員会が調査予定。

23, 野口遺跡（山川町）

昭和53年久留米市教育委員会が調査。

縄文時代前期（溝式・曾畑式）土器出土。竪穴状遺構を確認。

24, 大島遺跡（山川町）

銅剣（鈍か）の出土を『筑後将士軍談』が伝えている。

25, 下見遺跡（東合川町——註12）

昭和52年久留米市教育委員会調査。

奈良末～平安時代初頭にかけての、住居跡群・掘立柱の建物・井戸・溝を確認。墨書土器・緑釉陶器が出土。

江戸中期の墓地区・溝・土塚等をも確認。なお、土塚からは朝妻焼が出土した。

26, 西谷火葬墓（——註13）

火葬墓13基，土塚墓2基。奈良末～平安前期。

なお、久留米市教育委員会が調査を担当された遺跡については、同教委の近沢康治氏より御教示を得た。氏の御厚情に心から感謝いたします。

註 1 副島邦弘編「福岡県久留米市宮ノ陣町・御井町所在の遺跡群の調査」〈九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 XV〉1977年

註 2 大川清・伊藤博幸「宗崎遺跡」〈九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 I〉所収 1970年

註 3 大川清・栗原和彦・井 博幸「野口古墳」〈九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 II〉所収 1971年

註 4 川上市太郎「高良山礪山枕付舟型埴輪」〈福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書一史蹟の部一9〉所収 1934年



1. 紙圍山古墳
2. 紙圍山第2～6号墳
3. 礪山古墳
4. 礪山古墳群
5. 高良山神龜石
6. 東光寺城跡
7. 高良山大宮司跡
8. 高良山大祠跡
9. 宗崎遺跡

Fig. 4 紙圍山古墳群と高良山  
周辺地形図 (1/8,000)



なお、本墳の清掃・実測調査が、1971年に仏教大学講師吉本亮俊氏らによって行なわれた。また、昭和38年に西北約12mの地点から、石室土壌墓1基が発見されており、周辺になお群集するものとみられる（波多野皖三「礪山古墳下の石室」〈久留米市文化財報告書 7〉1974年）。

- 註 5 渡辺正気・古賀 寿・宮小路賀宏 「石櫃山古墳」〈福岡県文化財調査報告書 41〉1969年
- 註 6 浜田耕作 「筑後国三井郡上津党木村二軒茶屋の古墳」『九州に於ける裝飾ある古墳』〈京都帝国大学文学部考古学研究报告 3〉1918年
- 註 7 武藤直治・石野義助 「高良山神籠石」〈福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告 5〉所収  
1930年、塚本直治・樋口一成 「史蹟高良山神籠石保存管理計画策定報告書」〈久留米市文化財調査報告書 15〉1977年。
- 註 8 西健一郎・萩原裕房・横尾義明 「木塚遺跡」〈久留米市文化財調査報告書 14〉1977年。
- 註 9 概要が「第4回 くるめの考古資料展」のパンフレットに掲載されている。
- 註 10 古賀 寿・萩井康治・中尾 徹・松田直也・近沢康治・山口 淳 「筑後国府跡 I」〈久留米市文化財調査報告書 12〉1976年、古賀 寿・萩井康治・萩原裕房・近沢康治 「筑後国府跡 II」〈久留米市文化財調査報告書 13〉1977年
- 註 11 横田義章 「筑後国分寺」〈福岡県文化財調査報告書 44〉1969年。註9に同じ。『筑後国分寺 I』〈久留米市文化財調査報告 18〉1978年
- 註 12 「東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告」〈久留米市文化財調査報告書 19〉1978年
- 註 13 古賀 寿・渡辺正気・宮小路賀宏・樋口一成 「西谷火葬墓群」〈久留米市文化財調査報告書 3〉1971年

### Ⅲ 祇園山古墳の調査

1. はじめに

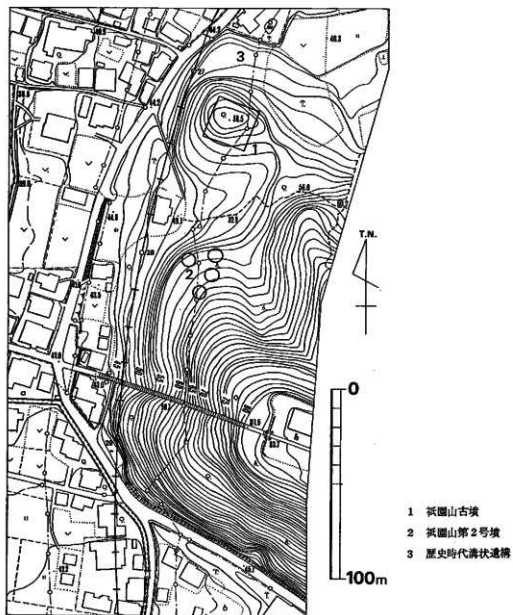


Fig. 5 祇園山古墳群周辺地形図 (1/2,000)

本墳の調査は、主として前半（第Ⅰ次～第Ⅲ次）を国士館大学部考古学研究室（大川清助教）が、後半を福岡県教育委員会が担当した。また、第Ⅲ次調査での葺石割面図の作成にあたっては写真測量を実施したが、この撮影については奈良国立文化財研究所（伊東大作・佃幹雄・黒崎直）に担当していただいた。

受託調査であるので調査範囲は原則として建設予定地内に限られるが、本墳の場合は方墳という外形ならびに裾部外周に主体群が営まれているという特殊性から土地所有者である石橋産業K.K.の快諾を得て、事前の地形測量ならびに発掘の範囲を拡大している。

## 2. 祇園山古墳

### (1) 立地 (PL. 2-1, Fig. 5)

祇園山古墳は、耳納山系の西端標高312m余の高良山頂から西の平野に向かって派生する丘陵の先端部に営まれている。筑後平野の西半を一望の下に見渡すことのできる平地との比高約10mの独立気味の低台地上に位置しており、占地の意図を窺わせる。

### (2) 墳丘

#### 外形・規模 (PL. 2-2, 3 Fig. 6~15)

伏聞後の測量調査により直ちに本墳は葺石をもつ方墳であることが判明し、みかけの規模は、一辺が約25m、高さ5mとみられた。墳頂部平坦面の縁辺部および南斜面の一部が変改を受けているものの墳頂部に陥没はなく、総じて墳丘の遺存度は極めて良好と思われた。裾部も、東隅角部付近を除けば著しい損壊は見当らない。西側を除く3面には平坦面が続き、北隅角部の外側は稍突出しているかに見えた。

方墳の対角線の一木は略磁針の南北方向にあるが、記述の都合上以下北西～北東辺を北辺、北東～南東北を東辺、南東～南西辺を南辺、南西～北西辺を西辺と呼び、またこれに対応する斜面を北斜面～西斜面とする。

方墳の各辺は直線とはならず中央部が稍膨らむ弧を描き、各隅角部は崩壊して不明瞭ではあるが隅丸となっている。また、東西中央部長約23.7mに対して同南北中央部長は22.9mと約0.8mの差がある。

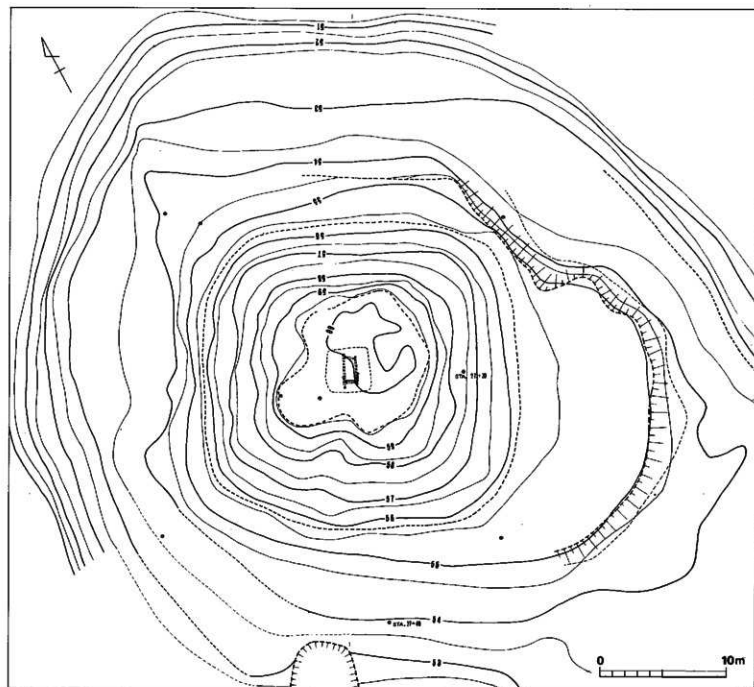


Fig. 6 孤園山古墳堆丘測量圖 (1/300)

現存高は、各辺裾部外周の高さが一様ではないため北・西側からは約5m、南・東側で約4.5mであり、封土の流失分を考慮すると当初の高さは、北・西側からみて約6mと推定される。墳頂部は現在一辺約10mの平坦面となっている。

段築成ではないが、標高56.5m——基部から約1.5mの高さを境として傾斜角が異なり屈折する。この屈折部は後述する第2段葎石の基部にあたり、これまた東西中央部長が約9.9mと南北同部長よりも長く、全体として東偏している。

構造 (PL. 9-2, Fig. 7)

墳丘構築にあたっては地形の高まりをとりこみ、基部に地山整形、上部には盛土手法を各々用いている。西斜面の墳丘断面 (Fig. 7) によれば基部は地山を高さ1.4~1.6m、一辺17m前後の方形台状に削り出したとみられ、上面の表土は除去されずに黒色腐植土層 (最下層の網目とする部分) として残る。従って、本墳はその高さの約 $\frac{1}{4}$ が削り出されていることになる。この削り出しの範囲は西辺を除けばいずれも葎石最下段縁よりも広く、北辺で0.6m、東辺で0.7~1.3m、南辺で0.1~0.5m各々外側に及んでおり、底辺長は東西約25m、南北約24mとなる。

- 1 赤褐色土
- 2 暗赤褐色土
- 3 赤色土混暗褐色土
- 4 赤色土混褐色土
- 5 黄褐色砂質土
- 6 褐色土
- 7 赤色土混黄褐色土
- 8 褐色土
- 9 赤色土
- 10 黄褐色土
- 11 茶褐色土
- 12 暗茶褐色土
- 13 灰褐色土
- 14 暗褐色土

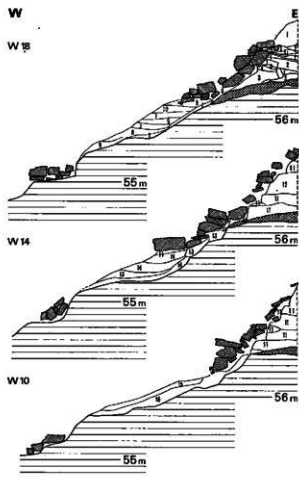


Fig. 7 祇園山古墳西斜面墳丘東西断面図 (1/60)

盛土にあたっては縁辺部をいったん高くするカルデラ手法がとられ、上半部の作業は石積構築と平行する。また西斜面では盛土の様相が南半と北半とは明らかに異なっており (Fig. 7) , 盛土の作業単位が複数であったことが知られる。

地山整形作業は裾部外周にも及び、北辺で約5.5m、東辺で約13m、南辺で約4m、西辺で約3mの巾となる平坦面を設けている。原地形の関係から東辺では特に広く、西辺では岩盤が露頭していない中央部稍北隅角部寄りに土砂を盛って整地している。東隅角部と北辺西半のD13・K1にかけてのテラス縁辺部は、後世の擾乱により弧状に抉り取られている。南北両辺ではテラス部の外側は斜面となるが、西辺では既述のように土盛・整地されて極めて緩やかな斜面が続いている。

#### 葺石 (PL. 4~11, Fig. 7~10)

現状では墳頂部平坦面近くの上半部を失っている。当初は全面にはなく、裾まわり (第1段) と削り出した台状部上面付近以上 (第2段) との計2段に葺かれていたと考えられる。従って、第1段は墳丘範囲を示すものであり、第2段は盛土部分の流失防止を目的としたものといえる。

西斜面での観察によれば (Fig. 7) , 第1段の基礎は前述台状部立ち上りの内側をさらに一段掘り下げた面に置かれている。基部の積み方は一定しておらず、W10・18付近のように規則的に積み上げる部分があれば、乱雑な箇所 (W14) もある。第1段は、この据えつけのための掘りこみと上部の斜面との間を充填する形で葺かれている。

第2段の基部は、台状部上面の稍下、削り出す際に生じた法面の凹凸を土砂を盛って整えた面に置かれている。所によって粗粗の差はあるがいずれも大き目の石材を配しており、積むというより貼る感じの上部よりも強固につくられている。西斜面の基部は直線となるが北斜面では中央部が稍凹み、東斜面では逆に膨らむ。底辺に対しても全体的に稍東に偏して均斉を欠く。

石を葺く作業は盛土後に行われるが、西斜面南半 (W10・14付近) では上段盛土部分の法面の凹凸を整形しないまま2段目を葺いているのに対し、北半 (W18付近) ではカットした法面に石材を叩きこむかのように葺いており、作業単位が異なる。

各斜面の葺石の状態は一様でなく、北斜面では、第2段目の下半は石垣状に積み上げられ傾斜も最も急であるが、全体に中央部が凹んでいる。南斜面は、傾斜も緩く総じて隙間なく石を置いた平面的な感を受ける。第2段基部は判然とせず、大き目の石材を用いなかっただけである。西斜面は、第2段目に限れば最も整齊な感を受け、傾斜角も北斜面に次ぐ。

全体としては稍均斉を欠くものの、多量の石が葺かれた築造当時の本墳は、鋭い稜線を見せつ辺を庄すかのように小丘上に聳えていたものと思われる。

作業単位を示す境界線 (▲印を付す) のうち判明したのは、北面で5カ所、西面では7カ所である。各作業単位の巾は均一ではなく、1.3m前後、1.6m前後、1.8m前後、2.2m前後と差

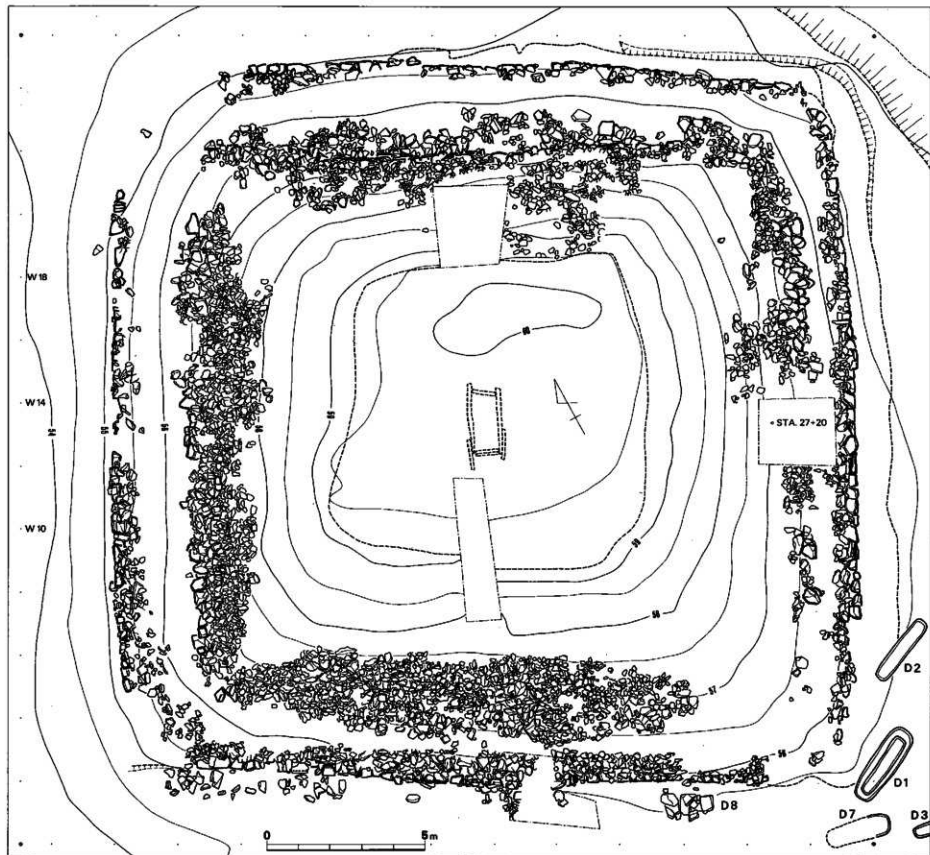


Fig. 8 姫園山古墳葺石平面図 (1/120)



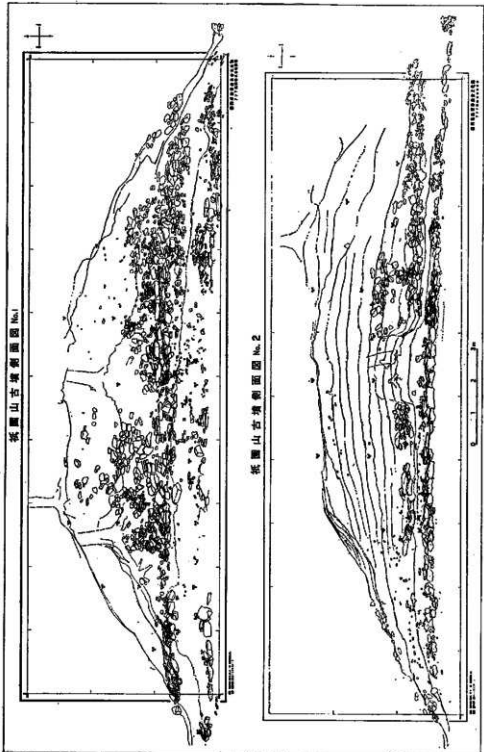


Fig. 9 祇園山古墳背石側面写真測量図 1 (1/120)

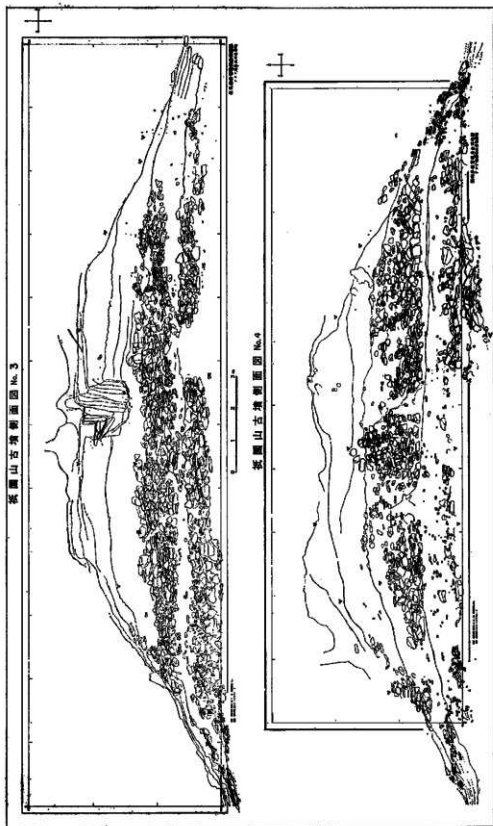


Fig. 10 祇園山古墳葺石側面写真測量図 2 (1/120)

がある。西斜面の中央稍南寄りに巾1mに満たない単位があり、両端から着手されたことを示すかとも思われる。境界線は西斜面の一部(PL. 8-1の左側から2番目)を除けば、上部にいく程不明瞭となる。

なお、葺石材・岩盤の岩質についての西南大学唐木田芳文教授の鑑定結果は、下記のとおりである。

#### 北斜面

縞状絹雲母片岩(石英レンズを含む)

縞状緑泥石片岩

縞状含絹雲母——石英片岩

縞状絹雲母——石英片岩

#### 南斜面

縞状含絹雲母——緑泥石片岩

縞状絹雲母片岩

縞状絹雲母——石英片岩(細粒)

輝緑岩(中粒)

緑泥石——絹雲母片岩

絹雲母——石英片岩

#### 岩盤

縞状絹雲母——石英片岩(比較的絹雲母が多い)

### (3) 内部主体(PL.12, Fig.11~14)

#### 箱式石棺

本墳の主体は、安山岩の板石、大小5枚を主体とし、さらに両側壁の不足部分をおきなうたため、それぞれ板石1枚を用いて構築した箱式石棺である。蓋石は、石棺を覆うに足る大きさの1枚石を用いていた。石棺の内部はもちろん蓋石内側には、朱が塗られていた。とくに、蓋石の内側朱彩には、刷毛痕と思われるものが認められた。石棺の大きさは上部内法で、長さ約1.7m、巾約80cm、底部では長さ約2m、巾約75cm、深さ約90cmである。

この石棺の中軸は、N-29°16'-Eであるため、記述の便宜上、磁北を約30度東にずらして、両側壁については東、西とし、両妻を南、北とする。両側壁は、さききのべたごとく、若干寸法に不足をきたしているため、それぞれ板石を補足している。それは、東西両側壁とも、南寄

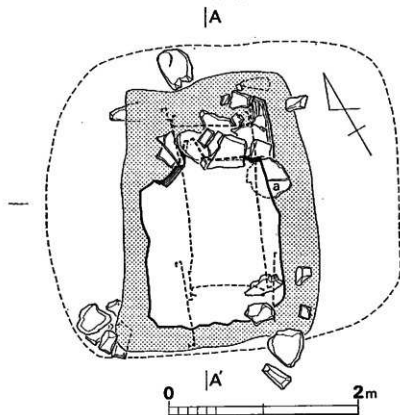


Fig. 11 祇園山古墳墳頂部箱式石棺蓋石実測図 (1/40)

りの部分において見られる (Fig.12)。この補足用の板石側壁は主体板石の外側から当てがわれたため、石棺内部では、この部分に空隙が生じることになる。その部分に粘土をはりこみ朱彩してあった (Fig.13)。

#### 石棺構築 (PL.13・14)

この石棺を、構築するにあたっては両妻の部分、側壁がはさむ形になっている。そのため、両側壁は妻石で内傾することはふせげるが、両妻はときには土圧によって内傾することもありうるし、現に、この石棺では、両妻は上部と下部では、約30cmの違いがあって上部が内傾している。両側壁は外側から圧力を加えれば、十分安定する。しかし、さらに強固に側壁を安定させるために、50×30cm程度の雲母片岩を側壁下部外側に控積みのように配置して土をうめ込み、さらに、側壁中央附近の東壁ならびに中央部にそれぞれ1個の雲母片岩を置き、それから上部にかけて粘土を置き、粘土の外側には淡黄色土をおき、側壁上部近くに、さらに粘土を置いて安定させてある (Fig.12)。

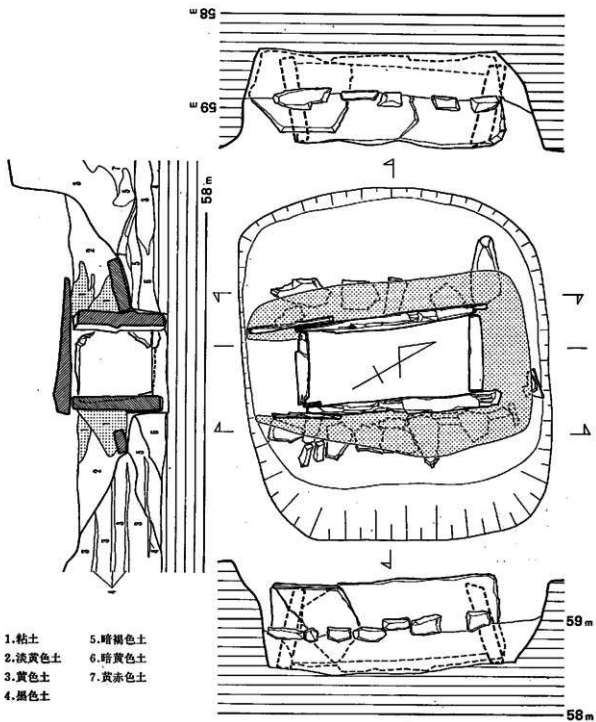


Fig. 12 祇園山古墳墳頂部箱式石棺全体図 (1/40)

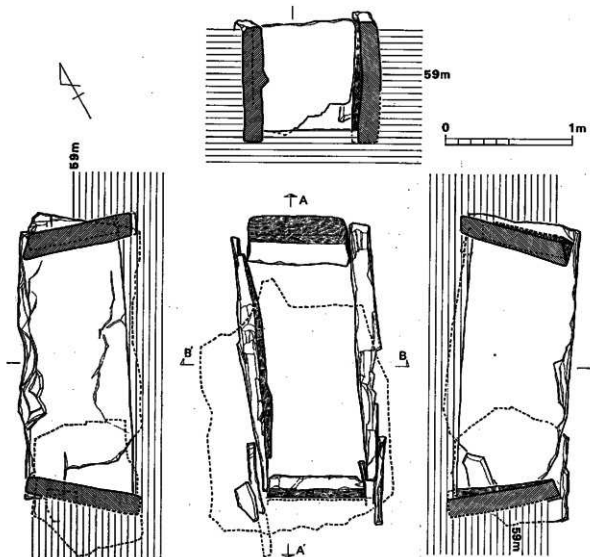
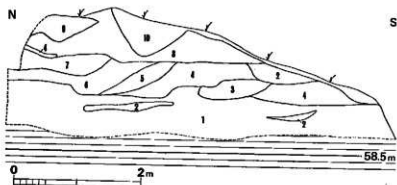


Fig. 13 祇園山古墳墳頂部箱式石棺実測図 (1/30)

そこで、これらの石棺を構築するために、墳丘上部中央に方形隅丸の壙を掘って、そこに4側壁の石を置いた。壙の大きさはA-A'で約3.2m、B-B'で約3.6mのすり鉢状にくぼめ、現表土下約1.1mの深さのところから一段と深く掘り込まれている。その掘り込みは、東西側壁外方60~70cmのところから、ほぼ垂直に約50cm下り、ゆるやかに内側へ深く掘り込んだその最下部に側壁をたて、控積みの石を外側に並べ、上方に粘土をおいて安定させた。



- 1 淡褐色土 2 黒褐色土 3 礫 4 混黄色粘土ブロック淡褐色土 5 混黄色粘土ブロック黄色土 6 暗褐色粘質土 7 混粒子暗褐色土 8 暗褐色土 9 赤色顔料+粘土+黒色粒子

Fig. 14 祇園山古墳墳丘南斜面南北断面図 (1/60)

#### (4) むすび

この石棺内部には、遺骸はなく、さらに副葬品も全く見当らなかつた。もちろん、丹念に内部に遺存していた土砂をフルイにかける作業をおこなったが、副葬品の細片をも検出し得なかつた。このことは、この石棺内に埋葬がなされたか、否かを考えさせることとなった。そこで埋葬の事実があったとするならば、盗掘を考慮せねばならない。盗掘と考えるならば、その侵入場所がどこであったか等々を考えてみなければならない。

まず、天井石の状態についてみると、蓋石北側の部分に天井石と同質の安山岩破片が、不規則に天井石や側壁上部にかかりながら、約10個程度かかれていた。さらに蓋石東側の北寄りに、40×40cm大の安山岩(a)があった。この安山岩aは、天井石と東側壁との間に、横のようにくい込んでいた。いま述べた、蓋石北側の安山岩破片の状態と、安山岩(a)の状態、さらには蓋石の北側が粉砕片を空隙にかぶせたと考えることもできるが、安山岩の存在はそのことを肯定することを躊躇する資料であらう。

石棺構築の際のべた石棺側壁上部近くに2次にわたる粘土の加工があった。その第2次(上部)の粘土は天井石を覆っていたものの基部に該当するものと考えられる。この石棺蓋石上部にはきわめて少量の粘土が散見された。本来ならば側壁から蓋石にかけて、多量の粘土が覆っていてしかるべきであろうに、それがあまり見当らないというのも不思議であった。もっともこの石棺の南外側の墳丘断面によれば、現表土近くに、酸化鉄朱(べんがら)まじりの粘

土が多量にのこっていた。そのことは蓋石上部を覆っていた粘土や、酸化鉄朱塊を除去してここに放置したものではなかろうか。とすれば、この蓋石上部の土は埋葬後、一度除去され蓋石の北側をおしあげて内部の副葬品などを取り去ったのではなかろうか。そして安山岩は、パッキングのように利用され、蓋石の碎片を空隙にかぶせたと考えることができよう。この石棺の発掘にあたった時期は明瞭ではないが、かなり古い時期と考えられよう。

#### 編者注

③および④は、〈九州縦貫自動車造園係埋蔵文化財調査報告 I〉に掲載した報告文を転載したものである。

### 3. 裾部外周の主体群

#### (1) 調査の範囲

既述のように、第Ⅱ・Ⅲ次調査では南隅角部周辺を発掘した。第Ⅳ・Ⅴ次調査では、本線建設によって破壊されることとなった北から南西側にかけての範囲を全面発掘し、破壊を免かれる部分については裾部から約2mまでの範囲を清掃し、主体の存在を確認するにとどめた。ただし、D12とT7とは自然崩壊の恐れがあり、D10と11とは蓋石を失って露出状態となっていたため実測も行った。

#### (2) 裾部外周の主体の数と位置

方墳の裾部外周から発見・確認された主体は、計62基に達する。その内訳は、

壘形墓 (K)	3 基
石蓋土墳墓 (D)	25基+7 (未調査5, 不明2)
箱式石棺墓 (H)	7 基
竪穴式石室 (T)	13 基
不明 (A~G)	7 基



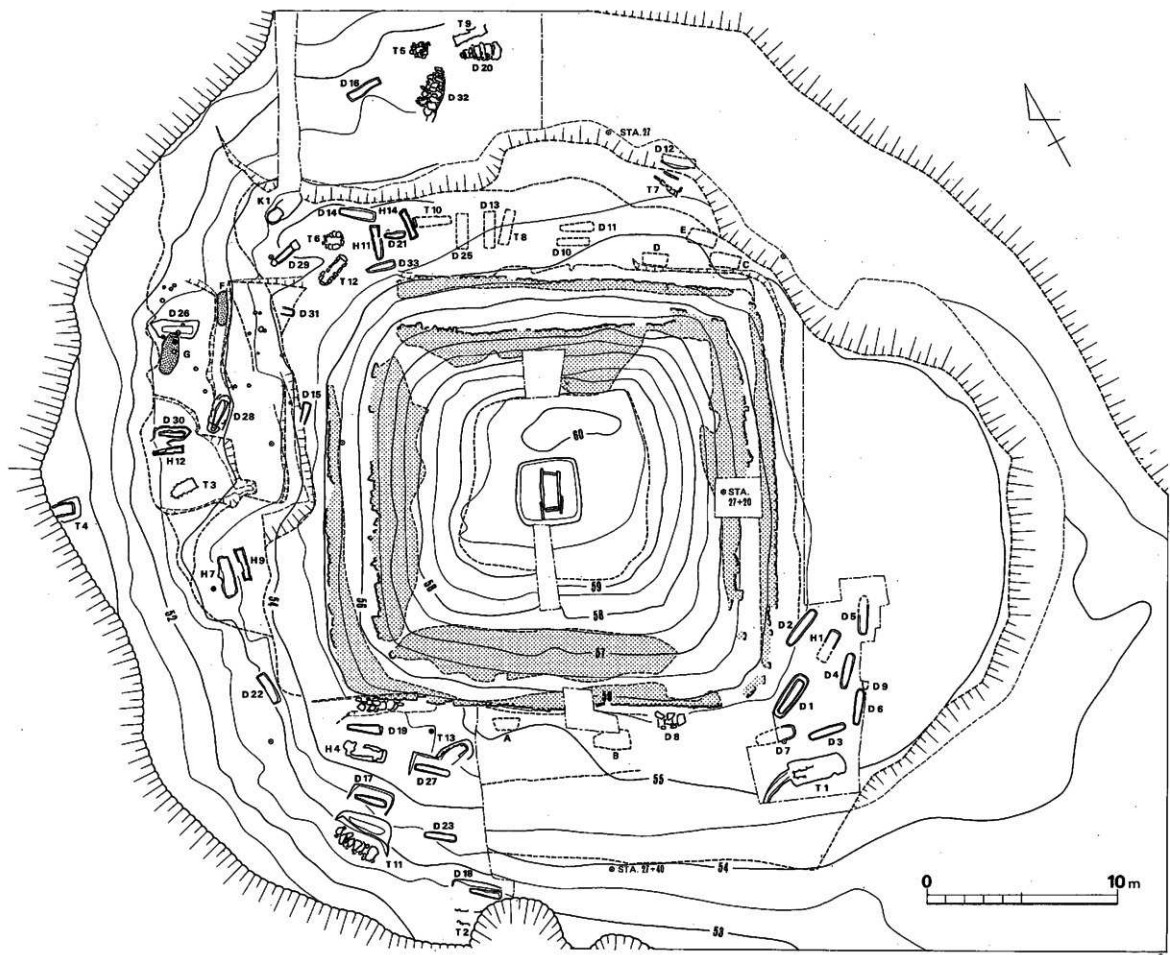


Fig. 15 祝融山古城南部外用主体群余体图 (1/200)



Fig. 16 祇園山古墳北隅角部裾部外周主体群全体図 (1/60)

である。

以上のうちD8・13は内部が未調査であるので、土壌層以外の構造をとる可能性がある。また、構造不明としたA～GのうちC～Eの計3基は「石棺系石室」（註1）とも考えられる。なお、小竈では竪穴式石室にこの石棺系石室をも含めている。

以上の裾部外周主体群は、北・西・南の三辺外周および南隅角部付近に密集する傾向にある。未調査部分についても状況からみて、南辺の東半部外周に少なくとも10基、南隅角部のD5・9の東側になお数基が存在するものとみられる。また、カットされて不明ではあるが、東隅角部付近にもあと数基が営まれたものと思われる。

これとは対照的に東辺北半では裾部付近に主体が営まれた形跡はない。東辺に続くテラス部に北西から南東にかけて設定した巾約2mのトレンチ調査の結果も同様である。西隅角部もこれに近く、D22が孤立気味に存在するのみであるが、この部分は硬い岩盤が露出しており、築造にかなりの困難があることに起因する可能性が高い。

註 1 山中英彦氏によって提唱されている。『東宮ノ尾古墳群』〈北九州市文化財調査報告書 14〉1974年

### (3) 甕 棺 墓 (K)

#### 裾部外周第1号甕棺墓 (PL.26・27, Fig.17~21)

北隅角部から約4m北に斜交して営まれており、破片は表土直下の極く浅い所から出土している (Fig.17・19)。その存在を全く予期していなかっただけに、下甕を確認するまでは半信半疑であった。

岩盤を穿った長さ約2.2m、巾約0.8mの隅丸長方形プランの墓壇内に営まれており、壇底は西側が低く約50cmの深さがある。甕棺は、主軸を東西にとり、口縁部を打ち欠いた上甕を下甕に30cm前後挿入しており、全体は41~42°とかなり傾斜している。内面には赤色顔料が厚く塗られ、ジョイント部分には赤色顔料を混じえた灰白色粘土を安定・密閉のために多量に使用している。なお、墓壇外の北側で採取された破片と破片との間にも赤色顔料が染みこんだ土塊が認められた (Fig.17のCの石の右斜上方ドットを付す部分)。

上甕の破片は、下甕に挿入された部分を除けば原位置にあるものはない。下甕はその破片出土状態 (Fig.17—●印は器表、▲印は下甕の口縁部を各々示す) ならびに棺内堆積土からみて、かなりの土砂が流入した後に陥没している。従って、主として上甕の墓壇肩部より突出す



Fig. 17 祇園山古墳裾部外周第1号礎基破片散布状態実測図 (1/20)

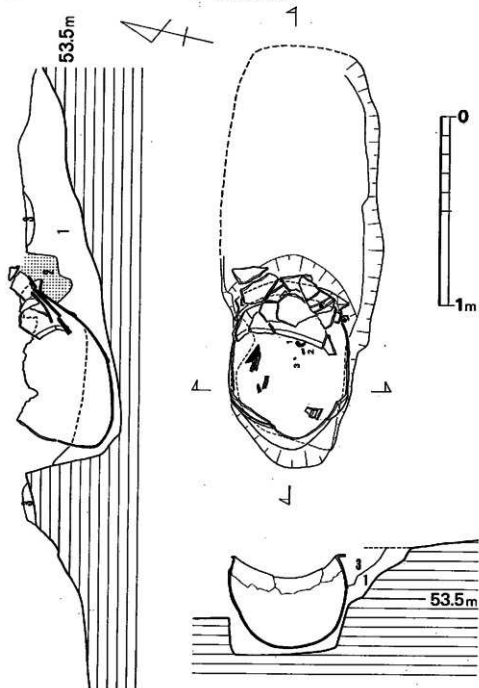


Fig. 18 祇園山古墳裾部外周第1号発掘墓室実測図 (1/20)

- 1 地山ブロック混黄褐色土 2 灰白色粘土+赤色顔料  
 3 黒褐色土 (含糸切底土師器片)

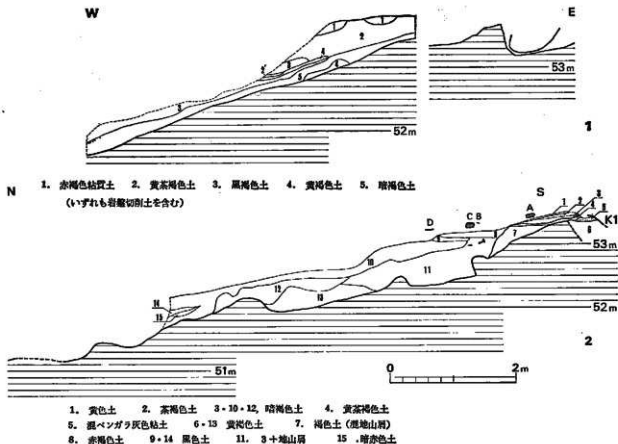


Fig. 19 祇園山古墳北隅角部断面図 (1/60) 1 東西断面図 2 南北断面

る部分が削平されたとみられる。

一方、墓壙北側の南北断面 (Fig. 19-2) によれば、岩盤上に旧表土は認められず、北側は寛相構築時に若干盛土されており (第7層)、寛相被覆土ならびに墓壙充填土 (第4~6層) とが現存している。第3層の下面と第11層とからは中世土師器片が出土しており、従って、第4~7層を除く層はいずれも後世の擾乱以降に堆積したものと思われる。これらの上部からも破片 (Fig. 17と19-2のA~D) は対応する。ただし、Fig. 19-2は軸線の異なるFig. 17との合成図である) が出土している。なお、擾乱が南側棺側にも及んだことが、第3層 (Fig. 18) に含まれた糸切底土師器片によって知られる。

東西断面 (Fig. 19-1) によれば、下墓西側外周には岩盤切削土が堆積している。岩盤直上

に腐植土層が認められないので、この部分の上部がいったん削平されたことは明らかである。

本壺棺蓋の上半が削平された時期は全体の評価とも係るので次節にて詳述することとし、ここでは事実関係を述べるにとどめたい。

下壺内からは、予測に反して壺棺蓋としては異例ともいえる質量の副葬品が出土した(Fig.18)。半月形の半円形帯鏡片は、北側器壁に鏡背を密着させており、遺体右腰部付近の原位置を保つとみられる。勾玉(1)および管玉(2・3)は、器壁よりも浮いており、当初は胸・頸部付近に置かれたものが崩壊・陥没に伴って落下したものと思われる。刀子片もまた原位置を移動している。遺体は一部が鏡片付近に遺存していたのみである。

#### 壺 棺 (PL.66, Fig. 20)

上・下の壺の法量は下記のとおりである。

	器 高	口 径	胴部最大径
上	(77.5) cm	(57.6) cm	59.1 cm
下	85.1~85.5 cm	61.5~64 cm	62.9 cm

( ) は復元値

上壺はひとまわり小さいが、両者とも、壺棺用として製作されたとみられる。

#### 上 壺

底部を失ない、口縁部は打ち欠かれている。胴部最大径は下壺と同様に中位よりも若干上位にあったとみられ、使用時の復元器高は73~74cmとみられる。内外の全面にわたって粗い刷毛目調整が施されているのが特徴的で、下壺と軌を一にする。刷毛目は、縦方向の場合は直線となるが、横あるいは斜め方向に施す場合は当然のこととして弧を描き、工具の巾は4cm前後とみられる。

刷毛目調整後に、頸部に三角凸帯を1条、体部に2条の帯状の凸帯をめぐらす。前者は下壺のそれに比べて稍シャープさを欠き、加飾されていない。体部の凸帯には横方向の刷毛目をかけ、接合部は工具で圧着されている。

内面および打ち欠かれた口縁部の折損部には、丹念に赤色顔料が塗られている。胎土に細粒を多く含むが、黄赤褐色を呈して焼成は良好といえる。体部の相対する2カ所に広範囲の黒炭部分があり、下壺とも共通する。積たえて焼成された結果によるものであろう。

#### 下 壺

口縁部は僅かに先細りとなり、口縁部は外反する。口縁部の形状は一定しないが僅かに中くばみ気味となる部分がある。胴部最大径は口径よりも若干小さいだけで略等しく、中位よりも稍上位にある。頸部ですぼまった器壁は、中位に向けていったん脹らみ、以下は底部に向かって急速に細くなり、全体として稍ズングリとした感を受け、上壺もまた同様であったと思われる。底部は完全な丸底である。口縁部は波打ち、全体に均齊を欠く。

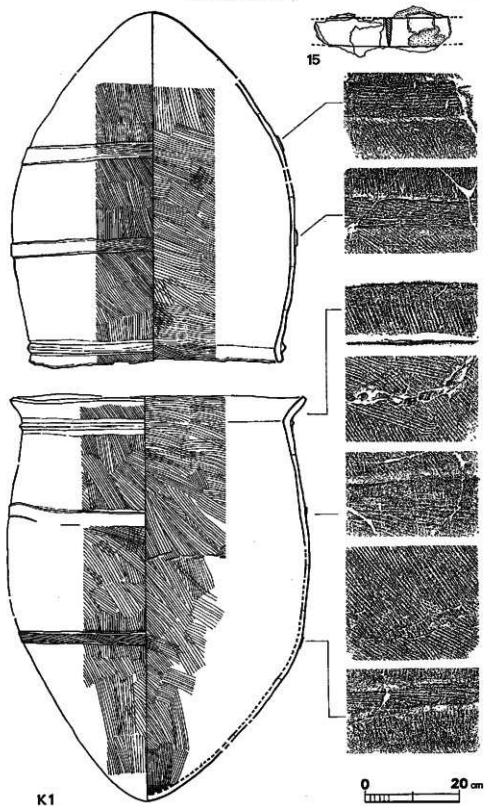


Fig. 20 祇園山古墳裾野外周第1号雙棺・棺内出土刀子実測図 (1/4, 拓本は1/4, 刀子は1/4)



成形・調整の手法は、上蓋のそれと全く同工である。凸帯の位置・数もまた上蓋と同様であるが、体部の凸帯は長さ22cm前後の粘土紐を順次めぐらしているが、上下動が目立ち、かつ、巾も狭く、上蓋のそれに比して著しく見劣りがする。また上段には刷毛目がかけられていない点も、上蓋とは異なる。また、全体的に上蓋に比して薄手である。

胎土に細粒を多く含み、黄赤褐色を呈する。内面には赤色顔料が塗られており、一部は口縁器表にもおよんでいる。

#### 裾部外周第2・3号壺棺墓

K1を起点として設定した断面観察用眸の西側から破片が採取されているが、原位置は不明である。恐らくK1の北側付近に営まれたものと推定される。

#### 壺 棺 (PL.66, Fig.21)

大部分を失っており、頸部片から計3個体分であることが知られる程度である。K1片とは、器表にのみ細い刷毛目調整を施す、器表にのみ赤色顔料を塗る、頸部凸帯に「X」印状の文様を加える、の3点で異なる。

K2(左)は、茶褐色を呈して胎土に細粒を多く含む点が特徴的で、K3片との識別は容易である。口縁部を欠くが、折損部に赤色顔料が塗られており、K1と同様な埋設法をとったと仮定すると上蓋として使用されたことになる。

K3(中・右)は、胎土・焼成・形状のいずれもが酷似するが、頸部凸帯の施文具が異なる。(右)の内面には、横方向の刷毛目調整が施されるが、K1のそれとは明らかに異なる。折損部の形状は(中)がより整っているかに見えるが、赤色顔料は塗られていない。なお、(中)は黒変している。

三者とも、K1に比べて古様を帯びる。

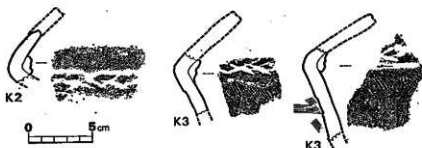


Fig. 21 祇園山古墳裾部外周第2・3号壺棺実測図(1/4)

#### (4) 石蓋土壙墓(D)

裾部外周第1号石蓋土墳墓 (PL.28, Fig. 22)

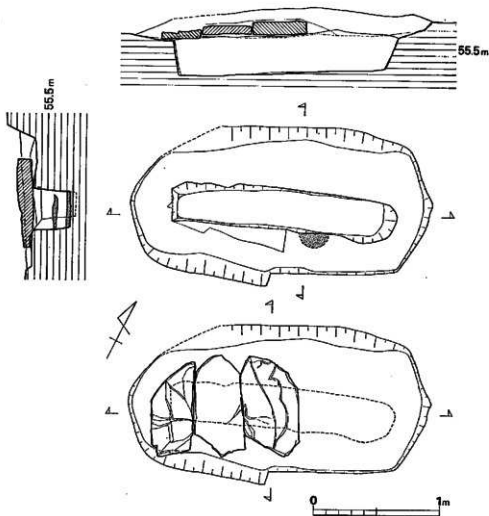


Fig. 22 祇園山古墳裾部外周第1号石蓋土墳墓実測図 (1/30)

南隅角至近に宮まれており、裾部外周の主体群発見の端緒となった2段掘りの土墳墓である。南西側の蓋石3枚が現存するが、これとて目張粘土が残っていないことからみて、原状を保つとは考えられない。攪乱時に再び覆われたものと推定され、本群では同様例が多い。床面の巾は足部が頭部に比して狭いが、上端値は等しい。墳底は頭位とみられる北東側が若干高い。枕の有無は不明である。蓋石内面と墳内堆積土および墓壙肩部の一部に赤色顔料が認められた。

棺内からの出土品は、歴史時代土師器 (Fig.85-60) を除いて皆無である。

## 3 裾部外周の主体群

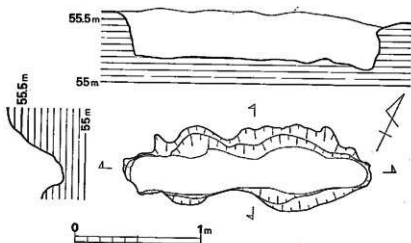


Fig. 23 祇園山古墳裾部外周第2号石蓋土曜墓実測図 (1/30)

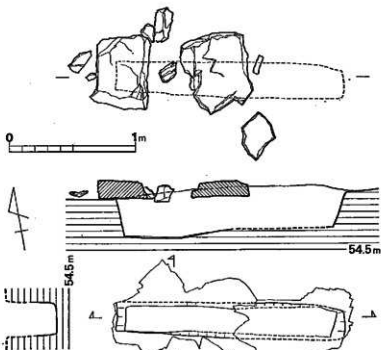


Fig. 24 祇園山古墳裾部外周第3号石蓋土曜墓実測図 (1/30)

## 裾部外周第2号石蓋土墳墓 (PL.29-1, Fig. 23)

蓋石の全てを失っており、上部特に両長側部の崩壊が進んでいる。墳底は、南西側が僅かに高く広く、頭位と推定される。

棺内からの出土遺物は皆無である。南西側の棺外、D1との間から、須恵器甕片 (Fig. 79-5) が採取されている。

## 裾部外周第3号石蓋土墳墓 (PL.29-2, Fig. 24)

蓋石は、2枚が現存するのみである。上部および底面の崩壊・風化が進んでいる。プランは極めて狭長な長方形を呈し特徴的である。墳底は略中央部で屈折して段が付き、高い東側を頭位としたと思われる。

棺内からの出土遺物は皆無である。

## 裾部外周第4号石蓋土墳墓 (PL.30-1-2, Fig. 25)

南西側に2枚の蓋石が残るが、中央部の板石群は攪乱時の移動によるものと思われる。北西長側壁の外周は、蓋石を安定させるためにさらに一段掘りくぼめられている。内法からは巾の広い北東側が頭位と思われるが、墳底は南西側が稍高い。

棺内からの出土品は皆無である。

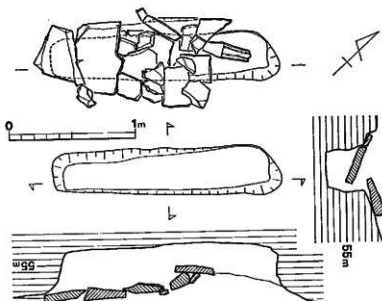


Fig. 25 祇園山古墳裾部外周第4号石蓋土墳墓実測圖 (1/30)

## 裾部外周第5号石蓋土墳墓 (PL.30-3・4, Fig. 26)

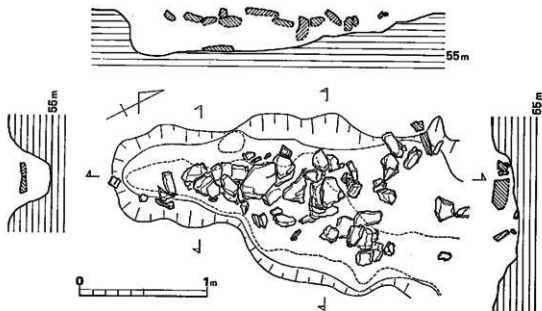


Fig. 26 祇園山古墳裾部外周第5号石蓋土墳墓実測図 (1/30)

現状は不整形プランの溝状となっており、なお北東側に続く。一応土墳墓としているが、規模を確定できず、疑問が残る。石材は、大部分は堆積土中に混在しており、葺石材であったと思われる。土墳墓が擾乱により変形したものとすれば、北東側が頭位であったと推定される。

棺内からの出土遺物は皆無である。

## 裾部外周第6号石蓋土墳墓 (PL.31-1・2, Fig. 27)

2段掘りである。上・下両段とも不整形ながら頭位の北東側の中が広く、足部は狭い。蓋石の大部分が現存するが原位置にないことは明らかで、擾乱後に再び覆われたものと思われる。墳底は、3段にわたって屈折しており、北東側が高い。北東側の西半には赤色顔料が認められ、この部分は枕として一段高く作られたと見做される。

棺内からの出土品は、皆無である。

## 裾部外周第7号土墳墓

未調査である。南東から北西に向けて長軸をとるとみられ、南東側は蓋石を失っている。

## 裾部外周第8号石蓋土墳墓 (PL.11-2)

南隅角部近くの南斜面葺石最下段と平行して営まれ、恰かも階段であるかのように見える。蓋石を確認したに過ぎないので箱式石棺墓である可能性もある。

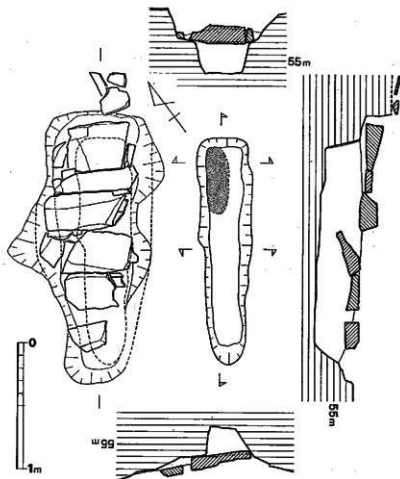


Fig. 27 祇園山古墳裾部外周第6号石室土墳墓実測図 (1/30)

**裾部外周第9号石室土墳墓**

D 6の北東側の至近に位置するが、未調査である。

**裾部外周第10号石室土墳墓 (PL. 22-1, Fig. 28)**

D 11と略平行して営まれる。蓋石の全てを失ない、上半を削平されている。巾が少し広く墳底が稍高い南東側を頭位としたとみられる。

棺内からの出土遺物は皆無である。

**裾部外周第11号石室土墳墓 (PL. 22-1, Fig. 29)**

D 10に北接し、僅か0.3mを隔てるに過ぎない。プランは、略長方形のD 10とは異なり、足部がかなり狭くなっている。墳底は水平ではなくて中央部が最も低く、これに2~8cmの厚さ

に粘土を貼るが、仕上った床面もまた中央部が低い。頭部の南東側墳底には、径12~15cm、深さ3・4cmの一孔が穿たれている。上部の粘土上面もまた凹面となっていたと推定されるが、現認されていない。南東側面に工具痕が残る。

蓋石の全てを失っているが、総じて整齊な感を受け、これは前述のD10とも共通する。

棺内からの出土品は皆無である。

裾部外周第12号石蓋土墳墓(PL.31-3, Fig.30)

法面にあり、蓋石の全てと墳壁の過半とを失っている。墳底は南東側が高く、巾も北西側に比して広いとみられる。墳壁には垂直あるいは斜方向に走る工具痕が残る、巾4cmの例が多い。

棺内からの出土品は皆無である。

裾部外周第13号石蓋土墳墓 (PL.22-2)

D25とT8との間に位置しており、蓋石の配置からみてT8と逆方向の南西側を頭位としたとみられる。内部は未調査であるので、箱式石棺墓としての可能性を残す。

裾部外周第14号石蓋土墳墓

(PL.32-1, Fig.31)

蓋石の全てを失っている。岩盤の節理により生じた周壁上部の凹凸を、板石材を積み上げて高さを揃えている。南東隅では、H11の北端の蓋石を側壁の一部としてそのまま利用しており、従ってこれに後出する

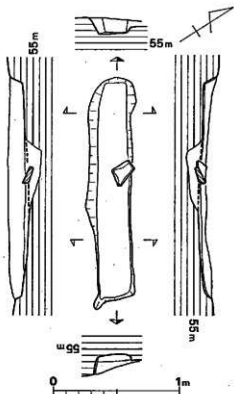


Fig. 28 祇園山古墳裾部外周第10号石蓋土墳墓実測図 (1/30)

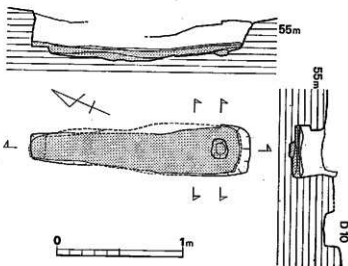


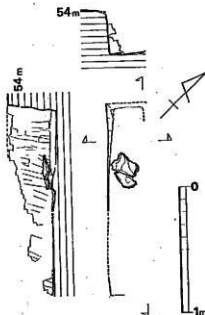
Fig. 29 祇園山古墳裾部外周第11号石蓋土墳墓実測図 (1/30)

ことは明らかである。凹凸著しい墳底には粘土を詰めて均した形跡があり、僅かに南東側が高い。足部が狭く、深い点が特徴的である。

棺内からの出土品は皆無である。南東側の上端とH11の蓋石との間から、刀子片 (Fig. 72-2) が採取されている。

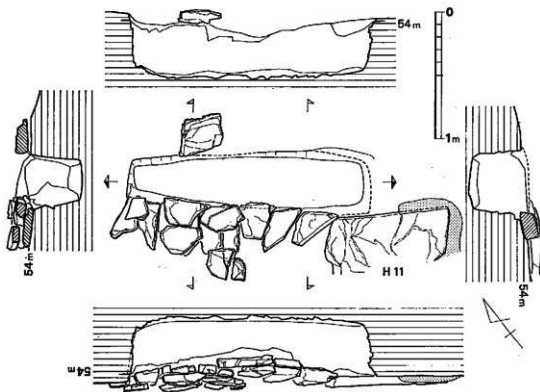
裾部外周第15号石蓋土墳墓 (Pl. 32-2, Fig. 32)

西面裾部近くの斜面に位置しており、大破している。北東側に頭部を置いたとみられ、足部は著しく狭かったと推定される。墳壁に工具痕を残す。棺内からの出土品は皆無である。



◀ Fig. 30 祇園山古墳裾部外周第12号石蓋土墳墓実測図 (1/30)

▼ Fig. 31 祇園山古墳裾部外周第14号石蓋土墳墓実測図 (1/30)





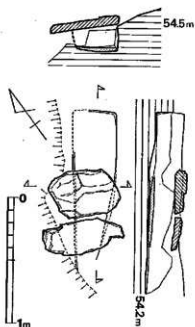


Fig. 32 福岡山古墳裾部外周第15号石蓋土壙実測図 (1/30)

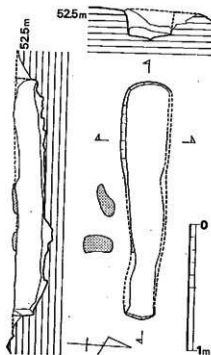


Fig. 33 福岡山古墳裾部外周第16号石蓋土壙実測図 (1/30)

#### 裾部外周第18号石蓋土壙墓 (Fig. 33)

頭位を西とする極めて狭長なプランで、周壁上部の崩壊・風化が著しく進行している。外周の一部に蓋石の目張り用に用いた粘土が残っている。凹凸著しい壙底は西側が僅かに高く、壁面に工具痕を残す。

棺内からの出土品は皆無である。

#### 裾部外周第17号石蓋土壙墓 (PL.33, Fig. 34)

傾斜の高い東側を均した面に営なまれている。墓壙周縁に青黒色粘土を敷き、蓋石との密着を図っている。蓋石は完存し原状を保つかに見えるが、部分的に二重・三重となりながら不規則であり、またその間に目張粘土が現存しない点に疑問が残る。北西側足部の3枚は、粘土に圧着痕が残る当初の姿をとどめる。壙底は平ではなく頭・足部がくぼみ、足部が著しく狭い。

棺内からの出土遺物は皆無であるが、上段掘方の北側肩部近くから甲き痕をとどめる土師器粟片(刷毛目調整、胎土・焼成良好)が出土している。

#### 裾部外周第18号石蓋土壙墓 (PL.34-1, Fig. 35)

傾斜の高い北から東側にかけてを均した面に掘りこまれている。石蓋は完存するが、石材の配置は洗練されたものではない。プランもまた均齊を欠くが、上端は略長方形に近い。墳底が若干高く、また蓋石が二重に置かれた南東側が頭部と思われる。隣接するT2の控壁の一部が蓋石にかかっており、これに先行することは明らかである。

内部からの出土遺物は皆無である。

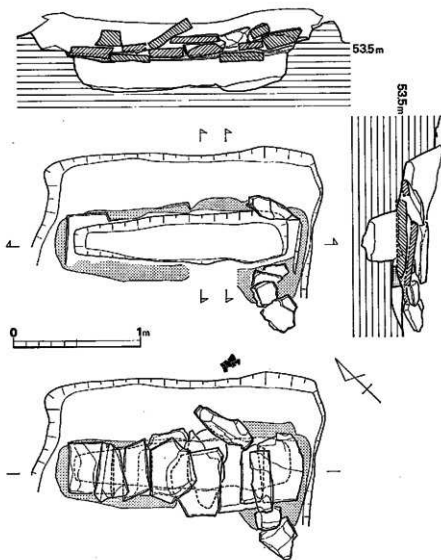


Fig. 34 祇園山古墳裾部外周第17号石蓋土版墓実測図 (1/30)

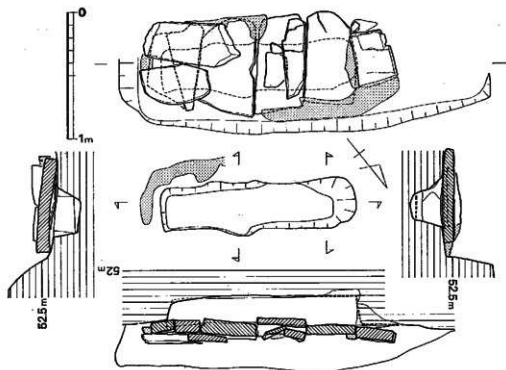


Fig. 35 祇園山古墳裾部外周第18号石蓋土壙墓実測図 (1/30)

裾部外周第19号石蓋土壙墓 (PL.34-2, Fig. 36)

蓋石は、両端のみしか現存しない。当初、上面は接合部を中心として、長さ248cm、巾111cmの範囲にわたって厚く粘土で覆われていたとみられる。プランは頭部の南東側小口が巾広く、足部の北西側が狭い羽子板状を呈する。頭部小口壁には板石が立てられ、特徴的である。中央部が低い壙底には赤色顔料を塗った厚さ約5cmの粘土が貼られ、頭部には径15cmの凹みをつくっている。北長側壁には、少くとも7段にわたる右下・真下・左下へ向かう工具痕が残っている。

棺内からの出土遺物は皆無である。

裾部外周第20号石蓋土壙墓 (PL.23-2, Fig. 37)

T9に南接しており、北側を除く3面の外周は、2段にわたって掘りくぼめられている。基壇の両小口の上縁に沿って粘土を貼っており、南東側の頭部から順次重ね置いた蓋石は完存する。北西側小口では上縁の外側に板石を埋めこんで立てこれに接して3枚の枚石を積んでいる。

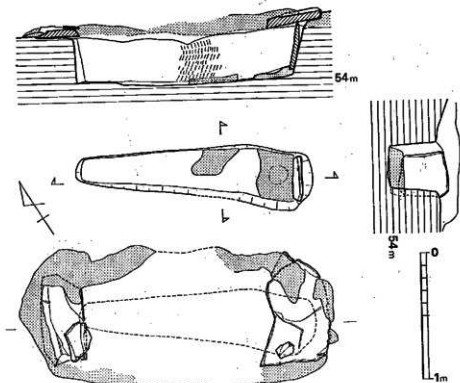


Fig. 36 祇園山古墳裾部外周第19号石蓋土壇墓実測図 (1/30)

墳底は略水平であるが、粘土等を敷いた形跡はなく、床面の中は一定している。蓋石材の配置からみて南東側に頭位を置いたことは明らかである。

内部からの出土遺物は皆無である。

#### 裾部外周第21号石蓋土壇墓 (PL.23-1, Fig. 38)

H11とH14との間隙に営まれている。床面長は94cmに過ぎず、本群では最小の土壇墓である。赤く塗られた床面は南東が巾広が高く、頭位と思われる。蓋の状態からみて、両側の石棺に後出するとみられる。ただし、上部の石材は小型であり (Fig. 53参照)、板あるいは他の有機質材で覆われた遺体上にこれらの小石材が置かれた可能性もあり注意される。

棺内からの出土品は皆無である。

#### 裾部外周第22号石蓋土壇墓 (PL.35, Fig. 39)

西隅角付近に孤立しており、この点でD15・16・31と共通する。この付近の岩盤は硬く、こ

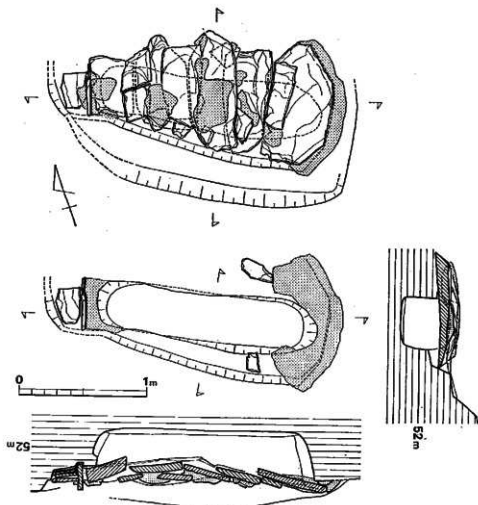
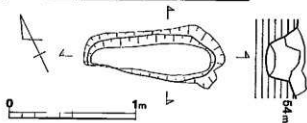


Fig. 37 祇園山古墳裾部外周  
第20号石蓋土塚高突  
測図 (1/30)



Fig. 38 祇園山古墳裾部外周  
第21号石蓋土塚高突  
測図 (1/30)



のため上・下端線は著しく屈折している。墳底は、略水平位にあり、粘土等を貼った形跡はない。南側の中が若干広く、頭部を置いたとみられる。北・東辺の一部に薄い板石があるが、石棺の補填材とするよりも、混入・墓壁からの剝離材とすべきと思われる。

棺内からの出土品は皆無である。

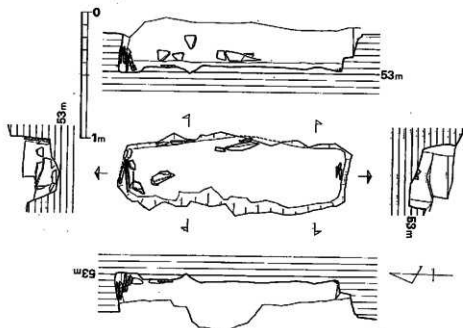


Fig. 39 祇園山古墳裾部外周第22号石蓋土壙墓実測図 (1/30)

裾部外周第23号石蓋土壙墓 (PL.21-1, Fig. 40)

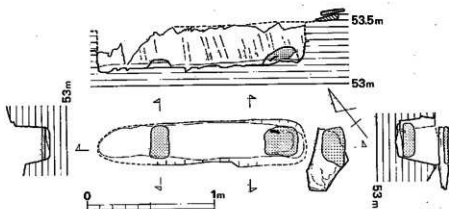


Fig. 40 祇園山古墳裾部外周第23号石蓋土壙墓実測図 (1/30)

長さに対して巾が狭いプランが特徴的である。南東側が僅かに高い墳底は凹凸著しく、これに黄褐色砂質土を置き、さらに黒灰色粘土を貼っている。床面には赤色顔料がみられた。南東側小口寄りには、厚さ10cmに粘土を盛って枕に充てている。墳壁には、巾5・6cmの斜行する工具痕が残っている。

粘土枕上の遺体右顔面にあたる位置から、手鎌 (Fig. 72-6) が出土した。

#### 裾部外周第25号石蓋土墳墓 (PL. 36-1)

清掃と撮影しか行っていない。蓋を失っており、東側に目張のための黒青色粘土が残るのみである。岩盤に掘りこまれているにもかかわらずプランは整齊な矩形をなし、墳壁もまた平滑に仕上げられ、本群の土墳墓中では異彩を放っている。

棺内からの出土品は皆無である。

#### 裾部外周第26号石蓋土墳墓 (PL. 36-2, Fig. 41)

上縁外周に長さ2.4m、巾83~90cmの範囲にわたって粘土を貼る点に特色の一つがあり、墳内にも上部からの落下と思われる粘土塊がある。調査が徹底せず詳細は遺憾ながら不明であるが、木蓋使用の可能性をこれらの多量の粘土は示唆している。もう一つの特色は、床面が狭くて低い足部 (北西側) 小口に1枚の板石を立てている点にある。内法・蓋石の大きさ等において頭部を重視する例が多い本主体群の中では、特異な存在といえる。既述のように、D24に先行して営まれている。

また、築造当時のものではないが、外周の粘土には2ヶ所にわたって、径15~20×28cmの浅い穴が穿たれている。

棺内からの出土遺物は皆無である。

#### 裾部外周第27号石蓋土墳墓 (PL. 37-1, Fig. 42)

T13と斜交しており、切り合いを確認してはいないが、これに先行して営まれたとみられる。墓壁は、横丘裾部寄の傾斜の高い北から東側にかけてを均した面に掘りこまれている。上縁外周に貼られた粘土の上に置かれた蓋石は現存しない。岩盤の硬い所に掘りこまれているため節理による上端線の屈折が著しく、南半では墳壁は内傾する。墳底は中央が広く、赤色顔料を塗った粘土が貼られている。南東側が僅かに高く、巾広い。

南東側頭部付近の床面から鋒を南西に向けた刀子1口 (Fig. 72-3) が出土した。

#### 裾部外周第28号石蓋土墳墓 (PL. 37-2・38, Fig. 43)

6ないし7枚の板石の上に板状小石材を積み重ねた状態で発見された。これを原状とする

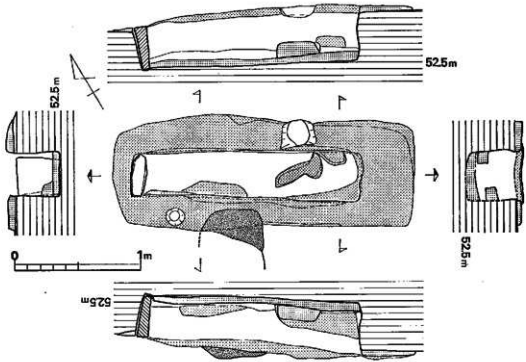


Fig. 41 祇園山古墳裾部外周第26号石蓋土塚断面実測図 (1/30)

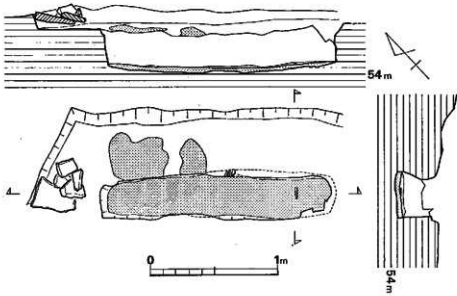


Fig. 42 祇園山古墳裾部外周第27号石蓋土塚断面実測図 (1/30)



木葬でも特異な密閉法となるが、以下に述べる理由から、擾乱後に再び覆われたものと推定される。①粘土が全く使用されていない。②頭部とみられる北端の蓋石材と足部の南端の蓋石が同大あるいは後者が若干大きい。③北端から2枚目の蓋石下にあたる位置の堆積土中から青磁片・灯明皿片が採取されたが、調査時に開口していたのは南端寄りである。

墓壁は、その長さ比べて深く穿たれD14に次ぐが、プランは上・下端ともに均斉を欠き、全体的にダレた感を受ける。横底は南端寄りが最も低く、黄褐色土を敷いた床面も同様である。なお、本土墳墓の北端付近を起点として、西面基石最下段から5~5.5m離れて略これと平行する巾0.7~1m(上端値)の溝が、約6mの長さにわたって続いている。この溝の北端の溝底には、190cm×55cmの範囲に赤色顔料が散布している。あるいはここにさらに1基の主体(F主体)が営まれたとも考えられるが、遺憾ながら不明とせざるを得ない。

#### 裾部外周第29号石蓋土墳墓 (PL.39-1, Fig. 44)

蓋石は西端のみしか現存しない。横底は、頭部とみられる東側がかなり高く、本群中では傾斜が目立つ。

棺内からの出土遺物は皆無である。

#### 裾部外周第30号石蓋土墳墓 (PL.24-1.39-1, Fig. 45)

岩盤の硬い箇所に穿たれており、節理による上・下端線の屈折が著しい。蓋石は、南東側に乱れがありかつ目張粘土が現存しない点からみて、原状をとどめてはいないと判断される。北東側の上段面には赤色顔料を塗った粘土が残っている。床面長は130cmに過ぎず、南接するH12と同様に内法は狭小である。南東側の横底は若干低いが、板石を置いて枕とし、この部分にのみ赤色顔料を塗っている。

枕石上に頭骨の一部が遺存していた。棺内からの出土品は皆無である。

#### 裾部外周第31号石蓋土墳墓 (PL.40-1, Fig. 46)

南東側小口近くが80cm弱現存するのみで、大破している。現存部分の巾は34cmと一定している。南東側小口壁近くの床面には厚さ約1cmの赤色顔料が残り他の床面にも薄く認められた。

棺内からの出土品は皆無である。

#### 裾部外周第32号石蓋土墳墓 (PL.40-2・3, 41, Fig. 47)

上部に板石材多数が置かれているが、石材の配置に通例の蓋石にみられる規則性がなくまた目張粘土が現存しない点からみて、当初の姿とは考えにくい。南半の外周には蓋石を受けるための段が残るが、北半は横壁の崩壊が著しくまた調査が不十分なためもあって明らかではな

い。南東側小口寄りの床面には赤色顔料が残り、頭部と推定される。

頭部付近から刀子1口 (Fig.72-4) が出土した。

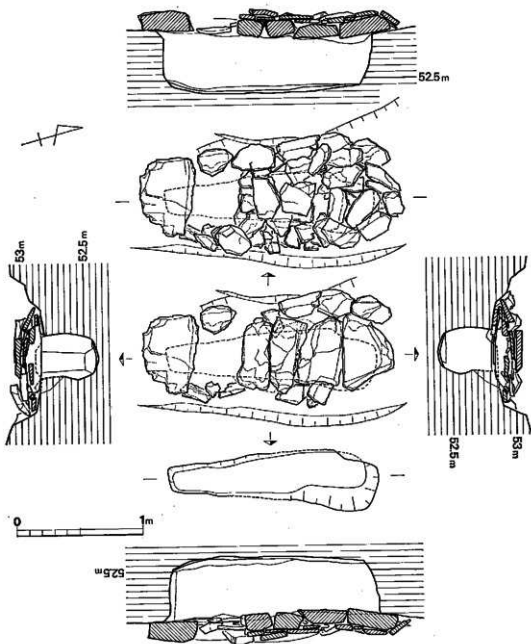


Fig. 45 祇園山古墳裾部外周第28号石蓋土塚実測図 (1/30)

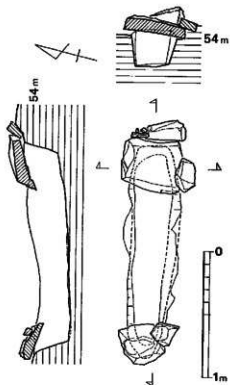


Fig. 44 祇園山古墳裾部外周第29号石蓋土塚墓実測図 (1/30)

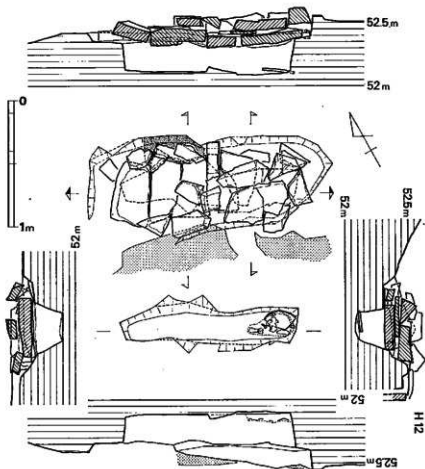
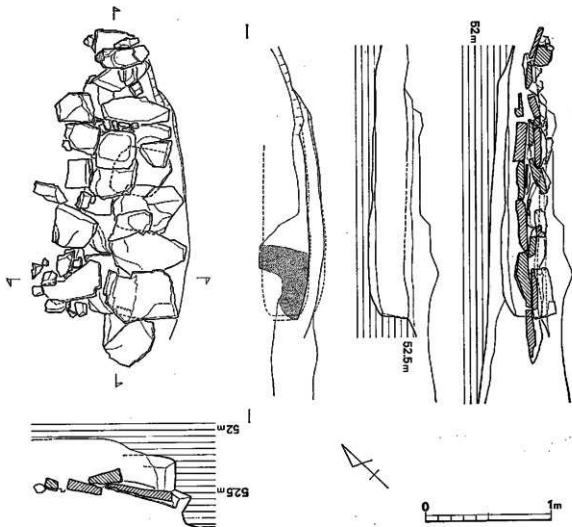
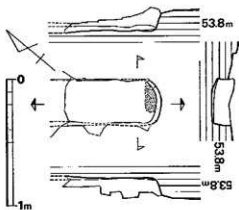


Fig. 45 祇園山古墳裾部外周第30号石蓋土塚墓実測図 (1/30)

なお、本棺の南西側に板石材多数が立てかけられた状態で集積されている。各石材は蓋石材とも思われる形状・大きさであり、後世の擾乱者の所業と思われるが、意図は不明である。

Fig. 46 祇園山古墳裾部外周第31号石蓋土墳墓実測図 (1/30)

▼Fig. 47 祇園山古墳裾部外周第32号石蓋土墳墓実測図 (1/30)



## 裾部外周第33号石蓋土墳墓 (PL.42, Fig. 48)

H11と葺石最下段との間の狭い空間に営まれており、H11に後出することは明らかである。一部が折れて落下しているものの、蓋石は略旧状をとどめている。上縁外周の一部は蓋石を受けるためにさらに一段掘りこまれている。プランは東側が巾広く、足部の西側は狭められている。墳底は、通例と異なり足部の西側が若干高い。

内部からの出土遺物は皆無であるが、棺外の西側小口近くの南側から土師器が採取された。

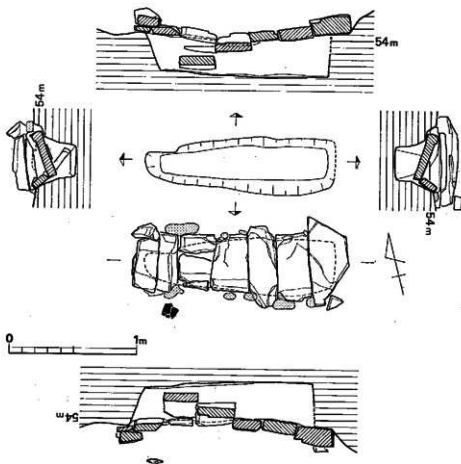


Fig. 48 祇園山古墳裾部外周第33号石蓋土墳墓実測図 (3/10)

Tab. 1 祇園山古墳裾部外周石室土壌墓内法一覽表

( ) は推定値

番号	上段	墓壇上端	墓壇床面	枕	ベンガラ
	長×巾×深	長×巾	長×巾×高		
D1	240×110~93×cm	178×35~30cm	163×29~22×29~30cm	?	○
2		196×32cm	188×27~23×39~36cm	×	×
3		181×(28~24)cm	166×(23)~20×33~33cm	×	×
4		181×(38~31)cm	162×32~21×28~(34)cm	×	×
5		?	?		
6	216×90~50×24~6cm	180×43~32cm	158×28~23×29~30cm	×	頭床
7	未調査				
8	未調査				
9	未調査				
10		?	169×25~23×?cm	×	×
11		(174)×40~19cm	166×36~18×35~26cm	彫りこみ	床
12		?	?×?~24×?~40cm		
13	未調査				
14		192×53~(36)cm	181×36~18×52~50cm		
15		?×36cm	?×34~?×23cm	×	床
16		188×(40)~24cm	184×(33~19)×22~22cm		○
17	222×122×23cm	168×41~23cm	156×32~12×22~22cm	×	×
18	298×?cm	155×40~33cm	133×30~28×27~23cm		
19		185×46~21cm	170×38~18×39~35cm	粘	床
20	244×?×20cm 190×?×15cm	176×45~37cm	157×36~38×36~28cm	×	×
21		101×37~19cm	94×25~14×26~20cm	×	床
22		173×50~45cm	176×44~38×29~35cm	?	×
23		162×(36~30)cm	158×26~25×(32~32)	粘	床
24	欠番				
25	未調査			?	?
26		187×42~33cm	170×(40~36)×(45~39)cm		×
27	247×?×15cm	186×33~30cm	180×37~26×32~30cm	×	○
28	218×103×18cm	166×48~22cm	152×28~16×38~48cm	?	×
29		169×39~28cm	151×30~20×28~27cm	×	×
30	192×70~86×16cm	141×26~18cm	130×22~15×29~20cm	板石	頭
31		?×36cm	?×34×?cm	?	○
32	?	?	?×36×28cm	×	○
33		(146)×43~30cm	133×25~14×34~25cm	×	×

## (5) 箱式石棺墓 (H)

裾部外周第1号箱式石棺墓 (PL43-1 Fig. 49.)

大破しており、側石1枚が現存するのみ。板石の埋めこみが極めて浅いため、内法の復元は

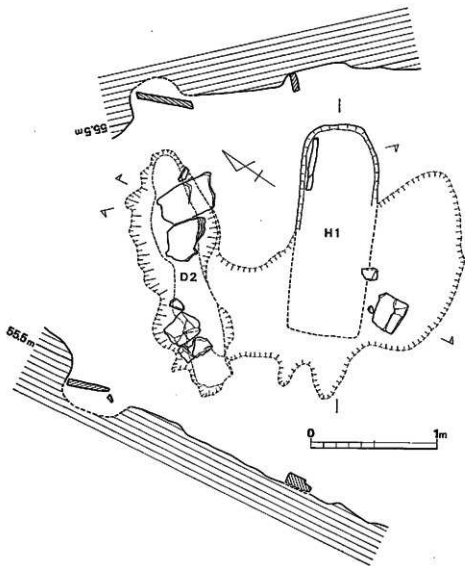


Fig. 49 祇園山古墳裾部外周第1号箱式石棺墓実測図 (1/30)

因難であり、従って頭位は不明。床には赤色顔料が認められた。

棺内からの出土品は、皆無である。

裾部外周第4号箱式石棺墓 (PL.43-2, Fig. 50)

D19の南西側に位置する。北から南東側にかけてを掘りこんで均した面に営まれており、墓槽は浅い。蓋石と側石材の殆どを失ない大破しているが、板石据付痕が明瞭に残っている。他例では小口の一方が他に比して巾広の羽子板状プランとなるのに対し、本例は巾が一定した矩形をなして異なる。粘土を多用しているが、現存部分は棺材の裏ごめに充てられたものとみられ

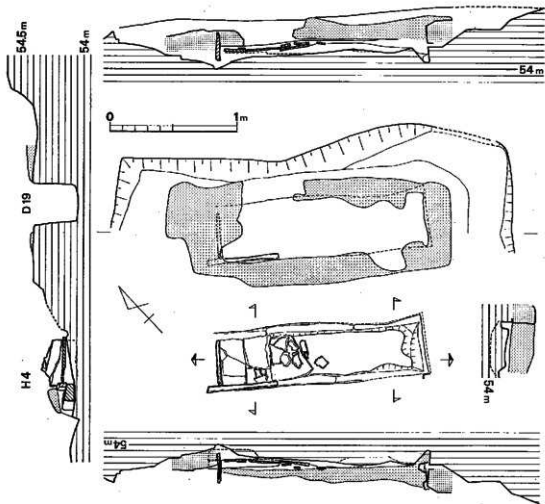


Fig. 50 祇園山古墳裾部外周第4号箱式石棺墓実測図 (1/30)



る。床面には、糠底と間層をはさんで極く薄い板石材を敷きつめており、本群中では異例である。赤色顔料の使用が目立ち、僅かに南東側が高い。高底差からみて、南東側を頭位としたとみられる。

棺内からの出土遺物は、皆無である。

裾部外周第7号箱式石棺墓 (PL.44-1, Fig. 51)

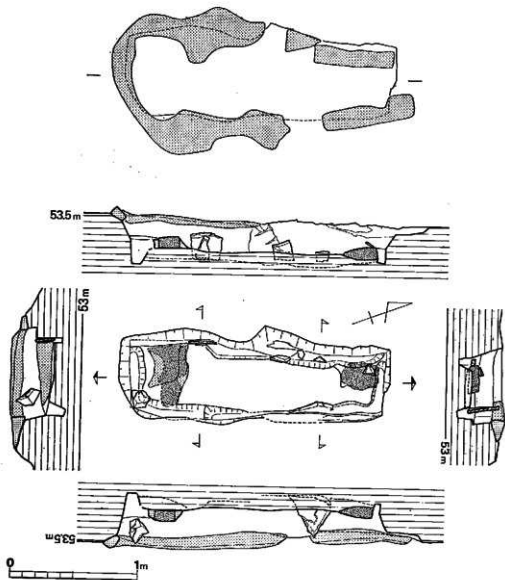


Fig. 51 祇園山古墳裾部外周第7号箱式石棺墓実測図 (1/30)

H9に西接する。蓋石の全てと側石材の殆どが抜き取られて大破している。岩盤を掘りこんだ墳底をさらに一段穿って側石を立て、墓室上縁には厚く粘土を貼っている。墳底は南側が僅かに高く、かつ巾広である。南北両小口部には赤色顔料で染まった厚い粘土塊があり、位置からみて枕と思われる。従って、主たる被葬者の頭位を南とする差し違い2体の埋葬が想定される。

棺内からの出土品は皆無である。棺外の西側から (Fig. 15にて・印を付す)、土師器甕2個体分の破片 (Fig. 78-28・29) が採取されている。

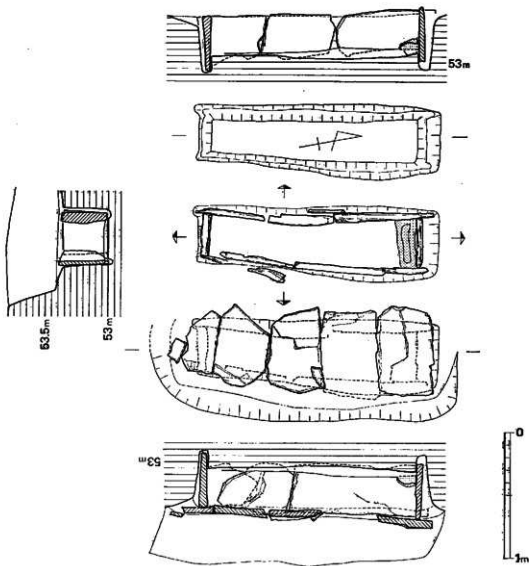


Fig. 52 祇園山古墳裾部外周第9号箱式石棺墓室実測図 (1/30)

## 裾部外周第9号箱式石棺墓 (PL.44-2・45-1 Fig. 52.)

H 7 に東接する。墓壁は、葺石寄りの傾斜の高い東側を掘り下げて均した面に穿たれている。蓋石は、一部が割れて落ちかかっていたものの完存し、荒された形跡は全くない。側石の外周には、蓋石の形状に合わせて最小限の範囲に青黒色粘土を薄く敷いている。墳底の四周を浅く掘り下げて板石を立て並べ、南側の隅角部は、板石を重ねたために凹凸を生じているが、この部分には灰白色粘土を充填して面を整えており、墳頂部の箱式石棺と共通するものがある。各隅角部には灰白色粘土が詰められ、北側小口壁に接して、頂部が凹む粘土枕が置かれている。全面に赤色顔料が塗られており、全体として整齊なつくりであるが、蓋石は稍薄く、華奢な感を受ける。

土砂の流入が殆どみられなかったにもかかわらず、人骨は遺存せず、副葬品もまた採取されていない。

## 裾部外周第11号箱式石棺墓 (PL.45-2・46 Fig. 53.)

地山を穿った墓室内に築かれており、石棺・石蓋土壙墓両者の構造を合わせもつという特異な構造をとる。

目張り粘土で覆われた蓋石は完存し、全く荒らされていない。この蓋には、同一石材を割って得られた4枚の板石が用いられていることが注意された。脚部が著しく狭い棺身は、北側小口と、両側壁北半のみ板石を用い、南半は墓壁をそのまま充てている。板石の埋めこみが浅いので、下部に粘土を置いて倒壊を防いでいる。墳底は北半が低いが、床の構築に際しては先ず北側小口に接して厚い粘土枕を作っており、これは上部が内径16cm前後の馬蹄形となる念入なものである。次に枕を段差のある部分を赤色顔料を混じえた青黒色粘土を貼って高低差をなくし、さらに薄く粘土を敷く。北半については、これに重ねて赤色顔料を混じえた粘土を貼るが、顔料の範囲は粘土のそれより狭い。

なお、本石棺は既述のように、東接するD 21、北接するD 14の両者に先行して営まれている。

棺内の右脚部から、短剣片 (Fig. 72-9) が出土した。

## 裾部外周第12号箱式石棺墓 (PL.24-1.47-1 Fig. 54.)

D 30 に南接し、地山を穿った墓室内に営まれた床面長144cmの狭小な石棺で、中央部の蓋石は外されている。墓壁の上縁外周に広く灰白色粘土を貼っている。側石の埋めこみは浅く、このため北側の一石は倒れかかっている。

墓壁と側石との間には粘土を充填しているが総じて粗雑な感を受ける。墳底は薄い板石を敷いて粘土で固めるが、中央部は攪乱により現存しない。東側小口に接して馬蹄形の粘土枕をつくっている。

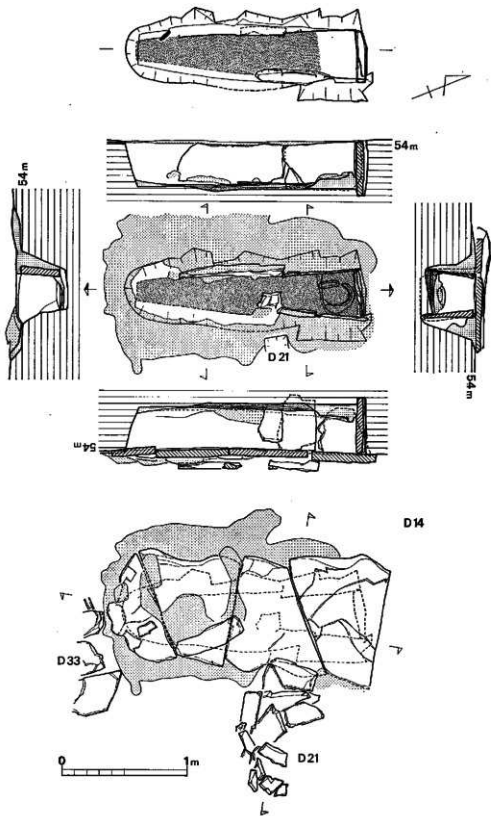


Fig. 53 祇園山古墳裾部外周第11号箱式石棺墓実測図 (1/30)

棺内からの出土品は、皆無である。

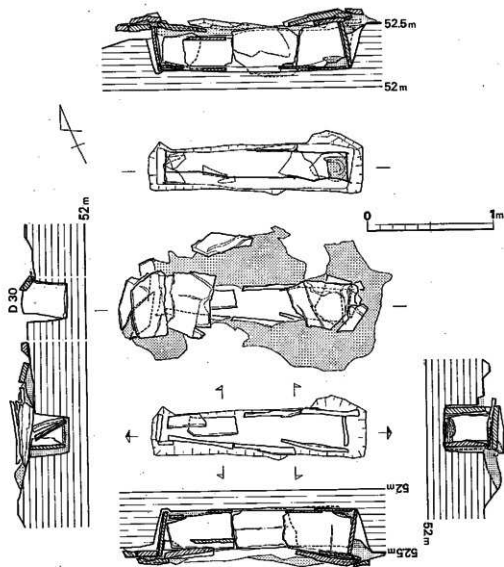


Fig. 54 祇園山古墳裾部外周第12号箱式石棺墓実測図 (1/30)

裾部外周第14号箱式石棺墓 (PL.47-2 Fig. 55,)

地山を穿った狭小な墓室内に営まれる。蓋石の残りは良いが、北端近くで空隙がある点と、上面の目張りの粘土が全く遺存しないことからみて、擾乱時に旧状に近い形に再び覆われたと

みられる。

棺身の板石は、基礎壁に密着するかのよう縦長に立てられているが、埋めこみは $\frac{1}{4}$ ～ $\frac{1}{2}$ と比較的浅い。各隅角基部には粘土が詰められている。墳底は、頭位の南側が稍高く、これに砂を混ぜた灰白色粘土を貼って固く締めており、床面は漆喰状となっている。棺身の外周には部分的に粘土が置かれて密着度を保っており、全体的に丁寧なつくりといえる。後述するように、本棺は東接するT10に先行して営まれている。

棺内からの出土遺物は、皆無である。

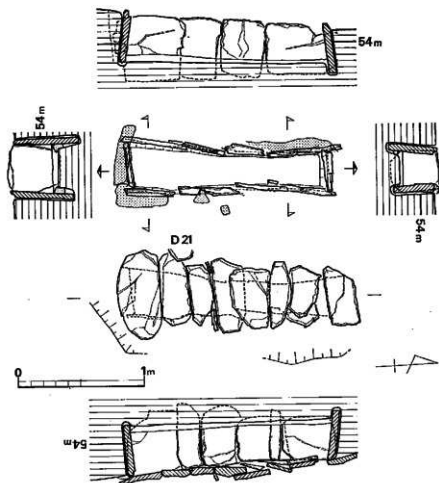


Fig. 55 祇園山古墳掘部外周第14号箱式石棺墓実測図 (1/20)

Tab. 2 新園山古墳裾部外周箱式石棺室内法一覧表

( )は推定値

	基 壇		内 法		枕	ベンガラ	床 石
	長 × 巾 × 深		長 × 巾 × 深				
H 1	(190)×60×7cm		?			床	
2	欠 番						
3	欠 番						
4	317× 250×	×8~18cm × 13 cm	(159)×(37)×?cm		×	床	○
5	欠 番						
6	欠 番						
7	211×72~60×25~16cm		(185)×(53~35)×(30×25)cm		粘 土	○	×
8	欠 番						
9	243× 191 ×60~45	×38cm ×33~32cm	165×40~35×37~32cm		粘 土	床・石	×
10	欠 番						
11	192×72~48×38~38cm		173×36~16×30~30cm		粘 土	石・床	×
12	170×38~32×32~25cm		144×21~16×36~28cm		"	×	一 部
13	欠 番						
14	166×48~39×33~30cm		159×40~31×34~28cm		×		×

## (6) 竪穴式石室 (T)

## 裾部外周第1号竪穴式石室 (Fig. 56-57, PL. 49)

地山を穿った墓壇内に営まれ、西側短側壁に巾55~27cm(上端値)、長さ約2.4mの排水溝を付設している。溝内石室寄りに現存する石材は構底直上にはなく、不規則ではあるが小口壁の裏込めとして土砂とともに置かれたものと推定される。従って、この排水溝は築造時に既に過半が埋め戻されたと見做される。

石室は大破しており、足部の西側の壁体の下半が現存するのみである。両長側壁は、基部から割石を小口積とするが、ヒカエよりもツラを長くとった箇所も多い。また、東側小口壁に接する部分(頭部両側)は、両小口壁と同様に板石を立て、以上を小口積みとしたと推定される。壁面は稍内傾し、隅角部は直交する。なお、周壁内面には赤色顔料が塗られているが、目地に粘土を使用した形跡はない。

壇底は頭部が幾分か高いが略水平位にあり、これに黄褐色土をはさんで扁平割石を敷く。西側小口壁から38~42cmの位置の床面に、2枚の板石が仕切石風立っている。埋めこまれては

いないので断言できないが、内法長からみても本石室に当初から設置された可能性がある。  
 出土品は、敷石の間から須恵器壺 (Fig. 79-3) 片を採取したにとどまる。

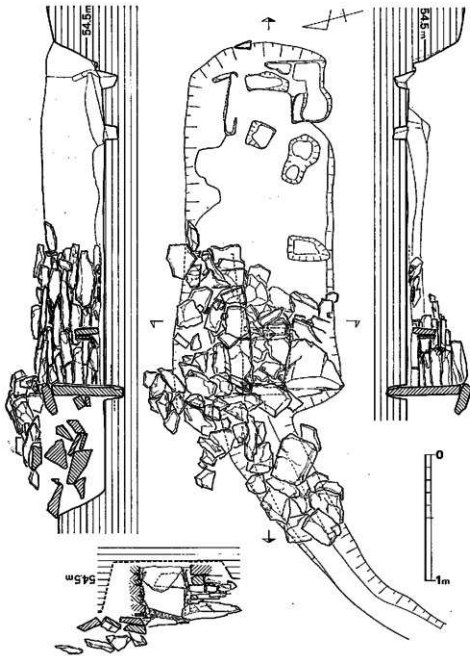


Fig. 56 祇園山古墳裾部外周第1号整穴式石室実測図 (1/30)



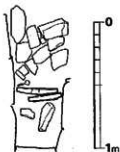


Fig. 57 祇園山古墳裾部  
外周第1号型穴  
式石室床面実測  
図 (1/30)

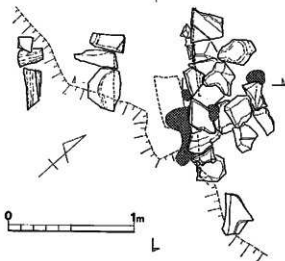
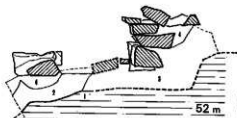
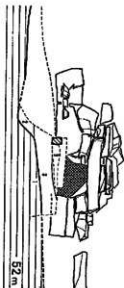


Fig. 58 祇園山古墳裾部外周第2号型穴式石室実測図 (1/30)



#### 裾部外周第2号型穴式石室 (PL.50 Fig. 58,)

両小口壁を失ない、大破している。墓嚢は調査が不十分なため判然としないが、地表を若干掘りこんでいる。割石を小口積みしており、基部の埋めこみは浅い。長側壁は平行せず、南東側が僅かに巾広となり、頭部をおいたとみられる。控積みの一部が、北接するD18の蓋石の上にかかっており、これに後出することは明らかである。

室内からの出土品は、皆無である。なお、室外のD18との間の黒色土中から須恵器甕 (Fig. 79-1) が採取されている。

#### 裾部外周第3号型穴式石室 (PL.51 Fig. 59,)

床面長129cmの小型石室である。蓋石の全てを失なっているが、周壁の残りは良い。他例とは異なり、墓嚢は岩盤を掘りこんでいないが、調査が徹底せず、遺憾ながら詳細は不明である。基部から割石を小口積みしており、長側壁は略直立するが、東側小口壁は若干内傾する。西側隅角の上部は、直交せず、隅丸となる。控積みは、南東隅角部付近のみにみられる。プラ

ンからみて、頭位を東としたと思われる。

室内からの出土品は皆無である。なお、北長側壁の下、岩盤よりも2~3cm浮いた状態で、土師器甕片 (Fig. 78-30) が出土し、この他に周辺から別個体の土師器壺片 (内外とも刷毛目調整、胎土良好、薄手) が採取されている。

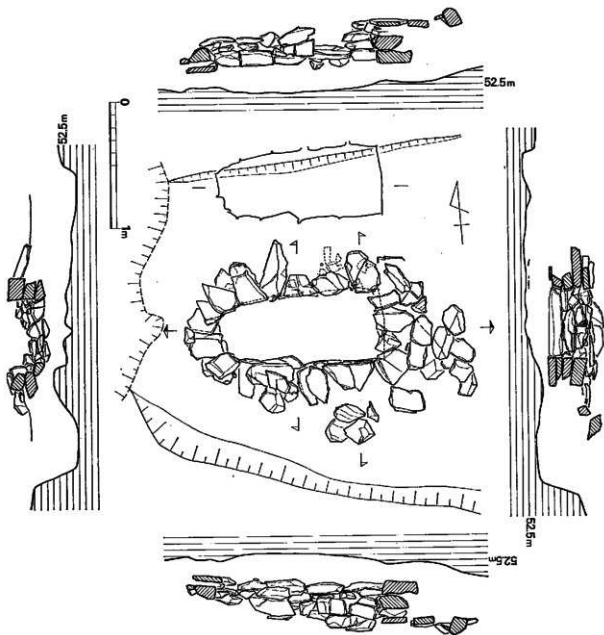


Fig. 59 祇園山古墳裾部外周第3号壘穴式石室実測図 (1/30)

## 裾部外周第4号竪穴式石室 (PL.52 Fig. 60,)

地山を穿った墓室内に営まれているが、西半を欠く。基部に板石を立て、以上を小口積とする石棺系石室に属する。板石は頭部を置く東側に大きな目の石材を配し、深く埋めこんでいる。床面は足部に向かって緩く下傾する。

室内堆積土中から胎土精良な土師器甕片を採取した。

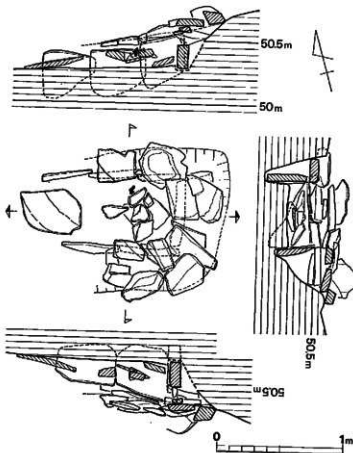


Fig. 60 祇園山古墳裾部外周第4号竪穴式石室 (1/30)

## 裾部外周第5号竪穴式石室 (Fig. 61)

地山を穿った楕円形の墓室内に営まれてあり、蓋石を失なうが周壁は略完存する。床面長63cmと、極めて狭小な石棺系石室である。基部に板石を立て上部を小口積とするが、板石の埋めこみは浅い。西側が僅かに広く、頭部と思われる。

室内からの出土品は、皆無である。

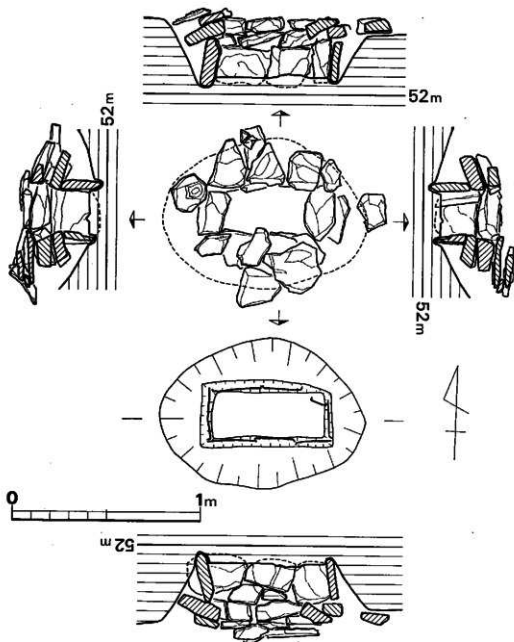


Fig. 61 祇園山古墳裾部外周第5号竪穴式石室 (1/20)

裾部外周第6号穴式石室 (Fig. 62, PL.53-1)

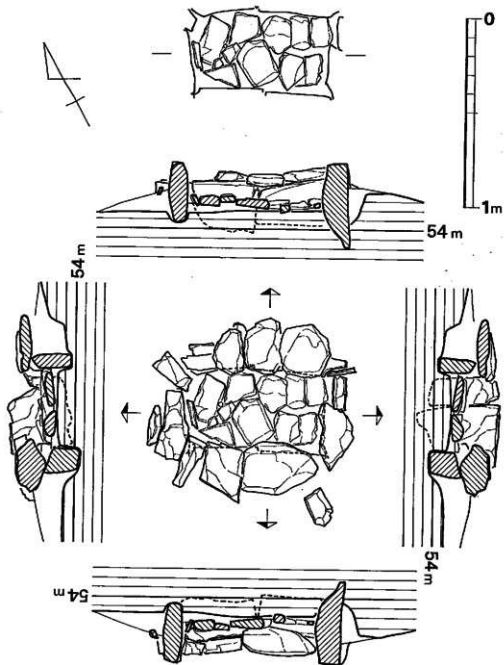


Fig. 62 裾部外周第6号穴式石室実測図 (1/20)

地山を浅く穿った墓室内に営まれており、蓋石の全てを失なうが、周壁の残りは良い。床面長73cmと前述したT5に比してひとまわり大きいとはいえ、極めて狭小な石棺系石室である。四壁とも基部に板石を立てており、T5のそれらに比して埋めこみは深い。竪底は頭部の南東側が若干高く、間層をはさんで床石を敷く。

室内からの出土品は、皆無である。

裾部外周7号壜穴式石室 (PL. 53—2 Fig. 63.)

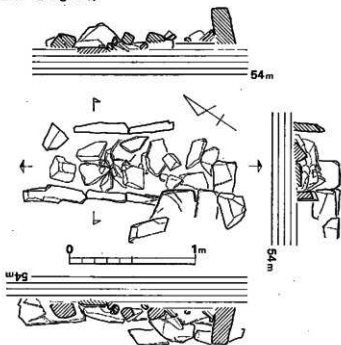


Fig. 63 祇園山古墳裾部外周  
第7号壜穴式石室実  
測図 (1/30)

調査が徹底せず、基壇は判然としないが、最下段の板石を繋ぎつけるために周囲を一段穿った程度と推定される。大破しており、北西側小口部周辺を欠く。基部に低い板石を立てており、石棺系石室に属する。床の石材は、攪乱時に葺石等が混入したものと思われる。床面には赤色顔料が認められ、巾が広い南西側を頭位としたとみられる。

室内からの出土遺物は、皆無である。

裾部外周第8号壜穴式石室 (PL. 54)

蓋石を失なっている。清掃と撮影しか行っていないが、基部に板石を立てた石棺系石室に属する。石材の配置からみて、北東側を頭位としたと思われる。

## 裾部外周第9号竪穴式石室 (PL.55 Fig. 64.)

墓域は、地山を穿った隅丸長方形プランで、蓋石の全てを失っている。基部にその高さの過半を埋めこんだ板石を立て、以上は小石材を小口積しており、石棺系石室に属する。内法からみて頭位は東と思われ、石材も東半の方が大ぶりである。床面は略水平位にあり、赤色顔料が認められた。

本石室を覆う土砂がD20の粘土の上にあることから、これに後出することは明らかである。

棺内の西半から、鉄鏝 (Fig. 72-8) および土師器 (Fig. 73-1) が出土した。いずれも床直上ではなく、間層をはさんだ石の上から採取されている。

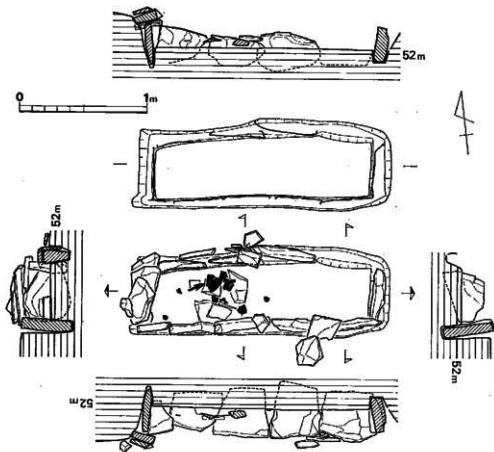
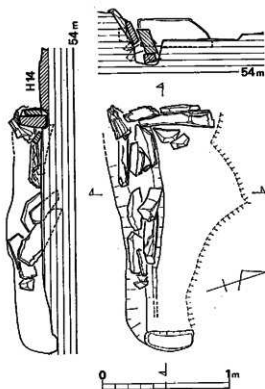


Fig. 64 祇園山古墳裾部外周第9号竪穴式石室実測図 (1/30)

## 裾部外周第10号竪穴式石室 (Fig. 65, PL.56)

H14に東接する。地山を穿った墓域内に営まれているが、大破している。墓底の四周をさら



に一段掘りこみ、基部に板石を横長となるように立てており、石棺系石室に属する。プランからみて西側に頭位をとったと思われる、足部に比して巾広となっている。

なお、西側小口の石材は、H14の蓋石上あるいはこれに接しており、これに後出することは明らかである。

室内からの出土遺物は、皆無である。

Fig. 65 祇園山古墳裾部外周第10号竪穴式石室実測図 (1/30)

裾部外周第11号竪穴式石室 (PL. 57・58 Fig. 66.)

地山を穿った墓室内に営まれており、傾斜の高い東側のD17との間を2段にわたって均している。蓋石は、1枚を除く他は現存しており、略原状のままかと思われたが、部分的に間層をはさんで二重となっており、また目張粘土が全く認められない点で異例であり、攪乱後に再び石材で覆った結果と推定される。石室は一部の石材が傾いている以外は、遺存度は頗る良好であった。基部に板石を立てるが、埋めこみは概して浅い。これらの上部には、小石材を積む。これを単に周壁上端を描えるためとするには範囲が広く、従って、石棺ではなく石棺系石室とすべきと思われる。南東側は、石材の並びが重むが墳底が僅かに高く、プランからみてもこちらに頭位が求められる。なお、南東側に枕風の石材1個があるが、墳底より浮いている。

室内からの出土遺物は、皆無である。

裾部外周第12号竪穴式石室 (PL. 59 Fig. 67.)

墓室は、調査が徹底せず遺構ながら不明である。蓋石は全てが失われている。石室の基部には板石を浅く埋めこみ、この上に数段小石材を積み上げており、石棺系石室に属する。斜面に



かかる西半については、控積みしている。石材の大きさ・形状とも不揃いで、床面プランも均斉を欠き、総じて粗雑なつくりとの印象を受ける。

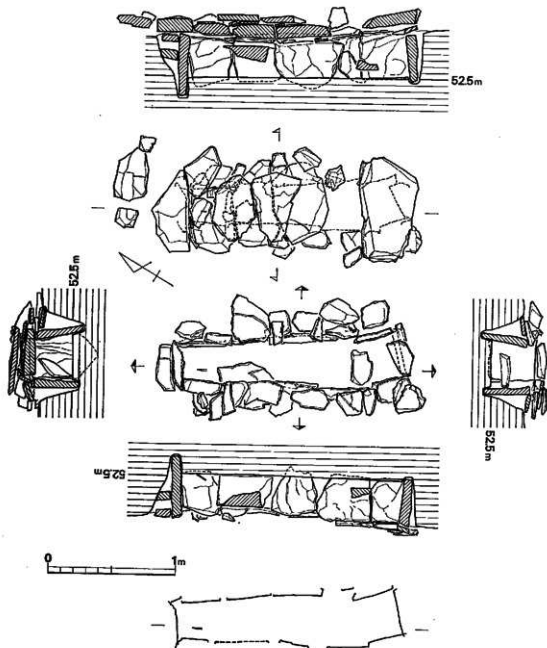


Fig. 66 福岡山古墳裾部外周第11号竪穴式石室実測図 (1/30)

南西側の床面が稍高いが、石材の配置からは北東側を頭位としたと考えられる。  
 棺内床面からの出土土物は皆無であるが、中央稍北東寄りの礎座と床面との間から底部を穿孔した複合口縁土師器壺 (Fig. 74-13) が出土した。その他、棺外の南西側小口から1.6~1.9mの地点から土師器高杯 (Fig. 73-6) が発見されたが、杯部は盗掘にあり、態様に堪えない。

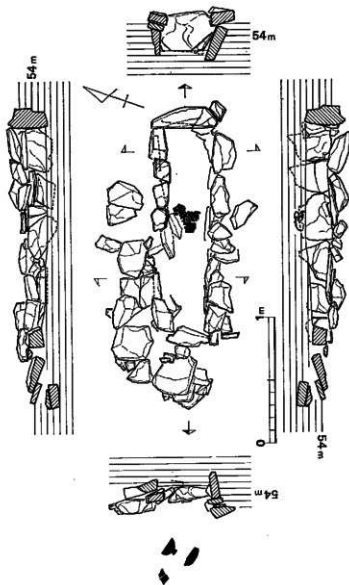


Fig. 67 祇園山古墳棺部外周第12号塚穴式石室実測図 (1/30)

## 裾部外周第13号壑穴式石室 (PL.60 Fig. 86,)

地山を浅く掘りくぼめた墓壇底に営まれているが、大破しており東半の基部を残すのみである。

石材の大きさ・形状とともに不揃いである。北側長測壁の石材には板状のものが多く、石棺系石室のそれに近いが、最下段を埋めこまない点で異なり、既述したT3の構造に近い。

棺内の両側壁近くから、手斧鋸 (Fig.72-7) 1個が出土した。この他に、北側貫石との中間地点付近から土師器 (Fig.78-32) が採取されている。

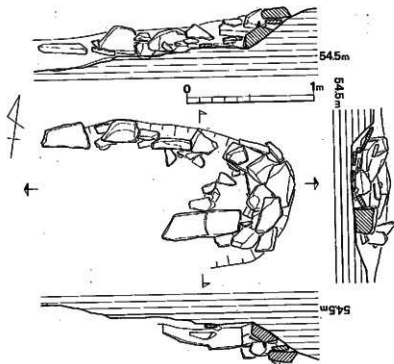


Fig. 68 祇園山古墳裾部外周第13号壑穴式石室実測図 (1/30)

Tab. 3 祇園山古墳裾部外周壑穴式石室内法一覧表

( ) は推定値

	墓 壇	内 法	枕	ベンガラ	床 石
	長 × 巾 × 深	長 × 巾 × 深			
T 1	291×114~131×50cm	(235)×(48)~32×(70)cm		○	○
2	?	?×(70~50)×?cm	?		○
3	?	129×53~40×(42+α)cm	×	×	×
4	?×113~?×29~?cm	?×53~?×(45+α)cm	?	×	?

5	108×79×31~23cm	63×26~18×(34)cm	?	×	?
6	103×88×10cm	73×41~38×(25+α)cm	×	×	○
7	?	?×60~?×?cm		床	
8	未調査	(80)×(50)×?cm	?	×	×
9	200×70~62×25cm	176×(48)~41×33+αcm	?	床	?
10	195×?~69×22~27cm	165×(50~30)×?cm	?	×	?
11	213×73×38~35cm	177×39~28×(40~37)cm	石?	×	?
12	?	160×40~42×30~27cm	×	×	×
13	?×?~95×?~26cm	?×(60)~(45)×?cm	?	×	○

### (7) 構造不明主体

#### 裾部外周号G主体 (PL. 61-1)

調査が不充分であるため実態は遺憾ながら不明である。長さ約2.2m、巾0.9mにわたって赤色顔料が塗られた粘土があり、この一端が隣接するD26の外周の粘土の上に及んでいる。従って、D26に後出することは明らかである。

D26寄りの北東端から、鉄製工具類 (Fig.71) が出土している。

### (8) 出土遺物

#### 鏡

##### 半円方形帯鏡片 (PL.62+63 Fig. 69.)

第1号甕棺墓内から出土した。

後漢の作とみられる。現存最大径10.2cm、復元径10.4cmで、後漢末紀年銘鏡に比べて稍小型である。現存重量は、47.5g (註1)。縁厚3mm。反りは僅かで2mm強。折損面のうち、一端のみが丹念に研磨されて平滑である。一孔が穿たれており、鏡面側の孔縁は磨滅している。上縁の凹凸部分は副葬当初の姿である。

鈕を欠き、現存部分の内区に特徴の跡はない。緻密な細部描写の右向きの電が内彫りされ

ており、鋳上りの良い優品である。首をいったん後方に引き、前方を睥睨して躍動感に富む。竜の右隣には、酷似するモチーフの後肢から尾部だけが残る。竜か虎かは判然としないが、尾部の表現が若干異なり、やはり右向きで相対してはいないと思われる。

類例の多い神獣鏡とはならず、また変棺墓出土鏡としても異例の型式である。竜と虎を配したものと見られるが、両者は相向わず盤竜鏡とも異なる。

半円方形帯の14の方格のうち5個が現存し、副銘をもつ。方格の両側には極小の円文を配し、半円の外縁には小半円文を付す。銘帯との間に外向鋸歯文を置くが、稍シャープさを欠く。銘帯は一段高く作られ、唐草文で加飾した縁へと続く。

銘文はいずれも右行で、主銘は字間もまばらであり、方格内の副銘の方が鮮明である。

銘文のうち判読できるのは、

副 銘 善同出丹□

主 銘 吾乍明□幽凍三商周□無□配 羅會…  
番昌兮

である。

諸鏡の銘文にならってこれを補えば

(註1)。

副 銘 (漢有) 善同出丹□

主 銘 吾作明鏡幽凍三商彫刻無極配羅會  
(年益寿) ……番昌兮

となろう。

駒井和愛博士の所説を援用すれば、主銘は、

吾作明鏡幽凍三商彫刻無極配(像萬)境會(年益寿) ……番昌兮

と復元される。博士は、幽は明と対をなしており、三商は「三つの強い金属の意味……銅・錫・鉛」と解されている(註2)。

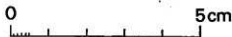


Fig. 69 〔河内山古墳裾部外周第1号変棺  
墓出土鏡拓影(1/4)〕

註 1 固化・修復後に、上皿天秤を使用して量った値。

註 2 銘文の検討にあたっては、下記を用いた。

『小枝経閣金文拓本巻十五』

梅原末治『泉屋清賞新収編』 1962年

梅原末治『漢鏡とその文字』 <書道全集2 中国2 漢> 1965年

なお、関連資料調査のための五島美術館収蔵鏡の閲覧に際しては、同館の竹内・那古那明・岡崎久司三氏の御高配を得た。また、九州歴史資料館の鏡山猛館長、ならびに渡辺正気・西村強三両課長には、斡旋の労をおとりいただくとともに、有益な御教示を得た。県文化課柳田康雄氏からは貴重文獻の複写を、渡部明夫氏(当時九大院生)からは「小枝経閣金文拓本」の一部の複写をそれぞれいただいた。上記諸氏の御厚情に対して心から感謝いたします。

註 3 駒井和愛「六朝以前鏡産の銘文」『中国古鏡の研究』1953年刊、1973年第2刷刊

鍍身具 (PL.64 Fig. 70.)

K1 棺内出土の勾玉・管玉の計3個に限られる。

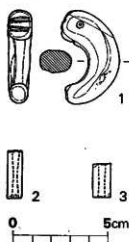


Fig. 70 祇園山古墳裾部外周第1号甕棺墓出土玉類実測図 (1/2)

勾玉 (Fig. 70-1)

美しい緑色の硬玉製で、全長48.6mmと大型。両側に平坦面があるのをはじめ研磨が充分ではなく、全体に扁平である。頭部の厚さは11.9mmで、尾部は9mmと稍細くなる。頭部は三条の切目を入れた「丁字頭」であるが、刻線は鋭さを欠く。頭孔は一方から他方を貫いており、孔縁は3.35~1.45mm。背から頭頂にかけて1条のクラックが入っている。

管玉 (Fig. 70-2・3)

いずれも碧玉製で、孔は両側から穿たれている。2は、長さ24.9mm、径7.5~7.45mmで、暗灰緑色を呈し、孔径3.35mm。3は、長さ17.4~17.7mm、径9.1~9.5mmと太くて短く、曲かにエンタシス状となる。前者と同様に縁辺に玉ユラによる細い剝離痕があり、灰白色を呈する。

鉄器

鉄製鏡・工具 (PL.64・65 Fig. 71・72.)

G 主体に厚鏡・鍔・鉈?等 (Fig.71) が集中する例を除けば、採取品は略1主体1個に限られる。

## 厚 鎌 (Fig. 71-1)

先端を欠くが折り返し部寄りの過半が残り、現存長11.6cm、同最大巾5.1cmと大型。錆のため判然としない部分もあるが、刃部は曲線をなし、全体に厚手・鈍重である。上端を欠く折り返し部は、刃部と斜交する。

## 鎌 (Fig. 71-2)

折損して四片となっている。現存全長16cmで、身部長は11.7cm。

先端は二等辺三角形となり方鎌に属するが、鋭さを欠きまた断面も長方形である。基近くの断面も4×6mmの長方形で、木柄に挿入されている。柄部の表面は錆で覆われ、硬化している。

## 鎌? (Fig. 71-3)

現存長5.2cmで、巾8mm、厚さ2.5mmと一定している。柄部木質は認められないが、鎌の基部かと思われる。

## 手 鎌 (Fig. 71-6)

D23の棺内からの出土品。土圧により「く」の字状に折れ曲っており現存幅は7cmで、復元巾も7.5cmと小型。両端を折り曲げた耳部は、右と左上半とを欠く。長さは16~17mmであるが、中央部は15mmと僅かに狭い。

## 手斧鎌 (Fig. 72-7)

T13の室内から出土した。全長8.1cmの両屑式の完形品。副葬に際し、外径26×35mmの袋部に柄は装着されていない。刃部最大巾は4.5cmで、既述の墳壁に残る工具痕の巾と略一致する。

## 刀 子 (Fig. 72-1~5)

1は、K1棺内からの出土品。鋒を欠き、現存全長4.5cm、同刃部最大巾1.5cm。錆化が進み、脹らむ。巾の割に薄身である。

2は、D14の頭部副棺外のH11との間から採取されている。帰属を決め難いが、H11の棺内には鉄剣片が副葬されているのでD14に属する可能性がある。鋒を欠き、現存全長3.1cm、同

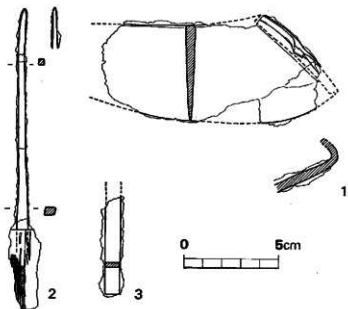


Fig. 71 祇園山古墳柄部外周G主体出土土器鉄剣測図 (1/2)

刃部最大巾1.1cm。

3は、D27棺内からの出土品。鋒を欠き、現存全長0.1cm。関部は錆のため不明であるが、推定巾は1.5cm、同茎長3.2cm。

4は、D32から採取された。茎先端をのみ欠き、現存長9.1cm。刃部長は6.5cm、関部巾1.3cm。若干の研ぎ減りがあり、鋒の棟部にこれと斜行する木質？が錆着している。

5は、T11の室内からの出土品。刃部の研ぎ減りが著しく、鋒を欠く。現存全長9cm、刃部巾4.5cm、関部巾1.4cm。茎には柄木の一部が残し、長さ3.1cm。

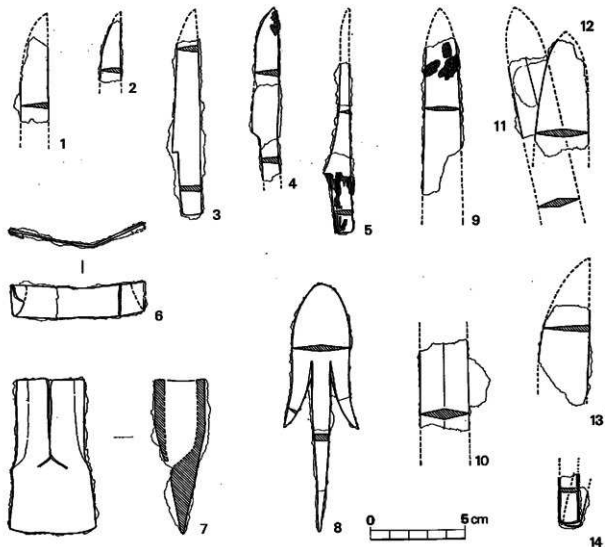


Fig. 72 祇園山古墳副部外周主体群出土鉄器実測図 (1/2)



15 (Fig. 20) は、K1 棺内から出土。1 とは別個体。現存全長 7cm で鋒と茎とを欠く。現存刃部最大巾 15mm。一部に骨片が銹着している。

武器 (PL. 65 Fig. 72-8~12,)

#### 鉄 鏃

8 は、T9 の室内から出土した。全長 12.9cm と大型で、腸 折の先端を欠くものの略完形。「両丸造腸扶柳葉式」(註 1) に属し、筧は装着されていない。身部は稍均齊を欠き、最大巾 3cm、腸扶部巾 4cm。

註 1 後藤守「上古時代鉄鏃の年代研究」19年

劍 (Fig. 72-9~12)

9 は、H 11 の棺内からの出土品。鋒を欠き、現存長 8.3cm。鏃は不明瞭で、刃部は鈍い。片面に布の小片が銹着している。細身・薄手で、現状は若干反っている。蓋石の状況からみて、もともと破片が副葬されたと思われる。

以下は、いずれも北西側裾部外周から採取されており、原位置は不明である。

10 は、現存長 4.8cm、同最大巾 2.6cm。鏃高で鋭利な感を受ける。

11 と 12 は、重ねて副葬されており両者は銹着している。11 は、現存長 4cm、同最大巾 2.2cm で、鋒近くの破片とみられる。鏃高で鋭利。12 は、鋒部片で、現存長 6cm、同最大巾 2.8cm で、鏃は不明瞭。

不明鉄器 (Fig. 72-13~15)

13 は、北西側裾部外周から採取されており、刀身状を呈している。現存長 5.2cm、同最大巾 2.6cm。巾の割に薄手であり、直刀の鋒近くの破片とするには疑問が残る。

14・15 は銹着しており、巾 1cm の茎状の破片で木質等は認められない。後者が少しく厚い。D28 の堆積土中から出土。

上記の他、赤色顔料が付着した砥石片がある。

土師器 (PL. 67, Fig. 73~78)

全て墳丘裾部外周から出土している。1 が T9 に、13 が T12 に、30 が T3 に各々所属し、8 も T12 に伴うものと思われる。他は、大部分が原位置から移動している。図示した以外にもなお別個体に属する小片があるが、弥生式土器片はまず採取されていないとして良い。

#### 杯

1 は、T9 の室内から出土した。復元口径 14.9cm、器高 5.5cm。口縁部は先細り気味に内彎する。内面の上半は横方向に、みこみは各方向から、暗文風に篋磨きを丹念に施す。器表は、口縁部近くを横ナデするが、以下は篋削りのまま。赤褐色を呈し、一部に黒斑がある。胎土は精良。

2は、D18周辺に厚く堆積した黒色土中から出土した。破損しているが、略完存する。器高5.8cm。口縁部は内彎し、最大径は口縁部より1cm程下位にあって14~14.2cm。厚手で、器表全面に粗い刷毛目調整が施されているのが特徴的。口縁部近くは、ナデ調整によりこれを消している。内面は、横方向に暗文風に磨きした後にナデ調整。赤褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好。

3は、後述する4・5と同様にD20・T5・T9付近から出土し、これらの他にあと1個体の小片がある。底部を欠く。黄赤褐色を呈し、胎土は精良で薄手。復元口径18cmに対して、同器高は4cmと浅い。内外の一部に丹塗の痕跡がある。

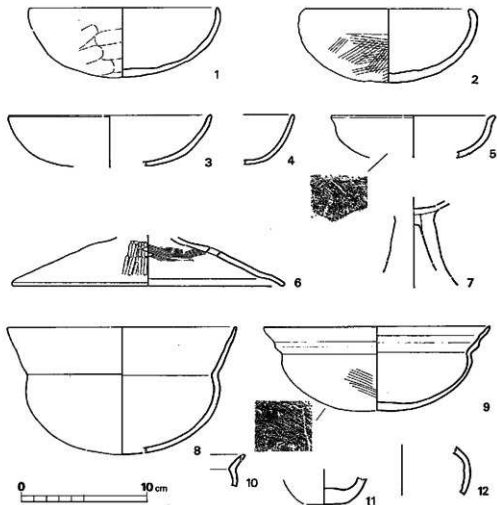


Fig. 73 祇園山古墳器部外周出土土師器実測図1 (1/30)

4は、復元口径15.6cm、赤褐色を呈して、胎土は精良。ただし器表の風化が著しい。厚さ3mmと極めて薄く、前述3と同工である。

5は、底部を欠く。復元口径13cm、同器高3.6cm前後。口縁部は外反する。体部以下が叩き締められている点に特徴がある。赤褐色を呈し、焼成は稍甘い。3・4とは異なり、胎土に細粒を多く含む。

#### 高杯

6は、T12の南西側椽外から出土したが、杯部は盜難にあった。現存高3.7cm、脚部底径21.4cm。脚台部は内彎気味に大きく広がり、端部は内側に向けて僅かに屈曲する。四等分する位置に径9mmの1孔が穿たれている。胎土は精良であり、器表は丹念に筐磨きされて光沢ある肌を残す。内面は刷毛目調整。出土例中では最も優品の一つである。

7は、北側から出土。厚手で、胎土は精良であるが、赤褐色を呈して焼成は甚だ甘い。

#### 鉢

8は、K1を基点とする土層観察用時の東側平坦面から出土。口頸部から体部下半の一部のみ、復元口径18cm、同器高10cm。口頸部は僅かに内彎しつつ外反する。体部の内外は細かく筐磨きされ、特に内面は光沢ある肌を残す。黄赤褐色を呈し、胎土も精良。

9は、T1周辺から出土した。¼前後が残り、復元口径17.8cm、同器高6.6cm。口縁部は、2度屈曲するという特徴的な形態をとり、北部九州では初出例と思われる。器表口縁部周辺は横方向の筐磨き、体部下半には局部的に刷毛目調整痕が残る。黄褐色を呈し稍軟質。胎土は精良で薄手。

10は、18・22・27と共にD23の北側から出土。細片のみ、胎土は精良であるが、赤褐色を呈して焼成は軟調。

#### 壺

13は複合口縁の壺で、T12の床面下から出土し、これに伴うことは確実である。復元器高18.7cm、間口径18~18.4cmと両者は略等しく、中位よりも若干上にある胴部最大径16.6cmに対して胴部高13cmと全体に肩の張りが目立つのが特徴的である。口縁部は大きく外反し、頸部は略直立する。底部の心からは外れるが、径約3.5cmの一孔が焼成後に穿たれている。器表は刷毛目調整され、筐削りされた内面はその痕跡を殆どとどめていない。黄褐色を呈し焼成は稍甘く、孔の周囲は黒変している。胎土は細粒を含むが良好といえる。全体として端正な感を受ける優品である。

14は広口壺で、D18・T2付近から出土した。底部を焼成後に径2.5cm前後にわたって穿孔している。復元口径12.8cm、器高16.2cm、頸部外径9.6cm。口頸部は少しく内彎しつつ外反し、頸高は4cm、復元胴部最大径は、口径よりも大きく15cm前後で、中位よりも稍上にある。底部は稍尖り気味。器表は丁寧に刷毛目調整され、肩以上はこの後にさらに横方向に筐で磨いてお

り、光沢ある肌を残す。体部内面には丁寧にナデ調整を施す。胎土は良好であるが、焼成は稍甘い。

15は、出土地点が不明である。肩部から体部下半にかけての一部が残る。口頸部を欠くが、立ち上り具合からみて複合口縁の可能性もある。刷毛目調整は内外とも入念に行なわれ、工具巾は2.2cm。全体に厚手であり、胴部は球形に近かったものと思われる。器表下半は黒色、内面は赤褐色を呈し、胎土は良好。

11は、12と同様D18・T 2周辺の黒色堆積土中から採取されている。底部のみ、復元底径3.6cmの小型品、胎土は良好。

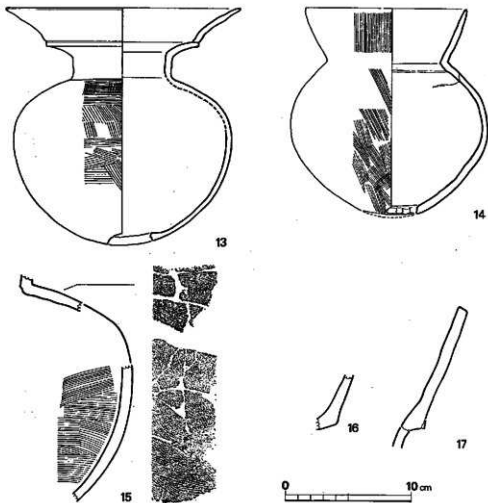


Fig. 74 祇園山古墳裾部外周出土土器実測図2 (1/3)

12は小片である。復元胴部最大径10.8cm。内面肩以上は横、以下は斜方向に指ナデを施す。

胎土は精良で、焼成も良好。

18, 17は複合口縁と思われる。前者は茶褐色、後者は黄褐色を呈して色調は異なるが、焼成は甚だ甘く、胎土に細粒を多く含む点で共通する。

18は北辺の表土から、17はD33の蓋石上から採取されている。両者の他に同一器形とみられる3個体目の小片がある。いずれもかなり大型とみられるにも不拘、破片は極く僅かしか採取されていない。

壺

18は、D23の北側から出土した。口頸部から肩部にかけての一部のみ。復元口径16.4cm、同頸部外径11.2cm。口頸部は低く、内彎しつつ大きく外反し、口唇部は少しく割りこまれてアクセントがつけられている。口頸部器表はナデ、以下は縦・横の順で刷毛目調整が施されている。内面肩部

以下は寛削り、黄褐色を呈して焼成は稍甘い、胎土は精良。一部が黒変する。

19は、21とともに西辺の北半——D31の北西側から採取されている。この周辺では計3個体分の小片が採取されている。底部を欠く。復元口径15.2cm、同器高26.4cmで、復元胴部最大径23.5cmは体部上半にある。頸部はほぼ直線的に外反し、口唇部は稍細くなる。肩部は張らず全体として倒卵形を呈したとみられる。黄褐色を呈して焼成は稍甘く、風化が進んでいる。胎土に細粒を多く含むが、薄手で、成形は良好である。器表の口縁部から体部上半にかけて煤の付着が著しい。

20は、D28から出土。口縁部を欠き、頸部から肩部にかけてのみ。器表は、頸部近くを縦方向

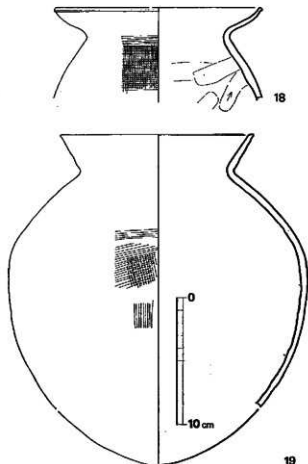


Fig. 75 祇園山古墳裾部外周出土土器実測図3 (1/3)

に刷毛目調整し、後横方向にナデている。以下は1単位の長さ6cm前後の粗い刷毛目調整。頸部内面は横方向の刷毛目調整痕を縦ナデして消している。以下の寛削りは、丹念である。黄楊

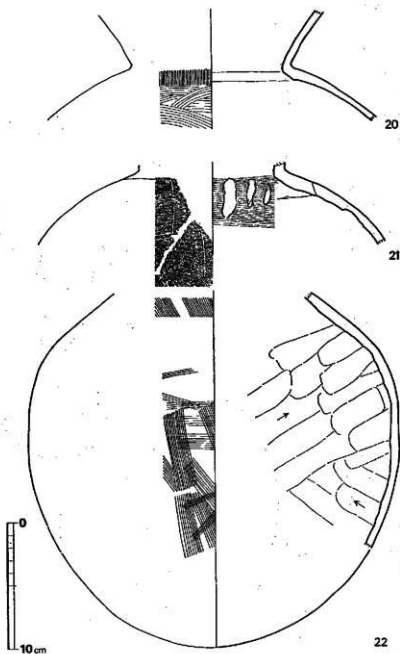


Fig. 76 祇園山古墳裾部外周出土土師器実測図4 (1/3)

色、部分的に赤褐色を呈し、焼成良好。胎土に細粒を多く含む。

21は、肩部周辺の一部のみで、復元頸部外径11.5cm。器表の刷毛目調整は極めて丹念であり、工具の走りは3~5cmと短かく、重なり合う部分はまずない。頸部周辺のみ、指ナデの最終調整を行なっている。内面は、器表に比して粗い刷毛目調整で、後に縦方向に指ナデ。黄褐色を呈して焼成良好。胎土に細部を含む。なお、頸部から肩部にかけて、2~2.5cmの間隔をおいた縦方向の2条の凹描沈線がある。

22は、D 23北側から出土した。口頸部と底部とを欠く。復元頸部最大径19cmは、中位よりも若干上にある。器表の調整には、巾15mmと18mmの2本の工具が

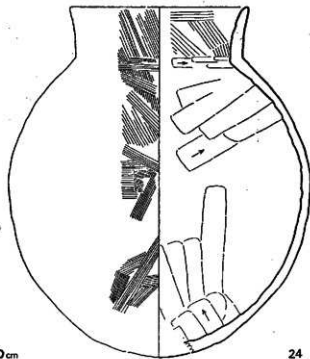
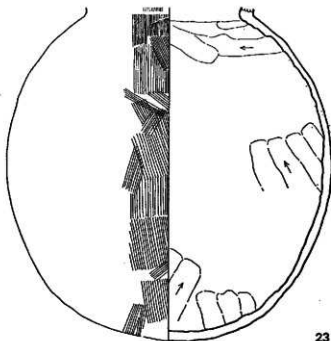


Fig. 77 祇園山古墳裾部  
外周出土土器  
実測図5 (1/3)

用いられている。内面は笥削りのまま、成形は良好である。暗褐色を呈して焼成良好で、一部が黒変する。胎土に細粒を多く含む。

**23**は、南西隅表土下の黒色土中から出土した。口唇部を欠く。現存高29.4cm、復元胴部最大径25.5cmは略中位にあり、球形の胴部となる。器表は2本の工具を用いて刷毛目調整を施す。内面はザックリと笥削りされ、肩から体部上半にかけては薄手に仕上げられている。黄褐色を呈して焼成良好で、一部が黒変している。胎土に細粒を多く含む。肩から体部下半にかけての器表には、煤が付着している。

**24**は、**25・28**と共にD7周辺から出土し、底部を欠く。復元口径14cm前後、同器高27.5cmで体部の一部が歪む。復元胴部最大径23.6cmは中位にあり、胴部は球形に近い。直立気味の口頸部は先端が僅かに外反し、先細りとなる。器表および頸部内面は刷毛目調整され、内面は笥削り。黄褐色を呈し、一部が黒変、器表の極く一部に煤が付着している。

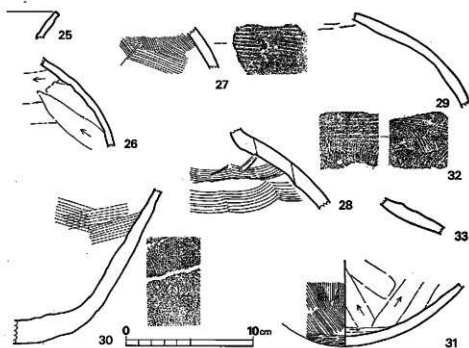


Fig. 78 祇園山古墳裾部外周出土土器実測図6 (1/3)

**25**は小型で、頸部の小片のみ。復元頸高2cm。口唇部に歯かな沈線を入れている。胎土は良好。

**28**は、肩部と思われる1片のみ。内面は粗く笥削りされ、一部に赤色顔料が付着している。器表上半は縦方向、以下は斜め方向に御目調整を施す。暗黄褐色を呈し、焼成は稍軟弱。**25**と



は別個体。

27は、D23の北側から出土した。器表は一見叩きを思わせる程の粗い刷毛目調整痕を残す。内面の調整は、最初に横方向、次に部分的に斜め方向に施す。

28は、29と共にH7の西側から出土した。肩部の一部のみ。現存部分の器内は1cm前後と厚手である。器表は硝風化しており、黄褐色を呈する。内面に粘土紐の痕跡を残す。器具の走りは短かく、刷毛目は瓢を描く。

29は、肩部の一片のみ。器表上半を軽く篋削りしており、内面は寛で丁寧になでられ、平滑。器表は黄赤褐色、内面は黄褐色を呈する。胎土は細粒を余り含まず、他の甕のそれとは異なる。

30は、T3の北側壁下から採取されている。底部周辺の一部のみ。平底に近い底部は1.9cmと異様に厚く、以上は徐々に薄くなり、現存最先端部では、4.5mmと差は極端である。器表は縦方向、内面は斜め方向に粗い刷毛目をかけた後ナデ調整を施す。黄赤褐色を呈し、焼成は良好。胎土に細粒を含むが、器表では目立たない。底部には、ワラシベの痕跡が残る。

31は、D28付近から出土。丸底の底部片のみ。黄褐色を呈して稍軟質。一部が黒変する。胎土に細粒を多く含む。

32は、D27周辺から出土した小片。内外に刷毛目調整が施されるが、器表には叩きの痕跡をとどめる。黄赤褐色を呈して焼成良好。胎土も良好。

#### 器種不明

33は、肩部付近とみられる小片。凸帯風に隆起する部分があり、器表には刷毛目調整が施されている。胎土は良好であるが、雲母の微粒を含み、出土品中では異色である。北辺から採取されている。

#### 須恵器 (PL.68, Fig.79)

甕(3)がT1石室内から採取された以外は、原位置をとどめない。甕(1)はT2北側(D28の西側)の黒色土中から、高杯蓋(2)・甕(4)が北隅角裾部外周から、甕(5)がD2の南西側から出土している。

#### 甕 (Fig. 79-1)

口の周囲を欠くが、器高16.7cm、胴部最大径17cmの大型品。復元口径12.4cm、頸径6.8cm。波状文をめぐらす口縁部はシャープであるが若干波打ち、肩部の沈線も乱れ、全体に均斉を欠く。頸部内面には、粘土紐の痕跡をとどめている。体部の成形にあたっては、径10cm弱の円板を底部としている。以上の粘土紐の接合部は、指頭による圧着痕が未調整のまままで凹凸著しく、特に底部との接合部が異常に厚く特徴的である。肩部以下の器表には叩き板痕を残す。黒色を呈して焼成は良好であるが、胎土は細粒を多く含む。正立状態で焼成されており、底部に径9cm弱の結合の痕跡をとどめる。

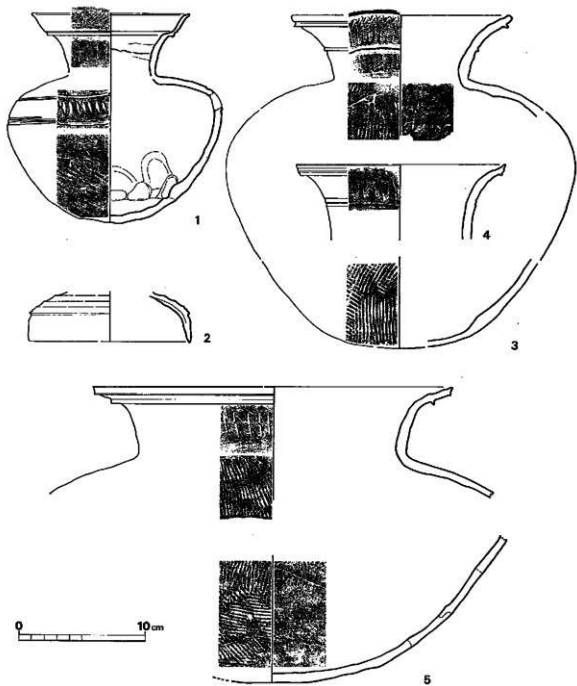


Fig. 79 祇園山古墳裾部外周出土須臾器実測図 (1/3)

## 蓋 (Fig. 79—2)

復元口径13cmで、撮を欠き現存高は4cm強。寛削りの範囲が広く肩部の稜線も鋭いが、全体に厚手で口唇部内側には段がつかない。肩付近に粘土を貼り足したような断面がみられる。灰青色を呈して、焼成堅緻。高杯の蓋とみられるが、対となる高杯は採取されていない。

## 壺 (Fig. 79—3—5)

3は、口縁から肩部にかけてと体部下半の一部のみ。復元口径17.4cm、同器高26.5cm同胴部最大径27.6cm。口唇部は稍鈍いが、頸部中段の突帯はシャープで、上下に波状文をめぐらす。叩き板痕は、肩部ではナデ消されているが、体部下半では未調整。内面はいずれも丁寧なナデ調整が施されているが、体部下半には叩き棒の木口に彫られた細かい同心円文を微かにとどめる。焼成は堅緻で、胎土もまた良好。

4は、口頸部の一部のみ。復元口径16.8cm、頸高6cm。頸部に浅い二条の沈線をめぐらし、上下に波状文を加える。青灰色を呈して焼成良好。

5は、口縁部から肩部にかけてと底部近くの一部のみ。復元口径28.4cm、頸高5.4cm。口縁部下にシャープな突帯をつけ、波状文をめぐらす。各端部はシャープで、焼成も堅緻。底部は、4cm前後の粘土帯で作られ、接合部内面の凹凸が著しい。内面は入念に調整されているが、底部近くには同心円文が微かに残る。焼成時には、径21cm前後のドーナツ状の踏台が用いられている。胎土は良好。

上記の他に、大型・厚手の寛片が北隅角部付近から採取されている。器表にはナデ方向が施されているが、縦方向の叩き日が残る。内面は小豆色を呈し、丁寧なナデ調整が施されて叩き棒の痕跡をとどめない。

## (9) む す び

## 第1号壺棺蓋の埋設状況

第1号壺棺蓋(以下K1と略す)の当初の埋設状況は下図(Fig. 80)のごとく復元される。本棺の埋設状況にみられる特色としては、

1. 墓域は一段で、浅い。
2. 上甕の口縁を打ち欠き、これを下甕に挿入している。
3. 甕棺全体が急角度をもって据えられている。

の三点が挙げられる。

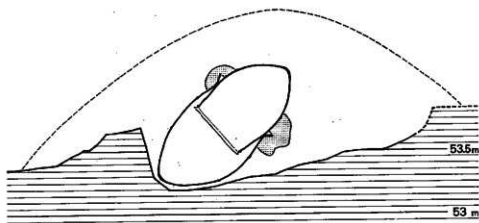


Fig. 60 祇園山古墳裾部外周第1号壺棺墓埋設状態復元図 (1/30)

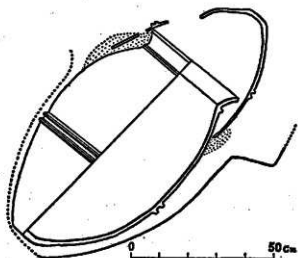
本棺に用いられた甕形土器自体が次節で述べるように古・新の二相を示すが、埋設の状況もまた新旧の特色を合わせ持つといえる。小稿では弥生時代の全期について触れるユトリはないので、後期以降に限定して甕(壺)棺の埋設状況の推移について言及することにした。

Fig. 81に参考例を掲げたが、その時期および傾斜は下記のとおりである。

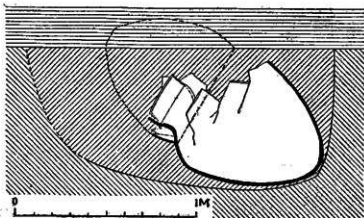
1. 亀ノ甲遺跡第17号甕棺墓(註1)  
弥生時代「後期」, 48°
2. 向原遺跡第1号壺棺墓(註2)  
古式土師器, 31°
3. 深町第2号墳南東裾部壺棺墓(註3)  
「柏田Ⅱ期」, 水平

後期までの壺棺墓は、いったん地山を掘削した墓壇壁(底)の一角所をさらに穿って壺棺を挿入するのが基本としている。すなわち、2段にわたって墓壇を穿つのが通例であり、かつ深い。これに対して後出する甕(壺)棺墓では、墓壇の形態は明らかに単純化している。土壇墓・箱式石棺墓と同様に長方(円)形プランの墓壇一段を穿つのみで、かつ、浅たえた棺体あるいはその下半を隠す程度の深さでしかない。一方、傾斜角は次第に緩くなる傾向があり、深町例では略水平位となるに至っている。

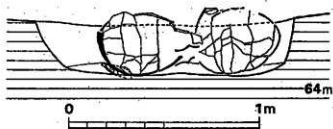
大雑把には、後期以降上記のごとき推移をとげたと思われる。そこで、本棺の埋設状況にたち戻ると、墳底ならびに壺棺の傾斜度は前代のそれに近いが、墓壇のプランおよび深さに明らかな後出的様相が認められる。なお、本棺と相前後する時期とみられる壺棺例に、筑紫野市・峠山壺棺墓がある。一段掘りの比較的浅い墓壇内に、複合口縁大型壺2個が口を合わせて略水平位に埋設されており(註4)、深町例に近い。



1



2



3

1. 八女市・亀ノ甲遺跡第17号甕棺墓      2. 糸島郡前原町・向原遺跡第1号壺棺墓  
3. 粕屋郡古賀町・深町第2号墳南東裾部外周出土壺棺墓

Fig. 81 甕・壺棺埋設状態例 (各報告書から転載)

2個の土器を用いた場合の合わせ口法のうち、上甕を下甕に挿入する例が稀であることは現地にて森貞次郎博士から御教示いただいたところである。古式土器段階では、前出深町例がその可能性があり、この他熊本県玉名市・山下古墳の後円部舟形石棺の脇に埋設された2基の壺棺でも「打ち欠いで棺身の口縁の中にはめこんであった」（註5）という。弥生時代終末期の類例が乏しい（註6）ので確言できないが、新しい要素の一つとして注意される。

以上を要するに、変化の度合が直ちに营造時期の先後を示すとは思われぬが、以上によってK1の所属期が自ずと限定されると考える。

註 1 小田富士雄編『雉ノ甲』1964年

2 渡辺正気「福岡県糸島郡旧糸島女学校校庭出土の壺棺」〈史測 81〉1960年。時期は現在の岡氏の見解による。

3 拙稿「深町第1号墳——壺棺」〈九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXI〉1978年。なお柏田夏期は井上裕弘氏の編年によるもので、「布留式の古期のもの」が充てられている。岡氏「おわりに」〈山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告4—下〉1977年。

4 1973年、県教委調査。調査担当者の前川成洋氏は、1978年5月11日出張先の宿舎が炎上するという不慮の事故に遭われ永眠された。本例を紹介するにあたり、現場見学時の筆者の印象に誤りがあることを恐れつつ、謹んで氏の御冥福をお祈りいたします。

註 5 田添夏喜「山下古墳調査概要」孔版による。三島格・内藤芳篤・田添夏喜・伊藤幸二・佐藤伸二「山下古墳調査概報」〈熊本史学 50〉1977年。

註 6 福岡市・日佐原遺跡の壺棺墓(A-6)では、「水平に近い状態で」埋置されており、「小形上甕が口縁部を大形甕の中に挿入していた」という。凸帯2条をめぐらし、「底部は丸底に近い」この壺棺は、「弥生の終末期に近い」とされている（鎌山 猛「環溝住居跡小論 4」〈史測 78〉1969年。同「九州考古学論攷」1972年 所収）。

#### 石蓋土壺墓・箱式石棺・竪穴式石室のプラン・構造・規模

石蓋土壺墓・箱式石棺・竪穴式石室の3者ともプランは頭部が足部に比べて巾が広い例が多く、後述する他の諸特徴からみても三者は系譜的に密接な関連を有する。なお、壺棺墓については次節にて後述することとする。

石蓋土壺墓と箱式石棺には、外周をさらに一段掘り下げた有段例とそうでない無段例とがある。前者は平坦面に築かれて完周する段をもつ石蓋土壺墓3例(D1・18・30)に限られる。これらの他に斜面に位置するために傾斜の高い側の外周をのみ掘り下げた例があるが、これは蓋石を水平位に保つための施設であり、無段の例と基本的には変わらない。無段例が上部を削平された結果によるものではないことは、北辺西半でのD14・21・33、H11・14の密集度とこれらの蓋石のレベルが略同高であることを勘案すれば明らかである。

石蓋土壙墓例として挙げたうちのD25・26の両者は、他例とは稍異なる。D25 (PL36-1) は覆蓋は稍外傾するものの、全体として矩形をなし、内部に組み合わせ式木棺が納められたのではないと思われる程整然とした感を受ける。一方、D26は粘土を多量に使用している点で異例に属し、痕跡を確認してはいないが木蓋使用の可能性が強く、足部の板石の存在もまた特徴的である。頭部に板石を立てるD19例は、本群における石蓋土壙墓と箱式石棺墓との同時性を示唆するものであろう。

竪穴式石室13基のうち9ないし10基が石棺系石室に属する。規模は劣るが純正な竪穴式石室の構造をとるのはT1およびT2の計2例に限られ、T4・9・11・12は山中英彦氏が明快に分析された「箱式石棺を母胎に竪穴式石室の技法を導入した」石棺系石室(註1)の典型的な例である。

以上を要するに、営造期のズレによる小異はともかく三者の間に特に顕著な差は認められない。けれども、狭小な墓室内になおかつ板石を組み立てて石棺としたH7の存在は、構造の選択が全くの自由意思で行われたのではなく一定の規制に従ったことを示唆する(註2)。

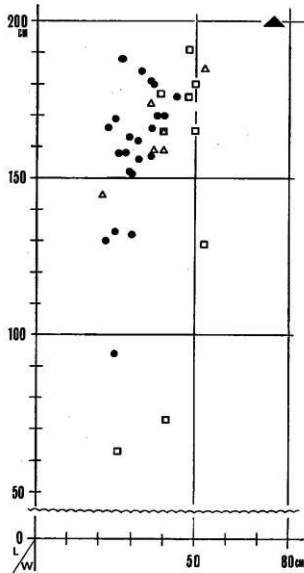
構造不明としたF・G両主体については、主体であるか否かも不明である。G主体では粘土の使用が認められたものの、F主体では赤色顔料が隅丸長方形に近い範囲に広がるのみである。筑紫野市・古劍塚第3号墳(註3)、鞍手郡若宮町・沙井掛第18号墳(註4)のように組み合わせ式木棺直葬となる可能性があり、敢えて主体とした。

規模は、人体1体を葬るのに最小限の大きさでしかない例が多い。石蓋土壙墓は床面の巾が25~40cmとなる例が多く、長さの割には狭いことが特徴的で(註5)、箱式石棺・竪穴式石室の順により広くなる傾向がある。けれども床面長は変わらず、三者の床面の規模には大差がないといえる。

次表(Tab. 4)により、壙墓を除く裾部外周主体は大・中・小に三分される。その内訳は、

大	—————	39基
石蓋土壙墓		24
箱式石棺		5
竪穴式石室		10
中	—————	6基
石蓋土壙墓		4
箱式石棺		1
竪穴式石室		1
小	—————	3基
石蓋土壙墓		1

Tab. 4 祇園山古墳裾部外周主体床面法量表



- 石室土壇墓
- ▲ 箱式石棺
- 整穴式石室
- ▲ 墳頂部箱式石棺



となる。各構造とも、大の比率が圧倒的に高く、全体では81%にも達することが注意される。

赤色顔料を塗布した例は、

甕 棺	2基	(66.7%)
石蓋土壙墓	12基	(46.2%)
箱式石棺	5基	(71.4%)
竪穴式石室	3基	(23.1%)

であり、一応の目安にすぎないが箱式石棺墓での比率が高く竪穴式石室での比率が相対的に低いことが注意される。

なお、石蓋土壙墓の蓋石材についての岩質鑑定を唐木田芳文教授にお願いした。その結果は下記のとおりである。

D1	——	縞状絹雲母片岩
D5	——	"
D6	——	絹雲母——石英砂質片岩（中粒）

註 1 山中英彦「東宮ノ尾古城群」〈北九州市文化財調査報告書 14〉 1974年

註 2 従って、土壙墓掘削時の施工ミスによる石棺構築への切換とする見解には従えない。

註 3 拙稿「古刻塚第3号墳」〈九州経貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 XX〉 1978年

註 4 拙稿「沙井塚第18号墳」〈九州経貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 XXII〉 1978年

註 5 狭小であることは、本群の土壙墓が木棺を納めるための施設ではないことを示唆する。

#### 頭位と埋葬法

平坦地に位置する場合は、先行する主体に制約を受けながらも意図する方向に構築されたとみられるが、傾斜地での場合は必然的に斜面と平行せざるを得なかったとみられる。頭位は全体では区々であるが、築造位置によって一定の方向性が認められる。

北辺裾部外周の西半では北辺と直交する例と平行ないし斜交する例とが混在するが、東半では略平行する。先行するとみられる直交例の頭位は北東・南西の相反する2者があるのに対して、平行例は不明のC～Eを除けば南東方向——墳丘に向けて左側に限定される。

西辺裾部外周では北東——墳丘に対して左側を頭位としてこれと平行する例と、南東——頭部を方墳に向けて直交する例とがある。平行例のうちH7の主たる被葬者の頭位は、他とは逆の右側となっている。

南辺裾部外周の西半では裾部と平行あるいは若干斜交して直交例はなく、頭位も南東——墳丘に向けて右側に限られて統一である。ただし、後出するT13は斜交して頭位も逆の南西側

におく。中央から南隅角部にかけては未調査のため頭位は不明であるが、西半と同傾向にあったと思われる。

南隅角部付近では斜交・平行の両者があるが、後者はいずれも頭位を南東あるいは北東——各々南辺・東辺に対して右側としている。

一見不規則ではあるが、主体構造の如何を問わず裾部平行例に限れば、北・西両辺では墳丘に向って左側に頭位をとるのに対して南辺～東辺南半ではこれとは逆の右側に頭部を置く傾向が認められる。頭位について一定の規範が存在したことが知られ、その意図が注目される。

人骨の遺存度が悪くK1とD30の2基から僅かな骨片が採取されたに過ぎないので、埋葬法を出土状態から推測することはできない。

粘土枕が床の両端に設置されたH7では、差し違い2体葬が行われたとみてよく、枕の状態からみて主たる被葬者の頭位を南西側として同時に葬った可能性がある。本石棺の内法が他に比べて稍大ぶりであるのも、予め同時2体葬を考慮してのことと思われる。

H7を除けば枕が現存した例はいずれも各1個に限られる。ただし、これは必ずしも差し違い2体葬の可能性を否定するものではない。また蓋石が二重となる例については、既述のD28での青磁片の出土状態からみて追葬を意味するのではなく、攪乱時の所産とみるべきであろう。

### 副葬品

採取品の質量ともにK1を除けば極めて貧弱である。未盗掘墓(D20・23, H9・11・14)での状況も同様で、D20・33, H9・14は棺内に全く副葬遺物を持たない。K1以外では装身具は全く採取されておらず、鉄器類が副葬される場合でも1主体1個に限られる傾向がある。H11では状況からみて僅か8cm余の剣片が副葬されているに過ぎない。従って、K1と鉄製工具が集中するG主体ならびに剣数本を伴った構造不明の1基の計3基は、本群中では異例に属する。

なお、副葬品は構造を問わず成人用主体に限られる。また、副葬品の有無と規模の大小との間には特に顕著な相関関係は認められない。

### 裾部外周主体相互の先後関係

既述の理由により、先後関係が明らかな例に下記がある。

古		新
D18	→	T2
D20	→	T9
D27	→	T13

D30	→	H12
H11	→	D14・21
H14	→	D21・T10
D26	→	G主体

斜面を控えた北・西・南の三辺の裾部外周では、原則として方墳により近い主体がより早くに営まれたことは明らかで、地形は異なる東辺でも同様であったと思われる。

竪穴式石室が石蓋土壙墓・箱式石棺墓の両者に全体として後出するのは当然であるが、既述のプラン・内法での共通性ならびにT9とD20・T10とH14の状態からみて、石棺系石室は築造順での前後はともかく両者の一部と明らかに併存している。

#### 裾部外周主体群を構成する単位とその内容

群集する主体群を主軸方向・相互の位置関係から判断すると以下に示す単位に分割され、未確認部分をも含めるとその総数は20以上と推定される。

A単位	—	D10・11 (PL. 22-1)
B単位	—	D13・25 (PL. 22-2)
C単位	—	D14・21・33, H11・14 (PL. 23-1)
D単位	—	D20, T5・9 (PL. 23-2)
E単位	—	D30, H12 (PL. 24-1)
F単位	—	H7・9 (PL. 24-2)
G単位	—	D19・H4 (PL. 25-1)
H単位	—	D17, T11 (PL. 35-2)
I単位	—	D1~7・9, H1 (PL. 15-1)

註 上記には、明らかに後出する竪穴式石室は含めていない。

一見して、各単位は2基から成る場合が大多数を占めることが知られる。常識的には、近親者(親子・兄弟等)・夫婦が葬られたことが推定される。けれども、H7では差し違い2体葬が確認されており、かつ、内法の狭小さが直ちに1体埋葬を意味しないことは諸例の示すところである。この意味で、幼児用主体を含むD単位が単婚家族の墓であるとは必ずしも限らない。

E単位の被葬者像としては、D30とH12の内法、特に長さからみて略同年令の近親者あるいは親友という関係にある少年(女)各1体の計2人が想定される。

C単位は、幼・少年用各1基と成人用3基の計5基から成るかに見え、成人用(H11・14)が先行する。とすれば、併列する2基で1組という原則的なあり方から外れるが、内部でより密接な関係にあるとみられるH11とD14, H14とD21との2つに分れる可能性もある。H11と

H14の床面最大巾は相反する方向にあり、一方、本群ではF単位を除けば、各主体の最大巾は同じ方向にあるという傾向が認められるからである。2単位に分れるとしても、各々が併列せずに直交関係にある点が特異である。

I単位では、主体数が多く、一定の方向性をもちながらも併列関係にある主体を特定できない点で上記の原則から外れており、かつ、調査範囲に限れば、主体構造は箱式石棺墓1基を除けば全て石蓋土壙墓に限られて、異例である。すなわち、A・G・不明のBの3単位を除けば、各単位は石蓋土壙墓と他の主体構造との組み合わせとなる規則性が認められるからである。しかも、岩盤を掘り込んだ狭小な墓室内に敷いて板石を組み立てる前出H12は、箱式石棺とする必然性があったことを強く示唆すると思われる。

主として弥生後半以降、北部九州では石蓋土壙墓と箱式石棺墓とが混在する形で集団墓を形成する例が増えつつあり、地域によってはこの両者に極く少数の甕棺墓が加わっている。石蓋土壙墓が一般的に早く姿を消す(註1)のに対して、箱式石棺は小円墳の主体として、少くとも5世紀末までは散発的に営造されている。無論もはや主流ではないが。

石蓋土壙墓と箱式石棺墓とで集団墓を形成する場合、両者の間になんらかの差があった——恣意的に一方が選択されたのではないと推定される。後者の方が、営造に際して石材の入手・運搬、棺体の組み立てに要する分だけ労力が余計にかかり、かつ、被覆施設としての恒久性も優るからである。けれども、構造は異っても、両者の内法には一般的に顕著といえる程の差はない。前項で述べたように、本群でも箱式石棺の巾が若干広くなる傾向が認められるに過ぎない。また、裾部外周主体における副葬品の有無が、主体構造ならびにその規模の大小と相関しないことは既述のとおりである。

しかし、石蓋土壙墓と箱式石棺墓とが共存する場合、両者では築造の契機が異なることを思わせる例が、ないわけではない。前出福岡市・日佐原遺跡(註2)がそれである。低丘陵に所在する同遺跡では、甕棺1・箱式石棺19・石蓋土壙墓33・不詳1の計54基が6群に分れて営まれており、甕棺は「弥生の終末期に近い」が後述するE群は「古墳期に下るものを若干含」むとされている。副葬品をもつ主体はE群(箱式石棺9、石蓋土壙墓15)に属する箱式石棺・石蓋土壙墓各1基に限られる。前者は「小さな土盛り」をもつが、注目されるのは集中度とともに両者の副葬品の内容の相違である。両者の副葬品は、

箱式石棺(E-7号)

管玉9、鉄鏝4、素環頭大刀?、鉄斧1、施?、「袋状の断片1」

石蓋土壙墓(E-15号)

長宜子孫内行花文鏡1、首飾(硬玉製勾玉2、水晶製串玉8、水晶製算盤玉11、水晶製小型丸玉2)、腕飾?(碧玉製管玉14)

筆者は、この副葬品のセット内容の相違は被葬者の性別に基づくのではないかと考える。つま

り、前者は男性であり、後者は女性であると。とすれば、主体構造の相違が被葬者の性別に基づく場合もあることが想定されるのである。上述の本群での2基が1単位を形成するというあり方、さらには幼・小児用主体をも含むC・D単位の存在は魅力的である。けれども、これを直ちに普遍化はできず、より確実な埋葬人骨の性別鑑定を集積によって検証すべきものとする。

註 1 6世紀後半代にまで下る可能性がある筑紫郡那珂川町・野口古墳群例(1978年 町・県教委調査)もある。

註 2 鍋山 猛「環溝住居址小論 4」〈史淵 78〉1969年

### 裾部外周主体群と方墳との先後関係

第Ⅱ次調査の時点では、これらの主体を先行する弥生時代の墳墓と考えたが、その後の調査による以下の事実と所見とから、基本的には裾部外周主体群と方墳とは共存関係にあると判断するにいたった。

#### 1. 方墳の墳丘下に主体が認められない。

西斜面に3ヶ所(Fig. 7)、墳頂部南西側(PL. 13-2)に1カ所の計4カ所の部分的なトレンチ調査を行ったに過ぎないが、旧地表下に主体が営まれた形跡はない。また、墳丘下半の地山整形による岩盤露出部分にも主体が破壊されたと思われる痕跡はない。

#### 2. 裾部外周主体群は、方墳構築時の地山整形作業によって形成された平坦面あるいは斜面に営まれている。換言すれば、方墳構築時の地山整形作業によって破壊されていない。

裾部外周に営まれた多数の主体のうち、最も適る可能性をもつ第1号甕棺墓(以下K1と略す)と方墳との先後関係が判明すれば、その結果を他に敷衍することが可能と考える。以下、K1に焦点を絞って述べてみたい。

K1の上甕の大部分が削平を受けたことは、既述のように墓壙内での遺存状態によって明白である。問題は、削平が方墳構築時の地山整形作業によるものか否かである。結論的にいえば、構築時に削平されたとは考え難い。

仮に、K1が先行して営まれ、方墳構築時に上甕が削平を受けたとすれば、破片の大部分は下方へおしやられたものと推定される。が、この推定は、墓壙外北側での破片の平面的な出土状態と層序とは明らかに矛盾する(Fig.17と19-2参照)。後にこの部分の天地返しが行われたと仮定しても、赤色顔料に染った土塊の存在を説明し難い。上甕の接合状況もまた否定的である。従って、K1の上甕上半が方墳構築時に削平されたとは考え難い。

しかし、かといってK1が方墳に先行する可能性が全く否定されたわけではない。方墳構築

時の地山整形作業がK1周辺には及ばず、逆に盛土されて結果的に保護された場合が可能性の問題として想定されるからである。

けれども、横式図 (Fig. 80) で示したように陥没していたにせよK1は周囲よりも一段高かったはずであるから、これを削平せずに放置することは他のテラスとの一貫性を欠く。意識的にこれを避けたとすれば、K1と方墳の同時性をより強く示唆することになる。

一方、盛土による整地の可能性は、全体的に北隅角部付近のテラスが北辺東半部よりも低く、その比高が1.5mにも達していることに基く。しかし、この高低差はもともと北東側が高かったにせよ原地形のそれではなく、方墳構築時に東隅角部から北隅角部にかけてを削り出したことによって生じたものである。また、K1西側外周の岩盤が削平を受けていることは既に述べたところである (Fig. 19-1参照)。従って、K1周辺は方墳構築時に地表上に直接盛土されたのではなく、いったん表層を削平し岩盤を露出させた後に、あらためて岩盤削り土を盛って整地されたと見做されるのである。

以上を勘案すれば、K1が方墳に先行するとの仮定は成立し難く、従ってK1は方墳構築時に形成されたテラスを新たに掘削して営まれたものと見做される。すなわち、K1は方墳に先行する弥生時代の變権墓ではなく、営造期の若干のズレはともかくとして方墳と大略同期に属するとみてよい。また、南棺側への糸切底土師器の混入からみて、上層の削平は後世の擾乱者の所業と推定される。

3. 裾部外周に所在する主体の主軸方向は区々であるが、全体として方墳を中心として一定の規範のもとに築造されている。

裾部外周主体の長軸は各隅角部では各辺と斜交する傾向があるが、大部分は直交あるいは平行する形で営まれている。特にD8 (PL. 11-2)・D33 (PL. 42-2)・A~D主体は、方墳の存在を意識しての築造としか考えられない。また、頭位が墳丘に対して一定の規則性をもつことは前項で述べたとおりである。

上記より、K1をはじめとして、方墳と同期あるいは若干後出する主体の存在が明らかとなった。逆に方墳に先行する例は確認されていない。裾部外周主体の全てについて検証したわけではないが、それが不可欠とは考えられず、以上の結果を全体に敷衍できるものとする。

なお、壜穴式石室をも含む裾部外周主体群の営造期にかなりの巾があることは既述のとおりである。これについては次節にて改めて検討したい。

## 4. 祇園山古墳以前と以後の遺構と遺物

## (1) 石 器 (PL. 68, Fig. 82)

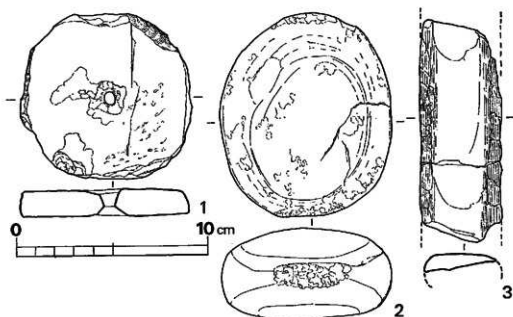


Fig. 82 祇園山古墳周辺出土石器実測図 (1/2)

1. 中央部に穿孔した円盤状の石製品。表面の穿孔は、初めに打撃によって行われた後ドリル状のものによって回転調整が行われている。

裏面は、打撃のみで穿孔している。周辺部は打撃によって調整されており、2ヶ所に縄ずれの跡が認められた。

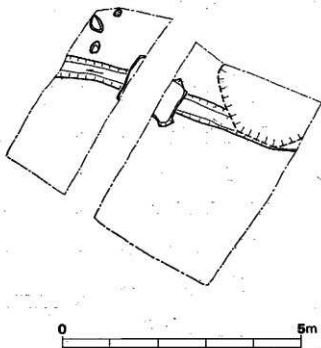
2. パン状の自然石の長軸の上下端を用いた敲石である。

3. 両側面を打撃によって調整後、研磨を行っている。左側辺部は、略90度の鈍角であるのに対し、右側辺部は鋭角に仕上げられている。

## (2) 歴史時代溝状遺構 (PL. 61-2, Fig. 83)

祇園山古墳への登り口の緩斜面に多量の中世土師器が散布していたため、小規模なトレンチ調査を行った。この結果、東西に走る上端巾約60cmの一条の溝と浅い穴3個を確認し、

6×6.5m程の狭い発掘区から夥しい量の土師器を採取した。東接する竹林は平坦面となっており、屈敷跡等が存在する可能性があり、これに関連する溝と推定される。



● STA. 20+80

Fig. 83 祇園山古墳北方歴史時代溝状遺構実測図 (1/100)

### (3) 歴史時代の土器 (PL. 69・70, Fig. 84~86)

#### 歴史時代土器

祇園山古墳周辺からは多くの歴史時代土器が出土したが、そのほとんどは遺構に伴うことなく、また、土器の大部分は細片化しているため、的確にその姿を掴むことができなかった。遺構に伴ったものもほとんど細片化しているため報告できない。そこで、ここでは完形もしくは完形に近いものを中心にして報告することにした。



## 土 師 器

杯と小皿が多量に出土している。両者ともにヘラ切り離しのものが圧倒的に多く、糸切り離しのは極めて少ない。ここではヘラ切り離しのものをⅠ類とし、糸切り離しのものをⅡ類とする。さらに器型により小皿をa・b・cの三種に、杯をa・cの2種に分けて報告する。

## 小 皿

## Ⅰ-a (1~38)

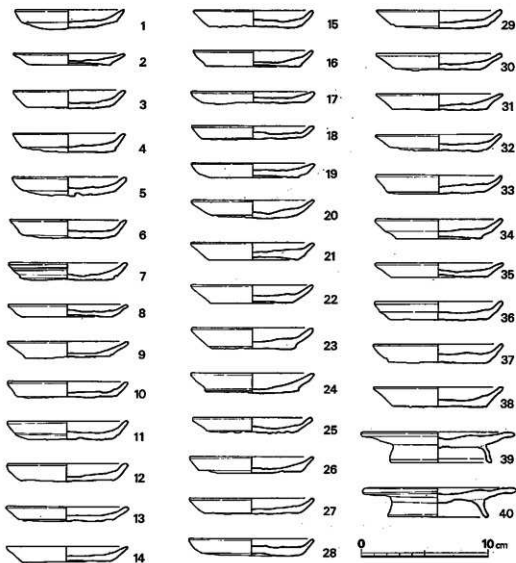


Fig. 84 祇園山古墳周刃出土歴史時代土器実測図1 (1/3)

口径8.4cm～10.2cm, 器高0.9cm～1.6cmを測る。器面が風化し摩滅して判断できないものを除き体部はヨコナデ、内底には仕上げナデがある。17・28・39・38の外底には板状圧痕が認められる。

## I-b (39・40)

高台付の小皿で、平坦な皿部と比較的高く外方へふんばった高台を有している。

## II-c (59)

口径に対して器高の高いものである。淡赤茶色を呈し、また胎土は精良で砂粒は少ない。口縁部内外に油煙が付着していることから灯火器として使用したものと考えられる。

## 杯

## I-a (41～52)

口径12.1cm～15.9cm, 器高2.4cm～3.9cmを測る。全て体部はヨコナデ、内底には仕上げナデがある。44・45・49の外底には板状圧痕が認められる。

## II-c (60)

皿I-cと同様に口径に比して器高の高いもので、内底には仕上げナデはなく全てヨコナデ調整である。D1出土。

## 鉢 (61)

復原口径24.7cmを測る大型の鉢である。粘土紐成形を行い、内面はヨコナデのみであるが、外面大半はヘラ削り調整、上半は左下方から右上半へ斜行するハケ目調整を行っている。外面全面には煤が付着しているところから、鍋として使用された可能性がある。暗茶色を呈する。胎土は精良で砂粒は少ない。

## 黒色土器

内面のみを黒色に焼したものをA類とし、内外面を焼したものをB類とする。

## A類

## 椀 (53)

丸味を有する体部と外方へ強くふんばった高台を有する椀である。ヨコナデ調整の上から内面および外面体部上半はヘラミガキを行い、外面は体部下半を回転ヘラ削りを施している。内面は黒色、外面は赤茶色を呈する。

## B類 (54～56)

## 皿 (54～55)

54はヘラ切り跡を有する平底の皿で、ヨコナデ調整の上からヘラミガキを施したもので、特に内底はヘラミガキを密に行っている。55は丸味を有する底部を持ち、丸底の杯に類似した形態を呈する。内外の底部には指で押えたような凹凸が多く見られ、体部は内外面ともヨコナデ調整である。これらの調整の上から比較的丁寧なヘラミガキを器面全体に施している。

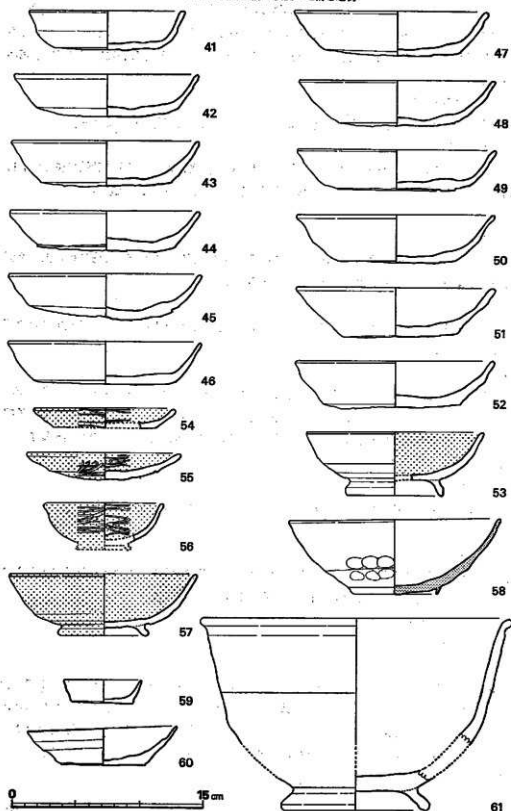


Fig. 85 祇園山古墳周辺出土歴史時代土器実測図2 (3/1)

## 椀 (56・57)

56は復原口径9.3cmを測る小椀で、内外面ともに丁寧なジグザク状のヘラミガキを施している。遺存状態が良いためか、黒色の光沢を放っている。また、胎土も精良で砂粒は少ない。外方にふんばった高台を有する57は外面体部下半は回転ヘラ削りを行っている。器面が風化しているため詳らかでないが、ヘラミガキは丁寧に高台部を除いて器面全体に施されているようである。胎土は精良でほとんど砂粒を含まない。また燻しは深く真黒色を呈する。

## 瓦器

## 椀 (58)

体部下位に若干の屈曲部を有する瓦器椀で、その屈曲部以下の外面には乱雑な指頭圧痕が多く観察できる。器面が風化しているためヘラミガキは定かでない。燻しは口縁部周辺のみで、他は乳白色を呈する。

## 陶磁器

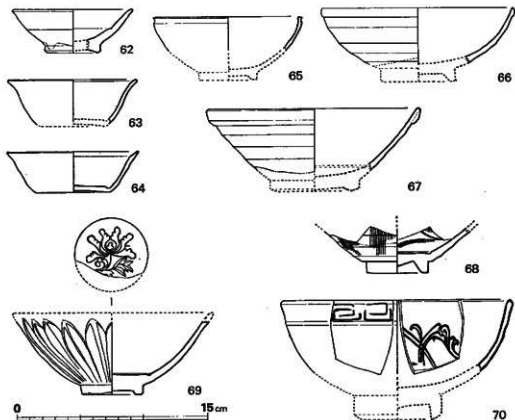


Fig. 86 祇園山古墳周辺出土歴史時代土器実測図3 (1/3)

出土した陶磁器は中国陶磁器および日本陶磁器である。日本製のは近代、現在のものがあり、この報告から除外した。出土した中国陶磁器片は白磁碗Ⅱ類6点・Ⅳ類5点・Ⅴ類9点(Ⅰ・1点, 2・a1点, 4・a1点, 4・b1点, 他5点), ⅢⅡ-Ⅰ類1点, Ⅸ類12点(Ⅰ・11点, 2・1点)その他, 内面に鉄絵を有する碗1点, 不明1点, 青磁は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5類9点(c1点, 他は不明)Ⅱ類1点, 同安窯系青磁碗Ⅰ-1・b類2点, ⅢⅠ-2・b1点, 他に分類不能な碗の破片が2点合計50点出土した(註1)。

#### 白磁

##### 皿

#### Ⅱ類 (62)

口径9.6cm, 器高3.5cmを測り, 若干黄緑色味をおびた灰白色の釉がかけられた高合付皿である。Ⅱ-1類である。

#### Ⅸ類 (63・64)

灰白色釉が全面にかけられた後に口縁部の釉がカキ取られ, 伏せ焼きされたいわゆる口禿の皿である。Ⅸ-1類である。

##### 碗

#### Ⅱ類 (65・66)

共に小さな貫入が無数に入った黄色の釉が掛けられた碗で, 65は口縁端部が平坦な面をなし, 66は小さな玉縁状の口縁を特徴とする。66はⅡ-1類, 65はⅡ-4類である。

#### Ⅳ類 (67)

断面が略三角形を呈する口縁を有し, 若干空色を帯びた灰白の釉がかけられた碗である。体部が若干丸味を有しているところから, この類のものでは古期に属するものと考えられる。

#### 青磁

##### 同安窯系青磁

##### 碗

#### Ⅰ類 (68)

青緑色の釉がかけられたもので, 外面に15本単位の御目, 内面にはヘラによる片彫りと櫛状工具による御目の文様を入れている。Ⅰ-1・b類のものである。

##### 龍泉窯系青磁

##### 碗

#### Ⅰ類 (69)

断面四角形の高台と鎊のある蓮弁文様と内底に花文のスタンプを特徴とし, 空色をおびた青色の釉がかけられている。内外面に大きな貫入がある。Ⅰ-5・c類である。

#### Ⅱ類 (70)

復原口径18.3cmを測る大型の碗で、黄色味を帯びた緑色の釉が全面にかけられている。内外には買入が非常に多い。外面上位に雷文、内面にはスタンプによる花文が施されている。

Tab. 5 祇園山古墳周辺出土歴史時代土器観察表 (単位はcm)

	口 径	器 高	底 径	底部切り離し		内底部の ナデの有 無	板状圧痕 の有無	器 種
				ヘラ	糸			
1	8.4	1.4	7.2	○		○	×	土師器 皿 a
2	8.5	0.9	6.2	○		○	×	"
3	8.6	1.4	6.3	○		○	×	"
4	8.5	1.2	6.8	○		○	×	"
5	8.8	1.4	7.0	○		○	×	"
6	8.9	1.4	7.0	○		○	×	"
7	9.1	1.3	7.2	○		○	×	"
8	9.2	1.0	6.8	○		○	×	"
9	9.2	1.2	6.4	○		○	×	"
10	9.2	1.3	7.6	○		○	×	"
11	9.2	1.4	6.5	○		○	×	"
12	9.3	1.4	7.0	○		○	×	"
13	9.4	1.2	7.1	○		○	×	"
14	9.4	1.2	6.8	○		○	×	"
15	9.4	1.2	7.1	○		?	×	"
16	9.4	1.3	7.2	○		?	×	"
17	9.6	0.9	8.1	○		○	○	"
18	9.6	1.0	8.0	○		○	×	"
19	9.6	1.2	7.1	○		○	×	"
20	9.6	1.4	6.6	○		○	×	"
21	9.6	1.4	6.9	○		○	×	"
22	9.6	1.5	6.4	○		○	×	"
23	9.6	1.6	6.7	○		○	×	"
24	9.6	1.6	7.3	○		○	×	"
25	9.6	1.0	8.0	○		○	×	"
26	9.7	1.3	8.0	○		○	×	"
27	9.8	1.2	7.5	○		○	×	"
28	9.8	1.2	7.9	○		○	○	"
29	9.8	1.4	7.3	○		○	?	"

	口 径	器 高	底 径	底部切り離し		内底部の ナデの有 無	板状圧痕 の有無	器 種
				ヘ ラ	糸			
30	9.8	1.3	7.1	○		○	○	土師器 皿 a
31	9.9	1.3	7.4	○		○	?	"
32	9.9	1.3	7.6	○		○	×	"
33	10.0	1.5	7.6	○		○	×	"
34	10.0	1.6	6.7	○		○	×	"
35	10.1	1.1	6.4	○		○	×	"
36	10.0	1.4	7.6	○		○	×	"
37	10.2	1.4	7.7	○		○	×	"
38	10.2	1.6	7.3	○		○	○	"
39	12.0	2.4	7.9	?		○	?	土師器 皿 b
40	12.4	2.3	7.8	?		○	?	"
41	12.1	3.1	8.2	○		○	○	土師器 杯 a
42	14.4	3.3	11.0	○		○	×	"
43	14.7	3.5	10.2	○		○	×	"
44	14.9	3.1	10.8	○		○	○	"
45	15.0	3.4	11.1	○		○	○	"
46	15.1	3.3	11.1	○		○	×	"
47	15.3	3.5	10.6	○		○	×	"
48	15.5	3.5	9.2	○		○	×	"
49	15.6	3.2	9.2	○		○	○	"
50	15.6	3.8	9.3	○		○	×	"
51	15.7	3.9	9.0	○		○	×	"
52	15.9	3.6	10.8	○		○	×	"
53	13.9	5.0	7.7				○	黒色土器 A 鉢
54	11.0	1.5	8.0	○				黒色土器 B 皿
55	12.0	2.1	8.2					"
56	(9.3)							黒色土器 B 鉢
57	14.6	4.9	7.0			○	○	"
58	16.7	5.8	6.8					瓦器 鉢
59	6.0	1.8	4.4		○	?	×	土師器 皿 c
60	11.6	2.8	6.5		○	×	×	"
61	24.5	(15.0)	11.7					

## 歴史時代土器の年代

以上祇園山古墳周辺から出土した歴史時代の遺物について報告したが、最後にその年代観について述べることにする。

## 土師器

## I 類

皿は口径10cm、器高1.5cm以上のも(33・34・36～38)とそれ以下のもの(1～32・35)とに大別でき、前者は高台付皿と共に11世紀前後、後者は11世紀～12世紀初頭頃のものと考えられる。杯は12cm前後のもの(41)、14cm前後のもの(42)、15cm前後かそれ以上のもの(43～52)の3つに分けられ、41は11世紀前後、42は11世紀中頃、43～52は11世紀終り～12世紀初頭のものと考えられる。

## II 類

糸切り離しの土師器の出土量は少なく、また細片化しているためその年代については詳らかにしえない。

## 黒色土器

53・54は11世紀前後、55～57は11世紀中頃前後に考えて誤りないと思われる。

## 瓦器

58は休部の屈曲部が下位にあり、焼しが口縁部周辺に留まることから瓦器碗としては新期に属し、「貞応三年十一月日」銘の本札を出土したSD605(註2)出土の瓦器碗と共通の特徴を有していることから13世紀前半代頃のものと考えられる。

## 陶磁器

出土した陶磁器は50点と少数ではあるが、いろんな時代のもを含んでいる。いうまでもなく陶磁器は長期の使用にたえることからいつ放棄されたか断定することは共存する遺物がないことには俄かに決め難い。そこで、ここでは輸入された時期について述べることにする(註3)。

11世紀中頃から12世紀初頭にかけて多く輸入されたものは、82～87、12世紀中頃のもの88、13世紀中頃のもの89、15・16世紀のものは70である。

註 1 横田賢次郎・森田 勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』1978年の分類に従って記した。なお、白磁碗Ⅱ-4類は新資料なので新たに追加したものである。

2 九州歴史資料館「大宰府史跡—昭和49年度発掘調査概報—」1975年

3 中国陶磁器の編年については、横田・森田前掲論文の他、前川威洋「南・バイパス関係埋蔵文化財調査報告第8集(下)」1978年に詳細なる論考があり、参照されたし。



### 歴史時代土器出土の背景

方墳の墳丘上表ならびに周囲からは、夥しい量の日常雑器を中心とする歴史時代の土器が採取されている。出土自体は特に珍しいことはないが、通常の高塚発掘調査での出土量とは格段の差があって異例ともいえる。もっとも、調査時には出土地点・組み合わせ等に特に注意することなく採取したために、これらの詳細が不明となったことが悔まれる。

上述の森田勉氏の年代観によれば、主として10世紀末から12世紀初頭にかけての時期に各種の土器が集中する傾向にあり、特に11世紀前半をピークとするかに思われる。

一方、墳頂部石棺および周辺の主体群の殆どが擾乱を受けている。石材をも抜きとられた例もあるが、開棺・擾乱の後に再び蓋石を被せたとみられる例も散見されて、擾乱者たちは一種の畏怖の念を抱きつつ副葬品の入手を狙ったものと見做される。

以上を勘案すると、これらの歴史時代の土器群は本墳についての擾乱となんらかの関係があるのではないかと思われる。すなわち、契機は不明であるが、10世紀末から12世紀初頭にかけて本墳ならびに周辺の主体群についての擾乱が断続的に行なわれ、この事前あるいは事後にこれらの土器を用いての「供養」を執行することにより「墓発ぎ」に伴う畏怖の念を表現したものと推察される。

墳頂部石棺の開棺がその嚆矢となったとも思われるが、上記は10世紀末以前の擾乱の可能性を否定するものではない。

## 5. 小 結

### (1) 墳頂部箱式石棺

本石棺の構造的な特色としては、

1. 一部に補充材を用いているが、側壁ならびに蓋には各1枚の大型板石を使用している。
2. 内法が箱式石棺としては巨大である。
3. 安山岩を使用している。
4. 床に底石をもたない。

の4点が挙げられる。

箱式石棺が弥生時代からの伝統的墓制であることは周知の事実である。以下に、一般に弥生時代終末期から5世紀前半前後に比定されている箱式石棺のうち、墳丘を伴う大型棺と通常規模棺（参考例1）の二三を紹介しておきたい。

#### 1. 福岡県粕屋郡粕屋町・平塚古墳

「もと径17～8mほどの墳丘」の「中央より西南寄りとみられるところに、ほぼ東西を主軸にして、巨大な箱式石棺が埋置されていた。」さらに「墳丘の東北隅に長さ2.5m、幅1m程の穴があり、塵芥捨て場になっている。これは、昭和6年頃、石棺が発掘されて、鉄の刀剣が発見された跡であるという。」（註1）

時期は、「弥生終末期頃のものともられている」（註2）。

#### 2. 大分県宇佐市・赤塚古墳

本墳は、九州の代表的古式古墳として著名である。主軸を墳丘主軸方向にとる石棺は「現在の位置まさに後円部の中央にあり、」「現在の封土の表面 下約二尺に蓋石があったという」（註3）。

#### 3. 福岡県甘木市・二塚第1・2号石棺

「1m弱の封土を有していたことは確認された。」「1つの封土の下に巨石を用いた箱式石棺2基（第1・2号石棺——筆者註）と普通型の箱式石棺2基、小児箱式石棺1基の出土を見た」。

所属期は「古墳期の石棺としてみるべきであろう」（註4）とされている。

#### 4. 福岡県宗像郡津屋崎町・奴山第5号墳

径32mの大型円墳で、略中央部の盛土部基底近くに大型棺が営まれている。年代は「五世紀前葉」に比定されている（註5）。

（参考例 1）

#### 5. 大分県宇佐市・古稻荷古墳

葦石と北側に周濠が確認された「一辺が20mの方形墳で高さは2mである。」「この古墳では墳丘はすべて盛り土によっており、石棺はその下部の地山に掘り込まれている。」

周濠出土土器の「形態および製作手法は明らかに弥生時代終末期の様相を示す」という（註6）。

#### 7. 福岡県大牟田市・澄塚第1・2号石棺

径約25m、高さ8m前後の円墳の墳頂近くに「約130cmの間隔で、東西に併列」して2基の「箱形の組合せ石棺」が営まれており、第2号棺は小副室を付設している。「1号棺も2号棺も蓋石の内面は、周縁をのこすだけで全面をくりくぼめている。」

1号棺は神人竜虎画像鏡、2号棺は内花花文鏡片・銅鏡を伴っており、「九州最古の畿内的な様相をもつ京都郡石塚山前方後円墳、嘉穂郡忠隈古墳などにつづいて、糸島郡鏡子塚古墳な

などとは併行ではないかと考えられ、「内部構造の組合せ式石棺は前代の北部九州に普遍的箱式石棺の様相を受けつぐとともに、その埋設の様相はまた一方畿内に通ずるものをもって」(註7)。

上記諸例と後統型式の石棺(参考例2)とを以下に表示する。

Tab. 6 大型箱式石棺一覧表 (註  $m$  は各最大値の乗数)

古 墳 名	内 法	蓋石数	岩 質	床	備 考	文 献
	長 × 巾 × 深					
浜 園 山	200×75×90cm (1.35 $m^2$ )	1	安山岩		四面とも一枚石	
平 塚	188×66×70cm (0.87 $m^2$ )	2	砂岩・蛇文岩・花崗岩	板石+粘土	3 號は1枚岩を使用	1, 2
赤 塚	194×61~55×79~82cm (0.97 $m^2$ )	3	安山岩	砂		3
二塚第1号石棺	245×78×65cm (1.24 $m^2$ )	1	緑泥片岩	板 石	四面とも1枚岩	4
” 第2号石棺	228×60×60cm (0.82 $m^2$ )	4	柿原石	板 石		”
奴山第5号墳	240×70×65cm (1.09 $m^2$ )	2		礫 床		5
瀬塚第1号棺	170×50~40×50~45cm (0.43 $m^2$ )	1	砂 岩	粘 土 床	四面とも1枚岩	7
” 第2号棺	180×50~38×40cm (0.36 $m^2$ )	1	”	板 石	四面とも1枚岩, 副蓋あり	
古 稱 荷	180×55×?	3	安山岩	粘 土 床	足部小口は板を充てる	6
月 の 岡	230×126×76cm (2.2 $m^2$ )	1	安山岩		長持型石棺	8
若 宮	285×121~107.5×113.5cm (3.9 $m^2$ )	2		板石 4 枚	小口部から追葬	9

以上と既述の特色1・2とによって、本棺が箱式石棺としては構造的に新しい様相を示すことが知られる。

特に、蓋に1枚石を使用する点で従来の箱式石棺とは大きく異なる。けれども、各石材は面はともかくとして未調整の板状材に過ぎず、加工度の高い濠塚の2棺よりも古式に属することは明らかである。蓋への1板石の使用という後出的要素を畿内型石棺からの影響・導入によるものとすべきではなく、安山岩という岩質の選択に起因するものと見做すべきと思われる。

本墳の周辺では緑色片岩系の石材の入手は容易であるが、これは大型板状材としては強度に

欠けており、このため素材である安山岩が選ばれたと思われる。ただし、安山岩は本墳の至近では得られず、直線距離にして20km以上離れた耳納山系東端（現浮羽郡吉井町・同浮羽町）あるいは南接する八女市東部等の遠隔地にしか産出しない（註10）。従って、この選択自体が本墳の隔絶性を具現するものといえよう。

一方、北部九州では主として5世紀以降に、阿蘇熔結凝灰岩を用いての石人・石馬類、石棺・石障の製作が盛行するという極めて特色ある文化が展開される。これが肥前・肥後・筑後を舞台としてくり広げられた各地域勢力の統合・連合をめぐるダイナミックな動きを如実に反映したものであることは、多くの先学が指摘されているところである。けれども、本墳がこの興味ある背景をもつ凝灰岩の使用に先行する段階の所産であることは、その構造・石材加工度からみて明らかである。

本墳は、箱式石棺としては卓越した内法をもつ。一方、本墳への埋葬遺体数は不明であるが、複数であった可能性も強い。けれども、単に合葬あるいは追葬に備えての大型化ではないことは、意図的な大型板状材の使用によっても知られる。

前代の箱式石棺は、1枚材を床に敷かないのが通例であり、この点で底板を持たぬ組み合わせ式木棺と共通する。しかも、この伝統は5世紀代の各種組み合わせ式石棺でも踏襲されている。従って、底石を敷かない伝統を継承している本墳に対して、二塚の2棺ならびに潜塚第2号棺はより後出的様相を示すといえる。

以上を要するに、木石棺は新しい要素を含みながらもあくまで箱式石棺としての構造を保持しており、壮大な墳丘の營造に際して石棺の規模と用材とをより相応しいものとしたとすることができよう。

註 1 森貞次郎「福岡県粕屋町上大原平塚古墳」〈九州考古学 11・12〉 1961年

註 2 森貞次郎「磐井の反乱」『古代の地方史Ⅰ 西海編』 1977年

註 3 柳原末治「豊前字佐郡赤塚古墳調査報告」〈考古学雑誌 14-3〉 1922年

註 4 高山 明編「福田町二塚石棺」・「総括」『埋もれていた朝倉文化』所収 1967年

註 5 佐々木隆彦「奴山第5号古墳」 1978年

註 6 小田富士雄・真野和夫・小倉正五「豊前・字佐地方における古式古墳の調査」〈考古学雑誌 60-2〉 1974年

註 7 渡辺正気「潜塚古墳」 1975年

註 8 島田寅次郎「日、岡、目、岡古墳」〈史蹟名勝天然記念物調査報告 1〉 1924年

註 9 金岡 恕「若宮古墳」『下関市史 原始—中世』 1965年

註 10 経済企画庁総合開発局『土地分類図（福岡県）—表層地質図』 1970年

## (2) 裾部外周第1号甕棺墓

裾部外周第1号甕棺墓が方墳に先行するものではないことは、再三にわたって述べたところである。従って、この甕棺墓に使用された甕形土器（以下K1と略す）の既往の編年における位置が判明すれば、方墳の年代もまた自ずと限定されると考える。

調査着手からまる10年が経過し、この間に本墳をとりあげての論考も多い。私見を述べるにあたり、これらのうち、K1の土器観、所属型式について公表された諸先学の見解を以下に掲げる。

## 森貞次郎博士（註1）

「博多平野西部の野方遺跡第1様式に属するものとみられ、弥生最終末あるいは最古の土器とみられる九州の地域性の強い土器である。」

## 高島忠平氏（註2）

「X式、…森編年の日佐原式、大神邦博氏の神在式の時期に相当する。画文帯神獸鏡を副葬した福岡県筑山山の甕棺が代表例で、西新町式というべきであろうが、X式のあるものはあるいは古墳時代のもので、土師器の可能性もある。」

## 小田富士雄氏（註3）

「…当地方最古式の土師器と思われる甕棺…」

K1に認められる特色は、形態上では、

1. 口縁部は稍短かく、外反する。
2. 胴部最大径は中位より若干上位にあり、口径よりも若干小さい。
3. 底部は完全な丸底である。
4. 胴部に1条、腰部に2条の計3条の凸帯をめぐらし、三角形と帯状となるものが併用されている。
5. 加飾されていない。

製作手法上では、

刷毛目による最終調整が内外の全面におよぼされる。

に各々求められる。

現時点では、本墳周辺の筑後地域での対比資料は必ずしも充分ではなく、従って、小稿では後期以降の甕棺墓と甕形土器の変遷がある程度明らかな糸島地区（福岡市西部および糸島郡）との比較を行ないつつ検討を進めることにしたい。

参考例として Fig. 86で示すように、糸島地区の後期の甕棺としては、故大神邦博氏が提唱

された「器面に施された多くの凸帯と内外一面をおおう粗い刷毛目」を特色とする「糸島地方後期壺棺の典型ともいふべき」「福井式」壺棺 (Fig. 118-1・2, 註4), ならびに、飯氏馬場遺跡第9号壺棺 (註5) 等が知られている。後者は、前者とは凸帯の減少と「×」印状文様の加飾で異なるものの、基本的形態は墨守されている。

これらに次ぐ時期の壺棺としては、丸底化した「西新式壺形土器」(註6) が挙げられるが、これは日常大型容器を転用したものであり、厳密には比較の対象とはなり得ない。橋口達也氏によれば、他地域では後期前半には基本的には終焉した壺棺葬 (註7), 糸島地区ではこれ以降も引き続いて特殊に展開し、しかも、同地区では、日常用の大型壺形土器と壺型を同じくしかつ形態的に共通する要素をもちながらも、壺棺専用として独特な大型壺型土器がつくられているからである (註8)。従って、底部を除く両者にみられる形態上の差異は、製作目的の相違に基くとみられるのである。

製作手法上では、本来日常容器である「西新式壺形土器」には、局所的に成形時の叩きの痕跡を充分に消去しない傾向が認められる。また、その痕跡からみて、使用された工具は「1枚の板に過ぎない」刷毛目調整用工具 (註9) とは異なり、深い刻み目が付された工具であったと推定される。一方、壺棺専用の飯氏馬場第9号壺棺の叩き成形痕は刷毛目調整によって僅き消されているが、叩きに用いた工具には深い溝は刻まれていなかったものと思われる (註10)。従って、形態的相違もさることながら工具の形態でも小異が認められて、仮にこの差を变化とみれば、製作目的を異にする飯氏馬場第9号壺棺と「西新式壺形土器」との間に一線を画し、先後の関係でとらえることが可能と考える。

後期後半以降の糸島地区では、過渡期特有の変化を構成する複合した要素を個別に切り離して導入する例も多く、加えて製作目的の相違もあって壺形土器の形態・製作手法は一様ではなく、複雑な展開を示している。

糸島地区では、伝統的な墓制である壺棺墓が、篋削り・細かい刷毛目調整を施した明らかに土師器である複合口縁の大型丸底壺を棺に使用する形で残存する傾向が認められつつある。背景は不明であるが、少なくとも墓制においては大型壺が大甕にとって代ったかのような感がある。先にふれた向原第1号壺棺墓 (Fig. 81-1・2) に使用された複合口縁の壺は、器高97cm前後と大型で、「底部は完全な丸底にはまだなっていない」うえに「頸部内面付近は横走る荒いはげ目が著し」く古様をとどめるが、形態的には土師器である。従って、向原例は土師器壺棺中でも古期に属する可能性がある。

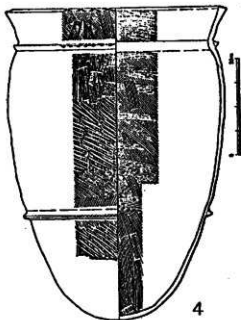
器種は異なるものの、「西新式壺形土器」が、これらの土師器壺と比較して在来的要素をより強くとどめているのは明らかである。しかし、双方に新旧両要素の部分的導入と残存とが認められる以上、両者を先後関係のみでとらえることは適切ではない。下限は不明であるが、むしろ両者は共存した可能性が高い。



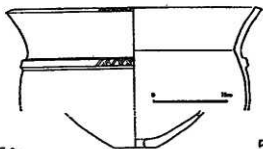
1



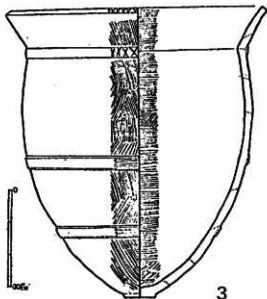
2



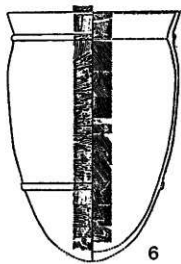
4



5



3



6

糸島地区では、昭和49年度から同郡前原町・三雲遺跡の発掘調査が継続されており、弥生時代後期後半以降の甕(壺)棺墓の類例が増加しつつある。従って、埋設状況の推移とともに使用された土器の形態ならびに製作手法上の変遷の詳細がいずれ明らかとなることが期待される。

筑後地区でも、基本的には上述の糸島地区と同様な変遷をとげたと思われる。遺構の性格が異なるので比較資料として充分とはいえないが、筑後市・狐塚遺跡第11号住居跡出土例(註11)は飯氏馬場第9号甕棺に、同第19号住居跡出土例(註12)は「西新式変形土器」に略相当するとみられる。

以下に、K1とこれら4例との比較を行ないたい。

まず、形態的には底部は異なるが、K1は全体として飯氏馬場第9号甕棺により近いといえる。口径が胴部最大径に近い点では、「西新式変形土器」ならびに狐塚第19号住居跡出土例と似通う。ただし、胴部最大径の位置と先細りの度合とが異なるので、底部にかけての形状から受ける印象には稍違和感がある。

口縁部はいずれも外反するが、K1のそれは他と比較して稍短かい。口縁部の形状では、K1は飯氏馬場第9号甕棺のそれに近い。狐塚第11号住居跡出土例ならびに「西新式変形土器」は内外が肥厚する点で前2者とは異なるが、内側が若干高くつくられている点で4者は共通する。狐塚第19号住居跡出土例では、内外特に内側への突出が目立つ点で「西新式変形土器」と似通うが、内外の上端の高さは略同じである。

K1の凸帯は、全体から受ける感じは飯氏馬場第9号甕棺のそれに近く、数も3条と一致する。しかし、形状は低い帯状となる体部の2条の他に、通常は日常容器の帯に付される断面三角形の凸帯を頸部にめぐらす点で注意される。また、加飾されていない点も特徴的である。文様に限れば、「西新式変形土器」は、狐塚第19号住居跡出土例と比較しよって古様をとどめている。

製作手法上では、K1は成形時の叩きの痕跡を刷毛目調整によって掻き消しており、飯氏馬場第9号甕棺と軌を一にする。口常用器であるはずの狐塚第11号住居跡出土例もまた同様であったかと思われるが、確証はない。これに対して、「西新式変形土器」ならびに、狐塚第19号住居跡出土例では、局所的に意識的とも思える叩き痕の未消去部分が認められる。

- |                      |                    |
|----------------------|--------------------|
| 1. 糸島郡二丈町・吉井浜甕棺      | 4. 福岡市西区出土         |
| 2. 糸島郡二丈町・長石甕棺       | 5. 八女市・狐塚遺跡第11号住居跡 |
| 3. 福岡市西区・飯氏馬場遺跡第9号甕棺 | 6. 八女市・狐塚遺跡第19号住居跡 |

◀ Fig. 87 糸島地区と筑後地区の甕棺および変形土器比較図(各報告書から転載。縮尺不同)



以上を要するに、K 1は径路はともかくとして、糸島地区の甕棺専用の大型甕形土器の系統上にあるとすることができる。

これらのうち飯氏馬場第9号甕棺と狐塚第11号住居跡出土例とをより古く位置づけることに、まず異論はないと思われる。K 1を含めた残りの3者の時間的関係は、いずれもが度合は異なるものの新旧の両要素を合わせて持つため迷断し難い。「西新式甕形土器」と狐塚第19号住居跡出土例との類似性が目立つが、共に日用土器であるので当然である。前2者をも含むこれらの全てが、「いわゆる西新式」と呼び慣らされており、そのこと自体に複雑さの一端が窺われる。

西新式は、標式遺跡からの一括出土土器に基く型式名ではないために、その実態は必ずしも明瞭ではない。

小田富士雄氏によれば、筑後市「狐塚遺跡は弥生終末期を主体とする土器資料を豊富に提供し、組みあわせも確認できた点で、北九州における西新期に相当する文化期の実態と土器編年に画期的成果をもたらした」とされ、「弥生終末期として第Ⅰ期、第Ⅱ期を設定し、それに接続する最古期の土師器文化として第Ⅲ期を設定した。これはそれぞれ上北島第Ⅰ式、第Ⅱ式、第Ⅲ式として形式設定できよう。」「これをこれまでの編年体系と対比すれば、北九州における弥生終末期におかれる西新式に第Ⅰ式、第Ⅱ式が当てられる。第Ⅲ式是最古の土師器として認識することができる」とされている(註13)。

氏の編年表では、第11号住居跡は第Ⅰ期に、第19号住居跡は第Ⅲ期に比定されており、従って、前者は「弥生終末期」の西新式土器に、後者は「最古の土師器」となる。

飯氏馬場第9号甕棺は、上述小田氏編年の第Ⅰ期に比定される。「西新式甕形器」は字義からみて第Ⅲ期に含まれているようであるが、第Ⅲ期の第19号住居跡出土例とさほど大きな時期差があるとは考えにくい。K 1は、甕棺専用大型甕形土器としての基本的形態と製作手法とをとどめてはいるが、第Ⅰ期よりも後出することは明らかである。かつ、頸部への三角凸帯の貼付からみれば第Ⅲ期まで下げることは無理と思われる。

狐塚遺跡での第Ⅲ期は、小田氏によれば「弥生終末期と区別できないほどの器種のもの、古式土師器として認識せざるをえない器種が共存する在り方」を示すという。当該時期の土器を、截然と弥生式土器と土師器とに区分することは非常に困難であるし、時には無意味とも思われる。

K 1の土器形態でいえば、甕棺専用大型甕形土器としての伝統を墨守・固執している点を強調すれば弥生式土器となり、丸底化を強調すれば土師器ともなり得る。要するに、誠に微妙な時期の所産といえる。

一方、K 1は前節で詳述したように方墳と共存する。この存在形態を重視し、また古墳時代の土器を土師器とするとの立場をとれば、土師器として取り扱うべきものと考えられる。

以上を要するに、第1号壘形墓に使用された壘形土器は、壘形専用大形壘形土器としてはその最終末期に位置づけられる(註14)。

- 註 1 同氏「釜井の反乱」『古代の地方史1』所収 1977年
- 註 2 同氏「壘形墓の編年」『立岩遺跡』1977年
- 註 3 同氏「西日本における弥生期古墳の地域相」〈古文化談叢 4〉 1978年
- 註 4 同氏「福岡県糸島郡地方の弥生後期壘形」〈古代学研究 53〉 1968年。なお、大神邦博氏は1975年早世された。引用にあたり、謹んで氏の御冥福をお祈りいたします。
- 註 5 副島邦弘「飯島馬場遺跡」〈今宮バイパス関係文化財調査報告 2〉 第64図 1971年
- 註 6 小田富士雄編「竊塚遺跡」第46図 1970年
- 註 7 同氏「棺の規模」『福岡県筑紫野市所在遺跡群の調査』〈九州縦貫自動車道関係歴史文化財調査報告 XXV〉 1978年
- 註 8 横口氏の見解は、明快にして適切である。なお、氏の見解の詳細は近刊の詳細は近刊の〈九州縦貫自動車関係歴史文化財調査報告 XXXI〉に掲載されるとのことである。なお、同氏からは、小稿を草するにあたり多くの御教示と有益な示唆とをいただいた。氏の御厚情に対して心から感謝いたします。
- 註 9 横山浩一「刷毛目調整工具に関する基礎的実験」〈九州文化史研究所紀要 28〉 1978年
- 註 10 「壘形墓のタタキ痕は……壘形墓の発生時から存在している」ことは、既に横口氏の指摘されている所であり(同氏「壘形製作技術についての若干の所見」註7文献所収)、叩き技法が土器成形、特に大型器種の成形法として普遍的な技法であることは多言を要しない。氏が脱かれるように、叩きの痕跡は、刷毛目・ナデ調整によって掻き消されて不明瞭となっている場合が多く、このことは工具に特に刻み目等が付されなかった場合があることを暗示すると考える。
- 註 11 註6文献 第28図
- 註 12 \* 第42図
- 註 13 同氏「弥生式土器から土師器」註6文献所収
- 註 14 前出峠山壘形墓例は、福岡平野と筑紫平野とを結ぶ要衝——現筑紫野市に位置している。小田富士雄氏によれば「周溝の東南隅に付随する壘形はこの地方の弥生終末期壘の特徴を強く伝える形態」であるという(註3文献に同じ)。しかし、この被合口縁の大型丸底壘の調整手法は明らかに土師器のものである。一方凸帯に加飾する点では古様をとどめるものの、これは福岡平野では「布甕式の古期のもの」——粕田里期まで残存することが、春日市・粕田遺跡第7号住居跡出土壘によって知られている(井上裕弘編「山陽新幹線関係歴史文化財調査報告 4」 1977年)。従って、峠山例はK1に対して若干後出の様相を帯びるものと考えられる。

## (3) 方 墳 の 時 期

前項と同様に、以下に諸先学の本墳についての年代観を掲げる。

大塚初重博士 (註1)

「この祇園山遺跡の段階ではまだ前方後円墳は出現していないかもしれない。この直後に出てくるであろうと私は思うのです。……弥生時代の終末、もしくは古墳時代のごく初め、四世紀の初頭と目される祇園山遺跡……」

松本雅明博士 (註2)

「祇園山古墳……これは明らかに弥生後期である。」

板橋和子氏 (註3)

「この方墳は筑後地方では最も古い畿内型古墳ではないかと考えられている。」

森貞次郎博士 (註4)

同博士は、墳頂部の「巨大な箱式石棺は、野方第1様式に伴ない後漢後半の鏡片を出す箱式石棺とは年代的に並行するとは考えにくい」とされ、現高良大社蔵の「三角縁三神三獣鏡を出した祇園山古墳の箱式石棺の年代を五世紀前半とすることに差し支えはないと思う」とされている。

前期の諸見解のうち、松本博士は弥生後期説の根拠を特に明示されてはいない。板橋氏も同様である。森博士は、方墳とK1ならびに裾部外周主体群とは先後関係にあるとの認識を基本的前提として、立論されておられるようである。

筆者が本墳の所属年代を検討するにあたって設定した前提は以下のとおりである。

1. 裾部外周第1号壘棺墓(以下K1と略す)は、方墳に先行しない。
2. K1に使用された壘形土器は、糸島地区で盛行した弥生時代後期後半以降の壘棺専用大型壘形土器の系統上にあつて、その最終末期に属する。
3. 現高良大社蔵の船載三角縁天・王・日・月・獸文帯三神三獣鏡(PL. 71)を、年代比定の資料としては取り上げない(註5)。

以上の前提、特に1・2に誤りがないとすれば、大塚博士とは立論の過程と全体の認識とを異にするが、K1の营造期を筑後地域での古墳時代の最初期とせざるを得ない。つまり、方墳は当該地域における最古期の定形化した古墳の一つと見做される。

従つて、短絡的に言えば、実年代は弥生時代と古墳時代との接点に求めざるを得ない。もともと文化の総体に対しての名称である両時代を、ある時点を境として截然と切り換えることは不可能であり、適切ではない。けれども、両者を区分するに足る相違点があることも事実である。筆者には基準・根拠を明示した上で、弥生時代から古墳時代への変換の時期を特定する力

はない。

筆者は、卑弥呼の時代にはなかったと思われる巨大な前方後円(方)墳の出現をもって弥生時代との間に一線を画すとの極めて常識的な立場をとらざるを得ない。かつ、京都府・大塚山古墳の年代を「280—300年というばあいと、300—350年というばあい」の2案の可能性があるとする小林行雄博士の「同范鏡による古墳の年代の限定」(註6)に従うものである。従って、定形化した前方後円(方)墳の上限は3世紀末に求められると考える。

註 1 同博士「古墳はいつどこから」『日本古代史の謎』1975年

註 2 同博士「大體と九州」『古代の地方史 1』所収

註 3 岡氏「有明文化圏の形成」註2文献所収。なお、岡氏が引用文献として示された<九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 1>は、第1次調査の報告書であり、この段階では周辺の主体群の存在は知られていない。

註 4 同博士「磐井の反乱」註2文献所収。

註 5 古賀 寿氏は、『高良妃(高良玉垂宮神祕書)』の所伝の分析から「この鏡が今一面の変形方格風短鏡と共に、恐らくは祇園山古墳の箱式石棺(墳頂部——編者註)から中世のある時期にとり出され」たとされている(『高良大社蔵三角縁神鏡と祇園山古墳』<筑後地区郷土研究 2> 1971年)。

註 6 同博士「同范鏡考」『古墳時代の研究』1961年 所収

#### (4) 裾部外周主体群の營造期間と被葬者

甕棺墓が先行し、壜穴式石室(石棺系石室を除く)が後出することは疑いない。全体の營造期間の上限を甕棺が示すことは明らかで、これについては前項で述べたおりである。下限については、須恵器の所属型式がこれを示すと思われる。

これらの須恵器がいずれも古式に属することは、一見して明らかである。大阪府・陶邑における中村治氏の最新の編年表(註1)との対比を試みると、まず甕は、大型であり、器高と胴部最大径とがほぼ等しく、口径が胴部最大径よりも小さい特徴があり、「I期第2段階」的な様相を呈する。甕(5)は、「I期第1段階」の口径部の形状に近い。甕(3)は、「I期第5段階」のTG43-II号窯出土甕の口径部の形状と共通するものがある。無論、細部での形状の差異はあるが、基本的には「I期」各段階の形態的特徴を示すとみてよい。

甕(2)と甕(4)とは、陶邑との直接的対比が困難であるが、甕(3)に近い時期に比

定できると思われる。蓋(2)は、篋削りの範囲の広さからみて6世紀中葉以降に下るとは考えられない。

次に土師器であるが、大略上記の上限と下限との間に位置づけられる。

複合口縁壺(13)がT12に伴うことは確実で、高杯(6)もその可能性が高い。両者とも精製品で、煤が付着した口常土器とは明確に異なる。壺は、「4世紀前半代」に比定されている筑紫野市・峠山遺跡出土例(註2)に近いとみてよい。高杯は、井上裕弘氏編年(註3)の「柏田Ⅱ期」に比定されている甘木市・神蔵古墳北西側くびれ部出土例(註4)よりも若干古式と思われる。この他、鉢(8)もまたT12伴出例と大略同期の所産と推定される。

T9に伴う杯(1)は、既知の九州産古式須恵器に伴出する杯(註5)よりも先行する形態である。一方、T9の属するD単位周辺から採取された杯(5)は、武末純一氏編年の「第ⅢB期」(註6)に相当するとみられる。築造位置でも、同単位は他の主体群に対して後出的様相を示す。

上記以外の土師器の原位置は不明である。甕(32)は、細片ではあるが内外に刷毛目をかけ、さらに器表の一部に叩きの痕跡をとどめて出土例中では最も古様を示す。壺(14)・甕(19)は、「柏田Ⅱ期」に相当するとみられる。

鉢(9)は、「布留式土器」を特徴づける器種(註7)とされるもので、北部九州では初出例と思われる。口径は大きく「柏田Ⅲ期」に相当するとみられる。甕(18・20～22・31)もまた同期の所産と見做される。

これらに後続するものとしては、甕(23・24)があり、武末氏編年の「第ⅢA期」(註8)に相当するとみられる。

従来、北部九州では古墳出土の古式須恵器の上限を大略5世紀後半代に求めてきた。また、田辺昭三氏は、「陶器窯で生産と供給が一元的におこなわれていた時期の須恵器を、とくに初期須恵器」と呼び(註9)、「陶器の成立を5世紀前半のある段階と考へ」、「5世紀末」からは地方窯が出現して多元的な生産が行なわれるとされている(註10)。本墳裾部外周から採取された須恵器は、甕(5)を除けば所謂古式須恵器として見慣れたものであり、上記に従えば大略5世紀後半代に比定される。

しかるに、県内でも、5世紀後半を遡る古墳に陶質土器が伴う例が最近の調査によって増えつつある。製作地はともかくとしても、須恵器の因産開始以前に半島からの得來品を使用する時期が存在したことは明らかである。また、識別が容易ではないが「初期須恵器」の流入をも勘案すれば、県内における須恵器の副葬あるいは葬送儀礼への使用と生産開始期とが全体的にくり上る可能性があるといえる。ただし、「5世紀初頭」に比定されている福岡市・老司古墳(註11)では須恵器が認められず、県内での須恵器生産はこれを超えるものではないと思われる。

北部九州における古式須恵器の出現期・生産開始期をいずれとするにしても、上記の土器の示す年代の中は1世紀を軽く超えることになる。これを裾部外周主体群全体の造営期間とすると、5世代以上にわたっての造営を想定せざるを得ない。けれども、これらの主体のうち重複するのはD27とT13、D26とG主体との2例に限られ、かつ、埋葬遺体の頭部の位置に規則性が存在することについては前節で述べたとおりである。従って、一部の竪穴式石室を除く裾部外周主体群の大多数は、比較的短期間のうちに継続的に築造されたとみることが妥当であろう。また、この間に墳頂部石棺への追葬が行なわれたことは大いにあり得るが、3世代以上の巾をもつとは考え難い。とすれば、上述の土器器の示す年代の中は、伴出例を除けば方墳と有機的関連をもつ裾部外周主体の営造期を直接示すものではないことになる。

ただし、裾部外周主体群全体における竪穴式石室の営造位置とその営造期とは、釈然としないところがある。須恵器を伴うとの前提に誤りがなければ、T1と大多数の石蓋土壘墓・箱式石棺墓とは少くとも半世紀以上の時間差があると見做される。所が、T1は先行するこれらの主体群の存在を充分に意識し、これらを損なうことなく築造されており、T2にいたっては、D18に引き続いて営まれたかとも思われる状況にある。つまり、位置からは同一集団による継続的営造が、時期——特にT1の場合では断絶が想定されて顛倒するかに思われ、判断に苦しむ。

裾部外周主体群の被葬者達は、墳頂部被葬者(達)によって立つ基盤の中核を構成した人々であったとみられ、主体数からみても、血縁的紐帯でのみ結ばれていたとは考えられない。第1号竪穴式石棺墓の女性被葬者(P.130追補参照)は、終焉しつつある伝統的舊制の墨守、副葬品の内容、ならびにその築造位置からみて、他の構成員とは異なる特殊な役割を担っていたものと推察される。

註 1 同氏「陶器Ⅱ」〈大阪府文化財調査報告書 29〉 1977年

註 2 小田富士雄「西日本における発生期古墳の地域相」〈古文化談叢 4〉 1978年

註 3 同氏「おわりに」『春日市・柏田遺跡の調査』〈山陽新幹線埋蔵文化財調査報告 4下〉 1977年

註 4 木下 修「神藏古墳出土の土師器について」『神藏古墳』〈甘木市文化財調査報告 3〉1978年

註 5 福岡市東区・蒲田遺跡D地区第2号住居跡出土例(『蒲田遺跡』〈福岡市埋蔵文化財調査報告 33〉 1975年)、粕屋部・乙植木第2号墳出土例(『粕屋部須恵町所在遺跡群の調査』〈九州統貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 X〉 1977年)等が該当する。

註 6 同氏「土師器」『福岡県八女市室間所在遺跡群の調査』〈九州統貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 XIX〉 1977年

註 7 安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」〈考古学雑誌 60-2〉 1974年

註 8 註6に同じ

- 註 9 同氏「須志」〈陶磁大系 4〉1975年  
 註 10 同氏「陶邑の変貌」『古代の日本 5』1970年  
 註 11 小田富士雄「横穴式石室古墳における複室構造の形成」〈史淵 100〉1968年

### (5) 祇園山古墳の性格

古墳特に前方後円(方)墳の発生と成立は、単に墓制における一大変革であるにとどまらず、弥生時代とは異なる政治・社会構造の成立を前提とし、かつ、それが墓制に反映した結果に他ならないとの認識があるからこそ重要視される。

某地で成立した前方後円(方)墳は、直ちに各地でも営造される。これを伝播とみれば、実態はともかくとして統一政權的な存在を想定しなければ理解し難いと考える。一方で統一政權側の選択(外的要因)があり、他方で各地域社会内部での首長権の確立度に相連(内的要因)があったことは十分に推察される所である。とすれば、各地における前方後円(方)墳の営造開始期に遅速が認められることもまた当然といえる。

上記の意味で前方後円(方)墳のもつ政治的記念物としての面を重視すれば、その成立以前に、集団墓から抽んで一定の高まりと貼石・列石等の外部施設をもつ墳丘が出現する地域があったとしても特に不思議ではない。これらを発生期古墳と呼ぶとすれば、発生期古墳の年代が既往の編年の弥生時代に食いこむであろうことは十分に予測される。筆者としては、発生期古墳に相当するものとして岡山県吉備郡真備町・黒宮大塚古墳、島根県安来市・仲仙寺第10・9号墳、兵庫縣加古川市・西條第52号墳等を挙げ、これらを弥生時代の墳墓ではなく古墳とされる間壁忠彦・霞子両氏の見解を支持するとともに、「弥生時代後期後半のある時点を、古墳時代に挿り入れる」(註1)ことに強い魅力を感じる。発生期古墳と定形化した前方後円(方)墳との間になお大きな隔絶があることを認めつつも、発生期古墳と弥生時代墳墓との差異をも重視すべきと考えるからである(註2)。

発生期古墳の墳丘の外形・規模、主体構造は当然ながら多様である。主体の数に限っても、上記諸例のうち西條第52号墳(註3)では周囲に5個の壺を配した竪穴式石室を思わせる「コ字形の石積み」1基に限られるのに対して、他はいずれも複数の主体が営まれ、仲仙寺第10・9号両墳(註4)では裾部周辺にも各3基の主体が確認されている。これら山陰・山陽両地域での発生期古墳は小異を見せながらも、貼石・石列は島根県江津市・波来浜遺跡等(註5)にその先駆的形態が認められ、また、岡山県下では「中期後葉の頃に台状墓といわれるもの」(註6)が出現していることからみて、火葬墓には前代の墓制との間に構造上の大きな断絶が認め

られない点で共通するといえよう。

北部九州での発生期古墳の様相を呈する例の一つとして、福岡市・宮ノ前古墳(註7)が挙げられる。一定の高まりをもつ墳丘を形成し、さらに墳頂部に主たる主体を、裾部に従たる主体を営むという宮の前古墳のあり方は、特定主体への盛土と副葬品の集中化という重要な変化を見せながらも、全体としてはそれらが集団墓の中に未だ埋没している福岡市・日佐原遺跡でのあり方とは明確に異なる(註8)。

けれども、北部九州では集団墓における個あるいは特定グループの視覚的な顕在化は、少くとも妻棺墓が基本的には營造されなくなる後期前半までは顕著ではない(註9)。視覚的な高まり——墳丘の出現が、春日市・日佐原E7号(箱式石棺)の「後期後半」、京都府犀川町・山鹿遺跡2号石棺の「弥生時代終末期」(註10)を遡り、かつ、その後の発展段階を迎える例は知られていない。つまり、前述の山陰・山陽両地方とは異なり、北部九州では発生期古墳と前代の墓制との間に構造上のギャップがあるように思われる。

ここで祇園山古墳に立ち戻れば、周辺にその先駆的墳墓が知られていない現時点では、一辺23~24m、高さ約6mの本墳の堂々たる墳丘が当該地域における前代からの墓制変遷の到達点とは考え難く、規模・構造において前代の墓制とは断絶があることは明らかである。従って、本墳は完成・定形化した姿で突如として出現したとしかいえない様がなく、この意味で山陰・山陽両地方の発生期古墳とは同列には扱えない。

とすれば、祇園山古墳は定形化した前方後円墳の成立に先行するものではなく、また、築造の契機に外的要因が強く作用したであろうことが推測され、本墳は小田富士雄氏が提唱された「畿内型古墳」(註11)の範疇に包括されるものと考えられる。従来の北部九州における古墳の編年では、定形化した前方後円墳——畿内型古墳の出現をその後半に置き、4世紀代がいわば空白状態とされていたが、最近に至り、漸くその出現の時期を半世紀程くり上げようとする動きが見られる。敢えて推測すれば、祇園山古墳は、九州における最古の畿内型古墳とされる京都府刈田町・石塚山古墳、大分県宇佐市・赤塚古墳の両前方後円墳と相前後として営まれたものと思われる。

なお、当該地域では本墳に直続する大型古墳は知られておらず、ブランクがある。離散的に営まれていないこと自体に、畿内型古墳築造の契機の一部が窺われる。

以上を要するに、祇園山古墳は、その外形に畿内型古墳としての性格を示すと同時に、墳頂部内部主体の構造と全体として集団墓としての構成をとる点で前代の墓制を踏襲しており、外来系と在地系の両要素を合わせもつといえる(註12)。



- 註 2 時代区分法としては、巨大な前方後円(方)墳の出現をもって古墳時代とすべきものとする。この意味では弥生期古墳は、弥生時代墳墓の終末期の一形態として扱うべきものである。矛盾を承知で、現時点では敢えて「古墳」という語を使用する次第である。なお、弥生期古墳は近藤義郎氏が提唱された「古墳以前の墳丘墓」に略相当する。(同氏「古墳以前の墳丘墓」<岡山大学法文学部学術紀要(史学論) 37> 1977年 所収)。
- 註 3 西條古墳群発掘調査団「西條古墳群調査略報」孔版 1964年
- 註 4 近藤 正編『仲仙寺古墳群』1972年
- 註 5 門脇後彦編『波来浜遺跡発掘調査報告書』1973年
- 註 6 註 2 近藤文献に拠る
- 註 7 下條信行・沢 皇臣編『宮の前遺跡(A~D地点)』1971年
- 註 8 筆者は、北部九州における弥生時代の墳墓は、原則として群集し顕著な墳丘を持たない——埋没後の各主体に視覚的な差が認められないとの常識的立場をとる。宮の前古墳は、調査者の下條信行氏によって「土器層の土器から判断して弥生時代の最終末期の墳墓」とされている(同氏「北部九州の弥生終末期前後の墳墓」<古文化談叢 4> 1978年 所収)。しかし、墓制上に認められる変化を重視する筆者としては、「宮の前C地点墳丘」を宮の前古墳として扱うべきものとする。
- 註 9 支石墓および標石等の墳墓様式的構造は存在する。飯塚市・立岩嶺ノ庄発見の「石籠」も一種の標石的存在と考えられる(磯山 猛「原始箱式棺の姿相」<史淵 27> 1942年 所収。同氏「九州考古学論攷」1972年 所収)。しかし、これらが定着あるいは発展した形跡は特に認められていない。また、立岩掘田遺跡では「中期後半に属する14基の成人墓(妻棺墓——筆者註)はそれぞれ広々とした墓塚の中に埋置され、墳墓相互の間隔も広く、通常の墓地に比較して広い墳墓面積を保有している」という(高倉洋彰「墳墓からみた弥生時代社会の発展過程」<考古学研究 20-2> 1973年 所収)。さらに、副葬品を持つ妻棺がそれを持たない妻棺と比べて大きさ・つくり等において優る傾向がある。
- けれども、北部九州では、一般的に被葬者あるいは集団間の較差は副葬品の有無・多寡に表われ、地表下とはともかく墳墓としての外観には特に反映しない傾向にあるといえよう。
- 註 10 小田富士雄氏の最新の見解による。同氏「西日本における弥生期古墳の地域相」<古文化談叢 4> 1978年
- 註 11 同氏「九州」『日本の考古学 IV』1966年 所収
- 註 12 但馬では、前方後円墳と集団墓との併存の可能性が指摘されている。榎本誠一「但馬における古墳文化」『城の山・池田山古墳』1972年 所収。

以上推測を重ねたが、方墳とその周辺に所在する主体群とについて、筆者の所見を以下に要約する。

1. 方墳は、削り出しと盛土とを併用し、かつ、葺石を2段にわたってめぐらしており、古墳として定形化した姿をとる。
2. 方墳の裾部外周に所在する主体群は、一見不規則に営まれているかに見えるが、方墳に対する主軸方向ならびに頭位に一定の規則性が見られ、かつ、2基で1組——単位を構成する傾向がある。この場合、石蓋土壘墓が箱式石棺墓あるいは石棺系石室のいずれか一方と組み合わせる例が多い。
3. 第1号甕棺(K1)は、糸島地区の甕棺専用大型変形土器と系譜的に連なってその最終末期の一つに位置づけられ、かつ、方墳の構築に先行するものではない。竪穴式石室の一部を除く大多数の主体についても同様である。すなわち、方墳と裾部外周主体群とは基本的に併存すると考える。
4. 甕棺(K1)との併存関係、ならびに当該地域の前代の墓制とは隔絶した墳丘の形態・規模からみて、本墳は当該地域における最古期の定形化した古墳——畿内型古墳の一つと思われる。
5. 墳頂部箱式石棺への埋葬は、3世代以上に及ぶとは考え難い。従って、一部の竪穴式石室を除き、方墳と有機的関連をもつ裾部外周主体の営造期間もまた半世紀前後と推察される。

調査当時から、祇園山古墳は最古の古墳だと称してきた。10年が徒に経過し、いざ報告する段になって、聊たじろいだのも事実である。最終末型式の甕棺専用大型変形土器と定形化した方墳の共存が意味する所は極めて重要と判断するからである。共存について疑問視される向があることも充分承知している。従って、共存関係と祇園山古墳の性格について未消化のまま敢えて私見を述べ、担当者の立場を明らかにした次第である。

末筆ながら、現地での調査指導、ならびに報告書作成の過程で示された大川清先生の御厚情に対して、心から御礼申し上げます。

また、森貞次郎博士からは折にふれて有益な御教示と示唆とを賜わった。学恩に対して心から感謝いたします。

なお、小稿を草するにあたり下記文献に負う所が多かった。

- 小林行雄 『古墳時代の研究』 1961年  
 下条信行 「まとめ 特に墳墓について」『宮の前遺跡(A～D地点)』1971年 所収  
 高倉洋彰 「墳墓からみた弥生時代社会の発展過程」<考古学研究 20-2>1973年 所収  
 近藤芳郎 「古墳以前の墳丘墓」<岡山大学法文学部学術紀要(史学類) 37>1977年 所収  
 間壁忠彦・榎子 「『大塚』は古墳か否か」<倉敷考古館研究集報 13>1978年 所収  
 小田富士雄 「西日本における弥生期古墳の地域相」<古文化談叢 4>1978年 所収

## 追 補

飯岡山古墳裾部外周第1号甕棺墓出土人骨について 永井昌文

この人骨は被葬甕棺の型式からみた所属時代といい、また舶載鏡・勾玉・管玉・刀子などを副葬されていたことなどから重要な人物と見られるので精査したが残存骨片僅少で思うにまかせなかった。

### 保存状態

骨片はすべて赤染して居り、赤色顔料が多量に用いられたらしい。いずれも大きくて2～3cmぐらいの細片から判断して、前胸以下の諸骨、骨盤・大腿骨上半の骨片が多く、頭骨や他の部分の骨は見当たらないので、身体の中央部分が保存に都合のよい条件下にあったのであろうと推察される。

### 推定年齢

骨端の離開を示すような骨はないので成人であるとは思われるが、さらに年齢を限定し得る根拠に乏しい。ただ腸骨耳状面の形態からみて、老年とは考えられない。

### 推定性別

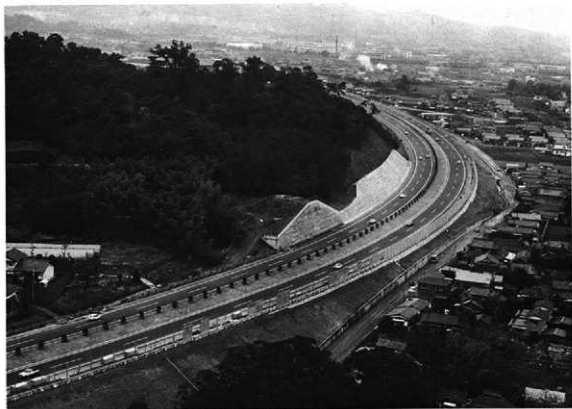
#### 女 性

唯一の有力な決め手は、辛うじて復元し得た右腸骨体の一部であり、幸い大坐骨切痕の輪廓を掴み得た。90度に近く開いており、おそらく女性とみて誤りないであろう。ただ耳状面を周っては、その前部のみを観察であるが、周囲溝・前溝などは認めることが出来なかった。

なお、右手の舟状骨・指骨や、大腿骨体断片から判断するにいずれもやや小さく、女性としても小柄の方であろう。

## 編者注

踏敵の事情により、永井昌文教授の鑑定結果をかかると体裁で掲載せざるを得なかった。K1出土の刀子(Fig.20-15)についても同様である。多忙の折にも不拘、原稿をお寄せいただいた永井昌文教授に御礼申し上げますとともに、心からお詫びいたします。



完成した縦貫道と部分保存された紙園山古墳



1. 祇園山古墳群遠景(背景は高良山)



2. 祇園山古墳全景(北から)



祇園山古墳全景(第Ⅱ次調査時)



1. 東斜面全景



2. 東隅角部全景



1.北斜面遠景



2.北斜面全景

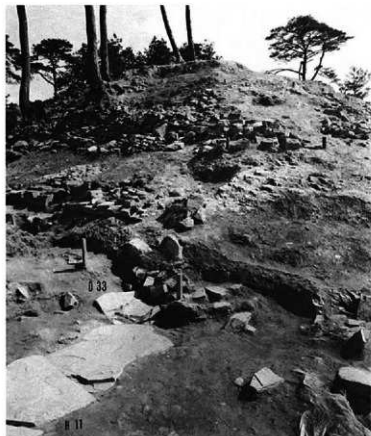




1.北斜面近景



2.北斜面西端葬石近景



1. 北隅角部全景



2. 西斜面全景

PL 8



1. 西斜面  
北端葺石近景



2. 葺石  
中央部葺石近景



3. 葺石  
南端葺石近景



1. 西斜面珪石と据部の  
構築状態



2. 同 北端および中央部の珪石欄部(断面の黒色土は旧地表)



1. 西隅角部地山削り出し状態



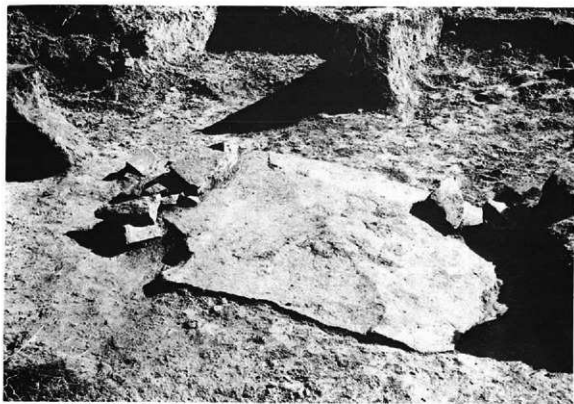
2. 南斜面全景



1.南斜面葺石近景



2.南隅角部全景



1. 墳頂部箱式石棺蓋石全景(西から)



2. 墳頂部箱式石棺蓋石全景(北東から)



1. 墳頂部箱式石棺全景  
(北から)

2. 墳頂部南西側墳丘断面(第Ⅳ次調査時)





1.墳頂部箱式石棺北側での粘土裏込状態



2.同上 北東側石材裏込状態



3.同上の上部裏込材を外した状態



1. 南隅角部付近の主体群全景



2. 北辺東半裾部外周主体群全景



1.北辺西半裾部外周の主体群全景



2.同(北東から)



1. 北隅角部付近全景(表土除去後)



2. 同(裾部外周主体確認後)



北隅角部付近の主体群全景



1.北辺西半裾部外周上・下段の主体群全景



2.同(墳頂部から)



1. 西辺裾部外周主体群全景



2. 西隅角部付近の主体群全景



1. 南辺西半裾部外周主体群全景



2. 同(南西から)





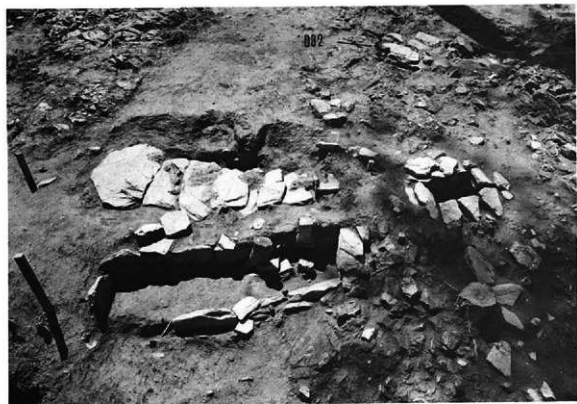
1. A 单位全景(上D11, 下D10)



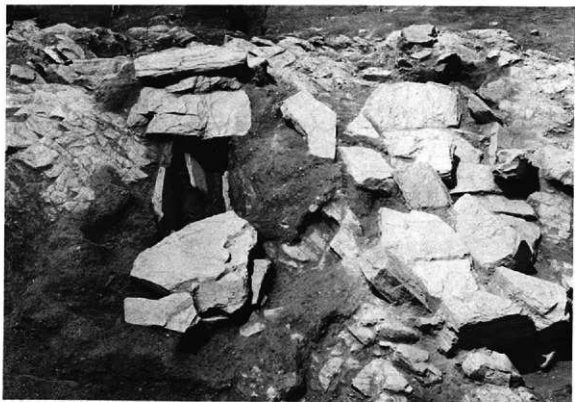
2. B 单位全景(左D25, 中D13, 右T8)



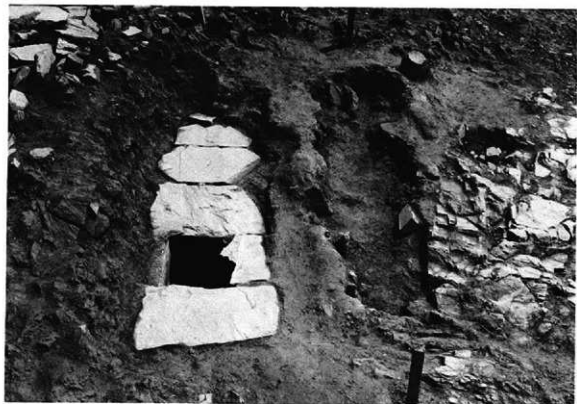
1. C单位全景



2. D单位全景(左上D20, 左下H5, 右T5)



1. E 単位全景(左H12, 右D30)



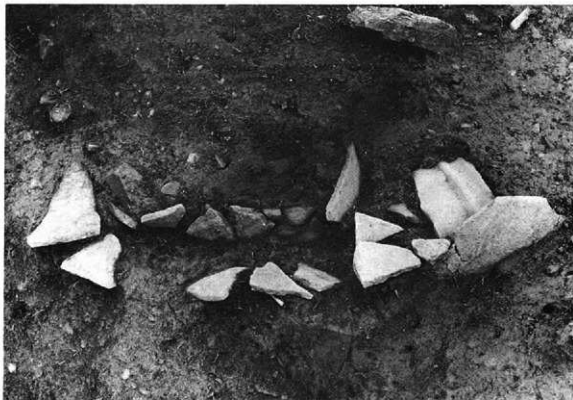
1. F 単位全景(左H9, 右H7)



1. G単位全景(上H4, 下D19)



2. H単位全景(左T11, 右D17)



1. 掘部外周第1号瘞棺墓(K1)発見状態



2. 掘部外周第1号瘞棺墓(K1)接口状態と、鏡片および勾玉出土状態



1. 裾部外周第1号奥棺墓(K1)下奥据付状態



2. 裾部外周第1号奥棺墓(K1)墓壇



1.掘部外周第1号  
石蓋土墳墓(D1)  
確認状態



2. " "  
蓋石除去後



3. " "  
壁面掘削  
状態近景



1. 裾部第2号石蓋土墳墓(D2)



2. 裾部第3号石蓋土墳墓(D3)





1.裾部外周第4号石蓋土墳墓(D4)の蓋石



2.同左 蓋石除去後



3.裾部外周第5号石蓋土墳墓(D5)



4.同左 石材除去後



1. 裾部外周第6号石蓋土墳墓(D6)



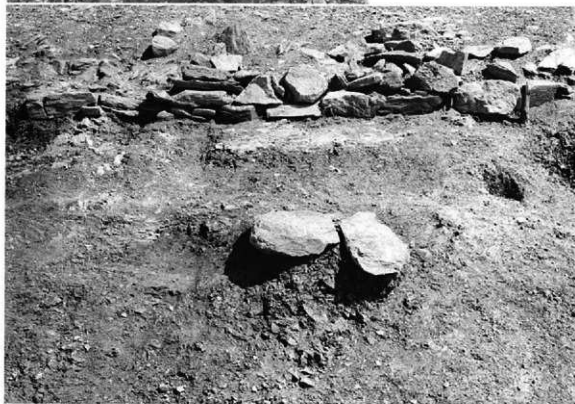
2. 同左 蓋石除去後



3. 裾部外周第12号石蓋土墳墓(D12)と工具痕



1. 裾部外周第14号石蓋土壤墓 (D14)



2. 裾部外周第15号石蓋土壤墓 (D15)



1. 裾部外周第17号石蓋土墳墓  
(D17)



2. 同上 壁面の工具痕



1. 裾部外周第18号石蓋土墳墓(D18)  
蓋石と土師器出土状態



2. 裾部外周第19号石蓋土墳墓(D19)



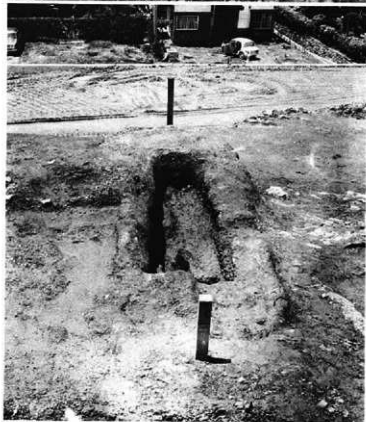
1. 裾部外周第22号石蓋土墳墓  
(D22)



2. 裾部外周第23号石蓋土墳墓  
(D23)



1. 裾部外周第25号石蓋土墳墓  
(D25)



2. 裾部外周第26号石蓋土墳墓(D26)



1. 裾部外周第27号石蓋土墳墓 (D27, ▲印は刀子片)



2. 裾部外周第28号石蓋土墳墓 (D28) 上部蓋石





1. 裾部外周第28号  
石蓋土墳墓(D28)  
蓋石



2. 同上 除去後



1. 裾部外周第29号石蓋  
土壌墓(D29)



2. 裾部外周第30号土壌墓(D30)石枕と頭骨



1. 裾部外周第31号石蓋土墳墓(D31)  
と不明柱穴群



2. 裾部外周第32号石蓋土墳墓(D32)



3. 同蓋石と不明石材群(手前)



1. 掘部外周第32号石蓋土墳墓(D32)蓋石



2. 同 南側不明石材群



1. 裾部外周第33号石蓋土墳墓(D33)発見状態



2. 同上堆積土除去後



3. 同 蓋石除去後



1. 裾部外周第1号箱式石棺墓(H1)



2. 裾部外周第4号箱式石棺墓(H4)



1. 裾部外周第7号箱式石棺墓 (H7)



2. 裾部外周第9号箱式石棺墓 (H9), 左はH7



1. 裾部外周第9号箱式石棺墓(H9)



2. 裾部外周第11号箱式石棺墓(H11)盖石





1. 据部外周第11号箱式石棺墓(H11)



2. 同 粘土枕



1. 据部外周第12号  
箱式石棺墓(H12)と  
第30号石蓋土壙墓  
(D30)



2. 据部外周第14号箱式石棺墓(H14)



1. 裾部外周第1号竪穴式石室(T1)全景



2. 同上(手前は排水溝)



1. 裾部外周第1号竪穴式石室  
(T1)西側小口壁



2. 同上 北側長側壁と仕切石



1. 裾部外周第2号竪穴式石室(T2)



2. 同上 北側長側壁



1. 裾部外周第3号竖穴式石室(T3)全景



2. 同上 南側長側壁



1. 掘部外周第4号竖穴式石室(T4)



2. 同上 南侧长侧壁



1. 据部外周第6号竖穴式石室(T6)全景



2. 据部外周第7号竖穴式石室(T7)





1. 裾部外周第8号竪穴式石室(T8)



2. 同 長側壁(手前、中央—D13, 奥—D25)



1. 裾部外周第9号竪穴式石室  
 (右—T9  
 (左—D20, 奥—T5))



2. 同 長側壁(手前、上方はD20の蓋石)



1. 裾部外周第9号竪穴式石室(T9)土器・鉄器出土状態



2. 裾部外周第10号竪穴式石室(T10) 手前はH14の蓋石



1. 裾部外周第11号竪穴式石室(T11)の蓋石 手前はD17の蓋石



2. 同 墓墳全景



1. 裾部外周第11号竖穴式石室(全景)



2. 同 刀子片出土状态



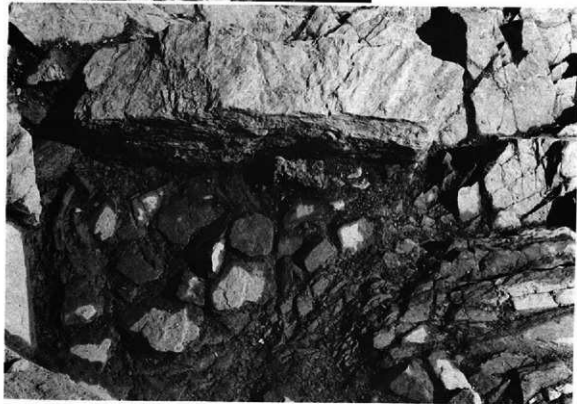
1. 裾部外周第12号竪穴式石室  
(T12)



2. 同 长侧壁



1. 据部外周第13号竖穴式石室(T13)



2. 同 鉄器出土状態

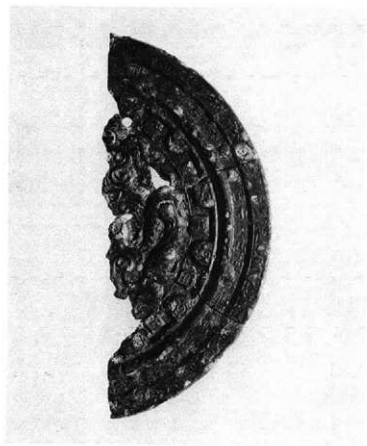


1. 祇園山古墳裾部外周G主体鉄器出土状態



2. 祇園山古墳北方歴史時代溝状遺構

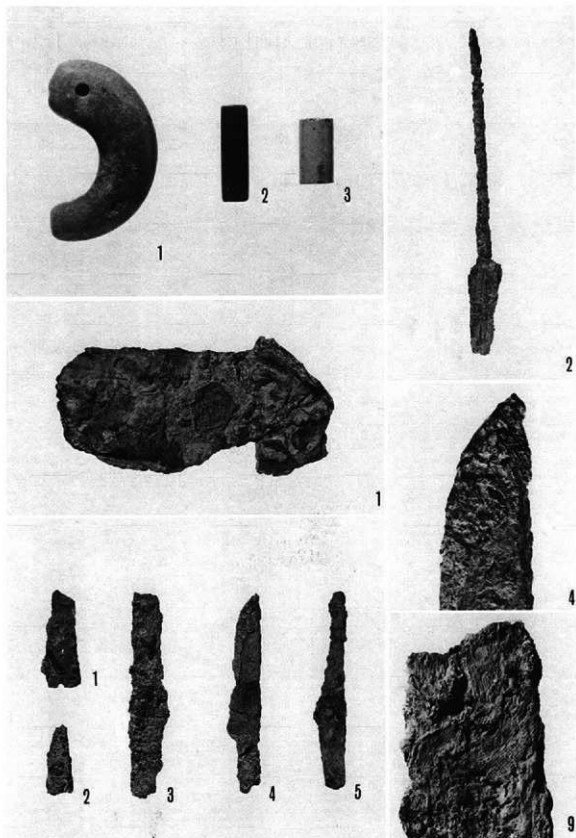




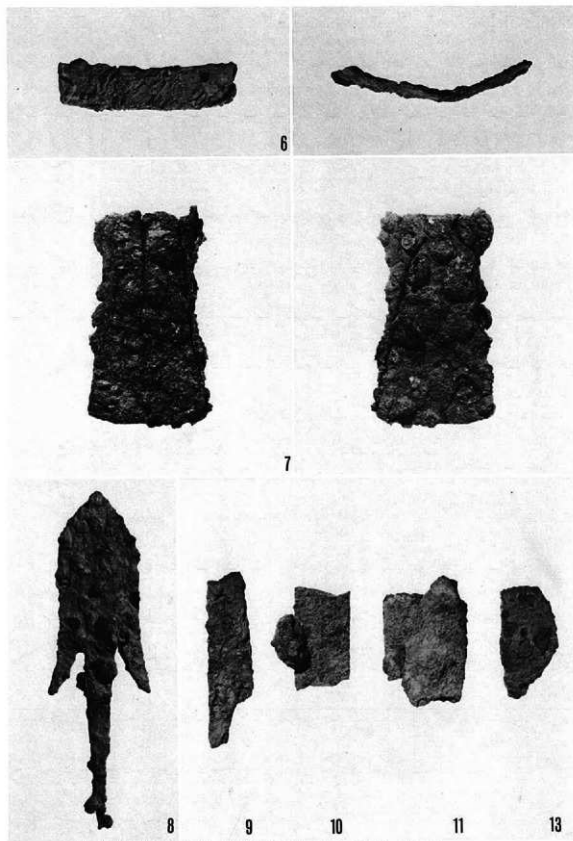
紙圍山古墳裾部外周第1号裏棺墓出土半円方形帯鏡片と主銘(実大)



紙圍山古墳裾部外周第1号褒棺墓出土半円方形帯鏡片(2倍大)と副鏡(約3倍)



紙圍山古墳裾部外周主体群出土遺物1 (番号は挿図の番号と一致する)



紙園山古墳裾部外周主体群出土遺物2 (番号は挿図での番号と一致する)



K1



K2



K3



K1



K3



1



2



9



6



13



14



19



24



1



1



3



2



4



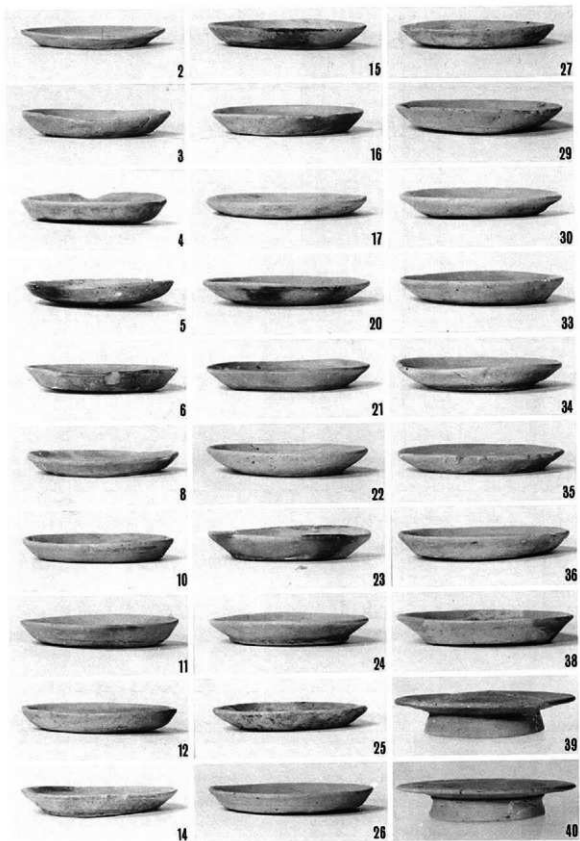
5



3

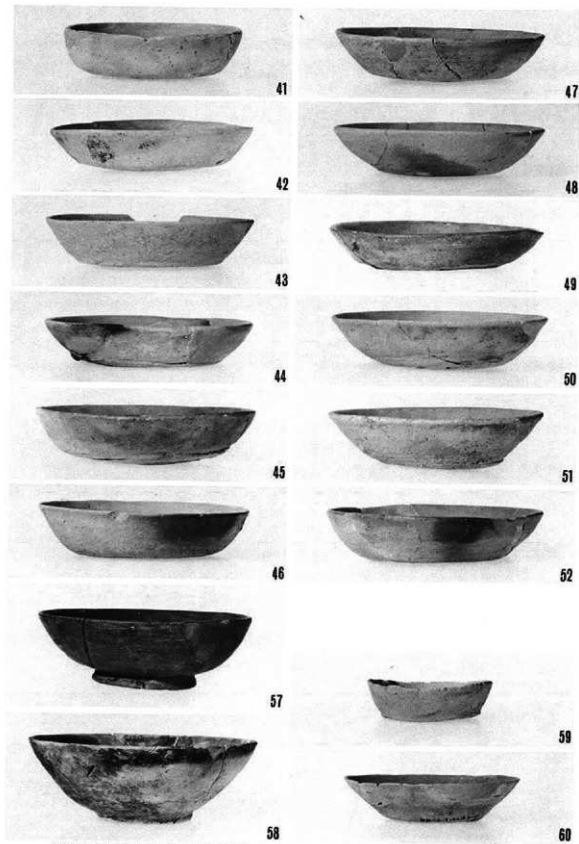
1. 祇園山古墳裾部外周出土須惠器

2. 祇園山古墳周辺出土石器



祇園山古墳周辺出土歴史時代土器 1





祇園山古墳周辺出土歴史時代土器2



高良大社藏三角縁天・王・日・月・獸文帯三神三眼鏡(径22.2cm)

#### IV 祇園山第2号墳の調査

## 1. はじめに

この調査が九州縦貫自動車道建設によるものであることは第1号墳と同様である。

調査は前後2次に分けて行われた。第1次調査は昭和46年7月20日より同年9月29日まで、第2次調査は昭和47年1月21日より同年2月21日までである。前後2次に分れたのは、調査当初においては半壊の小墳とされていたにもかかわらず、その墳丘下より完全に近い保存状態の石蓋土槨墓と箱式石棺が発見され、その重要性よりこの遺跡の保存を考慮して、久留米市、福岡県および日本道路公団にその保存を要請したが、路線の変更の困難なことを理由に認められなかったために、再調査せざるをえなかったためである。

この調査に御協力下された諸位に対して感謝の意をあらわしたい。

## 2. 祇園山第2号墳

### (1) 立地と墳丘 (PL.72, Fig.88・103)

#### 立地と第3～5号墳

この古墳の立地について見ると、久留米市および蛇行する筑後川を眼下にのぞみ、背後に霊地高良山を負う勝地にある点をまずあげなければならないであろう。地点によって数値を少しく異にするが、麓の水田の標高が20m前後であるのに対して、石室床面のそれがほぼ標高60mであり、その差の約40mというへだたりは、被葬者が生前何らかの関与をしていたであろう山麓の平野部に対して、墳墓の地として遠近ほどよきを得た地点であるといえよう。

第1号墳とは小さな谷をへだてて南に約100m、地名でいえば、久留米市御井町高良山299ノ1にある。御井町の聚落より山麓の急坂を標高56m前後まで登ると、ちょうど階段の踊場のような傾斜のゆるやかな地形にたどりつくが、そこに第2号墳をふくむ4基の小支群が営まれたのであった。

この4基の配置を見ると、それぞれの中心点を結ぶと平行四辺形をなす如く営まれている。調査の対象となった第2号墳の東側に当初より確認されていた第3・4号墳と、南側に第2次

調査によって確認された第5号墳とがある。いずれも発掘時の地形においては径15m以下の小円墳であり、ひとつとして盗掘をまめかされているものはない。その盗掘が第2号墳と同程度のものであったとすれば、遺物はおろか石材さえもほとんどを失い、墳形もいちじるしく変貌していると見るべきであろう。第5号墳の如きは、第2次調査のおり拡大したトレンチによって、わずかな封土の残存から辛うじて古墳であることを確認したにすぎない程であった。

調査の対象となった第2号墳と他3基との時間的前後関係を見ると、第3・4号とは、工事ともなう調査であるためにトレンチ端が限られており、第5号墳とはそれぞれの封土の流失によって、その堀における盛土の重複を観察することができず、時間的前後関係を確認することができなかった。しかし、後期群集墳の常として、時間的にさほど隔たることなく築造されたものであろう。

### 第2号墳の墳丘 (Fig.103)

第2号墳の墳丘について、南北および東西(註1)の墳丘断面(註2)にあらわれた層序を見ると、

#### 表土層および攪乱土層(1)

表土層は黒褐色腐植土を中心とする。攪乱土層は、黒褐色土、黄褐色土、礫石を含む雑多な混土層である。

#### 地山

##### 黄褐色土層(9)

この山の岩盤上の基本層である。粘性を少しくおびているが砂質である。黄味の強い明るい色調で、礫石を少しく含有している。

##### 黒褐色腐植土層(6)

黄褐色土とともに地山を構成している。地点によって厚薄さまざまである。礫石をほとんど含有していない。

#### 盛土

##### 黄褐色土層(5)

9に由来するが、地山のそれに比してやや暗く、少しく夾雑物も多い。

##### 黒褐色腐植土層(6)

5と上下に重複して互層をなして盛土を構成している。地山のそれに比してやや明るく、少しく夾雑物も多い。

#### 石室周辺の土層

##### 黄褐色土層(2)

石室の壁石の「うらごめ」の土。地山の9とほとんど同質であるが、夾雑物をほとんど

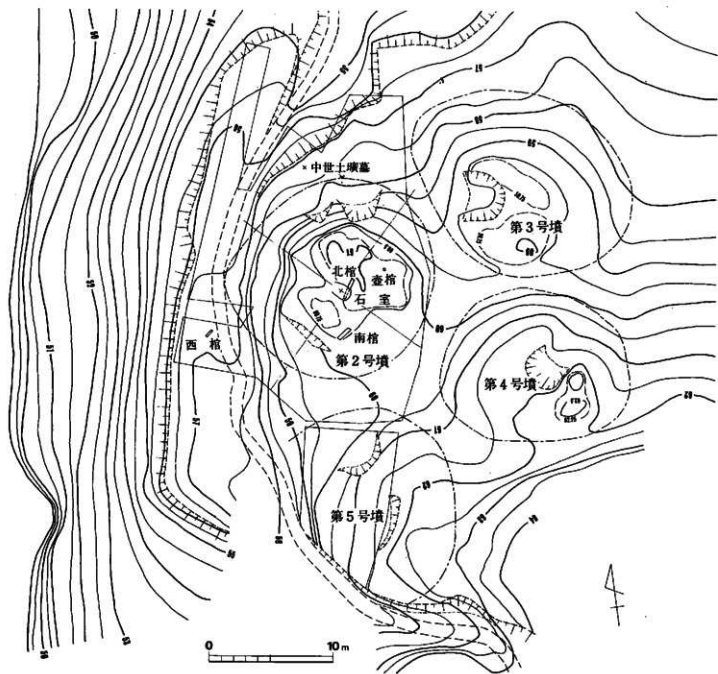


Fig. 88 长山山第2~5号墳地形图 (1/300)

含まない。

#### 黄色砂質土層(3・4)

石室床面の敷石下に用いられた黄味の強い砂質土で、意識的に用いられたものと思われる。

#### 墳丘下の遺構関係の土層

##### 褐色混土層(7)

礫石のきわめて多い混土で、南北両棺の掘方の埋めもどしに用いられた土層である。礫石の多いのは意識的に行われたものと思われる。

##### 岩盤(10)

部分的に浸透はあるが、黒褐色を呈する古生層石片岩で、表面に無数の亀裂が走っており剥離しやすい。地山および盛土の基本層である黄褐色土層の含有する礫石は、すべてこの剥離片である。

盛土は、地山の黄褐色土層と黒褐色腐植土層を用いており、地山の土層の質がそれぞれ盛土のそれに反映している。全体として地山に比して夾雑物も多く、色調も少しく純度を失った傾向にあるが、それも地点によってはことなる所が多い。

黄褐色土層と黒色腐植土層の多少・厚薄は、墳丘断面に見る限りにおいては、意識的なものではなく、偶然的なものであるらしい。

墳丘の規模について見ると、徹底的な盗掘のために、墳丘の高さは不明という他はない。墳径は、発掘時の盛土端の間の数値が、南北11m、東西10mであるが、築造時には少しくより大きいものであったであろうことは確かであろう。しかし、それとてもせいぜい15m程度のもので、20mには及ぶものではなかったと思われる。

墳形は、円墳という名の示すものではあるが、このような山腹の傾斜地に築かれているという条件を加味すると、幾何学的な真円形ではなく、少しく楕円形、やや卵形に近いものであり、石室の中心点が墳丘のそれより少しく後方、つまり「山寄り」にずれていることが予想される。しかし、このことは、墳丘の保存状態のよりよい遺跡において追求されるべきものであろうか、ここでは予想にとどめておく。

## (2) 横穴式石室 (PL. 73・74, Fig. 89)

第2号墳の内部主体は横穴式石室である。その残存状態はきわめてよくないが、そのわずかに残っている部分の観察を記述する。

まず、墳丘の断面において、盛土の末端のレベルを比較すると、南北において1.3m(約11m)、東西において1.9m(約10m)の高低差を示しており、墳丘築造時の傾斜の程を示して

いる。このような傾斜地に石室を構築する場合、その傾斜を削平して平坦面を設けて、その上に石室を構築する方法と、逆に盛土を行ってその平坦面をつくる方法がある。あるいは両者を兼ねたもの、つまり玄室は地山を削ってその上に、羨道は盛土上に営むという方法もある。第2号墳の約30cmの盛土の上に玄室を設けていることは、墳丘断面図を一見すれば容易に認めうるであろう。

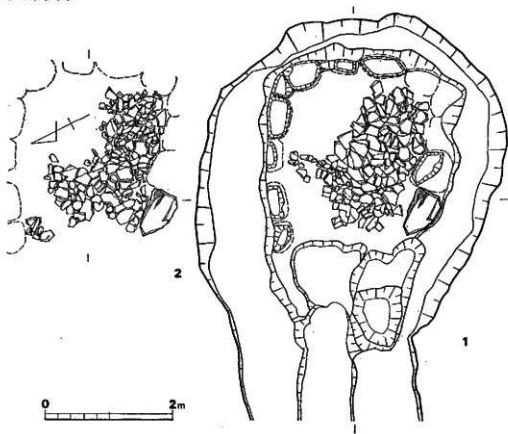


Fig. 89 祇園山第2号墳石室平面図 (1/60) 1. 第1次床面 2. 第2次床面

次に石室について見ると、天井石はおろか、一片の腰石を残すのみで、石室を構築していた石材はすべて搬出されてしまっている。腰石の抜き取り穴を検出して、わずかに石室のプランを復原したにすぎない。それさえも、羨道とそれに接する玄室の一端は深くえぐられた盗掘坑によって失われている。抜き取り穴によって示される玄室のプランは、隅丸の楕形とでも表現すべきものである。抜き取り穴によって玄室の数値を示すことに正確を期すがたいが、概数として示しておく。

長さ	2.9 m 以上
幅 (奥壁面前)	2.2 m



## 幅(玄室中心附近) 1.8m

石材は、奥壁をも含めて、おそらくあまり大きなものを用いず、持ち送りの大きい壁面であったことが予想され、天井もさほど高いものであったとは思われない。また羨道部も、もし存在していたとしても、玄室に比して比較的小規模のものにすぎなかったのではないと思われる。

壁石の背後の裏ごめの土には、比較的純粋な明るい色調の黄褐色土が用いられており、夾雑物をほとんど含んでいない点に注意された。

石室床面には敷石がしかれていた。玄室の半ば、その両半に残っていた。岩盤と同質の20cm前後の偏平な割石をていねいに敷きつめている。この敷石が、約20cmの間隔をおいて、二重に敷けられていることが判明した。その間は、粘性に乏しいサラサラした黄色砂質土が用いられており、地山や盛土の粘性のある土を用いていない点に注意された。

第一次床面の敷石は、すぐ盛土の黄褐色土の上に敷かれている部分もあるが、多くはその間に薄い(約10cm弱)一層をはさんでおり、その層の土もサラサラした黄色砂質土であった。つまり、盛土の黄褐色土によって、石室がのるべき平坦面を大體構築したあとで、砂質土を用いてその仕上げを行い、その上に敷石をしくという作業が確認されたのである。

## (3) 遺物出土状態

第2号墳は盗掘によって徹底的な破壊を受けており、出土品においても、原位置を示すもの、完形品は一点も存在しない。しかもこの破壊は周囲の第3～5号墳にも及んでおり、第2号墳の周辺で採取された遺物が、第2号墳以外の古墳の副葬品である可能性もない訳ではない点をことわっておきたい。そこで、比較的2号墳に近い位置で出土した遺物をえらんで報告を行うこととする。

## (4) 出土遺物

## 鉄器 (PL. 82, Fig. 90)

鉄器は、小破片を加えると約50点を得た。その種類は、鏃、鏃、刀、刀子、鏃、環状品、板状品であるが、半ば以上は、鏃か鏃の一部分と思われる棒状の小片である。

鏃は、広根式(19—23)と尖根式(12—18)に分れる。12は残存長12.5cmである。21は10cmをこす長大な刃部に細い茎を付したものである。4は鏃らしい。5は刀の茎片。8は片刃の刀

子片。11は鉄かとも見えるが末端の形状から鉤と思われる。6は少しく立ちあがった彎曲した縁をもつ薄片に小さな凹点を加えたもの。7は環状品である。

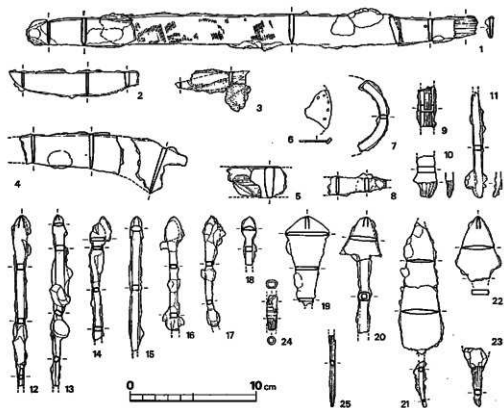


Fig. 90 祇園山第2号墳関係出土鉄器実測図 (3/4)

#### 土器 (PL. 83・84, Fig. 91)

少からぬ量を採取したが、完形品はなく、すべて破片である。その中から15点をえらんで示す。

#### 杯

1と7は、ていねいに磨かれた器面は炭素を吸着して光沢ある漆黒色を呈する。胎土は砂粒を含まないが、焼成は堅緻とは言いがたい。

2・3・5は、灰白色を呈し、焼成は堅緻ではない。器面をていねいに調整している。3は、5条の平行線に1条の横線を加えた雷印を刻む。

6は、橙色を呈する点以外は5に近い。

4・8は、共に橙色を呈し、調整を行わず、あらい成形痕をとどめている。

## 高杯

10は橙色を呈し、胎土は砂粒多く、焼成はよくない。外表面はていねいに磨かれて少しく光

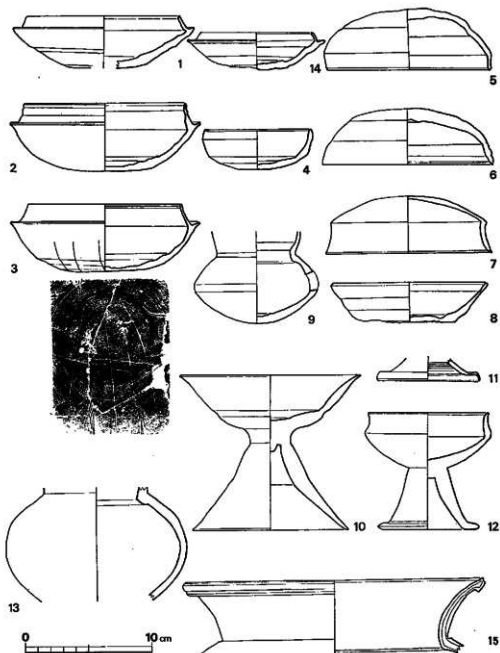


Fig. 91 祇園山第2号墳出土土器実測図 (1/6)

沢をおびるが、杯内面はやゝ粗である。

12は、杯内面は漆黒色、他は黄白色を呈し、ともにいいねいに磨かれて、少しく光沢をおびる。

11は、脚端の小片、焼成は堅緻。

甕

9は、わずかに口縁を欠く。黄白色を呈し、器面はいいねいに仕上げられている。

短頸壺

13は、褐色を呈し、厚手である。口縁と底頂部を欠くが、丸底で短い口頸をそなえたものであろう。

甕

少からぬ量の甕の破片を採取したが、ほとんどが腹部の破片である。口縁片15を示しておく。

### 3. 祇園山第2号墳以前の遺構群

#### (1) 遺構の配置 (Pl.75, Fig.92)

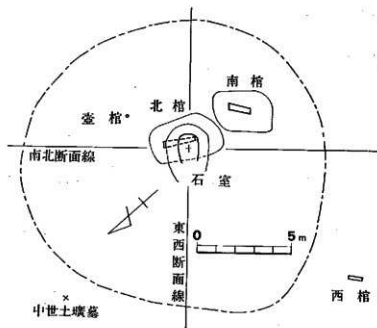


Fig.92 祇園山第2号  
墳関係遺構配  
置図 (1/200)

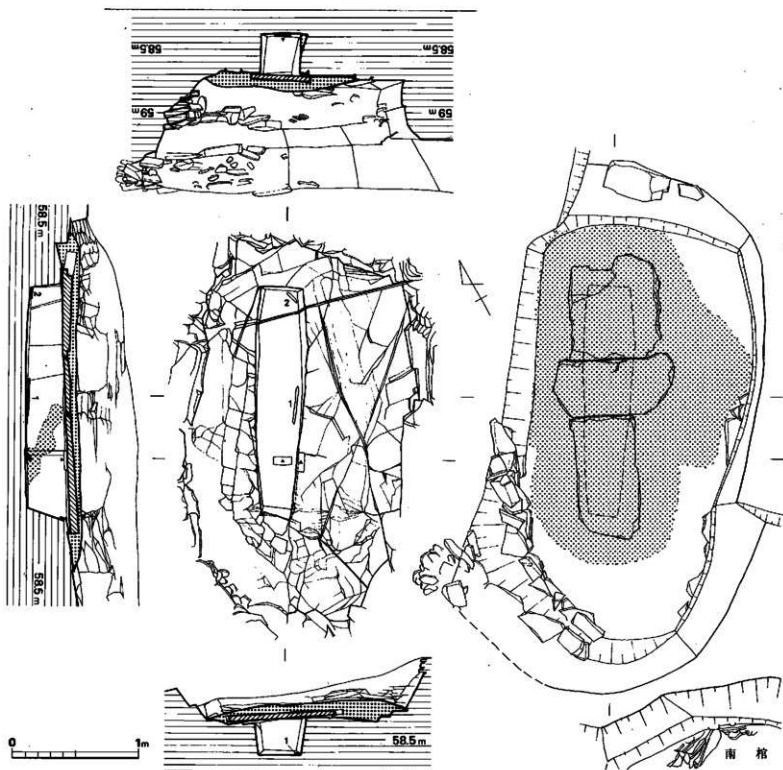


Fig. 83 祿園山第2号墳墳丘下石蓋槨墓室測図 (1/30)

この調査は、勿論上述の横穴式石室を内部主体とする第2号墳を対象としてスタートしたものであったが、作業が進行するにつれて、以下に記述する5基の遺構が次々に検出されたのであった。その発見の順序と位置について少しふれておく。

まず、石室の調査を完了して、墳丘の西半分を削平し、南北断面を観察したところ、石室床面下の約30cmの盛土層の下に、掘方らしきものが見出され、その下方に何か別個の遺構の存在を予想せしめたのであった。そこで、残る半墳丘の北半を削平して行くと、まず石室の東北の3.7mの地点に壘棺が発見された。更に削平を進めて行くと、石室直下に石蓋土壘墓（北棺）の掘方が姿をあらわしたのである。FL.75（上）は、そのおりを示すものである。それに力を得て、残る四分の一墳丘を削平して行くと、南にそれに接するように箱式石棺の掘方が見出されたのであった。第2次調査のおり、トレンチを拡大して墳丘周辺を削平して行くと、墳丘の西側、石室より約11mの地点に石蓋土壘墓（西棺）が出土した。更に北側約10mの地点に中世土壘墓が検出されたのであった。

以上の後出の5基の遺構と石室の配置をFig.92に示す。但し点破線は、発掘前の墳丘裾を示す。

各遺構の名称については：

第2号墳墳丘下石蓋土壘墓——北 棺

第2号墳墳丘下箱式石棺墓——南 棺

第2号墳墳丘西側石蓋土壘墓——西 棺

と略称することとする。

## (2) 第2号墳墳丘下石蓋土壘墓 (FL.75~78, Fig.93・94・103)

### 掘 方

まず掘方について見ると、地山を穿った長径約4m、短径約2mの隅丸長方形のプランであったと思われる。南側は明瞭であるが、西側は明らかではない。これは発見の際の事情もあるが、山腹の傾斜面を掘削するという作業のもたらした点もあろう。掘方の底面は岩盤である。長径約3m、短径約1.5mの平地面上に少しく北と西に偏して棺身を設けている。このことは、亀裂を生じやすい岩盤に整齊な棺身部を掘削するのに適した部分であると判断されたことを示すものであろう。

### 棺身部

棺身部は、西洋の棺桶型という表現がふさわしい形状を呈している。

全長	185 cm (175 cm)
最大幅(北端より45cm)	42 cm (34 cm)
北端の幅	34 cm (25 cm)
南端の幅	25 cm (23 cm)
南端の深さ	31 cm
北端の深さ	25 cm

括弧は下底面の数値を示す。

棺身部の下底面を含む内壁面はすこぶる平滑で、少しく亀裂も残すが、岩盤を加工したものとは思われぬ程整齊な感をあたえ、亀裂を生じやすい石質に対して注意深く熟練した作業を行ったことが容易に推測できよう。東側面に少しく大きな剝離を生じているが、そこに粘土を貼布して壁面を修正している。下底面は南半は水平であるが、中央あたりから北に向かって12cm程漸高している。

内面は蓋石の下底面を含めて、全面に酸化鉄朱を塗布しており、それが剝落して人骨をもおっており、蓋石をとりあげたおりは、その暗紅色が日光に鮮かであったのが印象的であった。

### 蓋石

3枚の蓋石を北より数字を付して呼ぶ。

	長さ	幅	厚さ
第1石	約 80 cm	約 70 cm	8 cm
第2石	約 45 cm	約 90 cm	5 cm
第3石	約 100 cm	約 50 cm	7 cm

3石の全長は225cmである。但し長さとは幅の数値は概数を、厚さは最大値を示す。

3石ともに白っぽい灰褐色の安山岩系統の板石を用いている。隣石に接する側面と内面とを少しく加工しているが、他の側面と上面は粗のまま残している。その側面の接合は、完全にピッタリと一致し、第1石と第2石の側面は加工のあとが著しい。

第1石は正方形に近く、第2石は横長に、第3石は縦長に用いている。そして下方の棺身をむだのない平面でおおっている。第2石は他の2枚に比べて少しく薄い、大差のあるものではない。

### 被覆粘土

蓋石の上を厚く粘土でおおっている。その厚さは部分によって異なるが、蓋石上は、5~7cmである。粘土は蓋石上にとどまらず、平坦面を埋めつくすように置かれているが、南端と東北隅に少しく空白を残している。

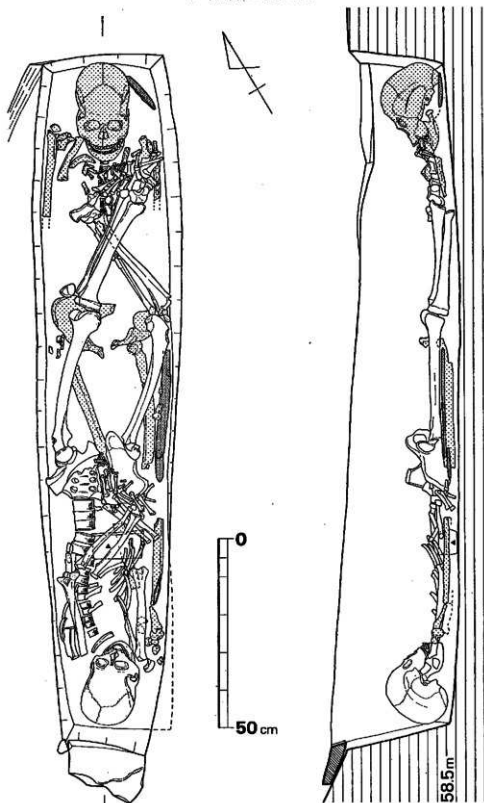


Fig. 94 祇園山第2号墳墳丘下石室土壌墓の埋葬状態実測図 (1/10)



## 埋めもどしの土

主体部の埋置が完了してから、掘方の埋めもどしが行なわれた訳であるが、その掘方の残っている壁面の高さは1m弱にすぎない。もう少し高いものであったと思われる。埋土は岩盤より剝離した礫石をきわめて多く含んだ雑多な褐色土で、礫石の多いのは意識的に行われたと見るべきであろう。

## 埋葬状態 (Fig.94)

土壙墓の主軸は東に30°ふれているが、いま便宜的に北・南として記述する。

人骨は頭位を北と南にする2体が出土した。頭位を北にするものをD2人骨とする。

棺は北側、とくにD1の肩のあたりで最も幅が広く、南側でせまい。したがってこの棺は、本来D1のために造られたものと考えられる。それは、棺壁に塗彩された赤色顔料と、D1の頭部付近に散布された赤色顔料は明るい色調のもので、肉眼観察では同一であることからうかがえる。

D1の上位に頭部を反対側にして埋葬されたD2の頭部付近に散布された赤色顔料はこれらとはちがひ、色濃いものであり、D2が異時埋葬であることを示している。このことは、D1人骨の右胫骨上に棺東壁の△印部から剝離した石片(△印)が落ち込んで乗り、その上にD2が埋葬されていることから確認できた。したがってこの複数埋葬はD1を埋葬した後、D2を追葬したものであることは確実である。

D2の追葬の際、D1の下肢を東側に寄せているが、下肢骨全体が乱れることなく寄せられていることからして、D1は未だ軟部が完全に腐爛せず、骨と軟部が分離しない半腐爛以前の時点で追葬が行なわれたと想定できる。

D1は成年男性、D2は成年女性で、この被葬者は年令も同一世代であることからして、配偶者であった可能性が高い。

この石蓋土壙墓は壙棺とはほぼ同一時期と考えてよからう。

## 遺物 (PL.78・83, Fig.90)

出土品は2点である。

1は刀で、棺底のほぼ中央の東側壁に接する所、遺休との関連で言えば「腰のあたり」に、鈍を北方に向けて置かれてあった。

3片に折損しており、復原長は39.2cmである。両関と思われるが、その位置が折損しているので明らかではない。鈍も銹化のため明らかではない。日釘孔を有する茎は木質を残す。刀身の片面上に点々と布の痕跡をとどめている。

2は刀子で、全長10.1cmの完形品。刀背は直、刃方の彎曲は大きく、短い茎がつく。刃関は銚から8.4cmの所であろうか。棺底の北東隅、北枕の被葬者の頭部の横から出土した。

### (3) 墳丘下の箱式石棺墓（南棺）（PL.79・80, Fig.95・97）

前述した如く、この遺構は北棺に接してその南に出土したものであるが、最も接近した所でその間隔は約10cmにすぎない。重複していないためにその前後関係を知る手がかりを得ることができなかった。

掘方は、長辺約3m、短辺約2mの少しくいびつな隅丸の平行四辺形を呈し、岩盤面まで掘り下げ、その底面を長辺約2.2m、短辺約1.5mのいびつな平行四辺形につくっている。そこに長さ約1.7m、幅約50cm、深さ30cmの直方体の棺塚（註3）を穿ち、その中に箱式石棺を埋置している。その状態を観察すると、

1. プランが長方形でなく、平行四辺形である。
2. 棺側石の材には、いかにも間に合せたと思われる小片を用いている。
3. もしも当初より箱式石棺を予定していたのであれば、何故岩盤まで掘り下げた上に、そこに棺塚をも穿つ必要があったのであろうか。
4. 棺塚は北棺の棺身部に近い数値のものである。特に北端部はよく似ている。
5. 岩盤の平坦面および棺塚を見ると、亀裂多く、崩れた箇所も少なく、凹凸もはなはだしい。
6. 棺側石に比して、蓋石は北棺のそれにきわめて類似しており、遜色のないものである。あらかじめ準備されたものであることが十分うかがわれる。
7. 粘土被覆をはじめ、全体として北棺にきわめて類似した様相を呈している。

以上の諸点から次のことが推測される。

この南棺の築造者は、最初は北棺と同じ埋葬施設を築く計画であったが、掘力を穿ち、岩盤に棺身部を掘削している間に、亀裂や崩壊を生み出したために、急遽計画を変更、掘削した棺身部を利用して箱式石棺を埋置したものであると思われる。そう考えると、少しくいびつになった棺塚の形に合わせて石棺も平行四辺形となったこと。あるいは間に合わせの石材で南端部をつくらったことも首肯できるであろう。

### 棺 墳

長方形の底面の四周に溝を穿って側石をはめこむようになっているが、南側のそれが他の三辺（7～8cm）に比して幅広い（17～20cm）ものであるのは、この部分の作業中にはまだ南側石

の位置が決定していなかったためであろう。また南端では、側石に合わせて両側面を少しく延長して掘りひろげている。

北端では、壁面を少しく外傾させているが、これは北棺とその趣を等しくしており、当初棺身部として作業されていたことを示すものである。また棺壁の北半の壁面が比較は整齊であるのに対して、南半において亀裂や崩壊が多い点を見ると、前述の南端部の加工と合わせて、工事が棺壁南半にさしかかった頃に失敗に気づき、計画変更を余儀なくされたことと思われる。また掘削の作業が、北から南に向う順序で行われたことも推察されよう。

底面を見ると、頭骨の下に枕石の如き板石を置き、他は礫石を敷きつめているが、横穴式石室のその如き扁平なものではない。また底面は水平で、北棺の如き傾斜は見られない。

## 石 棺

まず内法の数値をあげると、

長さ	155 cm
幅(北端)	28 cm
幅(南端)	21 cm
深さ(北端板石—蓋石)	26 cm
深さ(南端礫石—蓋石)	26 cm

両側石の4枚は、大きさも揃っており棺材として遜色ないものであるが、南端部には小材を用いて、空隙には小片や礫石をあてがっている。側石間の接合は必ずしもピッタリと一致していないが、蓋石に接する上端面は凹凸なく直線的である。

東西の第2側石は共に内側に傾き、そのため第3に蓋石も少しく傾いている。

すべての棺側石内面と蓋石内面に酸化鉄朱が塗布されていた点も、北棺と変らない。

棺材の数値を示しておく。

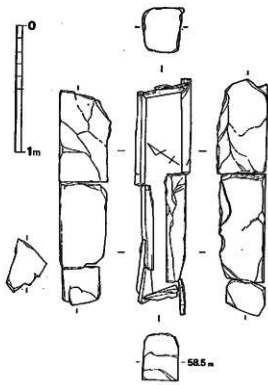


Fig. 96 祇園山第2号墳墳丘下の箱式石棺展開図  
(1/30)

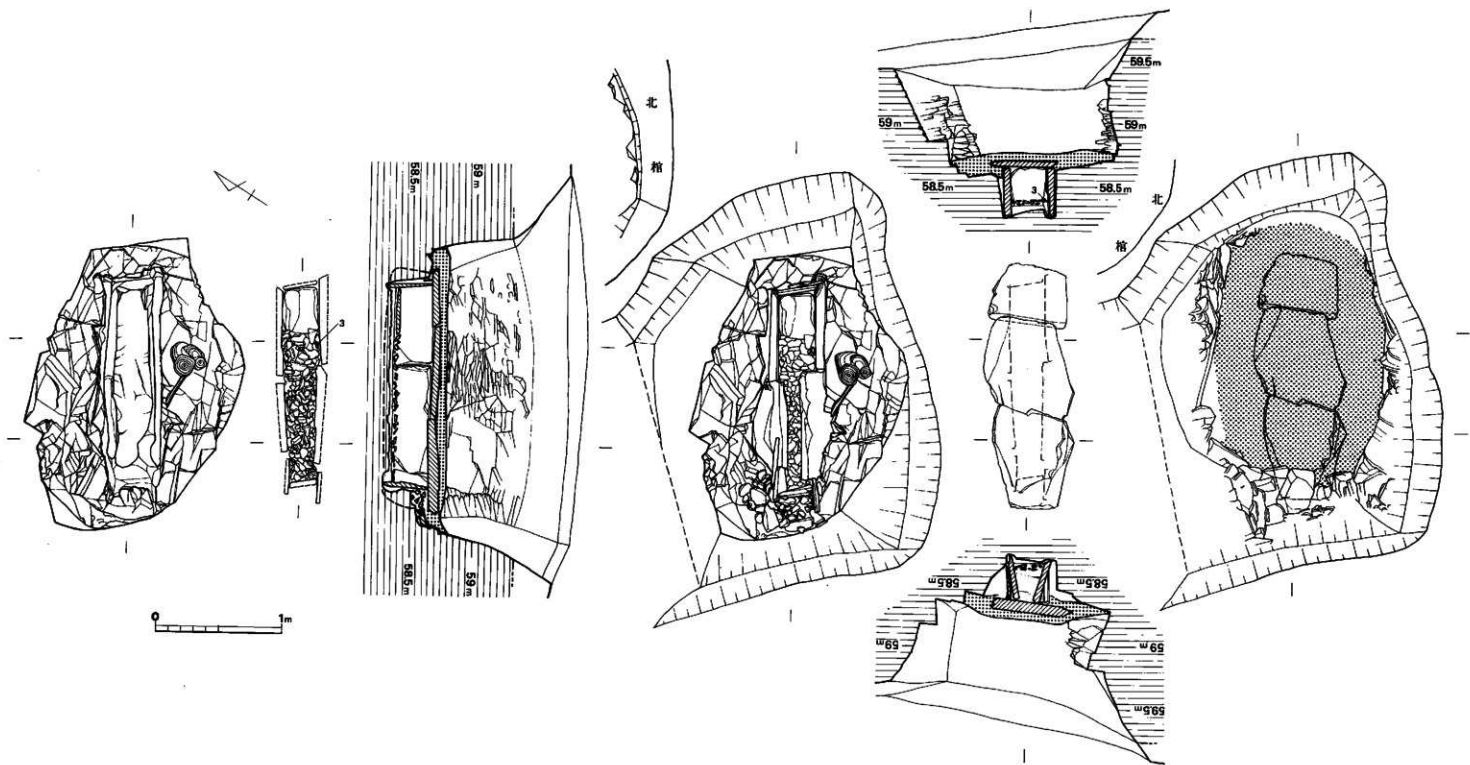


Fig. 85 祇園山第2号墳後丘下階式棺室実測図 (1/30)

	長さ	幅	厚さ
東第1側石	75 cm	39 cm	6~7 cm
東第2側石	86 cm	36 cm	5 cm
東第3側石	24 cm	32 cm	3~4 cm
西第1側石	72 cm	40 cm	5~6 cm
西第2側石	70 cm	37 cm	4~5 cm
西第3側石	30 cm	30 cm	2~3 cm
北側石	30 cm	35 cm	2~3 cm
南側石	28 cm	38 cm	2~3 cm

### 蓋石

北棺同様に白っぽい安山岩系統の3石よりなる。三石あわせて全長は195 cmである。側石間の接合は空隙を残さず、第2・3石間に見られるように縁辺の形状まで一致させている。第1石と第2石が接合辺において少しく重複しており、その上下から、第1石—第2石の順で置かれたことが判明した。おそらく第3石は最後に据えたのであろう。3石の中で一番長大な石材を第3石として縦長に用いる点も北棺と同一の手法である。数値をあげておく。

	長さ	幅	厚さ
第1石	47 cm	64 cm	5~6 cm
第2石	75 cm	72 cm	5~6 cm
第3石	80 cm	65 cm	9 cm

### 被覆粘土

北棺と同様に、掘方の底面をなす岩盤の平坦面いっばいに敷きつめている。蓋石上は5~6 cm、石棺周辺では10~15 cmの厚さをもつ。椎環の肩が崩れているために、部分的に蓋石の下にも粘土がつめこまれている。

### 埋めもどしの土

これも北棺同様に礫石を多く含んだ褐色の混土である。

### 埋葬状態 (Fig. 97)

頭位を北にした仰臥伸展葬である。人骨の保存状態は石蓋土壙墓出土のものに比較すると悪い。

## 遺物 (PL.83, Fig.91)

わずか1点にすぎない。東側石に沿って、北側石より約45cm南に出土した。遺体の左腕部の下に当ると思われる。敷石の1片に附着して出土した。何か袋のようなものに入れて副葬したものらしく、布状の痕跡をとどめている。長さ5.9cm、刃部の彎曲の大きい小刀子である。

大きさと異なるが、南北両棺の同じような位置より刀子が出土した点に注意されよう。

## (4) 第2号墳墳丘西側の石蓋土壙墓(西棺)

(PL.80-3, Fig.98)

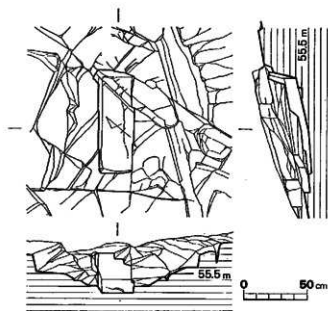


Fig.98 祇園山第2号墳西側石蓋土壙墓実測図 (1/30)

第2次調査の拡大したトレンチによって発見されたものであることは前述したとおりである。ちょうどこの遺構上を背後の受宮社に通じる参道があり、そのためであ

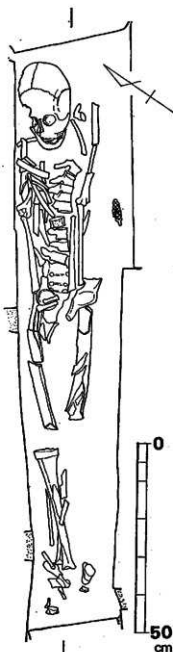
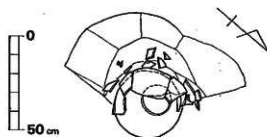
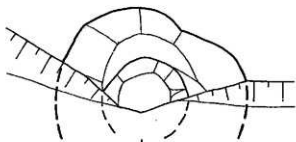


Fig.97 祇園丘墳山第2号下箱式石棺墓視葬状実測図 (1/10)

ろうか、蓋石もなく、棺身部も上半を失っている。狭小なものであるにもかかわらず、底面の高低差は13cmを数える。掘方・粘土被覆、蓋石・人骨・遺物・朱彩、すべてを失っている。

数値を示しておく。括弧は底面のそれである。

長さ	82 (75) cm
幅 (北端)	29 (25) cm
幅 (南端)	25 (23) cm
深さ (北端)	22cm



(5) 第2号墳墳丘下の壺棺墓

(PL. 81, Fig. 27・99)

出土状態

第2号墳の墳丘を削平中、石室の東北方3.7mの地点で発見されたものであることは前述のとおりである。そのおりは、盛土と地山との判別も明確になっておらず、石室の背後、つまり山側に当るとはいえ、高いレベル(標高59.5m)で発見されたために、盛土中からの出土と判断を下し、石室以後の歴史時代の遺構と考えたこともあった。

墳丘断面線よりずれた地点であるため、図(Fig. 103)においては破線で示したが、盛土下の地山を穿って埋置している状態をうかがい得るであろう。

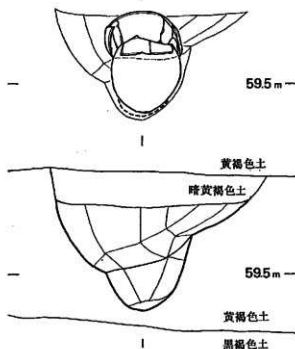


Fig. 99 祇園山第2号墳墳丘下の

壺棺墓出土状態実測図 (1/20)

墳丘削平の作業中に発見されたために、遺構はその半ばを失った状態で検出された。まず、径1mのほぼ円形の穴を掘り、その底に壺を安定させるための穴を更に穿って、そこに壺を据えたものようである。

#### 壺 棺 (Fig.100)

上は胴部上半、下は頸部から上を打ち欠いた壺を使用している。下は倒卵形をなし、胴部最大径は35.7cm、残存高39.8cmである。器表はハケ目調整の後、ナデているがハケ目はよく残る。内面は下半を粗ヘラ削り、上半を頸部より若干下ったところから丁寧なヘラ削りを加えている。黄褐色を呈し、胎土には細砂粒を含む。焼成は良好。内面は黒色顔料を塗布している。

上は下に比して若干寸づまりの壺で、胴部最大径は34.8cm、残存高27.8cmである。器表は不定方向の細かいハケ目調整を施す。内面はヘラ削りである。灰黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好。

これら壺棺に使用された土器は布留Ⅱ式併行期と考えられ、2号墳下の石蓋土壙墓・箱式石棺の時期を決定する好資料といえる。

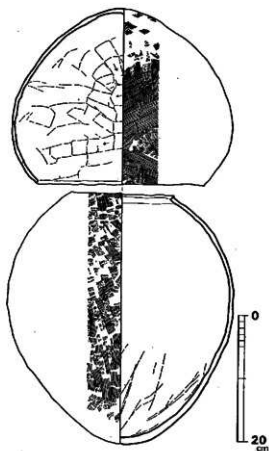


Fig. 100 祇園山第2号墳墳丘下壺棺実測図 (7/4)

#### (6) 人 骨

昭和52年12月15日付の、永井昌文教授（九州大学医学部解剖学教室）の鑑定は、下記のとおりである。



Tab. 6 祇園山第2号墳関係人骨一覽表

番号	性	年齢	保存状態	推定身長 (cm)	頭形示数	風習的 特徴	備考
D 1	♂	成年	△	166.1	75.7	無	赤色顔料付着
D 2	♀	成年	△	151.4	77.8	無	同上
S 1	♂	熟年	△	155.9	—	無	同上

凡例 年齢 成年 20~40才  
 熟年 40~60才  
 保存状態 △……不良

編者注 D 1——第1号石蓋土壙墓第1号人骨  
 D 2——第1号石蓋土壙墓第2号人骨  
 S 1——第1号箱式石棺墓埋葬人骨

D 1及びD 2は同一土壙墓内に収容されていたものであるが、人骨の配置を見ると、D 1は下位で頭を北位に、D 2は上位で頭は兩位に重ねられていた。ともに仰臥伸葬である。

なおD 1人骨の右胫骨上に棺壁の石片が落込んで乗り、上位のD 2人骨との間に介在していたから、両者は異時埋葬で、D 1遺体が葬られた後、時をおいてD 2遺体が追葬されたと考えられる。

#### 4. 祇園山第2号墳以後の遺構

中世の土壙墓 (PL. 85—上, Fig. 101)

2号墳の北側裾部から検出されたもので、一部分周溝を利用して、つくられている。頭部に築石して墓標としたものと考えられ、築石下からは、土師器の小皿4点と青磁1点とが検出された。

土壙のプランは隅丸長方形を呈し、長辺190cm、短辺100cm、深さ40cm、主軸方向はN 12° Wを呈している。断面形は楕円状を呈するもので、木棺の形跡はみられない。釘等の遺物は検出されなかった。堆積した土は周溝部分と明確な差異はなかった。

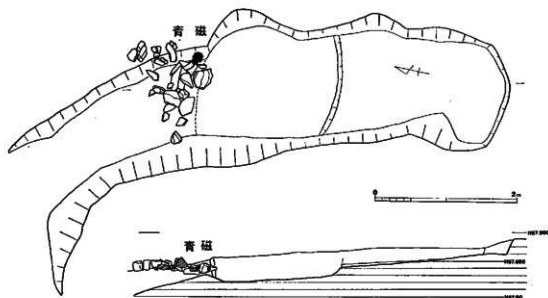


Fig. 101 祇園山第2号墳北側溝部中世土壺蓋実測図(1/30)

## 遺物 (Fig. 102)

集石部分から青磁の壺と土師器の小皿4点が出土している。

## 青磁 (5)

壺で、龍泉窯系の断面四角の高台を有するもので、高台部壘付およびその内部は露胎である。釉の発色は青味を帯びた緑色を呈している。底部の器内は厚く、内面文様は欠半文を片彫している花文と蓮華の葉を横からみた文様を対として入れ、2組をもって文様としている。見込みには花文をあしらっている。口径17cm、器高6.8cm。

## 小皿 (1~4)

土師器で、口径8.0~8.7cm、底径6.8cm~8.0cm、器高0.9~1.2cmで、やや低い。器面調整はヨコナアで、内底にはナデが施され、底面には糸切り痕と板目がみられ、糸の切りはなしは順手である。黄褐色ないし灰褐色を呈し、胎土に細砂を少量含むものが多く、焼成は良好で、確一的なものではない。計測値は Tab. 7 のとおりである。

集石下に副葬された龍泉窯系青磁壺は、大宰府での編年では、龍泉窯Ⅰ-bと土師器小皿4

点は器高が低いもので、これに類似するセットとしては大宰府史跡45次調査のSK 1212の土壘から出土しているものに比定される。

時期的には12世紀後半から13世紀前半の中世鎌倉期の初め頃に位置付けられる。前川氏の土師器の編年では、五条Ⅱ-2～Ⅱ-3にかけて比定される。これは筑前の大宰府付近での話して、筑後地区では、若干前後するものの一応の目安としてよいのではないだろうか。久留米市の中世墓制については、西谷火葬墓遺跡、茶臼山・東光寺遺跡等が知られている。これらの墓制については、遺跡が集成され、その資料をもとに今後の研究に待ちたい。

他の遺物としては、旧石器時代の礫器が表採されている。江戸時代の陶器朝妻焼と肥前陶器の「くらわんか茶碗」が出土している。

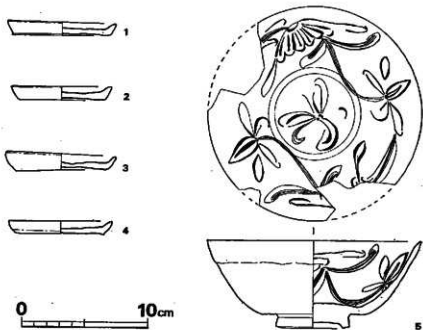


Fig. 102 祇園山第2号墳北側裾部中世土壘墓出土遺物実測図(1/30)

Tab. 7 祇園山第2号墳北側中世土壌基出土小皿観察表

小皿	口 径 cm	器 高 cm	底 径 cm	切り難し		内底部ナデ 有 無	板状圧痕 有 無
				ヘラ	糸		
1	8.6	0.9	8.0		○	有	有
2	8.0	1.0	7.0		○	有	有
3	8.7	1.2	7.1		○	有	有
4	8.2	0.9	6.8		○	有	有

## 5. 小 結

この小結においては、今回の調査によって確認された遺構を構成する諸要素のあたえる手がかりの示唆する問題点に少しくふれておく。但し、この調査の中心ともなった第2号墳以前の遺構については、第1号墳およびその周辺のおびただしい遺構群との比較を抜きにして論ずることは不可能であることは明白ではあるが、まだ正式に報告されていないので、ここではふれないことにする。

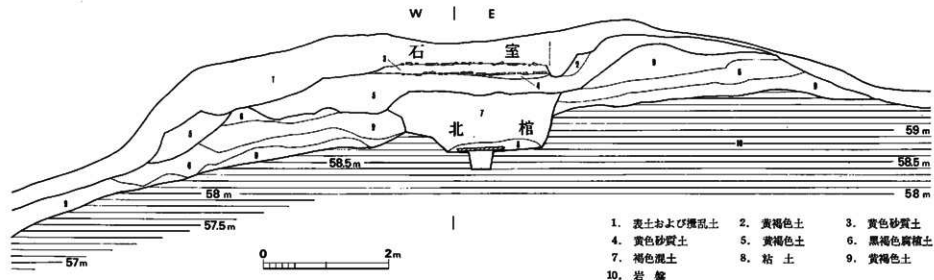
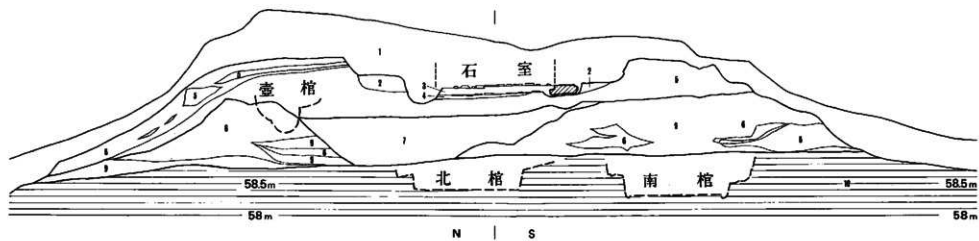
この遺跡は、第2号墳およびその周辺の狭小な調査範囲に6基の遺構の出土を見た訳であるが、それがすべて埋葬遺跡であることは、時代によってその意味する所は異なるとしても、墳墓の地としてのすぐれた立地点であることを示す点に変わることはないと思われる。

まず横穴式石室について見ると、プランの示す所は筑後地方に多い形式を示しており、その年代も追葬の態をもって土器の示す所は、この地方の多くの後期古墳のそれに変る所はない。残存のきわめてよくない遺構の中で注意を引くのは、二重の敷石床面であろう。この狭小な石室において床面をつくりかえるという作業の意味する所は重要ではあるが、土器との結びつきを欠くので、残存状態のより良好な遺跡に委ねるべきであろう。

第2号墳以前の遺構3基の示唆する所はまことに多く、かつ深いものがあり、そのいくつかについて少しくふれておく。

性別および大体の年今の判明した3遺骨の相互の関係については知りえないが、少くとも女性の地位について示唆するものがあるようである。

南北両棺あわせて3点の出土品と3体の遺体との関係について見ると、両棺ともにある刀子と男性、刀と女性という風に、性別と副葬品を結ぶことができれば話は面白くなるのであるが



- |             |         |           |
|-------------|---------|-----------|
| 1. 表土および礫混土 | 2. 黄褐色土 | 3. 黄色砂質土  |
| 4. 黄色砂質土    | 5. 黄褐色土 | 6. 黑褐色腐植土 |
| 7. 褐色濕土     | 8. 粘土   | 9. 黄褐色土   |
| 10. 岩盤      |         |           |

Fig. 105 祇園山第2号墳横丘断面図 (1/60)

遺跡における観察では、北棺の2点はともに第1被葬者に属し、追葬のおり落下したと思われる土砂がその上に見られたのであった。

追葬の示すものは、地表に墓標の如きものの存在を考慮すべきかも知れないが、むしろわずかもマウンドの如きものがあれば十分であるともいえる。

北棺の棺身部の形状も、解きたい謎をあたえるものである。遺体収容にギリギリの輪郭線の意味するものが労力の節約、あるいは蓋石の大きさによる制約というのは、いかにも姑息で全く説得力をもたないものである。棺身部はもとより蓋石や被覆粘土に見られる入念さを見ると、その形状が何か別の観念に支配された結果と見るべきであろう。

南棺における計画変更による箱式石棺への変換は、この調査において最も興味深い問題点のひとつである。これの意味するものが奈辺にあるかについて、推理小説もどきに、考えるケースをあげて見よう。

第一は、土壟墓も箱式石棺墓も等価値におかれて、言わばどちらでもよいと考えられていたとする見方である。この見方は、あるいはそうであったのかも知れないが、それ以上の発展を期待しえない姑息な説明という懐がないではない。

第二は、被葬者側、つまりその近親者が計画変更を容認したという見方で、これには四つ程のケースが考えられよう。その一は、労力あるいは費用の節約から、新たに別の土壟墓を営むことを断念したものと見るのである。その二は、何らかの観念によって、埋葬地点が他に移ることを許されなかった結果と見るのである。今日でも家相や墓相を意識する人々の多いことが想起されよう。その三は、これも何らかの観念によって埋葬の時期が決定されており、それにおくることが許されず、やむなく計画変更による工事の続行を容認したと見るのである。今日でも仏滅に孝せぬ人々の多いことが想起されよう。その四は、被葬者側の社会的地位がそれほど高いものでなく、工事担当者に対して強い発言力を有していなかったために、やむなく容認したという見解である。

第三は、この計画変更が工事担当者のみ関与したもので、近親者のあつかり知らぬ所で行われたものと見るのである。つまり、土壟墓築造の失敗は、蓋石設置の後には工事担当者以外には知ることのできぬものであること、換言すれば、棺槨の掘削、石棺の埋置、遺体の埋葬という作業の経過中に近親者が目撃することがなければ、秘密裡に計画変更が遂行できた訳で、当然土壟墓に葬られたと信ぜられたと思われるからである。もしこの仮説をとるならば、このことは被葬者の近親者に埋葬の工事には直接タッチすることが許されず、その現場にある一定の期間中は入ることを禁じられていたという、所謂「殯」の風習の一部を示す手がかりを供するものではないかと考えられよう。今日でも、血のつながらる子供の火葬には母親は立会わぬ風習のあることが想起されるよう。

以上、考えるさまざまなケースについて述べたが、どれひとつとして、それを完全に論証

しうるには、更に多くの調査によって確認せられた根拠を必要とすることは言うまでもないことである。

今迄に「工事担当者」と表現した専門集団について見ると、整齊な棺身部の加工や計画変更による失敗の修正などは、十分にその存在を証するものであるが、そのひとつに蓋石があるように思われる。南北両棺の蓋石の形態と用法にいちじるしい類似が見られることは、同一集団の所産であることを明示するものであること、つまり、その専門集団が招かれて埋葬工事に従事したおりに、すでに準備せられていた蓋石を搬入したものであることを示していると思われる。その石質は遺跡所在地の産ではないのである。

このように、遺跡所在地の「村」において現地調達しうるものと、村の外からもたらされたものという両面は、同時に工事における現地の村の人々の労働力と、招かれて外から来た専門集団の技術という分業と協業と一体のものであろう。掘方を穿ち、あるいはそれを埋めもどすことは村人のなしうる所であろうが、亀裂の生じやすい岩盤に整齊な棺身を掘削しうる熟練にいたっては、専門の腕の及ぶ所と見るべきであらう。勿論、横穴式石室においても同様であらう。

石蓋土壙墓について、ふれることがためらわれるものに、その年代がある。遺跡を突見された九州在住の考古学の諸位は、口をそろえて、その年代をきわめて古く古墳成立期にまでさかのぼらせて考えておられるようであった。勿論、弥生時代の伝統を引くこの種の遺構の中に、きわめて古いものが存在するであろうことを否定するつもりはない。しかし、この種の遺構のすべてがそうであらうか。少しく時間的に幅をもたせて、あまり画一的に把握しない方が大過のない答を導くように思われてならない。疑いを残しておきたい。

今回の調査において、第6番目の遺構として中世土壙墓が出土した訳であるが、壙棺や石蓋土壙墓にはじまり、現在も山上に鎮座する高良大社につないで、この遺構の示すものは、筑後平野の東、霊山としての高良山に対する麓の人々の信仰ではないかと思われる。

註 1 この遺跡においては、全体としては横穴式石室の主軸線を基準として作業を行ったが、方位とはかなりのズレを有している。しかし、記述の便宜から、石室縦断面線の方を東西、横断面線の方を南北と呼ぶことにした。各遺構についても同様であって、記述上の呼び方は正確な方位を指すものでないことをことわっておく (Fig. 92)。

註 2 調査のおり、梅川光隆氏によって詳細な墳丘断面図が作成されたが、地山および盛土に関しては、数種類の土質と礫石の混入の程度による差にすぎない場合が多く、あまりにも詳細な区分は報告書においては不必要と判断して、黒褐色腐植土層以外はすべて省略した。また断面にあらわれた礫石も図にあらわさなかった。黄褐色土も、黒褐色腐植土も地山と盛土と表土とは少しく質をことに

するが、あえて名称と変えることなく用いて、その内容は説明にゆだねた。梅川氏の努力に対して明らかにしておく。

- 註 3 北棺の棺身部に当り、石棺を収容する部分で、上方の掘方と区別するために、この語を用いることにする。

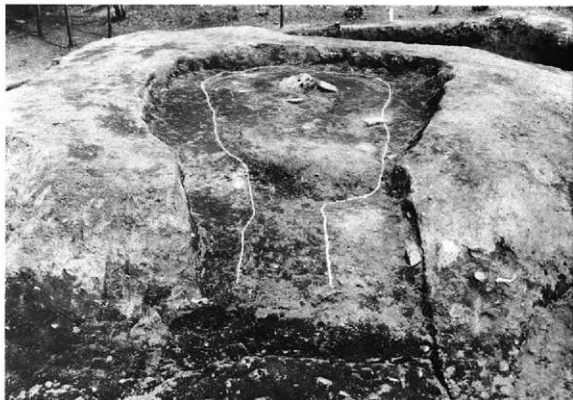




1. 祇園山第2号墳全景(発掘前—東から)



2 同上(発掘後—西から)



1. 祇園山第2号墳墓(発掘後)



2. 同上墓墳と石室床面全景



1. 祇園山第2号墳石室第2次床面



2. 同上 第1次床面と腰石据付痕



1. 紙園山第2号墳と墳丘下の石蓋土壌墓(北楯)



2. 同上 墳丘下の石蓋土壌墓(左)と箱式石棺墓(右)の墓壇全景



1. 祇園山第2号墳填丘下の石蓋土墳墓と箱式石棺墓(開棺後)



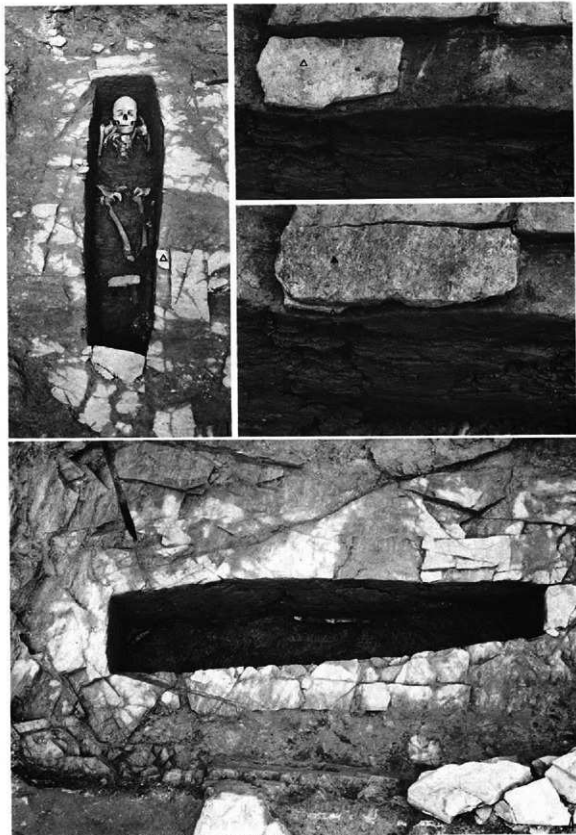
2. 同上 墳丘下の石蓋土墳墓の蓋石



1. 祇園山第2号墳墳丘下の石蓋土塔墓  
 (開棺直後—北から)



2. 同左 埋葬状態  
 (上—D1)  
 (手前—D2)  
 (南から)



1. 祇園山第2号墳填丘下の石蓋土壙墓第1号人骨(D1)と落石(▲印)  
 2.3. # 上縁剥落部と復元状態  
 4. # 副葬品出土状態



1. 祇園山第2号墳丘下の  
箱式石棺墓(兩棺)の蓋石

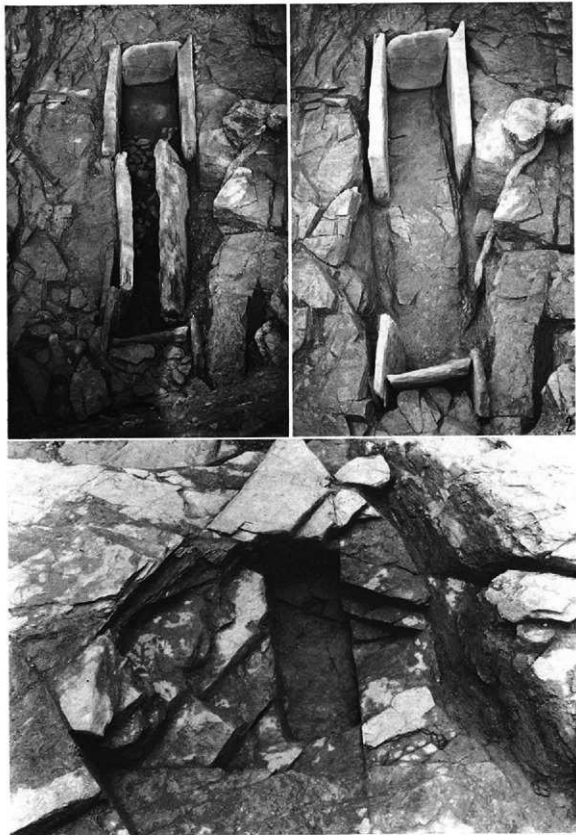


2. 同上(開棺直後)



3. 同上 埋葬状態





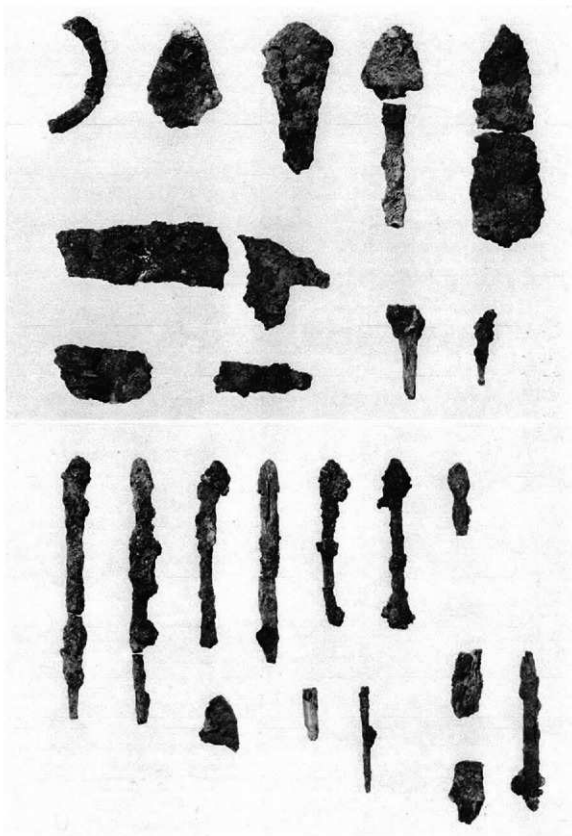
1. 祇園山第2号墳墳丘下の箱式石棺 2. 同左 割石据付状態  
 3. 祇園山第2号墳北側石蓋土壇墓(西棺)



1. 祇園山第2号墳丘下  
壺棺埋設状態



2. 祇園山第2号墳丘下壺棺



祇園山第2号墳関係出土遺物1



1



2



10



2



9



13





上，祇園山第2号墳西側中世土壇墓 下，同左 出土青磁・土師器

## V 七曲山古墳群の調査

## 1. はじめに

本古墳群は、結果的に計3回にわたって調査されている。

第Ⅰ次 昭和38年2月16日

波多野皖三教授（福岡教育大学久留米分校——当時）

竹重順夫教授（久留米大学医学部）

第Ⅱ次 昭和46年2月8日～3月16日

久留米市教育委員会

第Ⅲ次 昭和46年4月15日～5月27日

福岡県教育委員会

第Ⅰ次調査は、果樹園造成に伴い発見された2基の箱式石椁（七曲山第2号墳）について応急的に実施された。第Ⅱ次調査は、久留米市水道局放光寺浄水場の拡張と道路公園による採土とが計画されたために、浄水場拡張予定地に含まれる第1号墳について久留米市教育委員会を主体として行なわれた。第Ⅲ次調査は、道路公園の採土計画に基き、当委員会がこれを実施したものである。

第1・2号墳の埋葬人骨については、現地調査ならびに計測・鑑定等一切を竹重教授に担当していただいた。既に詳細なレポートが公表されており、これは本古墳群調査の大きな成果といえ、同教授に対して心から御礼申し上げます。同レポートについては、全文を本書に転載する計画もあったが、スペース等の関係上、編者の一存で抄録という形をとらざるを得なかった。御了解を願うものである。

なお、調査当時は放光寺古墳群と称していたが、本報告にあたり七曲山古墳群と改称した。

また、第1号墳関係については、久留米市教育委員会が別途に報告するために作成されつつあった原稿をそのまま掲載させていただいた。十分な討議もせぬままに印刷に付すことになり、このため若干の重複・齟齬を生ずることとなった。これらは全て、編者の責に帰す。

## 2. 位置と環境 (Fig. 3・104)





Fig. 104 七曲山古墳群周辺の地形と遺跡分布図 (1/6,000)

七曲山古墳群は、福岡県久留米市山川町大字城字七曲にある。

本古墳群は、昭和38年2月果樹園造成中に発見されたもので、当時福岡教育大助教授波多野院三氏等によって調査されたのは、本墳の北に隣接する、箱式石棺2基を内部主体とする2号墳であった(註1)。石棺には、それぞれ男女2体の人骨が埋葬されており、この地方における古代の墓制、風習、家族関係等を知るうえで貴重な合葬例として関心を集めていた(註2)。

七曲山は、高良山神籠石と高良大社の東方高良山(標高312.3m)の北面に派生した尾根筋の一つで標高65m~80mを測る。眼下には、「筑業次郎」の異名をもつ筑後川の雄大な流れと、肥沃な筑後平野が広がる。この豊かな筑後平野を擁する耳納山脈は、東から浮羽、吉井、田主丸の峰々と連続して久留米に至る延長20kmを指すが、大部分古生層からなる断層山脈であるため、その北面には無数の急峻な支脈が派生し、豊富な溪流と森林は人々に怡好な生活の場を与えている。山麓には数多くの遺跡が点在するが、中でも鉄器の普及とカンガイ技術が急速に進むと言われる古墳時代の遺跡が群を抜いている。特に塚花塚、珍敷塚、下馬場古墳など20数基の装飾古墳は著名である。しかし、これら耳納山麓の古墳に後期のものが多い中で、七曲山古墳群の周辺には、西南1kmに祇園山古墳(註3)、礫山古墳(註4)、同じ七曲山の裾部に見られる竹の子部落の石棺群など、前期—中期にかけてのものが集中することは、筑後地方北部の古墳時代前葉における高良山周辺の先進性を現わしているようである。

下っても、高蔭寺跡や杉城廃寺、西谷火葬墓群など奈良—平安の遺跡も少なくなく、古代における高良山が、仏教文化の受容と相いまって政治的、宗教的、文化的歴史環境を保持していたことをうかがわせる。

註1 波多野院三『久留米市山川町大字城石棺調査報告書』1963年

註2 竹重順夫『久留米市七曲山発掘の人骨群について』〈久留米医学会雑誌 26巻〉1963年

註3 石山 熊『福岡県久留米市祇園山古墳の調査』〈考古学ジャーナル73〉1972年

註4 川上市太郎『高良山礫山枕付舟型石棺』〈福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書—史蹟の部—9〉所収1934年

Fig. 104 七曲山古墳群周辺遺跡分布図

- |             |              |              |              |
|-------------|--------------|--------------|--------------|
| ◀ 1 七曲山第1号墳 | 2 七曲山第2号墳    | 3 七曲山第3号墳    | 4 七曲山第4号墳    |
| 5 七曲山第5号墳   | 6 大浦古墳       | 7 前田第2号墳     | 8 前田第3号墳     |
| 9 西丈クラブ第1号墳 | 10 西丈クラブ第2号墳 | 11 西丈クラブ第3号墳 | 12 西丈クラブ第4号墳 |
| 13 前田A遺跡    | 14 前田B遺跡     | 15 放光寺遺跡     |              |
| 16 竹ノ子古墳    | 17 竹ノ子遺跡     | 18 堂屋敷遺跡     | 19 城谷古墳      |

### 3. 古墳の配列 (PL.86, Fig.104)

確認された5基は、いずれも七曲山の稜線上に位置しており、南端を第1号墳、北端を第5号墳としている。第1号墳と第2号墳とは裾を接し合わんばかりに近接しているが、後述する主体構造からみて、木葬は營造時期上で二期に分けられる。両端の第1・5号両墳は竪穴式石室を主体としており、中央部の第2～4号墳に後出することは明らかである。

## 4. 七曲山古墳第1号墳

### (1) はじめに

七曲山第1号墳の発掘調査の契機となったのは、久留米市企業局水道部放光寺浄水場の施設拡張工事及び日本道路公団の九州縦貫自動車道建設にともなう土取工事によって七曲山の尾根が削平されることになったために実施した緊急調査である。

調査は昭和46年2月初旬から実働2週間を要し、福岡県教育委員会の協力をえて久留米市教育委員会が行なった

調査指導	九州歴史資料館	亀井 明德
“	福岡県教育委員会	石山 勲
調査員	久留米市教育委員会	塚本 直次
“	“	樋口 一成

なお出土人骨の鑑定は、久留米大学医学部第1解剖学教室竹重順夫教授の協力をえて、その所見をえることができた。記して謝意を表したい。

### (2) 墳 丘 (PL.87, Fig.105~107)

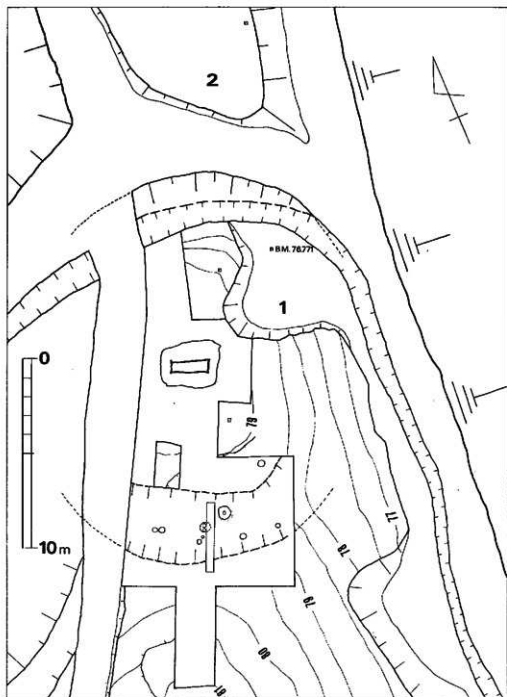


Fig. 105 七曲山第1号墳全体図 (1/200)

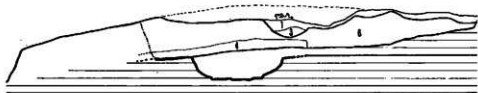


Fig. 106 七曲山第1号墳墳丘南北断面図 (1/100)

- 1 黒褐色腐蝕土    2 赤茶褐色土    3 黒色焼土    4 灰茶褐色土    5 暗灰茶褐色土  
6 茶褐色土 (遺物出土層)    7 灰褐色土    8 淡黄茶褐色土    9 混礫灰素土 (地山)

墳丘の径13.5m, 推定復元高1.0mで, 墳頂部が約20cm削られている。周溝は巾3m~4m, 深さ約50cmの浅い溝がめぐる円墳である。封土は, 石室附近の上層を厚さ30cmほどの粒子の細かい灰褐色土で覆い, その上に一層の盛土を施したもので版築は認められない。

墳丘頂部から葦石状の石材が検出され, 大きさが30~40cm大の扁平な谷川石を使用している。

約20cmの削平を受けているので断定することはできないが, 古墳との関連を仮定した場合, 荒されていない斜面や, 掘部に, この種の石材は認められないので, 築造時に葺かれた葦石が追葬時に失われたのか, 追葬時に頂部附近のみ葦石を張ったものかであろう。

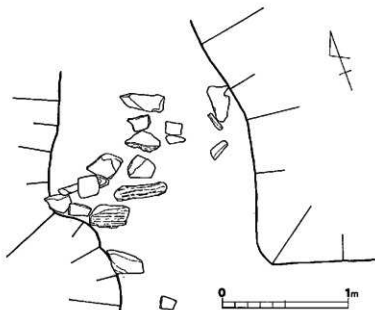
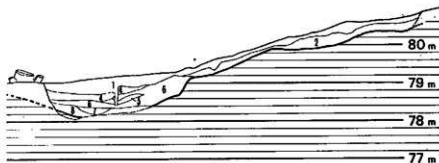


Fig. 107 七曲山第1号墳墳頂部葦石状石組実測図 (1/30)



### (3) 竪穴式石室 (PL.88~89, Fig.108)

石室は、整地後の地山から掘り込んだ $3\text{ m} \times 2 \sim 2.4\text{ m}$ の墓槽の中に造られた小型の竪穴式石室で、石材は耳納山に産する片岩系の割石を使用している。石室の規模は、床面で長径 $197\text{ cm} \times$ 短径東 $51\text{ cm}$ 西 $49\text{ cm}$ 、高さ $51\text{ cm}$ を測る。東部の床面が西側に比べ広く造られており、埋葬するときの身体(冑)の位置をあらかじめ意識したものであろう。東西の短側壁は1枚石を使い地山を $30\text{ cm}$ ほど掘り込み直立させていた。南北の長側壁は割石を小口積みにし、わずかに持ち送り構造になっている。基部に形の整った大きめの石を置き、その上の壁面は、大小の割石を自由に使い築壁しているが、北側の壁をみてわかるように壁の中央部と東西では石材の利用と築壁状況が多小異なる。左側(西)に比較的大きな石を、右側(東)に小形の石を使い東部の持ち送りを意識して床空間のとり方と同じ基調が認められる(Fig.108)。石室の背後は、 $40\text{ cm} \sim 60\text{ cm}$ の粗大割石で控積みを施し墓槽内を密に充填し、石壁の安定を保持させている。

床は、土壌内に掘り込んだ $10\text{ cm}$ 内外の浅い長方形の掘り方の中に赤褐色土を充填し、その上に扁平な板石を敷き床面を整えている。床石の接合部などには型による調整痕が残る。

なお西側の床石が失われているが、これは追葬時において蓋石の一部に転用したために欠損したものである。

蓋石は、1個の扁平な板石を割いて2枚にしたもので、亀裂痕や形状に一致点が見い出せる。蓋石の接合部は、型を使用して幅 $10\text{ cm}$ の噛み合せを作り、石室との接合部は粘土による目張りをして、密閉していた。なお東側の蓋石には両面加工が認められたが、表面の浅い加工と西側の蓋石とを噛み合せてみると石室を完全に封閉することができないことがわかった。つまり築造時、加工に手違いが生じたので、再度裏面を削り込んで噛み合せを完成したものとされる(PL.88, Fig.109)。

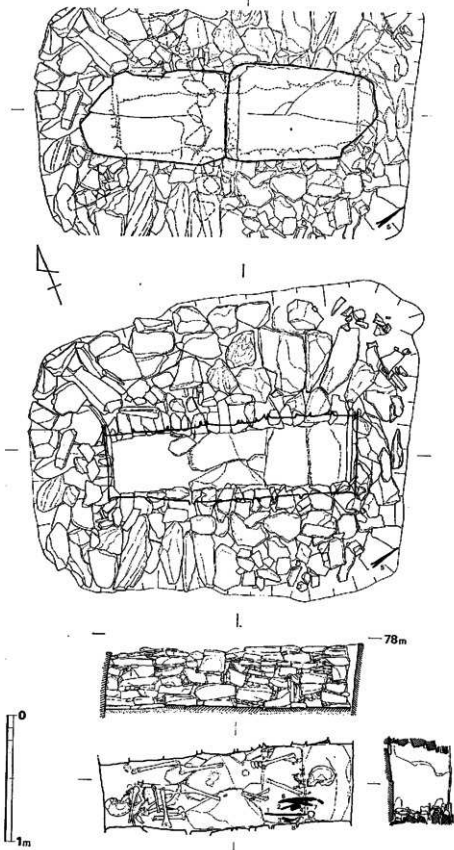


Fig. 108 七曲山第1号墳整穴式石室実測図 (1/30)

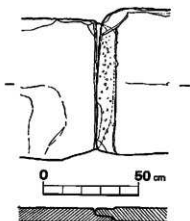


Fig. 108 七曲山第1号  
墳壺石加工状  
態実測図  
(1/20)

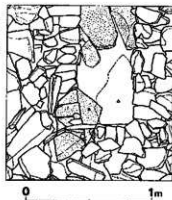


Fig. 110 七曲山第1号墳床石再使用状態実測図 (1/30)

内部は漆密に赤色顔料が塗付され人骨にも顔料が付着していた。

石室内には、頭を東にした仰臥位の1号人骨（壮年～熟年期）と、その左脚部に2号人骨（壮年期）が納められ、1号人骨に伴うとみられる各種鉄器の副葬品が発見された。低い墳丘のわりには、雨水や動植物による侵蝕が少なく、ほぼ完全な形で発掘できたのも、石室の構築が極めていいに行なわれていたことを物語っている（PL.90・91, Fig.108）。

#### (4) 築造工程と追葬について

以上のような調査結果から古墳の築造から埋葬までを再現すれば、概ね次のような過程を経ていると考えられる。

古墳の位置を平野に張り出した尾根上に選地した人々は、樹木を伐採して取り除き、傾斜する地形を石室の構築に必要な面積だけ削平して地面を整え、墓壇の掘り込みにかかる。

そのあと墓壇の中央軸線に合わせて床面のプランを確定し、浅い掘り方を残した後、東西の短壁を立て込み、側壁の基底部に比較的形の整った割石を固定させ、あるいは数段積み上げた後床石を敷き込む——この段階であらかじめ掘られた浅い掘り方の中に粒子の細かい土を入れて、厚さの異なる床石の面を合わせようとするもので、型による接合部の調整と目的を一にした作業である（PL.92）。

次に、割石の小口を合わせ、同時に粗大割石による控積みを施こしながら四壁を完成させ、石室の構築を終える（PL.89, Fig.108）。



その後遺体と副葬品を納棺したのち蓋石をかぶせて封閉し、土を盛って塚をきつき黄石を葺いて築造を終了させたものであろう。

追葬の状況は、追葬者（1号人骨）の納棺時にはその逆の形（開棺まで）が予想される。盛土の除去は、開棺に必要な広さがあれば十分であり、蓋石をはずして開棺したのに、すでに白骨化していた前被葬者（2号人骨）を、棺外に取り出し、新たな被葬者と副葬品を納棺し、再び前葬者の人骨をその脚部に集骨したのち、棺を閉じたことが推察できるようだ。

また、追葬か同時埋葬かの問題について、昭和38年に調査された2号墳の報告（註1）に接すると断定を避けながら同時埋葬とされていたが、本1号墳に関しては、集骨された2号人骨（PL91）床石の再使用状況（Fig.110）等によって追葬であることは疑いない。

## (5) 人 骨

室内には、成人男性2体が差違いで埋葬されており、集骨が認められることから追葬が行われたことが明らかである。人骨の調査については、後述する第2号墳の場合と同様に、久留米大学医学部第一解剖学教室（竹重順夫教授）に担当していただいた。以下に同調査団による詳細な観察と所見を抄録する。

### 久留米市放光寺遺跡古墳群発掘の人骨について

久留米大学医学部第1解剖学教室（主任：竹重順夫教授）

竹重順夫	宮崎道雄	金谷庄司	関和彦
岡村 肇	足達 剛	吉弘多香子	毛利 純
小柳温信	多田限照		

<久留米医学会雑誌 34-7> 1972年

## 第1章 緒 言

高良山の東裏山、七曲山中腹（海拔100m）の尾根にある放光寺遺跡古墳群は元来「七曲山遺跡」と呼ばれ、昭和38年2月古墳初期のものと思われる石棺2基と人骨4体が出土し、当時珍しい合葬例として報告されていたが、その後、漸次発掘が進むに従って4世紀時代と考えられるふき石を持った円墳や方形周溝墓などを含む5種7基の古墳が発見された。特に発掘された人骨は約4,000ml（写真1）にわたって存在する円墳2基、方形周溝墓1基、堅穴石室2基、箱式石棺墓1基、火葬墓1基中の割り石小椀石室（写真2）の内部に人骨2体（写真3, 4, 5）が発見され、同時に副葬品として鉄の刀などが観察された。尚、珍しい事は、先に報告された合葬例と異なり、人骨が人間的に集められた傾向が窺われ、合葬例の研究に重要な課題を提示するものと思われる。

## 第2章 研究材料及び方法

福岡県久留米市山川町七曲山中腹の放光寺遺跡古墳群より発掘した人骨の中、頭蓋骨を観察、計測し、同時に日本石器時代人、古墳時代人及び現代日本人との人類学的関係を比較検討した。

## 第3章 自己所見

割り石小積み石室中に存在する人骨の中、1人の人骨は仰臥位で頭を東南東の方向に向けて埋葬されており、他の人骨は前者の足の部分、即ち西北西の隅に全部の骨が集められ再埋葬された傾向が窺われる。更に、先に報告した七曲山のA、B棺中の2人骨はいずれも男女の合葬例であったが、本発掘の人骨はその形態からいずれも男性の骨格であり、異時埋葬されたものではないかと考えられる。

## 1) 人骨Ⅴ1

性別、男性。年齢、壮年～老年。

## 1) 保存状態

本頭蓋骨は右側頭骨の一部欠損が見られるのみで、殆ど完全な形態を有し、骨質は厚くて強く、骨自体の保存状態は非常に良好である。

## 2) 人骨Ⅴ2

性別、男性。年齢、壮年。

## 1) 保存状態

本頭蓋骨は右前頭骨、頭頂骨、側頭骨の部分的欠損が見られるが、骨質は厚くて強く、保存状態は良好である

## 3) 本人骨と古代人骨及び現代九州人との比較

本人骨の計測値を古代日本人及び現代九州人のそれと比較すると、表3に示す様に、頭最大長は他の比較群と比較すると大きい数値を示しているが、他の計測値、示数共に亀甲遺跡発掘のⅤ1、2の人骨と類似した成績を示し、現代の日本人及び貝塚人より大きい数値を呈している。

## 第4章 考 按

耳納山系の高良山付近は古くは親子の同時埋葬例が、又、近くは昭和38年に男女の合葬例が発掘され、更には本発掘に於いて、男性2人の合葬例が発見されたことからしても、合葬が此の地方に習慣づけられていた風習であると考えられる。

さきの男女の合葬例発掘の折、問題とされた同時埋葬か異時埋葬かについては、この度の発掘状態から判断して異時埋葬ではないかと思われる。即ち、図1にも示す様に、Ⅴ2の人骨が石室の西南西部に集められたと思われる形跡が見られる。即ち、1人の死亡の折、再度石室があげられ、さきに死亡した他の1人の人骨は1個所に集められた後に埋葬されたものと思われる。

## 第5章 結 語

放光寺遺跡古墳群発掘の人骨群の主な特徴を要約し結論づけると、割り石小積み石室内に男性2人の屍体が埋葬された事は、此の地方の人間関係、風習を究明する貴重な材料であると共に、埋葬状態を探究する好材料となろう。

次に、各頭蓋骨について見ると、いずれの骨も骨質は良好であり、その計測値は長さ、高さ、周径共に長くて広く、大きな頭蓋骨の形態を示し、七曲山でさきに発掘された男性頭蓋骨より大で、亀甲発掘の男性頭蓋骨と類似の傾向を示している。

## (6) 出土遺物

## 遺物の出土状態と被葬者の関係について

棺内からの副葬品は、1号人骨の左肩部に集中し、短刀と刀子2点は、刃先を脚部に向け錐状の鉄器、鉋、鋳、鉄斧は刃先を頭部にした状態で副葬されていた(PL.90~92・193)。また棺外、控積みの東南の隅より鉄矛が先端を東に向け出土している。土器は、葺石の直下より破砕された状態で出土した小型の壺が1点だけである。他は周溝内(南)の埋土より出土した歴史時代の遺物である(PL.194)。

出土鉄器と被葬者との関係であるが、棺内のは出土状況からみて、1号人骨に伴うと考えられるが、棺外の鉄矛については、どちらともとれる。ただ追葬時の開棺がどの範囲で行なわれたことによって異なるが蓋石2枚を開くことで追葬が可能であれば2号人骨に伴うともみることでもきよう。

特に関心のあることは、蓋石と床石に残された鋳による加工痕と副葬品の鋳の刃幅が一致することである。ということは、古墳の築造に使用された鉄器が1号人骨に副葬されたときのみならず、当然、彼が古墳を築造し、かつ、2号人骨を埋葬した人物と一致する可能性が高くなるし、2号人骨と1号人骨の関係が、きわめて濃い血縁関係にあることをうかがわせるのである。

## 鉄器 (Fig.111-1)

## 鉋

茎31.1cm、刃長3cm、全長34.1cmを測る細長い鉄身形を呈する。茎身は長方形で厚さは柄尻部0.3cm、刃に接する部分で0.2cm、刃部に向かって薄くなる。幅は柄尻0.65cm、中ほどで最大幅1.2cmを測り、この附近より巾が狭くなり刃先に続く、関は認められない、刃は両刃であるが切先はわずかに偏る。切先から4cm、13°前後の反りがあり断面は三日月形を呈する

## 錐状鉄器 (Fig.111-2)

全長14.1cm先端部は鋭く尖る。断面は基部が長方形で、胴部と先端部は正方形を呈する。

## 鋳 (Fig.111-3)

元幅1.2cm×1.0cm、先幅1.15cm×0.45cm。正方形の鉄身が刃部に向うに従って長方形となり、長さ0.75cm、巾0.8cmの楔状の刃先に連なる。頭部は打撃によって生じたと思われる巾2.1cm×1.7cm、厚さ0.4cmの面をもつ。蓋石の噛み合わせ、床石に残る調整痕と刃先の幅が一致することから、本墳の石室構築の際使用された工具と思われる。

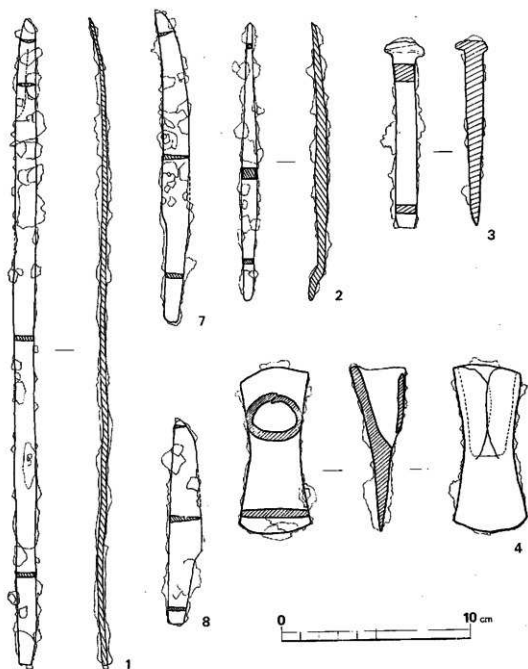


Fig.111 七曲山第1号墳出土鉄器実測図1 (1/2)

## 鉄 斧 (Fig.111-4)

全長8.9cm, 阿はなく(最大巾3.8cm) 中央部の狭間で体部と刃部に分かれる。刃部はゆるいカーブを保ちつつ刃先に向って開く。柄を装着する袋部は、左右から鉄板を折り曲げて作ったもので、2.3cm×1.55cmの卵形を呈する、刃部の偏りからみて手斧とみられる。鍛造品である。

## 刀 子 (Fig.111-7・8)

7は、切先を欠損している。復元全長16.7cm, 刃長11.4cm, 茎長5.3cm, 元幅1.55cm, 同重ね0.3cm, 茎元幅1.2cm, 同重ね0.3cm, 鬨は棟部のみで直に切り落している。刃部に反りが認められる。肉薄の刀子である。8は、7と同様切先が欠ける。全長11.9cm, 刃長7.5cm, 茎長4.85cm, 元幅1.7cm, 同重ね0.35cm, 先幅1.05cm, 茎元幅1.4cm, 同重ね0.2cm, 先幅0.85cm, 鬨は刃部のみ、反りはない広幅で短い刀子である。

## 武 器

## 鉄 矛 (Fig.112-5)

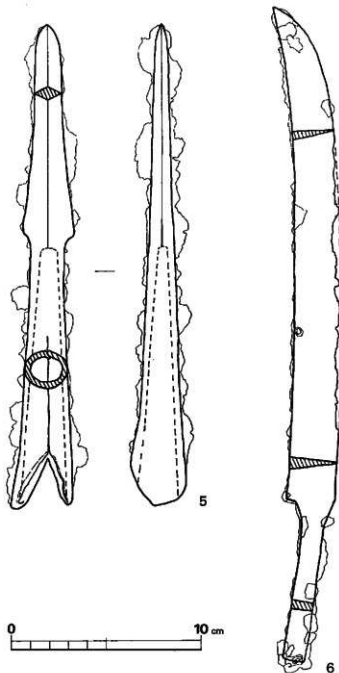


Fig.112 七曲山第1号墳出土鉄器実測図2 (1/2)

全長25.5cm, 身部長11.5cm, 元幅2.7cm, 先幅1.1cmを測る。断面は切れのよい菱形を呈する。袋部は長さ14.0cm, 元幅1.85cm, 先幅3.2cm, 袋は径1.3cm×1.7cmの楕円形の筒状を呈し、鉄斧と同様鉄板を曲げ合わせている。

#### 短刀 (Fig.112-6)

全長34.55cm, 刃長25.9cm, 茎長8.65cm, 先幅2.0cm, 元幅2.55cm, 茎幅1.2cm, 先重ね(厚さ)0.4cm, 元重ね0.6cm, 茎先重ね0.5cm。小振りであるが形姿が整い鋒はフクラ枯になっている。刃は直角から浅く斜に切った狭関と、斜に切っただけの刃関からなる。反りは1.0cm, 茎反り0.4cmが認められる。

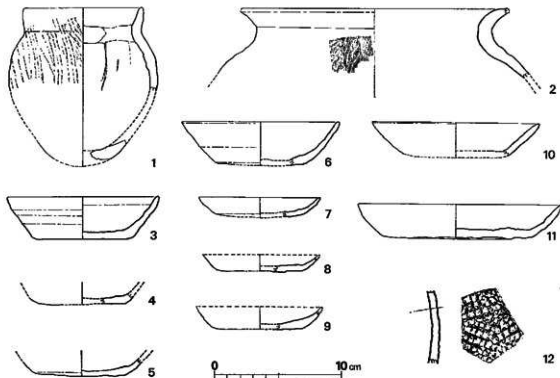


Fig.113 七曲山第1号墳出土土器実測図 (1/30)

#### 土師器 (Fig.113-1)

##### 小形丸底壺

墳丘頂部の黄石状石組の下層より出土した。三点の破片より復元したもので、古墳に伴う土器は、これのみであった。

復元径9.6cm, 器高12.6cm, 胴部最大径11.8cmを測る。丸味をもった肩部から直立きみに外反する口縁をもつ。胴はわずかに長胴となり、底は丸味をもちつつ尖り底となっている。

内面は、下から上方へと、頸部ではヨコ方向のヘラケズリによって器壁を均質にしている。

外面上半部には、頸部から肩にかけて、粗い櫛掻状の刷毛目が見られる。胎土は精選された良質の粘土を用い、焼成よく柔味のある淡褐色を呈する。この種の類例は乏しく、速断は許されないが、近郊の八女市室岡の野口遺跡や道添遺跡からの出土遺物の中に、和泉式の段階に入ると云われる小形丸底壺が報告されているが、本墳出土の壺と近似した形態的特徴がみられる。

## (7) む す び

最後に本墳の築造時期について述べておきたい。築造時期を考えるうえでの手懸りは、内部主体の構造、出土遺物、人骨等である。

人骨の鑑定所見は、八女市龜ノ甲遺跡出土の人骨に類似すると報告されているので除く。

内部主体は、扁平な割石による小形の竪穴式石室で、虚空蔵11号墳（朝倉町・註1）、甲塚古墳陪冢（久留米市藤山町・註2）、蛇谷古墳（瀬高町・註3）、など数例が知られていて、虚空蔵11号墳を前期とする以外は、中期前半代におかれている。

竪穴式横口式石室の初源の傾向は老司古墳（註4）の4基の竪穴式石室において認められ、うち3号石室と2号石室には複数の埋葬が行なわれていた。この時期は5世紀の初頭より中頃中頃までの間を与えられている。

しかし、他の地域では、この種の石室を確認することができないため、竪穴式横口式石室が盛行するのは5世紀後半代として、家族墓への移行期としている。

家族墓と合葬例を同一視できないが、複数埋葬の例は、七曲山第2号墳（石棺）、祇園山2号墳下の石蓋土壙墓（註5）、蛇谷古墳（竪穴）、持丸7号墳（石棺、甘木市、註6）、乃木松5号墳（石棺、三輪町、註7）などがあり、4世紀末～5世紀前半代が与えられ、古墳時代前期～中期前半代の石棺や竪穴式石室への複数埋葬は、家族墓への始源的様相をもつものかも知れない。とすれば本墳の築造時期の下限がおさえられるようである。

では出土遺物はどうか。小形の丸底壺は前述のように和泉式に入る頃とみられる。鉄器については、短刀や鉄矛は多少新しい鋸があるが、工具類の特徴や組み合わせからみて古い様相を持っているようである。鉄剣を副葬した虚空蔵11号墳が、本墳より先行しているとすれば、追葬という問題を踏えながら、築造の時期を5世紀の前半代に求めておきたいと思う。

註1 高山 明『須川遺跡群』〈朝倉町文化財調査報告書〉1967年

註2 甲塚古墳の西北部にある小形の割石積の竪穴式石室で、鉄剣等が出土

註3 近沢 康治他『蛇谷古墳調査概報』〈筑後考古 3〉1975年

註4 嶋山 猛他『老司古墳』福岡市教育委員会 1969年

註5 福岡県文化課の調査によって発見されたもので祇園山2号墳(後期)の下層地盤を掘り込んだ石葺土  
 墳墓より差し違いの成人人骨が出土した(IV-②参照)。

註6 高山 明他『持丸古墳群』<甘木市文化財調査報告書 1> 1974年

註7 新原正典他『乃木松古墳群』三輪町教育委員会 1977年

## 5. 七曲山第1号墳関係歴史時代の遺構と遺物

### (1) 遺 構 (Fig. 114・115)

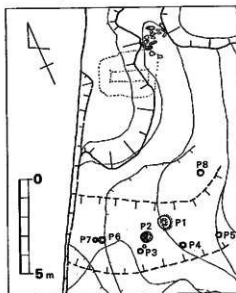
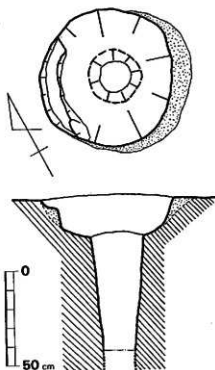


Fig. 114 七曲山第1号墳丘陵南半歴史時代  
 祭祀遺構実測図 (1/200)

Fig. 115 七曲山第1号墳丘陵南半歴史時代祭  
 祀遺構P1実測図 (1/20)



1号墳の南で確認した周溝の中において炉穴と、これを取りまく柱穴が検出されたのでその概要を述べておきたい。



幅10cmの焼土がめぐる径80cmの炉穴(P1)で浅いすり鉢状を呈する。中心部は径22cm、深60cm以上、垂直に下がる柱の抜き跡のような穴があいている。そして炉穴を中心に南側に径50cmのP2と径25~30cmのP3・P4が検出され、いずれも深さ20cm~25cmの柱穴である。この一群の遺構については性格不明の点も多いが、後節においてふれられているので後述にまかす。出土遺物は、皿や甕などがみられ、奈良時代—平安時代にかけてのものと思われる(PL.92, Fig.114)。

## (2) 出土遺物

### 杯 (Fig.113-3~6)

3は、口径12.1cm、器高3.35cm平坦な底部から、直線的に開く胴部との間に明瞭な腰をもつ。器壁の内外は指ナデを施している。底部はヘラにより切り離し痕がみられる。8は、口径12.7cm、器高3.5cm、底部から立上る胴部はゆるく内湾しながら開く、内壁面に刷毛によるヨコナデがみられる。底部はヘラ切りによる。4~5は底部のみであるが3~8と同様の形状をもつと思われる。4点の杯は口径、器高、焼成の状態からみて規格性が認められる。これらは周溝中の堆積土第6層~8層に含まれていた。

### 皿 (Fig.113-7~11)

7~8は小皿である。口径は、9.2cm~9.9cm、器高は、1.3cm~1.8cmを測る。全体に胎土は精選され焼成もよく黄褐色を呈する。底部にはヘラ切りが見られる。10は口径13.3cm、器高2.8cm、11は口径16.6cm、器高2.75cm、底部に襷巻状の条痕がみられる。

### 甕 (Fig.113-2)

口縁部の破片のみであるが復元口径21.4cmを測る。器高は不明、肩から口縁にかけて丸く外反し、体部はタテに細かい刷毛目がみられる。周溝内の3層から出土した。

その他壇丘表土層より須恵器(同12)の小片1点を採集した。甕なし壺の胴部と思われる。器表には、格子状の圧痕が、内面には同心円状の叩き痕が認められる。

出土遺物からみた年代は、近隣する高良山、西谷葬墓群より出土した土師器と、近似するところから、奈良時代後期から平安時代にかけての時期が与えられよう(PL.194)。

## (3) むすび

本古墳の南側周溝内で検出されたピット群について、若干の考察を付しておきたい。

すでに本文中に述べられた通り、これらのピット群は古墳と直接関係ないものである。出土の土師器の形式からも、そのことは確言できる。すなわち、すべてが杯ないし盤状の土器であって、奈良時代後期～平安時代前期の特徴を示している。

このピット群が単なる生活遺構でないことは、立地が標高80m付近の尾根上で、居住に不適当な場所であること、及び建物跡とするためには、絶対的にピットが不足することなどから容易に察せられよう。住居以外の構築物とすれば、それは果して何であつたらうか。

このことを考える場合、P1と呼んだ特殊なピットが重要な手がかりとなる (Fig. 114・115, PL. 92)。すなわち、径80cmの浅いピット中に、更に、径22cmの深いピットが組み合わされた二重構造で、外側のピットの内には焼上が残存していたのである。ピット中に丸太を打ち込み、その周囲で火を焚いたことが推定される。単なる伊跡などでないことはいうまでもない。しかも、規模や配置の上からしても、P1は群の中心をなすのである。P1の南側をとり囲むように、P3～6のピット4個が、ほぼ等間隔に配されていることに注意したい。このことから、これらピット群が祭祀、修法の遺構である可能性を想定できないであらうか。

もとより、性格不明のものを直ちに祭祀と結びつけるようなことは厳に慎しむべきであらうが、このような場合、祭祀以外に説明のつけようがない。

しかし、たとえこの遺構が祭祀の跡であるとしても、その祭祀の性格、すなわち、それが仏教的なものであるか、神道的なものであるか、また祭祀の対象は何か等の疑問は解明できない。出土遺物が土師器の細片のみでは、何とも判断のしようがないのである。

最も常識的には、この古墳が歴史時代に入ってより、何らかの事情で注意され、祭祀が行なれたのではないかということが考えられる。もとより、被葬者の血脈が記憶されているほど近接した時代ではないから、この古墳が祭祀の対象となるためには、それなりの理由があるはずである。一般的には盗掘や、偶然の発見などがその理由となるであろうが、この古墳の場合、そうした後世の擾乱を受けていないことが不可解である。つまり、この古墳が当時なぜ注意されたかが判らないわけで、祭祀を行なった人びとが、これを古墳とは知らずに、たまたま祭祀の場を選んでしまったかといふようがない。その祭祀の目的、内容も不明であるが、恐らく、墳頂部に祈禱・修法の対象を安置し、それに対して南から北に向うように、祭祀の設けがなされたのではあるまいか。墳頂部付近が削平され、配石状の遺構が見られたとれば、尚更その感を深くする。

極めて大胆な推理であるが、筆者はこの遺構を以て高良山における山間仏教の修法遺跡と考えたい。高良山に仏教が入ったのは、縁起によると天武天皇即位2年癸酉歲(673)とされるが(註1)、現在の考古学的知見でも、奈良時代後期までは確実に遡り得る(註2)。

耳納山脈北麓の寺院の中には、市内山本町柳坂の永勝寺の如く、明らかに奈良時代から山中

に営まれた寺院があり(註3)、高良山神宮寺高隆寺出土瓦の中にも、奈良期のものがある。また、高良山頂見沙門岳の北斜面に営まれた西谷火葬墓群は、九州地方における最大級の火葬墓群であるが、奈良時代後期に始まり平安時代前期に及んでいる(註4)。

こうしてみると、高良山、ひいては耳納山脈におかれる山間仏教の歴史は、予想外に古いといわねばならない。高隆寺や永勝寺の場合は、その出土瓦の様式からみて、国衙・大宰府との密接な関わりが指摘できるので、正統派の仏教であったと考えられるが、当時公けに認められた仏教以外にも、一種の「山林仏教」とでもいうべきものが、山地を活動の舞台として既に存在していたことが考えられる。それが、全国的にも奈良末期から漸次盛行する傾向にあったらしい。その性格は、在来の奈良仏教、都市仏教に対立するようなものであり、奈良仏教の官府の仏教に対して、社会的、民衆的な仏教であったといわれる(註5)。この地方においても、国衙、国分寺の官府の仏教に対して、耳納山脈に拠る山間仏教が存したことは想像に難くない。高良神に仏教帰依を勧めたのが「斗蓋之比丘」であったと伝えられる(『高良縁起』)ことから、そのような背景が充分考えられよう。

式内名神社高良玉璽命神社(高良大社)は、『日本紀略』延暦14年(795)条に「五月壬申、筑後国高良神、奉率授二從五位下一」とあり、これが正史上における高良神の初見である。すなわち、高良神がこの時はじめて平安の宮廷に国家の守護神として認められたのであるが、当然その前代からの勢力伸張はあったとせねばならぬ。その頃の高良山の状態は、今日極めて不明確である。このような遺構が、或いはその一つの手懸りとなることも考えられる。かかる問題を、ただ1例のみを以て論ずることは極めて隠当を欠くが、将来の参考に資するべくあえて私見の一端を述べた次第である。

1. 『高良縁起』石清水八幡宮記録 38, 建保7年(1219)写本、石清水八幡宮蔵
2. 古賀壽『高良宮の創祀と神宮寺』〈地方史ふくおか 第2巻第4号〉 1971年
3. 小田富士雄・瀬久副郎『筑後柳坂山永勝寺の遺物』史跡と美術 第33巻12 1963年
4. 久留米市教育委員会『西谷火葬墓群』〈久留米市文化財調査報告書 3〉 1971年
5. 原田敏明『山の崇拜と山の神』『日本宗教交渉史論』 1949年

## 6. 七曲山第2号墳

- (1) 墳丘 (PL.95, Fig.116~118)

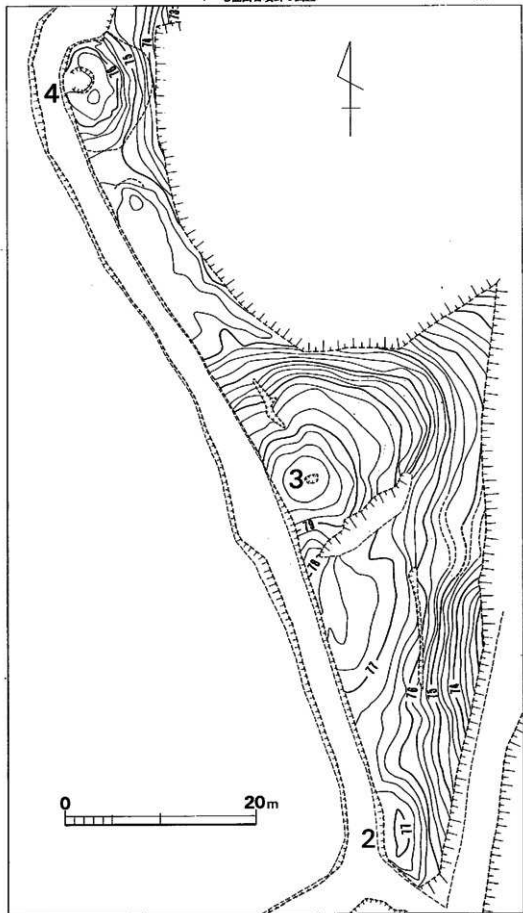


Fig.116 七曲山第2・3・4号墳地形測量図 (1/400)

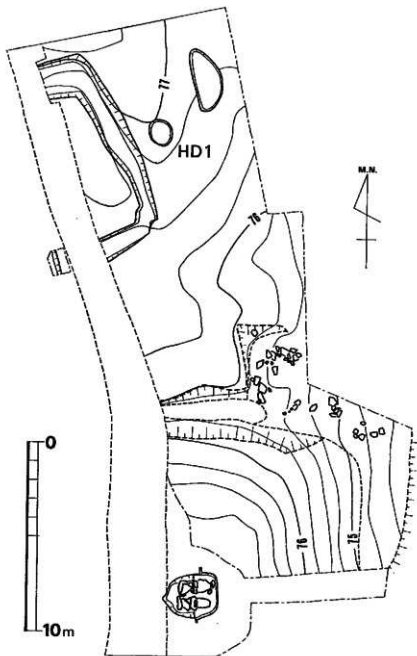


Fig.117 七曲山第2号墳・方形周溝遺構・第1号火葬墓 (HD1) 全体図 (1/200)

方墳であるが、 $\frac{1}{4}$ 強が現存するのみである。主体が墳丘の略中央部に営まれたと仮定する

と、当初の墳丘は1辺18~19mと推定される。高さは北側周溝底からみて1~1.3m、東側裾部からみて2m前後であったと思われる。

- 1 混礫茶褐色土
- 2 混礫黄褐色砂質土
- 3 混礫褐色弱粘質土
- 4 混礫暗茶褐色粘質土
- 5 混礫灰褐色弱粘質土
- 6 混礫暗褐色粘質土
- 7 混礫茶褐色粘質土
- 8 混礫灰茶褐色粘質土

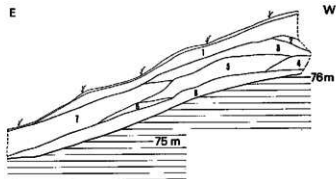


Fig. 118 七曲山第2号墳丘東半東西断面図 (1/60)

墳丘構築にあたり、表層は削平されている。地山整形痕は顕著ではなく、盛土も最も厚い所で約1mに過ぎないが、下からのみかけは作業量以上のものがある。

青石材が転落したと思われる小石材が、北東側裾部に散乱している。ただし少量であり、流失分を考慮しても墳丘全面に葺かれたとは考え難い。

北東側裾部は、尾根に直交する上端巾1.9~2.6mの溝によって画されている。南側は破壊されており、溝の有無は不明である。

## (2) 内部主体 (PL.96・97, Fig.119・120)

同一墓境内に、南北に併列する2基の箱式石棺が納められている。墓室は、2.7×2.4m(上端値)の不整形方形プランで、浅い。2基の石棺は、いずれも長軸を東西にとり、北側のそれを第1号箱式石棺、西側を第2号箱式石棺とする。これは、竹重教授調査時のA石棺、B石棺に各々対応する。

両棺とも、西側小口部は農道建設の際に破壊されている。蓋石もいったん除去されており、詳細は不明であるが、頭部に大きい石材を配する点で共通する。

2棺は、土層断面からみても同一時期に営まれたものと思われる。墳底をさらに一段掘りこんで棺身の板石を立て、裏込に適宜粘土を使用し、頭部寄に大き目の石材を配する等、軌を一にする。第1号棺がひとまわり大型で、その棺身上端が稍上位にあたる点異なるのみで、西側小口部は同一線上にくるようにキチンと揃えられている。

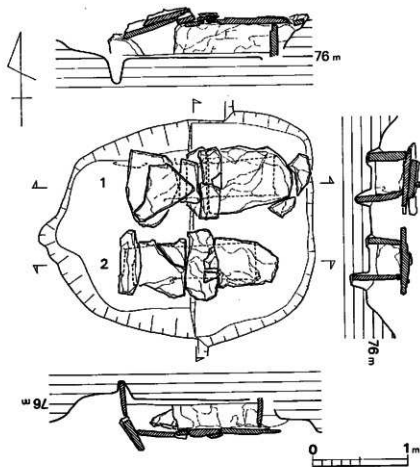


Fig.119 七曲山第2号墳主体全体図 (1/40)

両棺の規模は、以下のとおりである。

	長さ	巾	深さ
第1号棺	(1.6) m強	40~(37) cm	31cm
第2号棺	(1.4) m	39~(33) cm	27cm

( ) 内は推定値

なお、棺の内外とも副葬品は皆無である。

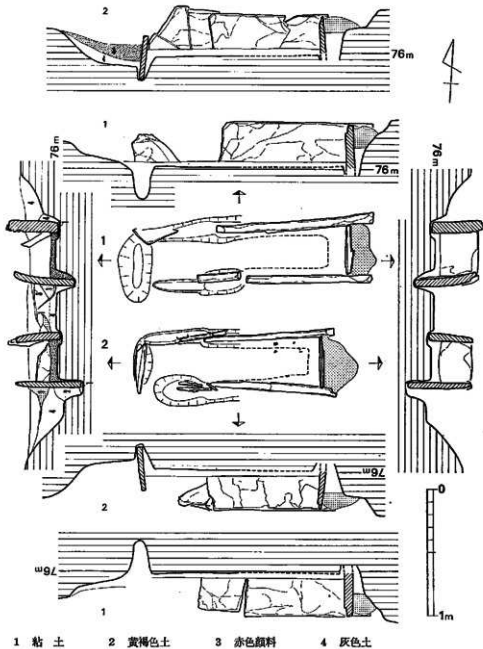


Fig. 120 七曲山第2号墳第1・2号箱式石棺実測図 (1/30)



## (4) 人 骨

A・B 両棺とも、東枕とする男女各1体を葬っており、B 棺の被葬者達が群年長であったという。以下に、久留米大学医学部第一解剖学教室（竹重順夫教授）による詳細な観察と所見を抄録する。なお、筆者らの調査時にB 棺から若干の歯と骨片を採取している。

## 久留米市山川町七曲山発掘の人骨群について

久留米大学医学部第一解剖学教室（主任：竹重順夫教授）

竹重順夫	宮崎道雄	伴 文夫	森 洋一
田中瑞穂	米光一仁	西村四郎	佐藤定人

<久留米医学会雑誌26-3・4> 1968年

## 第1章 緒 言

七曲山人骨群（4人の人骨）は昭和38年2月16日、福岡県久留米市山川町七曲山のみかん畑から古墳初期のものと思われる石棺2個とに共発掘された。即ち、現場（図1）は高良山の裏山、七曲山の中腹部、海拔約100mの山腹で、2つの石棺は深さ約1mの場所に、約45cmの間隔をおいて東西に並行にならんでおり、石棺の大きさは2つとも長さ約2m、幅約40cmで、蓋石は写真1、2に示す様に二重にならべておいてあり、内部は朱で密封されていた。又石棺内にも、附近にも副葬品は発見されなかった。尚、珍しい事は2つの石棺内にはいずれも2人の人骨が一緒に埋葬しており、各骨の位置及び各骨重複の状態から、考古学上、古代社会科学上の貴重な資料として、又合葬例の1つの研究報告補遺として重要な問題を提示するものと思われる。

## 第3章 自己所見

## A) 観察所見

## 1) A 棺

A 棺内には2人の人骨が東の方向に頭部を向けて埋葬しており、石棺中に散在する骨を復元して観察すると、

## 1) A 棺人骨系1

## a) 頭蓋骨

男性。推定年齢、壮年。

## i) 保存状態

本頭蓋骨は顔面骨の欠除が見られると共に、後頭骨、側頭骨の欠損が見られた。又骨質は強くて厚く、一部骨実質の変化が見られるが骨自体の保存状態は良好である。

## 2) A 棺 人骨 2

## a) 頭蓋骨

女性。推定年齢、壮年。

## i) 保存状態

本頭蓋骨は側頭骨、後頭骨並びに顔面骨のすべてを欠損しているが、骨自体の保存状態は良好で、骨質は頑強である。

## II) B 棺

B棺内には2人の人骨がその位置は明瞭でないが、A棺同様頭部を東に向けて埋葬しており、この骨を復元し観察すると、

## 1) B棺人骨 1

## a) 頭蓋骨

男性。推定年齢、壮年～熟年（A棺より稍高令である様に思われる）

## i) 保存状態

左側頭骨、左頭頂骨、前頭骨の一部欠損及び顔面骨の欠損がみられるが、骨自身の保存状態は良好で、骨質も頑強である。

## 2) B棺人骨 2

女性。推定年齢、壮年～熟年。

## i) 保存状態

右側頭頂骨、前頭骨及び左側頭骨の欠損が見られると共に、顔面骨の欠損が見られた。尚、骨質は良好である。

## B) 計測所見

## b) 大腿骨

次に、推定身長であるが、男性で160cm、女性で150cm前後を呈していたように大腿骨より算出される。

## C) 七曲山人骨と古代人及び現代九州人との比較

七曲山人骨の計測成績を日本古代の貝塚人及び現代九州人の頭蓋計測値と比較すると表3に示す様に、男女共に八女郡室岡亀甲発掘の人骨及び貝塚人々骨の数値に近似し、熊本県御領人骨より数値上は小さく、現代九州人より大きい様である。

## 第4章 考 按

石棺中に2人の人骨が埋葬された例は重葬、合葬例として古代人骨発掘過程に於てしばしば発見されているが、本発掘例に於ては各骨の位置及び各骨重複の状態から判断して、一種の合葬例と考えられる。特に七曲山の西、高良山附近で親子の同時埋葬例が発掘された事からしても、当時合葬が此の地方に習慣づけられていた風習ではないかとも推思される。次に、同時埋葬か、異時埋葬かについては、この発掘状態から判断することは出来ぬが、発掘された人骨がA、Bいずれの石棺に於ても男、女1対の埋葬であり、この2人は年齢的にも近似している事から、同時埋葬ではないかとも考えられるが、B棺のものは大腿骨の位置から或いは異時埋葬かも知れない。若し同時埋葬とすれば埋葬時の屍体の位置関係は 石棺の幅40cm及び発掘され

た骨の位置的関係より推思して、備前口粒江貝塚の例の如く、1人の背部に密接して他の1人が埋葬されたのではないかとも思われ、或いは又、1人は仰臥し、1人は俯臥して埋葬されたのではないかとも思われる。いずれにしても本発掘例に於ては石棺内への木の根の侵入及び棺外からの土砂侵入が多く見られ、骨の移動があったものと推定され、真の状態を推理する事は困難である。

#### 第5章 結語

七曲山発掘の人骨群の主たる特徴を要約し結論づけるとA棺、B棺共に男女1対の屍体が埋葬せられた事は当時の社会の人間関係、風習を究明するに貴重な材料と思われる。次に各骨について見るといずれの骨も骨質は良好で、最大長は男性で大なる数値を呈している。一方示数もB棺A1を除いて中頭乃至は長頭の傾向を示し、八女郡室岡亀甲発掘の人骨群と類似した傾向を示し、耳納山系を中央にして北と南の文化的、地理的交流関係を暗示させる。

## 7. 七曲山第3号墳

### (1) 墳丘 (Pl.98・99, Fig.121)

本群中では最高所を占め、西側を農道により削平されている。墳丘は地山削り出しによって形成されており、土盛は墳頂部の主体被覆として行なわれた程度である。

高さ約1.3m、径17~20mの不整形円形に削り出され、墳頂部の現状は7.5×9mの隅丸長方形に近い平坦面となっている。削り出しは、裾部外周のかなり広範囲にも達しており、一見、2段築成の堂々たる円墳であるかのような外観を呈し、巧妙・周到な配慮が払われている。

一方の根根筋にあたる南側にのみ、これを切断する溝が掘られて墳域が画されている。この溝の中央部は、中約3.5mにわたって掘り残されて陸橋部となっている。

### (2) 内部主体 (Fig.122)

墳頂部に、主軸線が斜交する2基が営まれている。その他、北東から南東にかけての裾部に3基の石蓋土嚢墓が確認された。墳頂部の両主体に、本墳の主たる被葬者が埋葬されたことは明らかである。A・B両主体の先後関係は判然としませんが、強いて言えば、前者が先行したものと推察される。

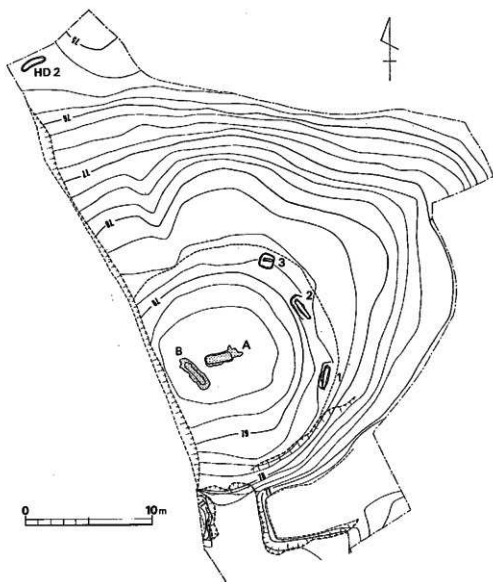


Fig. 121 七曲山第3号墳丘測量図 (1/300)

**墳頂部A主体** (PL.100・101-1, Fig.123)

箱式石棺であるが、石材の殆どを抜き取られて大破している。棺外北東側に、一部に赤色顔料をとどめる板石材が弧状に現存するが、盗掘時に棺材を築積したものである。

石棺は、長さ2.26m、巾1～0.85mの長方形プランの基壇内に組み立てられている。棺身上

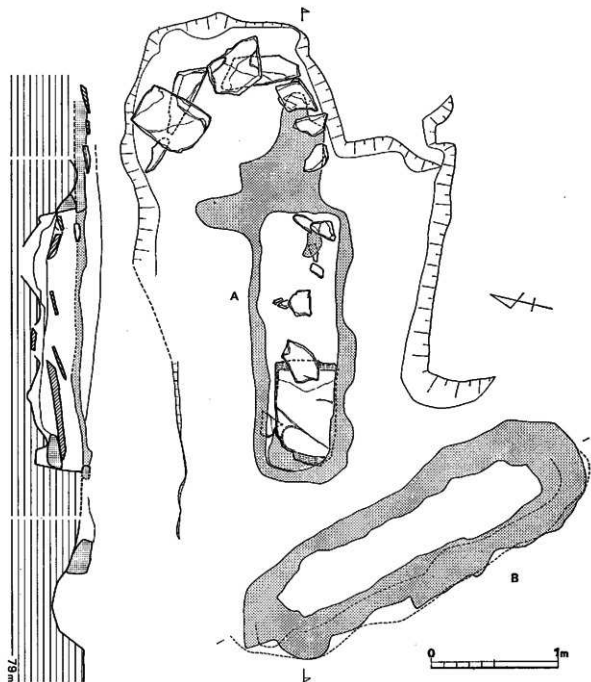


Fig. 122 七曲山第3号坟A·B主体关系图(1/30)

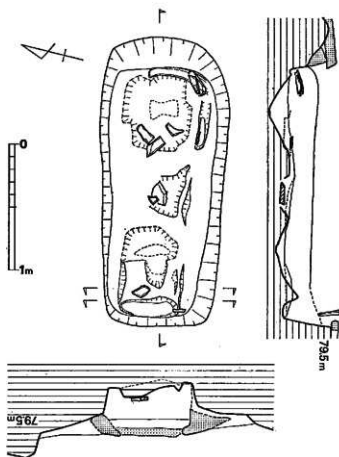


Fig. 123 七曲山第3号墳A主体実測図 (1/30)

らみて当初は粘土で覆われていたとは考えられない。不明点はあるが、側石上縁にまで目張粘土が貼られ、この上に蓋石がかけわたされたものと考えたい。

墳底も盗掘による凹凸著しく僅かに周辺が一段掘りこまれたことが知られる程度である。内法は、長さ1.8m弱、巾は東側が若干広く60cm前後、西側で50cm前後と推定され、第2号墳の2棺よりは大型であったと推察される。

頭部を東としたと推定されるが、棺内からの出土品は皆無である。

#### 墳頂部B主体 (PL.101—2, Fig.124)

粘土床上に置かれた木棺である。本棺の埋置にあたり、まず、長3.15m、巾0.8m前後の不整形長方形の墓壇を掘っている。墳壁および墳底は凹凸著しく、整然としたものではない。墳底は、巾40~45cm、長さ2.13mにわたって赤色顔料が認められ、この範囲が略木棺の規模とみら

端以上には黄褐色粘土が多量に使用されているが、横断面では、これらの粘土は内側に屈曲した状態で遺存し、しかも、現存上縁線は推定側石基底線よりも内側となっている。側壁材の上端を覆ったとすると、蓋石は粘土上かけ渡されたことになる。蓋石の上面を覆ったとすると、本棺の深さは20cm弱と推定されて浅すぎるキライがある。棺内に残存する板石材は、片面に赤色顔料をとどめてこれが棺材であることは疑いないが、これを側壁材とすると現存粘土上端よりも著しく突出し、かつ、強く内傾したとせざるを得ない。また、これを蓋石としても、

れる。

A 主体とは異なる黄橙色粘土が使用されており、その範囲は両小口部と蓋上面およびその外周の上半部に限られる。木棺の構造は不明点が多いが、通常棺身の安定に使用される粘土が認められない点で、割竹形とするには疑問が残る。救えて推測すれば、最近の調査によって知られつつある組み合わせ式木棺である蓋然性が高いといえる。

未盗掘ではあったが、棺内南東側小口近くに短剣1口が副葬されていたに過ぎない。

#### 裾部第1号石蓋土墳墓 (PL.102, Fig.125)

傾斜の関係で、墳丘側を2段としている。蓋石は現存するものの当初の姿ではなく、一度開棺された跡が歴然としている。一方の中が稍狭い隅丸不整長方形プランで、横底は略水平となっており、北側に遺体の頭部を置いたと思われる。

#### 裾部第2号石蓋土墳墓 (PL.103, Fig.126)

前者と同様、外周の地盤の隆起する部分を一段掘り下げている。蓋石は2枚のみが現存するが、原位置を保ってはいない。不整長方形プランを呈し、頭位は横底が少しく高い北西側にあつたとみられる。なお、北西側床面の石材が枕であったか否かは不明である。

#### 裾部3号石蓋土墳墓 (PL.104, Fig.127)

乳・幼児用の小型主体で、完存する。墓壁は2段にわたって掘りこまれ、上段は1m強の略

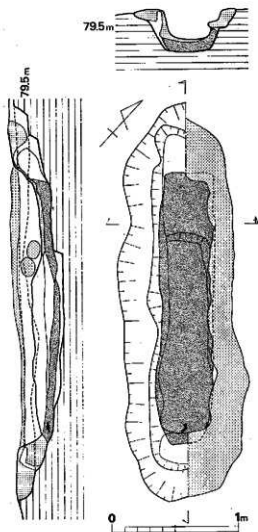


Fig.124 七曲山第3号墳B主体実測図 (1/30)

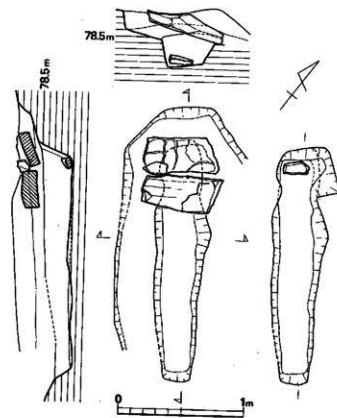
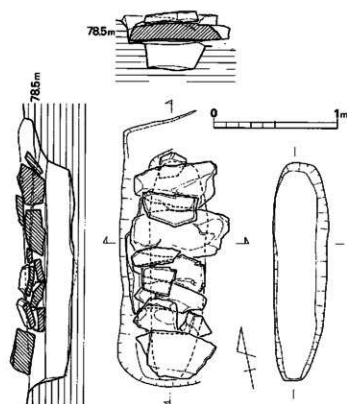


Fig. 125 七曲山第3号墩墩部  
第1号石崖土墩基突测图 (1/30)

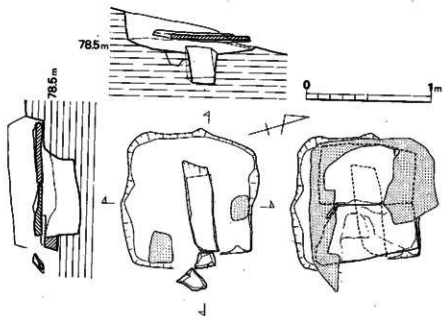


Fig. 126 七曲山第3号墩墩部  
第2号石崖土墩基突测图 (1/30)

Fig. 127 七曲山第3号墩墩部  
第3号石崖土墩基突测图 (1/30)

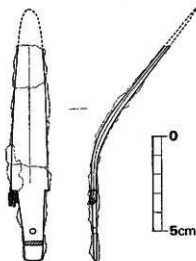


方形プランを呈する。蓋石は2枚で、外周は薄く粘土で目張りされている。上段は東から南側にかけてが低く、このため粘土を置いて蓋石を水平に保っている。竈内堆積土の下半は、赤色顔料で染まっていた。墓壇は不整長方形プランを呈し、壇底は西側が若干高い。

上述の各土壙墓の内法は、以下のとおりである。

	上 端		床 面		深さ
	長さ	巾	長さ	巾	
第1号	1.72m.	44~30cm.	1.63m.	34~20cm.	20cm
第2号	1.87m.	(34)~24cm.	1.69m.	(26)~21cm.	22cm
第3号	0.7m.	19~15cm.	0.6m.	19~15cm	25~29cm

( ) 内は推定値



### (3) 遺物

鉄器 (PL.109, Fig.128)

#### 短剣

墳頂部B主体から出土した。鋒を欠いて折れ曲っており、現存全長12.6cm、復元全長約15cm。両刃式で、刃部巾は2cm。茎は長さ3.7cmで、目釘孔は一つ。柄部木質の一部が残る他、身の一部に有機質(皮?)かとも思われる銹着物があった。

◀ Fig.128 七曲山第3号墳B主体出土鉄器実測図(1/2)

### 土器 (PL.109, Fig.129)

墳丘北側裾部から出土している。大部分が細片であり、各個体とも一部のみが採取されているに過ぎないので、上部の原位置から転落したものと思われる。

### 土師器

小型丸底埴(■)を除けば、全て甕である。甕は、図示した7個体の他に2個体以上に属す

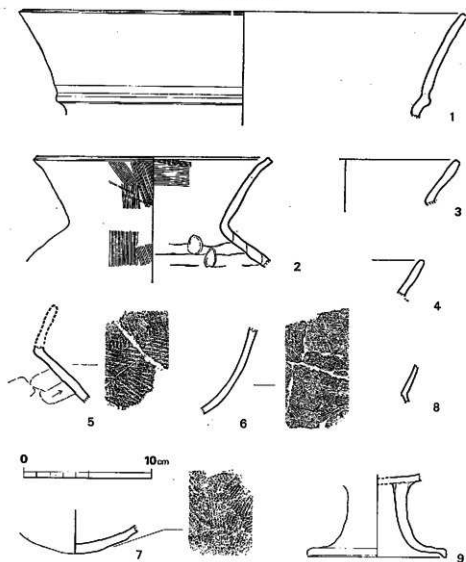


Fig. 129 七曲山第3号墳出土土器実測図 (1/4)

と思われる破片が採取されており、うち1点には煤が付着しており、他例とは異なる。

#### 小形丸底壺

僅かにそれと知られる小片に過ぎない。口縁部の外反度は強くなく、赤褐色を呈して焼成は甘い。胎土は精良で、細粒を多く含む甕のそれとは対照的である。

#### 要

1は、複合口縁の一部を残すのみで、復元口径は35.2cm。口唇部は浅く割られ、外面は少し

く賑らむ。器表は横ナデされ、黄褐色を呈して焼成は軟面。

2は、肩部以下を欠く。口径18.6cmで、口頸部は強く外反する。口唇部には前者と同様に浅い沈線をいれ、内面は稍屈曲気味である。口頸部器表には、斜め方向に刷毛目調整した後に横ナデを施す。肩部には、接合部を指頭にて圧着しただけの粘土紐の痕跡を明瞭にとどめる。

3は、口頸部の一部のみ。口唇部に極く浅い沈線が入る。復元口径18cm、頸高3.3cm。赤褐色を呈する。

4も口頸部の小片である。頸高2.9cmで、前者よりも稍短い。

5は、肩部の一部のみ。4と同一個体に属するかとも思われるが、口頸部の傾きと胎土が異なる。上半には縦方向に刷毛目調整を施し、後に横ナデを行なう。以下は斜め方向に刷毛目をかける。内面は篋削りされ、頸部との接合部には横ナデを施す。暗赤褐色を呈する。

6は、肩部から体部下半にかけての破片が部分的に残る。器表上半には横、以下には斜め方向の丹念な刷毛目調整が施されており、工具の巾は2cm弱。内面は篋削り。赤褐色を呈する。

7は、底部片のみ。各方向に刷毛目調整を施し、工具の接触が不十分な点で前述の5と通ずる。器表は黄褐色、内面は黒色を呈し、焼成は甘い。

#### 須恵器

一点のみであり、器形からみて本墳に伴うとは考えられない。

#### 台付壺

8は、台部のみで、現存高6.4cm、底径10.9cm。壺部に正接していない。黄灰青色を呈して焼成は良好で、胎土も精良である。

## 8. 七曲山第4号墳

### (1) 墳丘 (PL.105, Fig.13・131)

農道により北から南側にかけてを削られ、墳頂部は陥没していた。主体が墳丘の略中央にあると仮定すれば、本墳の直径は約20mと推定される。南側裾部からの比高は1.8mで、当初の高さは2mを超えたと思われる。墳丘は盛土によって形成されており、墳頂部近くで1mの厚さである。葦石が裾部を中心に現存する。

南側の尾根筋は、巾2.5～3mにわたって直線的に断ち切られている。東端近くの溝底に

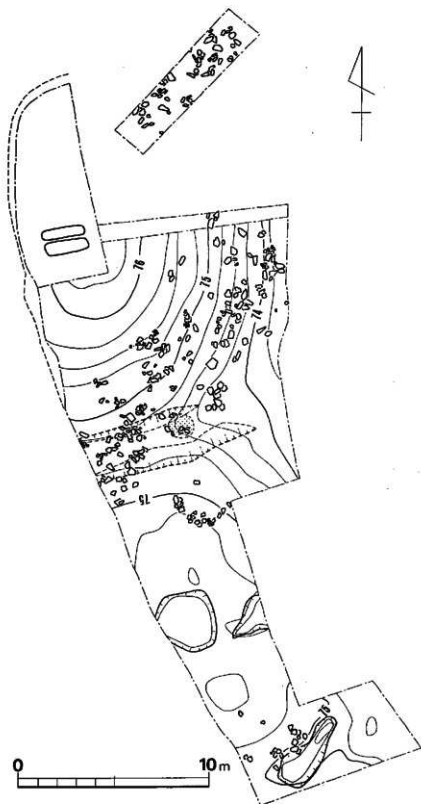
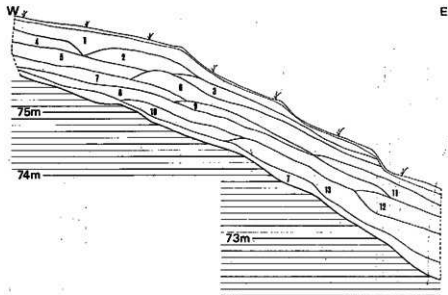


Fig. 130 七曲山第4号墩墩丘测量图 (1/200)

は、熱変部分が認められて (Fig. 130 にてドットを付す部分)、火が焚かれたものと推定されて興味深い。



- |             |             |             |
|-------------|-------------|-------------|
| 1 混礫茶褐色弱粘質土 | 2 混礫暗茶褐色粘質土 | 3 暗褐色粘質土    |
| 4 黄褐色弱砂質土   | 5 混礫灰褐色弱粘質土 | 6 混礫灰黒褐色粘質土 |
| 7 混礫灰褐色粘質土  | 8 褐色粘質土     |             |

Fig. 131 七曲山第4号墳坡丘東半東西断面図 (1/60)

## (2) 内部主体 (PL. 106, Fig. 132)

墳頂部に、長軸を東西にとり南北に併列する2基の主体が営まれている。細部の構造は不明であるが、組み合わせ式木棺と推定される。

内外からの出土品は、皆無である。

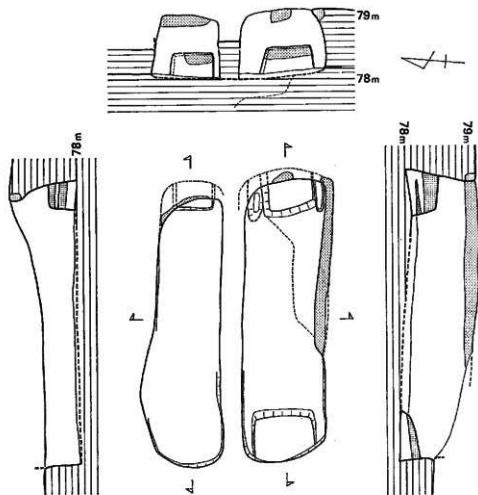


Fig. 132 七曲山第4号坟内部主体夹侧图 (1/30)

## 9. 七曲山第5号坟

## (1) 坟丘

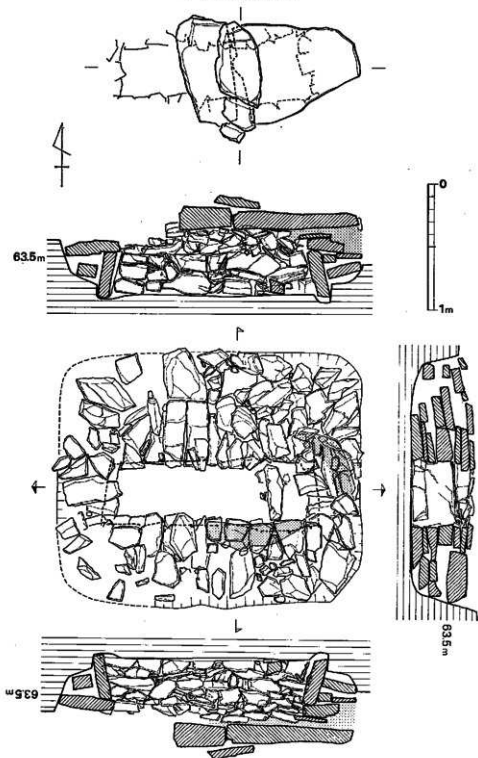


Fig. 133 七曲山第5号墳壙穴式石室実測図 (1/30)

果樹園と農道築成に伴ない、墳丘を完全に削平されている。本墳よりも北方の平野に向う頂部へトレンチを設定するために赴く途中で、蓋石らしき石材の存在に気づいたのが、本墳発見の端緒である。

## (2) 内部主体 (PL.107, Fig.133)

長軸を略東西にとる小型の竪穴式石室を主体とする。墓壇は、地山を25~55cmの深さに掘りこんであり、2×2.4m(上端値)の隅丸長方形プランをとる。

両小口壁に板石材を立てる他は、周壁はいづれも基部から小口積されており、若干内傾する。裏込は、石を混えて固く撞き固められて、入念である。使用された石材の形状・大きさは区々であり、稍整齊さを欠くとの印象を受ける。周壁上部の高さは揃っていないが、粘土を置いて蓋石のかけ渡しと密閉保持とに備えている。蓋石は3枚が現存しており、頭部があったと思われる東側に大型石材を配している。

墳底は略水平位にある。小石材が現存するので、当初は、床に石が敷かれたものと推定される。東側小口壁の若干手前に、枕と思われる角ばい一石が横たえられている。

内部は徹底した攪乱を受けており、枕近くから頭骨の小片を収骨したのみである。

## 10. その他の遺構

### (1) 方形周溝遺構 (PL.108-1, Fig.117)

第2号墳と第3号墳と間に位置する。両墳の間が稍空きすぎるかに思われ、墳丘を失なった主体あるいは石棺等の小型主体が存在するかも知れないとの想定の下に表土を除去したところ、火葬墓(HDI)とともに発見された。

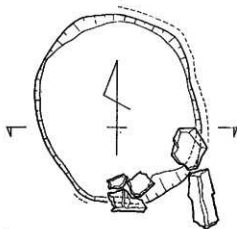
巾0.6~1.5mの浅い溝が、「コ」の字状にめぐっており、当初は略方形にめぐっていたとすれば、外側での1辺長約7.6m、内側での1辺長約5.5mであったと推定される。

出土品は皆無である。



## (2) 第1号火葬墓 (HD 1)

(PL.108-2, Fig.134)



深さ 30cm強、径 83~100cmの月形である。墳底には炭・灰が堆積しており、また、周縁が巾 5cm内外にわたって熱変する部分もあって、この墳内で火葬されたことは明らかである。

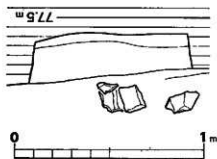


Fig.134 七曲山第1号火葬墓 (HD1) 実測図 (1/20)

## (3) 歴史時代土葬墓 (HD 2)

(PL.108-3, Fig.132)

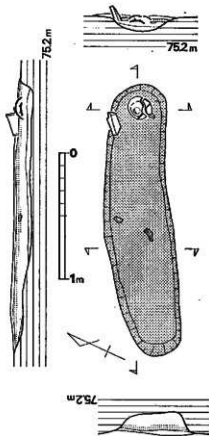


Fig.135 七曲山歴史時代第1号土葬墓実測図 (1/30)

第3号墳北方の鞍部に位置し、主軸を北東から南西にとる。長さ2.14m、巾44~55cmの中央が稍狭らむ不整隅丸長方形プランをとる。深さは14~19cmと浅く、壱内上層には炭化物を混えた焼土 (Fig.132でドットを付す部分) が一面に置かれている。頭位は、2個の瓦器椀が伏せられていた北東側と推定される。

#### (4) 歴史時代の遺物 (PL.109, Fig.136)

##### 第1号土塚高出土土器 (1~4)

この土塚墓から出土した土器は、土師器杯1・椀1・瓦器椀3・自磁椀1が出土した。

##### 土師器

###### 杯

小片のため図示できないが、内部に油煙の付着が認められ、灯火器として使用したものと考えられる。底部切り離し跡は著しい風化のため不明である。

###### 椀

後述する瓦器椀と同様な器形、手法で造られた椀である。これを焼し焼きすると瓦器椀になる。

##### 瓦器

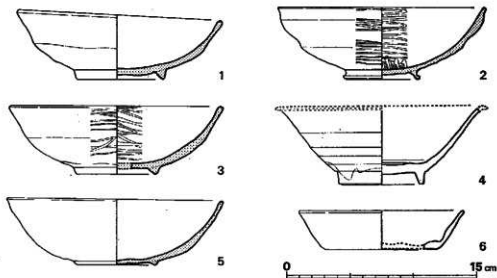


Fig.136 七山山古墳群出土歴史時代土器実測図 (1/6)

### 碗 (1~3)

いずれも体部中位が屈曲するもので、その屈曲部以下の外面には多数の指頭圧痕が認められ、その指頭圧痕を消すように丁寧にヘラミガキを行っている。2の体部下位および底部見込みに細かい板状圧痕が観察できる。3では屈曲部以下に不確実であるが糸切り痕らしい跡が認められる。黒色の煙しは器面内外全面にはなく、1・3は屈曲部付近で、内外面ともに下位は灰白色、上位黒色を呈する。2は外面は全て黒色であるが、内面は灰白色を呈する。いずれも幾つも器を重ねて焼いた結果と考えられる。

### 白磁

#### 碗 (4)

口縁部を曲げるタイプの中国製白磁碗と考えられる。灰白色の胎に若干灰色をおびた透明釉が掛けられている。内面見込み部分は重ね焼きするため環状に釉をカキ取っている。

### 第1号土壙墓以外の出土土器 (5・6)

土壙墓以外から出土した歴史時代遺物は須恵器(杯・杯蓋)、土師器(杯)、瓦器(碗)、瓦質土器(片口)等である。このうち図示し得るのは瓦器碗1と土師器杯1のみで、他は細片化しているため図示できない。

### 瓦器

#### 碗 (5)

全体にズングリした形状で、体部の屈曲も不明瞭で、またその位置も下位にある。高台の貼付けは雑で不整形を呈する。器面の風化が激しく、器面仕上げの方法を知り得ないが、かろうじて屈曲部付近に指頭圧痕を認めることができる。口縁部は内外面ともに灰茶色を呈し、他は黒色に煙されている。

### 土師器

#### 杯 (6)

1/6程度の小片から復元したもので、復原すると口径は13.3cm、器高3.1cm、底径8.8cmを測る。底部は糸切り離して、その上に板状圧痕がある。

以上、七曲山遺跡出土の歴史時代の遺物を報告したが、最後に第1号土壙墓出土土器の特徴および年代観について若干述べることにする。

第1号土壙墓出土の瓦器碗は大宰府の出土例からみると体部中位に屈曲を有する古式のタイプで、またその製作技法も類似している。即ち、本来平坦でなければならぬ糸切り跡らしきものが屈曲部以下から始まり、また体部下位に丸味を有する板状圧痕が観察できる。これは11

世紀代にみられる底部押し出し技法による丸底の杯と同系の技術・手法である。このことから大宰府跡出土の瓦器碗の編年幅を援用することができるのではないかと考えられ、これらの瓦器碗を12世紀中頃にその実年代を求めることができる。また、白磁碗は大宰府跡出土からみるとその上限は12世紀前半から中頃であり、以後多く出土する。

以上のことからこの土壌墓は12世紀中頃のものと思倣すことができる。

## 11. 小 結

### 墳 丘

構築手法上では、第3号墳のように地山を削り出すのみとして良いものと、これと盛土とを併用する第1・2・4号墳とに大別できる。後者に葺石が伴うのも当然といえる。

なお、方形周溝造構とした浅い溝の性格は不明である。完周したか否かさえ判然としない。仮に方墳の周溝とすれば、本群の他墳と比較して稍小型すぎるキライがある。溝は、調査範囲ではこれ1例のみであり、かつ、地形からみても「方形周溝墓」と呼ばれている墓とは考えにくい。

### 内部主体の構造

竪穴式石室が、全体として後出することは明らかである。これを除く箱式石棺あるいは木棺が、2基一対となって各墳の主体となる規則性が認められて注意される。

第3号墳裾部に営まれた3基の石室土壌墓は、その位置からみて本墳に付随することは明らかである。これらの被葬者達は、墳頂部の主たる被葬者達に対して従たる関係にあると思われる。両者の較差が主体構造と築造位置とに反映したものと見倣される。従って、当該時期では、既に石室土壌墓が他の主体構造とは同格に扱われていないことが知られ、その終焉の契機の一環が窺われる。

竪穴式石室は、内法および木棺を納めない点で、箱式石棺的である。両小口壁に板石を立てる点も、その名残と思われる。第1号墳の竪穴式石室が第5号墳のそれに対して若干先行するかも思われるが、当該地域ではこれらに先行する竪穴式石室は知られていない。

本群の主体構造は多様であるが、これが単に営造時期差・基制上の推移に基くものではないことは明らかである。

### 葬 法

第2号墳の2基の石棺と後出する第1号墳の竪穴式石室の計3基の主体に、各2体づつが合葬されている点が目される。しかも、前2者では成人男女各1体が、後者では成人男性2であると鑑定されており、少くとも両墳に限れば単婚家族の墓ではないことは明らかである。第3号墳でも、人骨での確認はできないが、主体の数からみて同様であったと推定される。

また、第1・2号墳、第3号墳A主体、第5号墳では、頭位を東として共通し、さらに第3号墳の裾部の主体はいずれも墳丘に対して右側に頭位を置く規則性が認められる。

本古墳群の特色の一つは、不明の第5号墳を除けば、複数の主体を営む、あるいは1棺（室）に2体を葬る点にある。前項で樋口氏が述べられたように、複数埋葬は北部九州では比較的に類別が多い。こうした傾向が、次期の横穴式石室導入の下地の一つとなったことは多言を要しない。けれども、墳丘裾部への主体構築が第3号墳以降では継続されず、また、少くとも第1・2号墳に限れば幼児は葬られておらず、第3号墳以降に「古墳」への被葬者がより限定されたことが窺われる。

### 年 代

第3号墳は、裾部にも主体を営む点で筑紫郡太宰府町・菖蒲浦古墳（註1）と共通する。しかし、本墳裾部出土の土師器が大略「柏田Ⅱ期」に包括されると見做されるので、これに先行する。恐らくは、前章にて述べた筑紫山古墳裾部外周主体群のうちの後出グループのあるものと併行関係にあると思われる。

第2号墳および第4号墳は第3号墳に後出するが、墳丘の構造ならびに主体数が共通することから両者は相次いで営まれたものと思われる。けれども、両者の墳形・主体構造は異なり、被葬者間の較差が墓制に如実に反映した結果と考えられる。

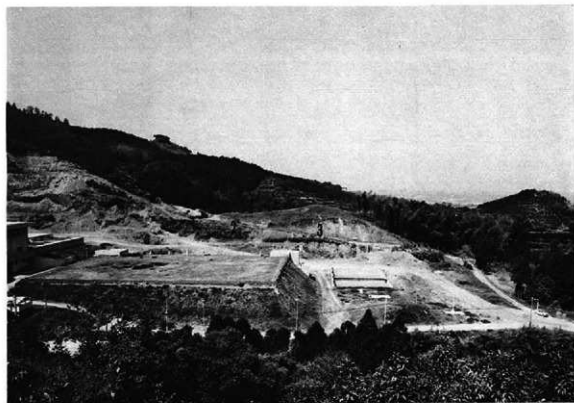
第1・5号両墳はこれら3者に後出するが、重複・破壊せずに営まれている点からみて、第2・4号両墳よりも半世紀以上の時間差があるとは考えられない。

以上から、5基の営造期は、第3号墳→第2・4号墳→第1・5号墳の3期に大別され、その巾は大略半世紀の間と見做されよう。

註1 森田 勉編『菖蒲浦古墳群の調査』〈太宰府町の文化財 1〉1976年



1.七曲山古墳群遠景(南東から、手前は久留米市浄水場)



2.七曲山古墳群遠景(東から)



上、七曲山第1号墳全景 中、同左葦石状石組 下、同左周溝と歴史時代ビット



1.七曲山第1号墳石室墓確認状態



2.同上 蓋石





1.七曲山第1号墳壙穴式石室全景



2.同上 北側壁



1.七曲山第1号墳壙穴式石室内  
No.1人骨



2.同上 No.1人骨と副葬品



2. 七曲山第1号墳壙式石室内集骨状遺



1. 七曲山第1号墳壙式石室内No.2人骨全景



1.七曲山第1号墳堅穴式石室の床石と副葬品



2.同左 副葬品の位置と抜かれた床石の跡



3.七曲山第1号墳周溝と歴史時代柱穴群(中央がP1)



4

8



3

2



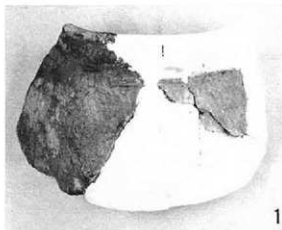
1



6



5



1



3



11

七曲山第1号墳出土土器



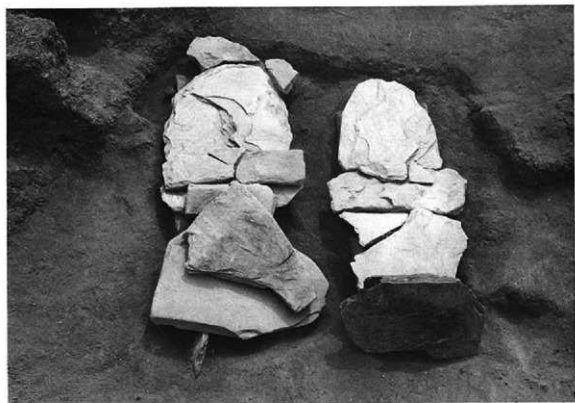
1.七曲山第2号墳発掘前の墳丘全景(西から)、奥は第1号墳



2.七曲山第2号墳の墳丘と溝(西から)

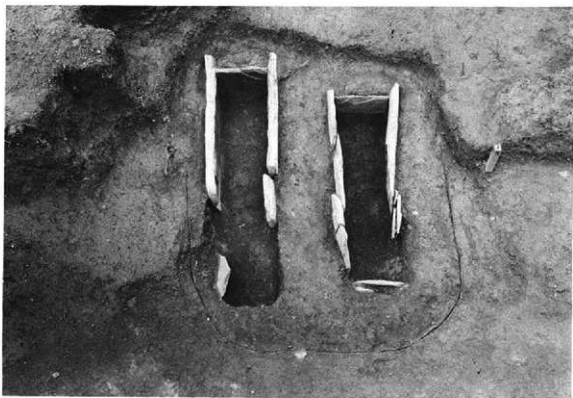


1.七曲山第2号墳の墳丘と主体(南西から)



2.七曲山第2号墳の第1・2号箱式石棺の蓋石  
(昭和38年調査後にかぶせられたもの)





1.七曲山第2号墳の墓壇と箱式石棺(左——1号棺, 右——2号棺)



2.同上 石棺の構築状態



1.七曲山第3号墳の発掘前の墳丘(南から)



2.七曲山第3号墳の墳丘と周溝ならびに陸橋部(南から)



1.七曲山第3号墳墳丘全景(東から)



2.同上(北から)



1. 七曲山第3号墳  
A主体全景



2. " "  
A・B主体全景



3. " "  
A主体の粘土使用  
状態



1. 七曲山第3号墳  
A主体墓室



2. 同上  
B主体全景



1.七曲山第3号墳  
裾部第1号石蓋土墳墓蓋石



2.同上  
蓋石除去後



1.七曲山第3号墳裾部第2号石蓋土坑墓蓋石



2.同上 蓋石除去後



1.七曲山第3号墳裾部第3号石蓋土填墓蓋石と粘土



2.同上 蓋石除去後

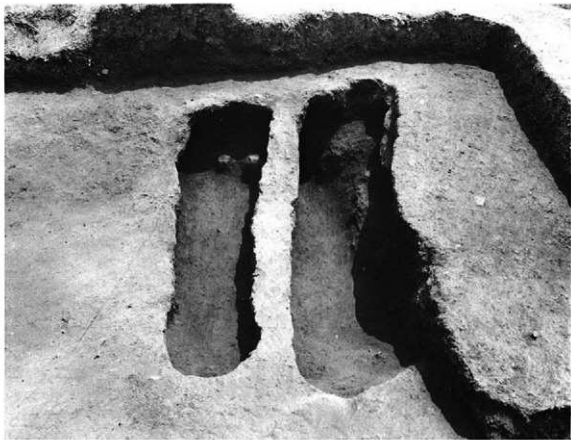




1.七曲山第4号墳発掘前の墳丘



2.同上 墳丘と葬石



1.七曲山第4号墳主体全景



2.同上 南側の不明土壌群



1.七曲山第5号墳  
石室全景



2.同上(天井石除去後)



3.同上 枕と頭骨



1.七曲山第2、3号墳間の方形周溝と第1号火葬墓(南から)



2.七曲山第1号火葬墓(HD1)全景



3.七曲山第1号土壌墓(HD2)瓦器碗出土状態



1.七曲山第3号墳出土遺物



1



2



3



5

1



2

2.七曲山第1号歴史時代土塚墓  
出土瓦器碗  
(番号は実測図の番号と一致する)

VI 主要遺物の保存処置と  
赤色顔料の分析

## 1. 主要遺物の保存処置

### (1) 鏡 (PL. 110)

一面分の半分弱が5片に割れて発見された。保存状態は、いわゆる「かさぶた状の錆」(ブロンズ病ともいう)とチョーキングがひどく、これまで九州歴史資料館からの移動はほとんどしていなかった。青銅製品、特に出土品のそれについての本格的な保存処置法は現在実験段階であり、そのような時点での中途半端な保存処置はしない方が良いという考えもある。しかし、本例の鏡は上述のような状態で、ごくわずかな振動でも微細片が剝落するような状態であったため何らかの保存処置が早急に必要と考えられた。

まず固化処置として、アクリル樹脂のキシレン溶液を筆で塗布しアセトンを気化させながら乾燥した。これにより表面の樹脂光沢をかなり押えることができた。破片の接着はシアノアクリレート系接着剤で行い、接着ラインの所々にある隙間(土中での変形により破片同志が密着しないため)はあえて埋めなかった。これらの処置によってチョーキングは一応おさまり、又破片同志がぶつかって傷むこともなくなったが、今後もできるだけ扱わないこと、乾燥状態を保つことの2点を守ることが望ましい。

#### 註

アクリル樹脂のキシレン溶液……パラロイドB72の10%キシレン溶液。

シアノアクリレート系接着剤……東亜合成化学K. 五. アロン・アルファ……使い方によってはごく見苦しくなるので対象物や技術等の点から使用にはおのずと限定がある。

なおチョーキングを起しているような遺物は固化処置をしないまま接着剤を使うとますます本体を悪化させるので、厳に注意したい。

### (2) 鉄 斧 (PL. 110-3・4)

出土鉄製品はすべてアクリル樹脂の油性エマルジョンを強制含浸して強化したが、ここでは鉄斧についてだけ報告する。

出土後2年経った時点で、各所に縦亀裂がひどくなり、そのままでは剝落が起る心配があっ

たので、とりあえず錆取りなどはしないままで上記エマルジョンの含浸処置をして展示を行ない、それ以外は乾燥剤と共にタッパーウェアで保管した。しかしこの報告書作成の機会に、ふくらんだ錆などを取り除き改めて上記処置を行った。そして目立った亀裂部にはフェノール系樹脂のマイクロバルーンとセルロース系接着剤を混合して充填した。この処置ですっきりした状態になったものの法量はわずかであるが亀裂分だけ大きくなっているのは仕方がない。

#### 註

アクリル樹脂油性エマルジョン……パラロイドNAD10

セルロース系接着剤……セメダインCセメダインK.K.

### (3) 甕 棺 (PL.110-5)

(1)で報告した甕を剥離した甕棺は本文で見られるように高85cm、最大径63cm外面はチョーキングが激しく、内面は赤色顔料が塗布され甕のあと形がついている。これらを水溶性アクリル樹脂に浸して固定した。写真に見られる縞文様はこの浸漬の際の容器の大きさが足りなかったのと、液表面の泡に原因しており、この固化処置の技術的な不始末である。浸漬に際して赤色顔料が剥落するのが心配であったが目立つ程のそれは見られなかった。

接着は、大形であり固化処置が済んでいるということからエポキシ系の接着剤を使った。ふつう土器にはセルロース系接着剤を使うのが良いと思われるが、特に大形品で堅固さを要求される場合にはエポキシ系接着剤も使用して良いだろう。しかしあくまでも「固化処置」をしたもの、その中でもごく特殊なものにのみ限るのがよいと思われる。なぜならばチョーキングの激しいもののような弱い胎質の土器のばあい、無処置ではどのような接着剤も効果が薄い、胎質強化をしたものは、かなり大形品であってもセルロース系接着剤で充分接着効果が得られるからである。価格の点からもセルロース系接着剤が有利である。

#### 註

水溶性アクリル樹脂……バインダー17、エポキシ系接着剤……セメダインハイスーパー、

セルロース系接着剤……セメダインC

## 2. 赤色顔料について



## (1) はじめに

祇園山第2号墳墳丘下石蓋土壘墓(D1)、同箱式石壘墓(S1)および祇園山古墳裾部外周第1号甕棺墓(K1)より出土した赤色顔料について、その種類と形状を知る目的で、顕微鏡による観察、けい光X線及びX線回折分析を行なった。

当時の赤色顔料としては、ベンガラ(酸化第二鉄,  $Fe_2O_3$ )、朱(硫化水銀,  $HgS$ )、鉛丹(四三酸化鉛,  $Pb_3O_4$ )が考えられ、出土顔料を理化学的方法により明らかにした例は少ない(註1)。これらの分析例および発掘調査時点での観察をあわせてみると、全般的な傾向を次のように捉えることができる。遺骸には朱を用いることが多く、ベンガラが用いられた場合でも頭胸部のみには朱を施すことが少なくない。また埋葬施設のみにも認められる時はベンガラが多いようである。

出土顔料を分析する際に重要なことは、試料の採取とその状態および分析方法である。これはあらゆる考古資料の分析にとって問題となる所であるが、赤色顔料の場合は特に注意を払わなければならない。顔料は粉末であるため、土砂や人骨粉あるいは他の遺物(風化したガラスや金属製品の錆等)が混入する率が高い。また、ベンガラと朱両者が施されていた場合両者の比率は部位により種々の値をとるはずであろう。頭胸部周辺から採取した試料を何点か分析すれば、おそらく採取地点の数だけの異なったベンガラと朱に関する定量値が得られるのではないだろうか。さらに、顔料の色はまずその主成分で決まるものであるが、顔料粒子の大きさ(粒度)も色に関する重大な要素である(註2)。たとえば日本画顔料では、同一成分のものも粒度の違いにより色の異なる5~10種類にも分かれる場合があり、特に朱は粒度によって異なる色を示す代表的な顔料の一つである。朱の粒度が出土顔料を分類する際の一つの指標になる可能性があることもわかっているので(註3)、採取した赤色顔料を分析するために、軽々しくその全量を細粉化して粒度を損なう(つまり遺物としての色が失われる)ような態度は避けるべきであろう。

以上のような問題点を考慮した上で、採取試料より最大限の情報を得るためには、試料そのものに対する評価が大きな位置を占め、さらにそれに対応する分析が必要である。ここでは、主成分の定性分析を行ない、今後より詳しい調査をするための目安としたい。なお、将来、同一試料を用いてさらに詳しい効果的な分析を行なう余地を残すため、試料を破壊しないままに置くことを第一の目的としたので、不十分な結果しか得られていない場合もあることを付記する。

## (2) 試料

試料は14点であり、表7にその内容を示す(註4)。㉞1~6, 12~14については、20倍(顕微鏡の倍率)で検鏡しながら土砂等の混入物を除いた。小塊状のものは薬包紙に包み指で圧してほぐした。㉞7~11は甕棺の破片である。なお、試料の色は表7に示した通りであるが、㉞1~3, ㉞7~14は11点とも黄色の強い明るい赤色であり、㉞45は、2点ともほぼ同じような紫色を帯びた赤色であった。㉞6は両者の中間のような色調である。

Tab. 9 赤 色 顔 料 一 覧 表

㉞	遺 構	採 取 位 置	色
1	D 1	壁および床面	明(黄)赤色
2	"	1号人骨(♂)の頭部付近	"
3	"	1号人骨の眼窩内	"
4	"	2号人骨(♀)の頭部付近	暗(紫)赤色
5	"	2号人骨の眼窩内	"
6	S 1	棺 内	赤 色
7	K 1	上蓋破片に付着した状態のまま	明(黄)赤色
8	"	下蓋 "	"
9	"	北西下—括土器の中の甕棺片	"
10	"	"	"
11	"	"	"
12	"	㉞. 7から採取した。	"
13	"	㉞. 8 "	"
14	"	棺 内	"

## (3) 顕 微 鏡 観 察

スライドガラス上に試料を取り、反射光および透過光で検鏡した(Ⅵ7~11は反射光のみ)。各試料の色調は前述のように異なるが、三種の色調はいずれもベンガラによるものと思われた。石英、長石あるいは骨粉などの粒子に微粒の顔料が付着したために見かけ上大きな粒子となったために暗色化して本来の色を失なう場合もあるが、Ⅵ4, 5では認められなかった。Ⅵ2, 3および14には微量の朱の粒子が認められたが、他の試料からは見出すことができなかった(註5)。

#### (4) けい光X線分析

Ⅵ1~6, 12~14はマイラーに包み、Ⅵ7~11は赤色顔料が付着した部分(内面)と外面についてそれぞれ比較的平らな面を選び照射面積を一定にして測定を行った。測定条件は、理学電機製けい光X線装置・ガイガーフレックス, Pt対陰極, 30kv-15mA, Lif-air, シンチレーションカウンターである。フルスケール, 時定数, チャートスピード, 走査速度は試料毎に適宜設定した。Ⅵ1, 4~11では、赤色の由来となる元素としてはFeのみ, Ⅵ2・3および14からはFeとHgが検出された。Ⅵ2・3・14について、管球に由来する $PtL\alpha$ に対する $FeK\alpha$ ,  $HgL\alpha$ のピークに関する相対強度化を求めた所、HgはFeに対して極めて小さい値となったので、これらの主成分元素はFeであると考えられる。Hgの相対含有量はすべて異なるがⅥ2は他に比べて小さい。また、Ⅵ7・8から少量の試料を採取して測定を行ったが、Hgは検出されなかった。なお、色調の明暗の要因となるような元素(たとえばMn等)は測定されなかった。

#### (5) X線回折

無反射ガラス試料板を用い、試料が多いものは試料板表面のくぼみに充填し(Ⅵ1, 3~6)、少ないものは裏面中央にワセリンで付着させた(Ⅵ2, 12~14)。なお試料の細粉化は行わなかった(註6)。測定条件は理学電機製X線回折装置・ガイガーフレックス, Cu/Ni対陰極, 40Kv-20mA, プロポーションナルカウンター, スリット系 $1^{\circ}$ - $0.3$ - $1^{\circ}$ であり、フルスケール, 時定数, チャートスピード, 走査速度は試料毎に適宜設定した。全試料(Ⅵ7~11は除外)とも、赤色の由来となる鉱物としては $Fe_2O_3$ が同定され、Ⅵ2・3・14では $HgS$ (赤)が同定された(註7)。また、色調の相違の要因となるような鉄化合物( $Fe_3O_4$ 等)についてははっきり同定できるピークは認められなかった(註8)。石英、長石等も同定されたが、顔料そのものに由来するのか、あるいは分離し切れなかった土砂に依るものか不明である。

## (6) 考 察

以上の結果から、 $\text{C}2 \cdot 3 \cdot 14$ は少量の朱を含むベンガラであると考えられるが、この3点の試料は各々純粋に一つの試料として扱って良いのだろうかという疑問がある。つまり、使用される前から朱が含まれていたのか、使用された時点で結果的に混在してしまったのかということである。「ベンガラは常に微量の水銀を含有している」(註9)という説に従えば、これらの試料に含まれる朱はもともとベンガラの中に含有されていたものということになるわけである。しかし、それではなぜ、他の試料からは朱が検出されなかったのであろうか。さらに感度の高い分析方法を用いて Hg が検出されたとしても、これらの試料が同一の原料鉱物に由来するものとするれば、各試料の Hg 含有率は変らないはずである。つまり、この説では採取地点別による試料中 HgS の濃度の著しい違いは説明することができないと思われる。むしろ、頭部と遺骸とでベンガラ、朱の両者を使いわけて施した結果であると考えた方が無理がないのではなからうか。

ベンガラの色調の相違について、今回の分析でわかったことは、主成分はほぼ同じであろうということであるから、今後は、その定量分析および、顔料粒子の粒度と形等についてより詳しい分析を行えば良いであろう。

試料自身をもう一度調整し直し(土砂等の混入物を綿密に分離する)さらに、 $\text{C}2 \cdot 3 \cdot 14$ においては、朱とベンガラも分離して、定量分析を行うことにより、さらに明瞭な事実をつかむことができると思われる。試料の調整方法については、重液による分離法を実験中である。また、もし朱とベンガラを分離することができれば、その粒子径分布を求めることにより、D1、1号人骨とK1の顔料の差についても理解できると考えられる。

## (7) ま と め

現在の段階で推定できることは以下の通りである。

1. D1の壁面に塗られていたものおよび床面全体に認められた顔料はベンガラであると思われる。1号人骨の眼窩を中心とする頭部周辺には朱も施されていたかもしれない。
2. D1の2号人骨では、眼窩を中心とする頭部周辺には、1号人骨埋葬時に用いられた顔料と色調は異なるが、ベンガラが施されたものと思われる。
3. S1に用いられた顔料はベンガラと思われる。
4. K1では、遺骸の一部に朱が施され、棺内(あるいは遺骸)全体にはベンガラが用いられたのかもしれない。

## 謝 辞

実験の大部分は東京芸術大学保存科学研究室にて行ったものであり、小口八郎教授その他に御指導いただいた。また東京国立文化財研究所江本義理保存科学部長、東京学芸大学大沢真澄助教授には機器の使用等、終始、御教示を受けた。なお、測定に関しては、成瀬正和氏の御協力を得た。心から感謝いたします。

- 註 1 『考古学に関する自然科学研究文献目録』 1975年  
2 桑原利秀、『顔料及び絵具』 1972年  
3 本田「赤色顔料の分析について」＜山陽新幹線開業理蔵文化財調査報告 9＞ 1978年  
4 表1～6・14は横口達也氏に依り採取されたものである。  
5 非常に細かい朱の粒子の場合、光学顕微鏡では、ベンガラとの識別は難かしいため、確実なことは言えない。  
6 分析方法として不十分であることは否めない。  
7 HgS (101, 003, 102, 110, 104, 201, 113, 105)  
8 Cu 対陰極を用いているため確定的なことは言えない。  
9 市毛勲『朱の考古学』 1975年



1



2

1.鏡——処置前  
2.鏡——処置後



3

3.鉄片——処置前



4

4.鉄片——処置前



5

5.銅鏡処置後

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—XXVII—

昭和54年3月24日

発行 福岡県教育委員会

福岡市中央区西中洲6番29号

印刷 株式会社西日本新聞印刷

福岡市中央区天神一丁目4番1号